天涯の花

宮尾登美子

Miyao Tomiko



集英社文庫

集英社文庫

天涯の花

宮尾登美子



集英社

集英社文庫

天涯の花

宮尾登美子



集英社版

天涯の花　目次

第一章　吉野川の岸辺　9
第二章　珠子の決心　57
第三章　剣山へ　83
第四章　山の暮らし　137
第五章　天に咲く花　188
第六章　遭難者　237

第七章　希望　290
第八章　別れ　336
第九章　迷う　377
第十章　心澄んで　423
あとがき　443
解説　高橋敏夫　446

天涯の花

第一章　吉野川の岸辺

昭和三十五年の、あの夏の日の午後が、自分の運命の大きな分かれ目だった、と珠子はときどき思い起こす。

そのとき珠子が腰を下ろしていたのは、養護施設愛光園の園長室で、真向かいには園長の木暮先生が片頬を西陽に照らされながら坐っていた光景も浮かんでくる。

煙草が大好きな木暮園長は、ここら辺りには煙草栽培の農家が多い関係で、いまだにヤミの煙草葉を分けてもらい、それを刻んでは紙で巻いて片ときも離さずふかしているが、そのときには指に煙草は挟んでいなかった、と珠子ははっきり憶えている。

煙草片手に足など組んで話すような内容ではなく、木暮園長がいかにも大切に、この話を珠子に伝えようとしたかは、ヤニで黄色くなった指先をきっちりとテーブルの上に揃えていたことでも判っている。

そのせいもあったのか、珠子はこの話を半ば喜ばしい気持ちで受け取りはしたものの、何しろこれからの生涯を定める大切な針路だっただけに即答はできず、

「返事はようよう考えてからでええんじゃ。なあ珠ちゃん」

といって立ち上がる木暮園長に、はい、と首を振って深くうなずいた。

スリッパの音を立てて遠ざかる園長の気配を背に、珠子はそのままの姿勢で改めてゆっくりと、部屋のうちを見廻した。戦後の粗悪な資材で築十年以上にもなるこの愛光園はいかにも古び、園長室の壁のペンキもところどころ剝げてめくれ上がっている。それを隠すように、一段高いところにペスタロッチの肖像画、その下には篤志家から贈られた押し絵の花咲爺さんの額、使い古した指人形やマリオネットがうなだれて吊されており、その壁の隅には、これももうすっかり色褪せた古い木版画が鋲の金具も錆びて貼ってあるのに目を当てた。

この絵図は、ものごころついて以来、珠子が朝に夕に眺めて来たもので、それがようやく源平の合戦図らしいとわかったのは、中学で古典を習ったときからであった。

よく見ると、甲冑に身を固めた武士たちが斬り合っているかたわら、雲のたなびいている彼方には、十二単衣の上臈たちが酒宴の用意をしている様子も見られ、そして左上では高貴な身分とおもえる公達を輦台に乗せ、走り去ろうとしている一団もある。

詳しくは判らないが、珠子は以前から何となくこの絵図に心惹かれ、何かにつけてはこ

の前に来て意味もなく眺めていたものであった。

いまも、その絵図のなかの人物、とりわけ髪をおすべらかしにした女性の一人一人をぼんやりと見ているうち、珠子の心のなかでは、自分はきっと、園長先生からのこの話を受けることになりはしないか、と心がすこしずつその方向に向いてゆくのを感じている。

木暮園長が金を出して煙草を買うときは必ずゴールデンバットだが、その箱のマークを指して、子供たちにはいつも、

「これは四国の形じゃなあ。我が徳島県はこの辺りかいな」

と羽をひろげた蝙蝠の形の、その右翼のほぼ中央部を指し示す。

地図をひらくと、県土の八割は山間部で占められており、そこを両断するかたちで吉野川が東流し、末は徳島市の北で紀伊水道に注ぐ。源は愛媛県の石鎚山、流れは一旦高知県北部を縫って蛇行しつつ徳島県へと入ってゆくのだが、鉄道徳島本線は始発徳島からこの川をさかのぼり終着池田までおよそ七十五キロ、そうして土讃線に接続する。

清流に囲まれた山間の町池田は煙草栽培と専売公社とで知られ、ここから上り列車に乗ると、つくだ、つじ、を過ぎて駅はあわかも、町の名は三加茂町に木暮園長の経営する養護施設愛光園があった。

四国三郎、と愛称のある吉野川は、怒れば大河となって人家を呑み尽くすが、ふだんは

至っておとなしく、この三加茂町あたりでは石の河原のなかに一筋、清らかな瀬音を立てているばかり、愛光園はその南岸の松林のなかに建っている。

養護施設というのは必ずしも孤児のみを収容する施設ではなく、両親はあっても十分に養育できぬため入所せざるを得ない子供もあり、愛光園ではただいま全園児四十名、うち来春中学を卒業する者は、珠子を含めて男子二名、女子二名の計四名であった。

施設が厚生省からもらう措置費という補助金にはこまかな規定があり、下は満二歳から、上は中学卒までしかこれを受けることはできないため、義務教育が終われば、それぞれの道を求めてここから巣立ってゆかねばならなかった。

親が引き取る状況にある子はそれがいちばんだが、そういう例は先ず無く、本人の希望を聞いて、手職をつけたいと望む子には、大工左官、経師屋細工物屋植木職等々の見習いに、かくべつ目的を持たない者は食堂や子守り、家事手伝いの住み込みにあっせんするのが例で、最近では工場から引合いが増えて、集団就職で県外へ出てゆくというケースも目立つようになっている。

木暮園長は毎年、卒業生の落ち着き先に頭を悩ますのが常だが、それだけに早々と全員の身の振りかたが決まった年にはいかにもほっとするらしく見える。

もう長い年月、この愛光園を我が家としてきた珠子も、毎年三月には先輩たちとの別れを目の辺りにしてきており、いつかは自分も、と思うその日が一日一日と迫ってくる不安

を感じている矢先の、木暮園長からの話であった。

木暮園長から伝えられた珠子の進路というのは、工場への就職などではなく、個人の家庭への奉公でもなく、全く思いがけなく「養女に」という申し込みで、希望者は徳島県南部に聳え立つ霊峰、剣山の中腹に鎮座する剣神社の宮司、白塚国太郎、すぎの夫妻であるという。

この春、園長のもとへこの話を持ってきたのは、同じ町内、加茂郵便局の配達夫で、「この先の貞光町の仲間から頼まれたんじゃが、おうちに心のやさしい女の子がおったら、ぜひ娘にもろうて育てたいと、剣神社の神主さんがいうておいでじゃと」との人伝ての、それも配達業務のついで、とも思えるまことに簡略の申し入れであった。しかも、何の何子という指定もなく、またこれだけは満たして欲しいという最低の条件もつけず、単に心のやさしい女の子、というだけでは木暮園長ひそかに、猫の子をもらうにしても三毛とか、赤とか、好みがあるはずじゃのに、と不満を抱いたのも無理はなかった。

本来ならば、憤然として聞き流してもいいはずなのだけれど、ま、その宮司さんとやらの話だけは聞いてみよう、と木暮園長が思ったのは、昨今、里親の申し出というのはほとんど無いためであって、万々一、その里親という人たちがあたたかな心の持ち主であった

場合、家庭を知らない子供のためにはよい環境となり得る、とも考えたからでもある。

木暮園長は、言伝(ことづ)てを持って来た配達夫のまたあらわれるのを待って白塚宮司の住所を聞くと、剣山は遠隔地ゆえに郵便配達の除外区域となっており、郵便物はすべて貞光局留めとなっているという。

その宛名(あてな)に向けて園長が里親制度に関する書類一式を送ったところ、ようやく返事が届いたのは夏休みまえであった。

里親制度というのは、形式的には県知事の委託を受けた里親が保護者にかわり、子供を養育するもので、べつだん入籍せずともよく、契約すれば若干の手当も支給されることになっている。

ただし、この制度が適用されるのは義務教育を受けている児童のみであって、中卒後、珠子が養女ともなれば補助金は下りないが、もしや白塚宮司がこの補助金を当てにしていたなら、そのことを事前にはっきり告げておく必要がある、と考えたからでもあった。

それというのも、いまは戦後の混乱も落ち着いてきてはいるものの、終戦直後のおよそ十年間ほどは引き取り手のない子は町に溢(あふ)れ、施設はどこでも定員を超過するほどだったのを、木暮園長はいまでも胸の痛くなるほどよく記憶している。

また施設でなくても、どこの家庭でも食糧難のなかで食べ盛りの子供を養うのは大へんな時代だったし、そこでこの里親制度の補助金目当てに子供をもらいにくるというケース

も少なくはなく、いく人も引き取っては虐待しているというニュースも、世間を賑わした例もある。

いきおい園長たるもの、卒園する子供たちの行き先については慎重の上にも慎重にならざるを得ないが、まもなく届いた白塚宮司からの返書には、一応申込書に添えて達者な毛筆で丁寧な手紙が同封されてあった。それには、

「自分たち夫婦は子に恵まれず、そのうち、そのうち、と来るべきものを待ち続けて、とうとう二人とも六十を過ぎてしまいました。この先、残された時間は少ないのですが、もしやさしい女の子が我が家に来てくれるなら、実の親子三人として仲むつまじく暮らしたいと思っています。何といって当地は人里離れた山奥であります故、来て下さる方があれば年齢、出自、何ひとつ問いませぬ。

つきましては、園長先生がご推薦下さるなら、我々二人は天からの授かりものとしてただちに入籍し、その子を大切に育ててゆく所存であります。故に、里親とか契約とかの言葉は不適切であると思うし、まして手当金などは全く不要であります」

といかにも神に仕えるひとらしく、生真面目な意見が述べられてあった。

木暮園長はその手紙をいく度読み返したか、この文面にいささかでも誇張や嘘が混っていれば大へんなことになる、との用心からであったが、いくら読んでも眺めても、そこからは社家の人のもの固さ、以外のものは感じられなかった。

世塵に遠い山頂の暮らしは、ひょっとして珠子には向いているかもしれん、と木暮園長の気持ちは少しずつほぐれ、一日、この施設の主任保母正岡先生にまずこの話を打ち明けた。

「どうだろなあ。いまどき見当たらんええ話と思わんかね。うちの園ではこれは珠子しかない、とわしは考えておるが」

というと、正岡先生は案に相違して、

「ンまあ」

と目を丸くして驚き、

「何というひどい話でしょう」

と怒りを露わにして木暮園長を見返した。

「何故ですか。何もひどい話ではないと思うが」

「園長先生も徳島の人なら、剣山がどんなに恐い山なのかよくご存知でしょうが。あそこは昔から天狗さんが棲むといわれているし、ついこのあいだまで女人禁制だったじゃありませんか。

そんな山へまだ十五の珠子を追いやって、どんなに珠子が淋しがるか」

「いやいや正岡先生、剣山は里人の厚い信仰に支えられてきた霊山じゃきんな。天狗さんなど棲んどりはせんよ。

それよりも珠子の両親となるこの宮司さん夫妻は、了見が立派じゃないですか。いまどきこういう謙虚な人は見あたらんと思うがね」

正岡先生はその木暮園長の言葉に激しく反発し、

「おっしゃるように宮司さんご夫婦が人格者で、珠子のことを大切にして下さることに嘘いつわりはないかもしれません。

でも園長先生、書類には白塚国太郎さん六十二歳、妻すぎさん六十四歳と書いてあります。

これでは珠子は、二人の老人介護のために人里離れた剣山へ登ってゆくということになる。白塚さんご夫妻もそういう目的で養女を、と望んだのにちがいありません」

「いやいや正岡先生、そこまでカンぐることはない。六十過ぎてもまだまだ元気な人はたくさんあります。

げんに白塚さんの郵便は局留めじゃけん、たびたびとはいわずとも、ときどきは用達(ようた)しのため里へ下りて来ておいでの様子じゃろう」

「園長先生、うちで育った子供たちは兄弟のように強いつながりを持っている場合が多いですよね。おととしは女生徒三人とも揃って名古屋の紡績工場へ入りました。ここなら寮があるし、うちにいるころと同じように枕(まくら)を並べて寝ることができるから、と喜んで行ったではありませんか。

珠子も、いま小西隆子とは仲よしじゃから、二人一しょに就職できる先を見つけてあげたほうが、あの子のためやと思いますよ」

「いや、子供たちの進路に方程式なんてありはせん。いつの場合でもケース・バイ・ケースじゃないですか。

三年まえ、揃って製紙工場に男子四人送り込んだときには、半年経たぬうち三人がつぎつぎとやめてしまい、残る一人も病気になってしもうた。

集団で育って来たから、ずっと集団で生活したほうがよいとは限らないのです。げんに小西隆子は、将来食堂をやるのが夢だから、できるならうどん屋でいいから食べ物屋へ住み込みたいというておる」

「ええ、それは私も聞いています。でも」

と渋る正岡先生を木暮園長はじっと見つめて、

「私もそうじゃが、正岡先生も珠子にはどうやら特別な思いがあるようじゃなあ。

福祉に携わるひとは、まず判断を冷静に、対応は理性的でなければいけん、とは常に私自身にもいい聞かせている信条です。

先生、ともかくこの話は本人には伝えてみますよ。

その上で珠子が拒否すればそれでええし、承諾すれば本人納得の上のことだから、祝福して送り出してあげようや。そうしようや」

と同意を求めた。

正岡先生は、話したところでまだ中学生の珠子に世間の波風がどうして理解できようか、と強く思ったが、これから三月にかけて巣立つ子供たちの進路で頭を悩ます時期であり、自分にもその責任の一端があるのなら、これ以上の反対はできなかった。

珠子が、あの夏の午後、園長室での話に自分の運命が決まってしまったと考えたのと同様に、正岡先生も、木暮園長が「ともかく本人の意向を聞いてみる」といったときから、話せば珠子は決して断りはすまい、という予感があった。

そこまで珠子を知るについては、木暮園長もいったとおり、二人とも珠子とは長く深いつながりがある。

それは終戦の年の九月十八日の朝のこと、まだ愛光園は開設しておらず、松巌寺住職の木暮祐之は復員してきたばかり、留守中、荒廃していた寺を建てなおすのに懸命であった。

本堂で朝の勤めを終えたのが六時ごろだったろうか、辺りはまだ靄が立ちこめており、階段を下りようとして何やらふっと人の気配を感じた。

それは、極めてかすかな動きで、たとえていうなら仔犬が餌を食べたあと口を鳴らしているような湿った音だったが、この音を木暮が朝靄のなかで耳ざとく捉えたのも、ひとつの運命であったと自分では思っている。

見廻すと、階段わきから奄の緒が見えており、手繰ると鋪石の上をずるずると奄が寄って来て、なかには赤ん坊らしいものが寝かされているのであった。

このときの木暮祐之の驚き、本堂の縁の下にはしばしばおこもさんが雨露をしのぎにやってくるが、真っ赤な顔の赤ん坊ははじめてだっただけに一瞬腰抜かすほど混乱し、とりあえず庫裡の母親のもとへ走ったのは、この際適切だったかも知れなかった。

母親は少し前からかるい半身不随で寝たり起きたりしており、あわてふためいて駈け込んで来た息子をたしなめて、

「お父さんが生きておいでのころにも、一度、こんなことがあった。うちは寺じゃもの、捨て子の一人や二人でびっくりすることはない。奄のなかには証拠の品も入っておるじゃろうから、一まずそーっとこちらへ運んで来なされ」

と教え、木暮は妻の真代に手伝わせてその子を奄ごと座敷へと上げた。

経験者の母と木暮夫婦があらためてみると、奄の底に綿入りのおくるみを敷き、その上に寝かされていたのは元気な女の児で、白いじゅばん、白い長着に白いちゃんちゃんこを重ねている。

じゅばんと長着は、戦時中から衣料切符で配給されている白い晒で縫ったものだが、うす綿を入れたちゃんちゃんこは紋織りの緞子で、胸の紐だけ赤い絹で丸ぐけしたものであ

った。

母のいつ子は首をかしげながら、

「ふしぎな赤ちゃんじゃなあ。ふつうの暮らしの人間がこんな白の紋織りのちゃんちゃんこを着るかねえ。

それに見てごらん。ミルクを飲んだばかりじゃないか」

いわれてみれば、赤ん坊の唇のまわりはまだ濡れていて、木暮がさっき聞きつけた人の気配とは、この赤ん坊がもっとミルク欲しさに鳴らすその舌の音であったらしかった。

赤ん坊の腹の上にもたせかけるようにして三分の一ほどミルクの入った瓶もあり、いつ子はそれを取り上げてみて、

「近くにこの子のお母さんはまだいるかも知れんな。

祐之、本堂のまわりをちょっと見て来てみなさい」

というのは、瓶のなかのミルクがまだどうやら生温かいからであった。

いつ子は嫁に手伝わせ、乳首を洗ってから自分の利き腕の右手でそれを赤ん坊の口に含ませたところ、やはりまだ飲み足りなかったのかごくごくと強い吸引力で呑みくだしてゆく。

「いい赤ちゃんじゃなあ。元気じゃなあ」

と目を細めているいつ子のもとへ、木暮は戻ってきて、本堂のまわりも地つづきの松林

のなかにも人影らしいものは見えなかったと報告した。
三人は頭を寄せ合って赤ん坊をまず畳に取り出して寝かせ、畚の中味を調べたところ、敷物にしていた黄いろいおくるみの下から、着替えのじゅばん、長着、おむつ、それにちゃんちゃんこと共布で縫った小さな袋がみつかった。
袋のなかには脱脂綿にくるまれた臍の緒と、奉書の書き付けが入っており、それには、
昭和二十年七月十五日出生
平珠子
と楷書で墨書されてあり、三人はそれを見るなり大きな驚きと衝撃を受けてしん、と黙り込んでしまった。
やっと木暮から、
「親の名も住所も書いてないなんて、あまりにもむごすぎる話じゃ」
と憤慨すれば、いつ子は宥め、
「捨て子するのにどうして親の名など書くもんかいな。書けん事情があるからこそ捨てるのじゃないか。
名前もきっと偽名じゃなあ、これは」
「ほじゃけんどお母さん、生まれた日はほんまなんでしょうねえ」
と嫁の真代が聞くと、

「生まれて六十日余り、とすれば、この発育ぶりじゃとちょうど辻褄は合うわなあ。ただこの赤ちゃんにはいろいろとおかしいことがある。第一、平という姓はこの辺りでは聞かんし、遠くからやって来た様子でもないし、それにふつうじゃ紋織り緞子のちゃんちゃんこなんぞ着せはせんのに、しかし乗せられとったんはお百姓さんの使う畚、じゃもんな。どういう事情のあるひとの子供か、まるで見当がつかんじゃないか。これじゃ親を捜しようもないわなあ」

といつ子はためいきをついた。

ミルクを飲んで満腹した赤ん坊はまもなく眠り、三人は畳に手をついてその様子をじっとのぞき込んでいたが、やがて母親が、

「祐之、さ、一っ走り交番へ行って届け出て来なされ。捨て子は二十四時間以内に警察に連絡せんと、拾うた人が誘拐罪に問われることになるやもしれんと以前教えられたきに」

と、経験からそう教えると、祐之はそうですか、とあまり気乗りせぬふうに答えていたが、次にやおら、

「お母さん、真代も聞いて下さい。

この子の親は我が子を捨てるに当たり、数ある寺のなかで、うちの寺を、この三加茂町

松巌寺を選んで頼って、預けに来たのではないじゃろうか。

私はその縁を、いま非常にふしぎに思います。ひょっとすると仏のお導きで、子供のない我々夫婦にこの子を授けてくれたんじゃないかと思うのです。

なあ真代、お前はどう思うんじゃ？　これは仏さまがわれらに『大切に育てよ』と賜わった公案のひとつとは考えられまいか」

とふり返れば、真代も、

「はい、私もそんな気がします。書き付けに親の名がなかったのがかえってさいわいじゃったかも知れません。

実の娘のように思うて育てさせてもらえたらどんなにかええじゃろか」

と膝をすすめるのへ、気の昂ぶってきたいつ子は不自由な手を小刻みにふるわせながら、

「二人ともやめなされ。

亡きお父さんも同じことをいうて、私に捨て子を育てさせようとしました。

そればかりじゃない、孤児を二人、三人と拾うてきて、一時は五人も本堂に寝泊まりさせました。祐之も智之も兵隊に取られてしもうておったから、このことは知らなんだでしょうが、戸籍もわからない子たちなら配給の食糧ももらえず、どうやってこの子らを養ってゆくか、それはそれは難儀じゃった。

うすい芋の粥でもやっと三度三度食べさせているから、と安心していても、腹が空った

からというて盗みをしたりする子もいる。そのたび私は泣きながら詫びましたよ。

大きな子供でさえこれじゃけん、ましていまどき乳呑み児を育てるのは大へんなこと。真代さんには悪いけど、子供を養うたこともないあんたが、第一、ミルクをどうします？

いまミルクは母子手帳を持つ母親の、それも母乳が出ないことを医者に証明してもらった人のみ、最低の量を配給してもらえると聞いています。

ヤミで買うたらミルクは米の三倍とか、おそらくこの赤ん坊の母親は、ヤミのミルクを買いつづけて今日まで飲ませてきたものの、もうお金がつづかなくなったのも子を捨てる決心のもととなったと思いますよ」

縷々と説く母の言葉に、祐之はなお、

「ミルクでのうてももらい乳とか、米の粉を溶いて与える方法もあるんとちがうん」

などと抵抗を見せていたが、

「よしんば苦労して育てても、その子がどんな子に育つかは判らぬ。早まってはいかん」

といつ子の頑としてゆずらぬ態度に推され、とりあえず近くの交番へ連絡しに行った。

老巡査のいうのには、自分がその子を見に行ってもなんちゃできん、こういう問題は本署を通じて県の児童相談所へ話を持っていかなくてはならないので、しばらくお待ちを、と市外電話の申し込みをしたものの、いっかなそれは通じない。

狭い交番のなかで、イライラしながら立ったり坐ったり、そのうちようやっと児童相談

所へつながったが、声が遠く雑音が多く、詳しい話はできなかった。どうやら、今日中にそちらへ出向くことはむずかしい、明日午前中にお伺いするといっているらしく、木暮は、

「それでは何分よろしく」

と挨拶して電話を切ったが、そのあと思案の上、とりあえずミルクを求めるため汽車に乗り三駅先の池田町のヤミ市まで出かけて行った。

その夜は夫婦して一睡もせず、赤ん坊から目を離さずに朝を迎えたが、育児の経験の全くない者にとっては不安この上ない一夜であった。

やがてあらわれた児童相談所の職員と保母に話を聞いてみると、親も名もわからぬ捨て子の場合は、まず捨てられた場所を本籍地と定めて戸籍を作り、その地の市町村長が名をつけてやるのだという。

そして今後の処置としては、満二歳までは乳児院で育て、そのあとは養護施設に託して義務教育を終えさせてのち、自立させるのだそうであった。

「そうすると、珠子ちゃんは」

と木暮は名を呼んでふと気づき、いいなおして、

「この子はその乳児院に入れられるのでしょうか」

と聞くと、いまのところ乳児院は香川県小豆島施設より他なく、そこで預かってもらうことになろう、と職員は答えた。

木暮夫婦ができることはここまでであって、二人は、おくるみに包まれた赤ん坊が保母の手に抱かれ、遠ざかってゆく姿を寺の門のかたわらに立っていつまでも見送った。

終戦直後の、何も彼も荒廃したころのこと、混雑した汽車で、あの子は押しつぶされもせず無事小豆島まで辿りつくことができるだろうか、乳児院にミルクの配給はたっぷりあるのだろうか、心のやさしい保母さんたちに可愛がってもらえるのだろうか、木暮はとめどなくこの子の行末が思われてならず、その後もときどきは家中でその話をし合ったが、このときの体験は木暮の脳裏に深く刻まれ、容易に消え去らなかった。

まもなく小豆島の施設から、赤ん坊は三加茂町長によって改めて「平珠子」と命名され、松巌寺の所在地を本籍地として戸籍が作成された由、木暮に連絡があった。

木暮家の三人は、折にふれ珠子のことを話題にし、そうすると母のいつ子も、あのときあれほど珠子を養女にするのを反対したにもかかわらず、ふと目を和ませて、

「ほんとにいい赤ちゃんだったねえ。

こういっちゃおかしいかもしれんけど、品のいい赤ちゃんじゃったなあ。

女の子は赤ん坊のとき、髪のうすい顔の真っ赤な子ほどきりょうよしに育つというけれど、あの子もいまにきっと髪のふさふさした色白の娘さんになることじゃろうなあ」

などとなつかしむのであった。

真代も同じ思いがあり、遠慮がちに、

「ならお母さん、あのとき家にひきとめておけばよかったですのに」

というと、これだけはいまも警戒して、

「親が知れんということは、先がはかりがたいことなんじゃ。子供のうちは何もなくても、大きくなって悪い病気が出てきたり、突然凶暴になって人を傷つけたりすることがなきにしもあらずじゃけんな。そんな苦労を、あんたたちに背負わせるわけにはいけんもんな」

というのも、結局は息子夫婦のためを思っての親心かもしれなかった。しかし木暮には、あの経験以来、庇護者のない子供たちへの関心が日ごと自分のうちに昂まってくるのを自覚しているのであった。

この界隈は何といっても草深いところだから、大都会のように路上にまで浮浪児があふれているわけではないが、日々の新聞には肉親をさがす子や、引き取り手を募る記事などが大きく掲げられ、いま自分が安穏だからといってのうのうと暮らすのはいささか心とがめる思いがある。

あるとき、まだ詳しくは聞いていなかった母親の捨て子を育てた体験について木暮がたずねたところ、いつ子は深くうなずいて、

「うちは寺じゃし、お前もお父さんの血を引いておるし、いまの世のなかでは戦争で親を失った子やら、失わずとも子を捨てる親もあってその数は増えてゆくばかりかも知れん。

それをお前はよう見過ごしはせんでしょう」

と先を見越したようにいい、そして、

「あれは昭和十八年ごろのことじゃったなあ。

このあいだの子は本堂の縁の下じゃったが、私の見つけた男の子は縁側にただ寝させてあった。座蒲団だけはひいてな。

書きつけも着替えもなく、いったいこの子はいくつじゃろ、と首をかしげたが、よく見ると歯が生えていて這い這いもする。ならおまじりくらいはよかろうと食べさせて、お父さんはこれも仏縁じゃというてきかないし、とうとう私が育てることになりました。

このあいだのように警察へも届け、名もつけてもろうてね。そして一年目に、その子の母親がたずねて来たのじゃった。

あらわれた母親というのは、池田町の外れの農家の一人娘さん。もちろん煙草も作りよったらしい。

養子もろうて子供二人生まれたところで、その養子さんには召集が来て戦地へ行ってしまわれた。

その留守に、そこへ軍隊がやって来てしばらく駐屯することになりました。何でも要塞を作るとか、煙草栽培を促進するとかで、各戸に出入りするうち、兵隊さんの一人と娘さんとがねんごろとなり、困ったことにお腹が大きくなってしもうたんです。

軍国の妻たるものが、夫の出征中に不義を働いたとなるとこれは大へんなこと、まして夫が帰ってでも来れば大さわぎとなるのじゃなあ。

子供を堕そうにも手立てがなく、そこで臨月近くになってそのひとは善通寺の親戚のもとへ身を寄せ、男児を出産しました。

子供は、親戚のおばあさんが育ててくれていたらしいが、このおばあさんもかなりのお年じゃったと見えてある日、ぽっくり逝ってしまわれた。そこでこのひと、困ってしまい、ちょうどうちの本堂にそのころ三人ほど、身寄りのない子が居ついていて私が世話をしていたものだから、噂を聞いてここに捨てに来たのじゃろうなあ」

「何というみだらな」

木暮は拳を握っていきまき、

「で、捨てた子を取り戻しに来たというわけですか」

「幸か不幸か、ちょうどそのころ、戦地の夫の戦死公報が届いたらしい。

そうなると、その兵隊さんとは晴れて一しょになれるわけだから、恥も外聞も捨てて、そのひとの子を手もとで育てたいってことじゃった」

ところが、いつ子の丹精でもう二歳近くにも育っていたその子は、母親を嫌って泣きわめき、無理に連れてゆこうとすると、手に嚙みついて大怪我をさせたという。

「自業自得ですね。そしてその子はどうしたんです？」

翌昭和十九年は松巌寺にとっていちばん大へんな時期で、まず祐之の弟智之の戦死の知らせのあと、三月たたないうちに父の住職が倒れ、わずかの患いで亡くなってしまった。悪いことは重なるもので、つづいて本堂の三人の子が揃って脱走し、しかも二歳のこの子を道づれにして逃げたという。

太平洋戦争も末期のころでもあり、捜索願を出しても警察も人手不足でなかなか消息が知れず、そのうちようやっと遠く丹波の山の中で発見され、四人別々の施設に入れられたとまでの消息はいつ子の耳に届いている。

いつ子の半身不随の病いは、このときの心労が大いに関わっているものと考えられ、その話を聞くと、木暮は生半可な決心で子供を預かってはいけないのだと、自らを戒める気持ちにもなる。

しかし、身寄りのない子供たちのめんどうを見てやりたいとの思いは、木暮の胸の内でもはや動かし難い願望となり、とうとうある日、県庁内の母子福祉課へでかけて行ったのは二十一年の初頭であった。

養護施設の数はいま極めて少なく、教会か寺以外個人経営はほとんど見当たらないのに、逆に収容しなければならぬ孤児はあふれており、またこういう世相なら、たとえ一人でも子を引き取ってくれるような篤志家も皆無、といってよいほどありはしない。

では、寺を全部開放するから施設に使って欲しい、といっても子供たちを養うには金がかかり、また住居、監督者についても厚生省の一定の基準というものがある。

木暮は県へひんぱんに通って指導を受け、児童一人につき何平米という施設の基準を満たすために、本堂につぎ足してバラックを建てたが、徳島県全体としてもこのような施設がまだごく少なかったところから、園長木暮の熱意ものをいって、昭和二十二年夏のはじめには認可が下り、措置費がもらえるようになったのは何よりもありがたかった。

木暮園長は、このころの自分を振り返って、あの大変な忙しさを夜の目も寝ずに乗りこしたのはいったい何だったろう、と心に問い、それは何ものでもない、平珠子をこの地に連れ戻すためだったのではなかったろうか、とそのことをしみじみ胸に嚙みしめる。

松巌寺は檀家の多い寺で、ただでさえキリキリ舞いするほどなのに、その上に愛光園開設が重なればまことに激忙、というにふさわしい日々だったと思う。

あれから小豆島の乳児院に収容された珠子は、二年経てばどこかの養護施設に転入させられることになり、それがいずれの地のどんな施設か、全く予測もできないために、願わくば、珠子の本籍地となったこの三加茂町に木暮はぜひとも引き取ってやりたかった。

考えてみれば、父住職の精神、母いつ子の奮闘を無意識に受け継いでいるとはいえ、もしあの朝、珠子に出会わなかったら、これほどの熱意は木暮に沸かなかったかもしれなかったとつくづく思う。

開設に当たっては、収容児の定員に応じて保母三名を募集しなければならず、その旨、新聞広告を出したところ、無資格者二名しか応募はなく、それを知って妻の真代は、

「施設での泊まり込みというんが嫌われるかもしれませんなあ。私がお手伝いします。そのうち勉強して保母資格も取りますきに」

と申し出たが、そのころ母いつ子の病状が思わしくなかったことや、一人は寺の事務も引き受けねばならぬところから、これは頼めなかった。

認可基準のなかには、資格保母が入っていなければならず、手をこまねいていたところ、檀家の一人が世話をしてくれて、近くの脇町に夫と息子を戦争で失った、もと保母が一人ぐらしをしているとの話があり、こちらはうまく運んで、やがて着替えを入れた鞄を持ってあらわれたのが、正岡満子先生であった。

正岡先生の前職はふつうの保育所保母で、泊まりこみのこういう養護施設ははじめてだとのことであったが、よく肥っていて磊落な性格そのままにさばさばと、

「なあに私は一人になってしまいましたけん、どこで寝泊まりしたっておんなじこと。こちらで子供たちと一緒に寝させてもらえば、戦死した息子が生きて戻ったような気持ちになりますよ」

と、心からこの仕事に打ち込んでくれる様子なのはありがたかった。

八月の陽盛り、正岡先生と連れ立って徳島市の児童相談所へ向かう木暮園長の胸は高鳴り、汗はしたたり落ちてとめどもなかった。

今日はいよいよ、ほぼ二年ぶりに平珠子に会える日、前もって廻って来た書類には「健康。発育良好。夜尿ノ癖ナシ。性格几帳面、口数少ナシ。草花ヲ好ム」とあり、それを見て木暮園長はふっと目頭が熱くなった。

親は無くとも子は育つ、は養護施設に働く職員全員のしみじみとした実感だが、珠子はまさしく、健康で発育もよく、その上、夜尿癖もなく、性格もきちんとしている、とあってはまさに百点満点の育ちかた、だと思った。

きっと施設のみなさんに可愛がってもらったろう、それには本人が素直でやさしい子だったからだろう、と思うと、いうなればこの子のために愛光園を開設した甲斐があったというものであった。

正岡先生には、途中珠子の履歴については詳しく話してあり、先生もすっかり感動して今日の対面を楽しみにしているのであった。

一室に通され、やがて職員に連れられてあらわれた珠子を見て、二人とも一瞬、

「おお」

と声を挙げ、つづいて木暮園長は思わず、

「珠子ちゃん、大きゅうなったなあ」

と呟かずにはいられなかった。

子供を前にして、いい子だね、おりこうだね、などと褒め言葉を口にするのはわざとらしい感じを免れないが、いま目の前の珠子にそれをいっても少しも不自然ではない感じがあった。

「あなたが珠ちゃん？　こんにちは」

とまず正岡先生が挨拶すると、ちょっとおびえた表情ながら、珠子は小さい声できちんと、

「こんにちは」

と頭を下げる。

見れば古びてはいるが小ざっぱりしたワンピースに、小指に当たる部分を繕ってある白いズック靴を履いており、決していい装とはいえないものの、みじめな感じはなかった。

木暮園長は、職員からこまかい報告を受けたあと、

「さ、珠ちゃん、一しょに帰ろうね。今日から珠ちゃんのおうちは愛光園なんじゃよ」

と、帰ろうという言葉に心をこめてそういった。

外は太陽がカッと照りつけており、それを見て木暮園長は珠子の前に背を向けてしゃがみ、

「珠ちゃん暑くて大へんだから、私がおぶってあげよう、さ、おいで」

と振り向いて呼ぶと、珠子はしぶり、それを見て職員がわきから、

「木暮さん、そういうことはしないで下さい。施設では何もかも一人でしなければならないのですから」

と注意し、そんな判り切ったことを若い職員にいわれた木暮園長はすっかり照れてしまって頭を掻いた。

新設の施設の開園当時というのは実に大へんなもので、それから一年ほどのあいだ、木暮園長はほとんど園のほうに泊まり込みであった。

生まれも育ちも異なる子供たちを一ケ所に集め、ある種の拘束を課すのだから、馴れるまでぎくしゃくするのは当然で、始終喧嘩あり、脱走あり、いたずらあり、反抗あり、また病気あり、登校拒否ありで、軌道に乗せるまで一年、というのはむしろ早いほうかも知れなかった。

この一年のあいだに、母のいつ子が二度目の発作を起こして亡くなったが、木暮園長は十分な看取りもできず送ったのが残念でならなかった。

唯一の慰めは母も平珠子と再会できたことで、これはくり返し、

「ええ子に育ったねえ。あの子はきっと生まれがええんじゃなあ。ひょっとすると平家の末裔なんかも知れんな。平という姓じゃし」

といい、それを聞いて木暮がまさか、と笑うと、
「いえいえ、この山奥の祖谷地方には平家の落人伝説がある。しらべてやってみてみい。珠子の親が知れるかもしれん」
といったのが、事実上、珠子に関するいつ子のいいおきになってしまった。
ふしぎなことに、愛光園に戻ってきてからの珠子は、姿が見えなくなると必ずいつ子の部屋に行って坐っており、その様子をしばしば目に止めた木暮園長は、まるで血を分けた祖母と孫のように見えたという。まだ十分に口もきけぬ珠子が、自分の意志で施設の外の老女のもとを訪ねてゆくのは、そこに何か互いに通い合うものがあったに違いなく、これが自分のせめてもの母への贈物であったかも知れぬと木暮園長は思うのであった。

忙しい木暮園長に代わって、日々、実際に子供の相手をするのは主任保母の正岡先生で、それだけに子供一人一人をしっかりと見分けており、子への対応のしかたは木暮園長も一目おいている。
子供たちが寝静まったあと、正岡先生は事務室で一日の日誌を記しながら、話すのはいつも珠子のこと、
「ねえ園長先生、珠ちゃんは二歳児とはとうてい思えませんよね。あんな小さい子なのに分別というものがある。仲間のいさかいにはどうしても入らない

のですよ。誰かが激しくいい合い出すと、すっと後じさりしてその輪から抜けてゆく。

そのくせ、いじめられて泣いている子があると、あんなに小さいのに背中さすりに行ってあげたりして」

とべたべたに褒めあげるばかり、木暮園長はときにからかって、

「じゃ珠子は子供らしくないってことじゃな。分別くさいってのはまるで老人じゃないか。子供は泣いたりわめいたり、さわいだりするのが健康なんじゃ」

というと、これも本気に受け取って、

「いいえ園長先生、珠ちゃんはかわいいんですよ。キビの皮でお人形さん作ってあげると、夜寝るときもそれ、おぶっちょるんじゃけん。

それにね、あの子はお花が好きですねえ。

いないと思ったらいつも庭の隅の花の前に立って眺めよるんですよ。女らしい子でしょ」

とむきになってそういう。

たしかに、乳児院からの身上書には「草花ヲ好ム」とあったとおり、この子は、幼児にありがちな玩具のたぐいを好むよりも生の花が好きで、それも花瓶に生けられたものよりも、地面に咲いているのを見ると、いっそうれしそうに眺めるくせがあった。花を好むのが女らしい子であるかどうかは別として、子供同士玩具の取りあいなどしょっちゅうの

施設内で、ひとり庭の花を眺めてはにこにこしている珠子の存在は、職員たちにとっても救いであるに違いなかった。

そして昭和二十六年の秋、木暮園長は懸案の施設の新造を果たし、子供たちをこちらに移転させた。

創立当初のバラック建ては、寝室ともなる個室がとれず、やっと大きく男女別に分けられるだけだったのを、せめて四人部屋でよい、ベッドつきの個室を与えてやりたいと念願していたのが、ほぼそれに近いかたちで実現できた。

新築移転とはいってもまだ物資不足の時代のこと、何よりもまず檀家の寄付を仰がねばならず、山林持ちの慈善家に乞うて木材を分けてもらったり、古い家具をもらい受けたり、全職員駅前に募金箱を持って立ったりしたこともある。新造施設は同じ寺領のなかにあり、前の建物とはものの五十メートルしか離れてはいないが、ただ、愛光園専用の門ができたことと、こちらは松林をへだてて、いくらか土手に近くなり、夜の静寂のなかでは吉野川の流れの音が耳につくようになったくらいの違いはある。

このとき珠子は六歳、翌年には近くの加茂小学校に上がり、さらに六年後には加茂中学へ進んで、そして来年三月には、卒業と同時にこの愛光園に別れを告げなければならぬ時期なのであった。

職員たちにいわせると、この施設に入って出るまでのいく年かのうち、何らかの問題を起こさない子は一人もいないというが、珠子だけは何の心配も要らず、今日まですごして来たのだという。

たとえば逃げたり隠れたり、ときに警察を呼ばねばならぬほどの大喧嘩や、稀には店の品物をかっぱらう子もあり、そうでなくてさえ仲間に意地悪したりいじめられたりはしょっちゅうで、一日が何ごともなければ今度は誰かが病気になるといったあんばいで、日誌のなかの悪いできごとに名前が一度も出ないのは平珠子だけだそうであった。

珠子が中学も二年になったとき、正岡先生は園長に、

「珠子は勉強も好きだし、園長先生、卒業後はここにいてもらいましょうよ。夜間の高校に通いながら保母か給食婦の手伝いをしてもらえば、何年か経つと保母試験を受ける資格ができるでしょう。施設で育った子がその施設の保母さんになるのは、他の子の模範ともなるじゃありませんか。

あの子を手離すのは惜しいですよ」

と熱心に進言したが、木暮園長はこの件についてははっきりした態度は示さなかった。実は、正岡先生には打ち明けてはいないが、これまでの経緯からして木暮園長夫妻の珠子への思いは一入のものがあり、早くから夫妻はいずれ珠子は養女に、と思い込んでいた

ところがある。

亡きいつ子は、捨て子は先がはかりがたいとして、それが息子夫婦に大きな負担となるのを憂えたため強くとどめたが、いまや珠子が何の瑕瑾もなく、文字どおり玉のように成長してゆくのを見て、夫妻はこの子を手離すなどとはもはやいささかも念頭にはないのであった。

園長夫妻はしばしば養女に迎える段取りを話しあい、それにはまず、できる限り手を尽くして珠子の両親を調べてみることにした。真代がいうのに、

「お母さまもいわれとったように、珠子はやっぱり平家の末裔とちがうじゃろか。こんまいとき、壁の合戦の絵図を、あの子、じいっと身動きもせずみつめとったんじゃもの。いまでもときどき、一人でぼんやり眺めよることもあるしなあ」

このことは園長も気づいており、そう思えばかつてのいつ子の言葉を笑い飛ばすこともできず、わらをも摑む気持ちで訪ねて行ったのは檀家の一人で、郷土史研究家の広田老人であった。

広田老は、あの絵図を施設に寄付してくれた人で、話によると池田町の古物商で自分のものを買ったとき、おまけにつけてくれたのだという。

「この徳島県の施設なら、阿波の山中へ安徳天皇が落ちておいでになった話を、子供たちに教えてやってくださいよ」

とそれを自ら鋲で壁に貼っていってくれたのだったが、木暮園長は、かつて一度も子供たちを集めてその話をしたことはないだけに、いまごろ広田老を訪ねるのはすこぶる敷居が高かった。

老人は鉄道わきに一人住居しており、木暮園長が頭を掻きつつも打ち明ける話に大きくうなずきながら、

「いまじゃなあ、阿波の山中に幼帝が落ちておいでになった話など、誰も信じるものはおらんけんなあ。園長先生が子供さんに話して聞かせるのを忘れとったんも無理ないわなあ。じゃけんど、わしは信じとるよ。あれはたしかに平家の落人の里じゃと思うとる。そこの娘さんは皆々、京ふうの美人じゃもんなあ。鄙には稀なる上臈ふうの女性がようけおるんじゃ。いやわしは実際、この目で見ておる」

と広田老は渋茶をすすめながら、まるで子供に話すように、歴史に弱い木暮園長に阿波に伝わる伝説を話してくれた。

「園長先生は学校で源平の戦のこと、習いましたなあ。平家は源氏に敗れ、壇ノ浦で悉く討ち死にした。ときの幼帝安徳天皇も、二位尼に抱かれて入水し、崩御なされたと教えられたじゃろ。

ところがこの辺りにいまも残るいい伝えでは、安徳天皇はご守護の任を負う平教盛の二男、平国盛に護られてこの阿波の国祖谷山の山中に逃げのびられたという。

東祖谷山村に栗枝渡というところがあって、ここに落人たちは行在所を定めたが、この地はとりわけ湿気多く、また寒冷の地じゃ。幼帝にはきびしいお暮らしであったとみえて、翌年この地でとうとうおかくれになったと伝えられておりますのじゃ。

この場所にはいま八幡神社が建立されておりますが、社殿の右手に天皇をご火葬申し上げたとされる跡があり、誰が植えたのか、ひとり生えか現在天まで伸びた大銀杏があって、ご火葬場あとを守るかのようじゃと皆がいう。

ふしぎなことに、どんなに寒い冬でもこのご火葬あとだけは雪が積もらんそうじゃ。あのあたりで標高千メートルはあろうかと思えるがこれもおん年八歳で崩御なされた幼帝のおん徳というもんかなあ。

このときの落人は総勢三十六名であったとも、十数名しかいなかったともいわれるが、このひとたちはそのあと、源氏の追討の目をくらまし、以来この地に居ついて阿波の人となって下された。

剣山の頂上には平家の馬場、という平らな地があり、この名前でもわかるとおり、あっこで馬を責め、いずれまた平家の世がやってくることを夢みて、その日にそなえたものじゃろう。ほんじゃけん、祖谷山一帯には平家や武士に因んだ地名がようけある。

剣山も安徳帝の御剣を頂上の宝蔵石の下に埋めたけん、そう名付けたいうし、国盛杉、刀掛けの松、それから栗枝渡の地名も、祖谷川を渡るとき、栗の木を伐って橋にし、幼帝

をお渡し申し上げたためそう呼ばれたそうですのじゃ。

それでいまでも、東祖谷から西祖谷にかけては平家の里ともいわれ、そこに根をおろした平家の武士たちは土地の娘さんをめとり、子をなしていまに至っておるという。

じゃけんいまなお残るここの八軒の名家には、平家ゆかりの品を秘蔵してあるところもあり、直統といわれる山中家は代々伝わる赤旗を家宝とし、また吉川家のご先祖は、安徳帝のご最期をお看取り申し上げた医家ということじゃ。

これらを、とるに足らぬ風説とか、祖谷を秘境として観光用に売り出すための手段じゃとか批難する向きもあるが、わしはそうは思うておらん。

わしは、壇ノ浦で亡くなられたお方は、きっと替え玉であられると思う。安徳帝はそれ以前、屋島の戦のあと、この山へお入りになられたのじゃと考えておる。いまでも祖谷一帯には、いかにも都びとのようなきれいな娘さんを折ふし見かけるのが何よりの証しじゃないかと思うのじゃがなあ」

という広田老の話を園長はしっかりと聞き、そしてもうひとつ踏み込んで、他言無用の約束を取りつけた上で珠子の出生について打ち明けた。

「ほう」

と広田老は首を振り、

「いよいよ伝説はほんまもんじゃった気がしますなあ。

捨て子は戦後、町に溢れておったと聞くが、こんな田舎で、しかも身分の高い人が着るような着物を着せられた赤ん坊の捨て子ははじめてじゃ。やっぱり、落人伝説に関わりのあるお方じゃろうなあ」

と腕を組んで考え込んでいたが、

「やっぱり園長先生、この八軒へ訪ねておいでるんじゃな。ただし、平という苗字は偽名じゃよ。ここは吉川とか山中、峯谷などで、落人がまさか平という姓はつけるはずもない。行きなされ。行ってみなされ。なんぞ判るかもしれん」

と広田老はしきりに園長を励ましてくれた。

行きなされ、とすすめられても、では参りましょうと早速に応じられないのは、この人跡稀な秘境へどこをどう入ってゆくか、皆目見当がつかず、また険阻な地ゆえにさまざまの恐い話が伝わっている。

いまだに、平家伝説に聞く多くの武士の幽霊が山中をさまよっている話、危険な谷道をつけるとき、万人の人夫が事故死したため万夫谷と呼ばれている個所、そう遠くない昔、小学校の校長以下三名の職員が凍死した事件、この三加茂町まで聞こえているだけでも、決してこの山々に足を踏み入れてはならぬという戒めが生きているのであった。

しかし、珠子のためを思えば、これから親となる身としてぜひとも出生は明らかにしておいてやりたく、木暮園長は真代と相談の上、池田町から祖谷郷へと入ってゆくことにし

た。吉野川の岸辺に立って南を望めば、天を摩す山々が屏風のように立ち並んで行く手を阻んでおり、そのなかへたった一人、人力で分け入ってゆくのはなかなかに勇気の要ることではあった。

木暮園長はまず池田町の祖谷口から祖谷渓までの定期バスに乗ろうとし土讃線祖谷口で下りたところ、バスは夏期だけの運行で、いまは休止だという。ついでまた土讃線で吉野川沿いに大歩危まで入り、ここからついさきごろ京上まで開通したというバスに乗れば何とか落合まで辿りつけそうだと考えたが、ざんねんながらこのバスも六月のいまは雨で道がところどころ決壊して不通になっているのであった。

木暮園長は無念の思いを抱いて三加茂町に戻り、広田老にこの一部始終を明かしたところ、老は資料をしらべて平家ゆかりの八軒のうち、これといった根拠はないものの、下瀬の峯谷家に問い合わせてみては、と提言してくれた。

木暮園長は委細を長い手紙にしたため、末尾にははっきりと、これは珠子嬢を養女に望むが故の詮索であって、ご当家には今後ともいささかのご迷惑もかける所存はないので、何とぞ、ご承知おきの事実があれば、ありのままをお明かし下され度、と懇切な文言を記したのであった。

手紙を書きはしたものの、これが先方へ届くは果たしていつか、また首尾よく届いても返事がもらえるかどうか、はなはだおぼつかない文の使いではあったが、それでも夫妻は

一縷の望みをかけて待ちつづけた。

しかし思いもかけず、奥山の匂いのする部厚い封筒が配達されてきたのは三ケ月ものちのことであった。

差出人は三好郡東祖谷山村下瀬字石原、峯谷孝正、とあり、昔ながらの巻紙に墨書された文字はすこぶる読みにくい略字くずし字が多かった。それでも夫妻は頭を寄せ合って判じ合い、何とか意味をひろってみれば、まず、お申し越しの質問に該当するような事実は当家には全く心当たりなく、これによって家名に傷がつきはせぬかと甚だ迷惑致しおります。本来ならば放置いたすべきところなれど、素姓も知れぬみどり児を養女に、と望む貴殿のご篤志に感ずるところあり、記憶を手繰り寄せつつ、ここに返書をしたためた次第であります、と一言報いられたあとで、昭和十九年ごろの、太平洋戦争もそろそろ敗色濃いあたりから、この祖谷一帯にかけては疎開者が日に日に増えはじめたという。

米軍が四国の、高知県の海岸線に上陸するという噂は早くからこの山中まで流れてきており、もしそうであっても、まさか険阻なこの辺境まで攻めてくることはあるまい、と誰も考えたに違いなく、縁故のあるなしにかかわらず、まず高知から山越しにやってくる人でいっぱいになり、次いで本土が危いと聞いて、瀬戸内海を渡ってくる人たちでこの辺りは混雑を極める状態となった。

東、西の祖谷山村一帯の家という家は、母屋には五、六世帯の同居、納屋にも二、三世

帯というのはざらで、溢れ出た人たちは庭や道のわきに掘立小屋を立て、そこで寝起きするありさまだったが、聖戦完遂という大義のもと、誰も不平ひとつ洩らさなかったという。

峯谷家にも、この孝正老の記憶にもないほど遠い縁者がいく世帯か身を寄せていて、手紙では「老妻に聞きしところ、そのなかに東京よりの疎開者にて、終戦直前、我が家にて出産せし女性ありしをおぼえており」とあり、しかしながら、戦争終結のあと、家族とともに他の疎開者同様、この地から引き揚げて帰ってしまったという。

園長夫妻は手紙のこの個所を指して異口同音に「これじゃ」と叫んだことをよくおぼえている。

珠子の誕生日が七月十五日、園長が本堂で発見したのは九月十八日、すると母親は身重の身を、遠い伝手を頼って峯谷家に疎開し、無事身ふたつになってのち、産んだ子は松巌寺に捨ててもとの東京か、或いは他の土地かへ行方をくらましたもの、と考えれば符牒はぴったりと合う。

しかし、身重の身でここまでやってくるのに介添えがないとは考えられず、いったい何人世帯だったか、何故四国の山中にまで来たか、いやそれよりも重要なのは、何故に産んだ子を捨てねばならなかったか、であった。

「ますます判らんようなってしもうた」

と腕を組む園長に、真代は、

「祖谷への道がなおったらもう一ぺん峯谷さん家へ行って、詳しゅうに聞いてみたらどないじゃろか」

としきりにすすめるが、手紙の冒頭に、明らかに迷惑と書いて釘をさしてある限り、それはできないと園長は思った。

それに、当時の混雑のなかでは、疎開者と宿の提供者とのトラブルは日常茶飯事で、両者が親しく話し合ったともとうてい考えられず、それは男の孝正老にほとんど記憶の残っていない事実を見てもわかることではあった。

また元気な男という男はすべて戦に駆り出され、残された妻が身重である例は珍しくはなかったし、珠子の母親も、まわりから身上話を聞き糺されることもなく、祖谷での生活をすごしたものと考えられるのであった。

木暮園長はこのことについて妻とともにいく月も悩んだ挙句、ある夜、気持ちを据えて、

「なあ、珠子の過去には一切蓋をしてしまおう。両親は戦災で亡くなったということにして、中学卒業を待って、我々と養女の縁組をすることにしよう」

というと真代もうなずき、

「お父さんはともかく、あの子のお母さんはもう死んじょるとしか思われんなあ。捨て子しても、母親はその捨てた場所へ必ず様子見に来るというけんど、今日まで十二年ものあいだ、それらしい人は誰もあらわれんし」

と何の異論もなかった。

その年の夏休み、園長は珠子を自宅の庫裡へと誘った。

母のいつ子が存命のころには、珠子はよく施設を抜け出てこちらへ遊びに来ていたが、その後はめったに訪れることはない場所であった。

真代とふたりで向かい合うと、珠子は表情を固くして緊張しており、それを和らげるように、園長はゆっくりと、

「珠ちゃん、この部屋おぼえとるん？　珠ちゃんがおばあちゃんて呼んでた私の母が寝てたとこなんじゃ。

なあ、そのおばあちゃんの願いでもあり、私と真代との希望でもあるんじゃけんど、珠ちゃん中学出たら、うちの子になってくれんかなあ。小っちゃいときから馴染んどるんじゃし、いままでもずっと、私も真代も珠ちゃんをほんまの娘じゃ思うて、暮らして来たんじゃが、中学出たらちゃんと籍にも入れて、ほんまの子になってもらいたい思うんじゃが、どんなもんじゃろなあ。

もちろん、学校へも行ったらええし、勉強好きならその上へも行かしたげよ。珠ちゃんの好きなようにしてもろうてええんじゃが」

といったとき、園長も真代も、この場が明るい笑いに包まれ、三人一しょに「よかった

なあ」と手を取って喜び合えるとばかり考えていたのであった。

が、それを聞いた珠子は驚いたように目を見張り、二人をまじまじと見つめていたが、やがて視線を落として、

「そしたら私は、ここで一生死ぬまで暮らすのじゃろか」

と呟くような声で聞いた。

園長はその顔をのぞき込むように、

「まあなあ、珠ちゃん、私らは珠ちゃんが好きじゃ。親子として一緒に暮らしたいんじゃけん、子になってもらいたいんじゃわ。

そら上の学校行ったりしていっとき別々の暮らししてもかんまんけんど、終わりは木暮家のお墓へ一しょに入ってもろうたらうれしい思うよ。じゃけんど、こんなことはさきのさきの話じゃ。どうなるか判らんことじゃ。

心配いらん、珠ちゃん」

と園長は珠子の不安を取り除こうと一所懸命になって言葉を継いだ。

すると、聞きながら遠くを見るようにみひらいていた珠子の澄んだ双眼から突然、噴き上げるように透明な涙が溢れ、それはあとからあとから勢いを増して、頬を伝わっていった。とうとう珠子は卓の上に突っ伏し、ついには背を波打たせながら声をあげつつ泣き入っている。

園長夫妻は呆気にとられ、一瞬顔を見合わせたが、二人とも急いで珠子のそばににじりより、背をさすったり、頭を撫でたりして慰めるのであった。しかし珠子の涙はとまらず、ハンカチで顔を掩いながら、

「帰ります」

といって立ち、力無い足どりで施設へと戻って行った。

この日、珠子は夫妻の要請を承諾していないままこうして席を立ってしまったが、園長も真代もそうは受けとっておらず、

「あの年頃はいちばんむずかしいけんなあ。なあにしばらくするとありがとう、ちゅうて、承知の答えをしてくれるじゃろう」

と話し合っては、その日を待っているのであった。

しかし、珠子はこの日のことをすっかり忘れ去ってしまったように、その後は何の反応もなかった。暮らしかたにも格別の変化はなく、これまでどおり過ごしているのを見て、園長夫妻はどれだけイライラしつづけたことだったろうか。

二人して毎夜のように話しあい、真代はしきりに、

「珠ちゃんきっと、もう承諾しとるんを、わたしらが知っちょると思うてじゃなかろか。もう一ぺん呼んでたしかめてみたらどうじゃろ」

とすすめるが、園長は、
「呼んでまた泣かすもかわいそうじゃ」
とためらってしまう。
それというのも、木暮園長には、あまた手にかけた多くの子供たちのなかで、事情はどうあれ、珠子のみを自分の養女にすることについては後めたい思いは大いにある。子供たちには平等に接しなくてはならないが、たとえば正しい感覚の持ち主である正岡先生でさえも珠ちゃん珠ちゃん、と自分のそばに引き寄せたがるし、ときどき明らかなえこひいきをしようとする。
施設には折にふれ衣料などの寄付があり、荷をほどくと、正岡先生はまっさきに新しいものを取り、
「これ珠ちゃんにええなあ。ぴったりじゃわ」
などと、わきへ取っておこうとし、木暮園長が注意すると、
「あらそうだったなあ。みんなに選んでもらうべきじゃな」
とさすがにすぐ改めはするが、その行為を見ると、木暮園長はみずからの心を照らし出されているようだといつも思って来たことが省みられる。
収容児のなかにはとくに嫉妬心の強いあの子、性格の激しいこの子、などの、いつもこちらを窺っているような目つきが感じられ、この子たちを、いま親に代わって育てようと

するなら、並みの二倍は愛情を注がねばならぬ、というのが自分の日頃の持論なら、珠子ひとりを園にひきとめるのは、子供の心のバランスを大きく崩すことになると思われるからであった。

珠子が中三に上がった年の春、夕食のあと一年後にはここを巣立ってゆく男子の島崎勇、滝和光、女子は小西隆子と平珠子の四人を園長室に呼び、それぞれの進路についての話しあいを持った。

「みんなもこれまで見てきたとおり、中学を出るとここの先輩たちはほとんど就職さきを求めて社会へ出て行ってしもうたなあ。

あんたがたも来年はどうするか、一応、話は聞いておきたいんじゃが」

と園長が口火を切ると、皆もじもじしていたが、身寄りのない身の上の隆子がまっさきに、

「私は前からいいよるとおり、どこか食堂の住み込みに世話してもらえたらええと思います。大人になったら小っちゃなうどん屋でもええけん、自分で食堂やりたいですきに、いまから仕事おぼえちょきたい」

というと、つづいて勇は、

「おれは園長先生にお任せします。おれは個人の家へ住み込むよりも工場みたいな寮のあるところがええ。県外でもかんまん」

といえば、和光も、
「おれもそれがええ。ここを出ても去ぬる家はないがじゃきに、自分で働かないけんもん」
といえば、難病で寝たきりの父親を持つ和光の家の話になり、一しきり慰め合ったあとで、木暮園長は、
「珠ちゃんはどうなん？　ここに残るんやったかいなあ」
とそっと触れた。
すると珠子はすらりと、
「私もみんなとおんなじように、就職先をお願いしたい思うてます」
と答えた。
木暮園長は、どきんとしたが、さりげなく、
「そうか。みんな自分で働く意志があるんじゃなあ。ほしたらいまからぼつぼつと、就職先の手打っとかないけんな。去年はキミエちゃん一人じゃったし、結局は岡山の伯母さんの家へ引き取られていってしもうたけん、楽じゃったが、今年は四人、皆ええとこへ納まるよう、私もがんばるわなあ」
と励ましたが、心のなかは重い失望でいっぱいであった。
その夜、がっくりと力を落とした園長からこの話を聞いた真代もどれだけ落胆したか、

口を尖らすようにして、

「珠ちゃんはあたしたちが嫌いなん？　こんなにあの子のこと、心配してあげちょるのに」

と珍しく不満を露わにし、目には涙さえ浮かべていたが、園長はひとり、これでよかったかもしれん、と思った。

生まれた直後から特別のえにしで結ばれている、と自分たちでは思っても、施設の子として育てば皆おなじ、そのなかで一人珠子ばかり我が子とするのは、これまでの生きかたからしてよいことではないと自ら慰めるしかないのであった。

第二章　珠子の決心

珠子が木暮園長から、剣山に住む宮司からの養女に、という話を聞いたあと、一週間ほどののちの午後、珠子は隆子と二人で土手を越し、川に泳ぎにでかけた。

隆子は気性が強く、施設内でも小さい子を泣かすのでしばしば先生がたから注意を受けており、男子からは「ケンカ鷹」とあだ名をつけられているが、珠子は何故か気が合い、いつも一緒に行動している。二人だけで泳ぎにいってはいけないけれど、今日は暑いし、「足だけ水に漬けるだけだから」とかいって河原に下りた。

河原は珠子にとって何よりも楽園で、それというのもここにくればさまざまの野草が石のあいだから伸びており、その野草にはまた必ず小さな花が咲いていて、珠子を束の間楽しませてくれる。

この日も、珠子は先生に縫ってもらった布の手さげ袋に大事な虎の子の植物図鑑を入れ、隆子と手をつないではだしになり、しばらく浅瀬で遊んでからもつれ合うようにしていつもの場所へ坐って足を投げ出した。

いつもの場所とは、以前の増水の折、川上から流されてきた大岩が転がっているところで、都合のよいことに、岩のわきには楊の木が一本、ひょろひょろと伸びて涼しい木陰も作っている。

ここにはいまカワラニガナがいちめんに咲いていて、その淡い黄いろの小さな花を見ると、珠子はいつも心が和むように思う。

「ここ涼しいなあ。石は焼けてて熱いけど、風が吹くし」

といいつつ珠子は、隆子の顔にまつわる長い髪の毛を手でかきあげてやりながら、

「どうして髪伸ばすんじゃ。短くするようにいつもいわれとるんのに」

というと、

「うるさくいわれるから反抗するんじゃ。あれはなあ、長い髪じゃったらシャンプーがよけい要るけん、そんなケチなこというてるんよ。長う伸ばしても、あのデブのオバさんには何の関係もないやんか」

と正岡先生のことをいい、それを聞いて珠子は「そうじゃなあ」と笑った。

隆子が愛光園へやって来たのは小学三年のときで、そのときの印象は、この子の以前の生活を思わせるような、すさんだ態度であったのを珠子はよくおぼえている。父親は傷害致死で入獄、母親は隆子を祖母に預けたまま消えてしまい、隆子は枚方市でその祖母とともに暮らしていたが、決して楽な暮らしではなかったとみえて、こちらに入所した当時、

珠子にもしきりに盗みをけしかけたものだった。

「店屋のもんじゃったらかんまんよ。どうせ売るんじゃからな。店番がよそみしよるあいだに袋菓子ポケットへ入れるんじゃ」

と教え、珠子がいうとおりしないとつねったり、髪をひっぱったり、おやつを隠したり、意地悪をしたが、ふしぎに珠子は腹が立たなかった。

何故か、と聞かれれば答えようもないが、たぶん隆子の性格の中に、自分にはないある種の勇ましさを見、それを羨ましいと、考えていたせいなのかもしれなかった。

仲よくなったのは、隆子は生理が早くて、小学五年の終わりにそれを見たとき、相部屋だった珠子が一しょになって始末してあげて以来、心をひらいたし、また、盗み癖もぴたりおさまってしまった。

川原石の上に並んで足を伸ばした二人の話題は、やはり卒業後のこととなり、

「ふたあり一緒じゃったらええのになあ」

と、いう隆子に、珠子は、

「私、こんな話があるんじゃ」

と、剣山からの養女の話を打ち明けた。

「へえーっ」

と隆子はのけぞっておどろき、

「それでタマ子、その場で断ったじゃろうなあ」
と念を押すと珠子は首を振り、
「園長先生はよう考えてからにしなさいとおっしゃるけん、私ははいとだけ」
「バカじゃなあ、タマ子は」
と隆子は、
「あんた、施設より他の世界しらんけん、そんなことがいえるんじゃ。そんな山奥のじいさんばあさんと暮らすじゃなんて、もう息も詰まるわ。私は一日じゃって、半日じゃってよう暮らさん。
私は枚方でばあさんとしばらく一緒じゃったが、それはもううるさい、やかましい、死にそこないの根性曲がりで、朝から晩までガミガミ、ガミガミ。この施設へ入ったとき、私はほっとしたんじゃで。
やめとき、やめとき」
と珠子の肩へ手をかけてゆすぶるのへ、珠子はじっと隆子の目をみつめて、
「おばあさんの家より施設がええと、隆ちゃんはほんとにそう思うたん？」
と聞いた。
「そうに決まっちょる。なんでじゃ？」
と怪訝そうな隆子の顔から珠子は視線をそらし、うつむいていたが、やがてほろほろと

スカートの上に涙をしたたらせた。
「何でじゃ？　タマ子、いうてみい」
「うん」
とうなずいて珠子ははっきりと、
「隆ちゃんはそういうけど、私はな、私は施設が嫌なんじゃ」
と、はじめてそれを口にした。
「間違うてとられると困るけん、隆ちゃんにいうとくけどなあ。私は園長先生や真代先生が嫌いじゃというとるんじゃないよ。私を養女にしてくれるのは有り難いし、うれしいと思うけんど、あの家の養女になってしもうたら、私は一生、施設から離れられん。死ぬまで施設がついてまわるじゃろ？
いままでな、私はもの心ついて以来、施設の子じゃ、親のない子じゃいうて、どんだけ学校の友だちからうしろ指さされたんか。町へ出ても店屋のおばさんたちはじろじろ見るし、ものを盗まれやせんかと用心しよる。
なあ隆ちゃん、あんたも思うじゃろ？　私らが何のわるいことしたんじゃ。こんなバチ当てられるようなこと私らがしたというんか。私は隆ちゃんのように口も立たんけん、口惜しいときは便所へ入って泣くだけじゃった。けんかもよう仕掛けんと泣くだけじゃった。じゃけんど、私は近ごろになって、気持ちが落ちついた、いうんか、だんだんとこれも

運命じゃなあ、と思うようになってきちょる。神さまがつけてくれた私の道じゃ、と思うようになってきちょる。

但しじゃなあ、神さまはいたずら好きで、私にくれた道のなかに、ところどころ分かれ道を作っておいでになるみたいじゃ。どっちでもええほうへ歩いてゆきなさいとじっと天から眺めておいでになるらしい。いまは来年三月の卒業がその分かれみちなんじゃと思う。なあ隆ちゃん、私は園長先生の家の子になって、一生施設に関わって生きてゆくよりも、誰も知らん人ばかりの中に入って行って、施設のことはきっぱりと忘れたいんじゃ。判ってもらえるかなあ？」

珠子が泣きながら話すのを隆子はじっと聞いていて、

「そうじゃったの。そうじゃったの」

とうなずいて、

「判らんことはないよ。私も施設の子じゃとどんだけ白い目で見られたか知れんけんねえ。ほんじゃなあ、タマ子、あんた工場へ就職するよりもやっぱりその山奥へ行くつもりしちょるんか？」

「まだはっきりとは決めとらんけんど、先輩たちの話では、やっぱり施設出の子は施設出の子で結局就職先も一しょになるちゅうこともあるらしいんじゃ。

ほんじゃったら、ここにおるんと同じじゃろ。それはもっと嫌じゃなあと思うし」

「そうじゃなあ、しょせん私たちには人並みのしあわせはないかもしれんわ」
隆子は大人ぶった口調でそういい、かたわらの小石を拾って遠くの川面（かわも）へ投げた。家なし親なしの子は、来年四月からはどっちみち自分自身の選択に従って生きてゆかなければならないのを、二人とも身に痛いほど感じているのであった。

夏休みも終わり二学期がはじまったころ、木暮園長はふたたび園長室に珠子を呼び、先日の話についての結論を聞こうとした。
「どうしようなあ、珠ちゃん、そろそろ返事せんならんが」
と、なるべく強く当たらないように話を持ちかけると、珠子は、
「園長先生はどんなに思いますか？」
と逆に反問し、園長はたじたじとしながら、
「何ごとも珠ちゃん次第じゃけんな、行きたいと思えばそう返事するし、なんなら断ってもかんまんよ」
「先生、向こうのおじさんは私と指定してきたんじゃないですよね。女の子じゃったら隆ちゃんでもええんじゃないんですかねえ」
「ま、それは、なあ」
と応酬しつつ、園長は珠子がまだ決心は固まらず、かなり揺れているのを見てとった。

ではこの話はないことにしよう、と断ち切ってしまうことも何故か園長はできなかった。珠子を集団就職で県外に手離してしまえば、その先は目の届かなくなるという不安も、かなりの部分心を占めていたらしい。

「ではね珠ちゃん、白塚さんとは一生親子となるわけじゃけん、会いもせんと話は決められんわなあ。私もぜひ一ぺんはお話もしたいし、どうじゃな、白塚さんとお見合いしてみんかな」

と園長が提案すると、珠子はほっとしたように表情を和らげ、そして、

「お見合い？」

となぞってかすかに笑った。

「そうじゃお見合いじゃ。結婚みたいじゃなあ」

と園長も一しょになって笑った。

園長はこの経過を正岡先生に打ち明けたところ、最初から反対の正岡先生は、やはり納得できないと見えて、

「お手紙には園長先生からの推薦者を、天からの授かりもの、と思うってありましたね。そしたらお見合いをすればほとんど決まってしまいますわね。

そうでなくてさえ、珠ちゃんを見たら誰でもさらって行きたくなりますから」

といい、そしてみずから、
「私が珠ちゃんを説得してみますから」
と乗り出すことになった。
夕食のあと、就寝までのあいだ、愛光園のなかにはくつろいだ自由な時間がある。風呂場で水を浴びている者、自習室で本を読んだりカードで遊ぶ者、保母にまつわりついてふざける者、そして上級生の当番は食事のあと片づけに忙しい。
正岡先生は、あちこちの群れを目でさがし、自習室の片すみで二、三人の子に絵本を読んでやっている珠子を見つけると、そばに寄っていって、
「ちょっとええ？」
と聞き、裏口へ珠子を誘った。
サンダルをつっかけて外へ出ると、そこはもう土手のきわまで松林が拡がっている砂地で、あたりはたそがれが濃くなっている。
正岡先生は先に立ち、松林のなかに子供たちがつけた小さな道を辿りながら、これも皆が椅子代わりによく使う土手ぎわの松の切り株を指さし、
「まあ、かけなさい」
と珠子にいい、自分は向かいあった石に腰をおろした。
そして団扇の一枚を珠子に手渡して、

「煽ぎよらんと蚊にくわれるよ」

と、自分からバタバタと音をたてながら、

「珠ちゃん、こないだ園長先生から聞いた養女のお話じゃがなあ。お見合いすることになったってほんと？」

とたずねた。

夕闇は刻々と深まり、ついそこの施設の灯りも明るさを増し、土手の向こうの人家にもぽつぽつと電燈の数が増えてきているのが見える。

遠灯りで見る珠子の表情はいつもどおりのおだやかさで、

「はい」

とうなずき、

「園長先生のおっしゃるとおりにしたいと思うています」

と、これもいつもどおりの声音であった。

「そう」

と、正岡先生のほうが珠子の落ち着きぶりにちょっとたじろぎ、

「ほんなら珠ちゃん。もし園長先生がお山はこわいけんやめなさい、といえばやめるの？」

と詰め寄ると、珠子はしばらく考えてから、

「園長先生はたぶん、そのおじさんのおうちへ行くように、とすすめると思います」
「あら、なぜ？
おじさんのおうちは、いえ、おじさんじゃなくておじいさん、その方はおそろしい剣山のてっぺんに住んでおるんよ。
剣山のことは珠ちゃんも社会で習ったでしょう？
そんな人里離れたさびしいお山へ、園長先生は珠ちゃんに行けとすすめるかなあ。
すすめはせんと思うんじゃ。私は。
どうして珠ちゃんはそう思うんじゃろか」
蚊を追う正岡先生の団扇の音はいら立ってはげしくなってくるのへ、珠子は相変わらずゆったりと団扇を動かしながら、しばらく黙っていたが、やがて、
「先生、お山には高山植物がいっぱいあるんじゃってね。
学校の図書室の図鑑で見ましたが、私の知らんとってもかわいい花が、ようけようけありました。
そういう花は、町へおろして来てもよう咲かんし、見ようと思えば山へ行かんといけんですもんなあ」
「まあ、珠ちゃん。
そんならあなたは、花が好きじゃけんこのお話を受けるっていうの？

園長先生は、そんな理由ではゆるして下さいませんよ」

「いえ」

と珠子は正岡先生の言葉をさえぎってから、ごくんと唾を呑みこんだ気配があって、

「先生、私なあ」

とちょっとのあいだ、いいよどんでいたが、

「あの」

とまた詰まり、やがて思い切ったように、

「先生、私がこの愛光園へ何故やって来たかということ、私、知っています。私、捨て子だったのですよね。園長先生に拾われて、それから小豆島の乳児院へ入れられたのですよね」

「誰がそんなことをいったの？」

正岡先生はとどろく胸を押さえながら聞き返すと、

「誰にもいわれたことはありません。私のカンじゃけど。ずっと前に、園長先生はお寺の本堂で捨て子を二人拾われ、その一人は逃げてしもうていまは行方知れずになっている、ということを、給食婦さんが話しているのを洩れ聞きました。

あとの一人が私だったのですよね。

だって、こちらにいる子はほとんど、どんな事情でここへ入ったのか、親はどこにいるか、おおよそ知っていますもの。

私だけはなんちゃあ知らされていないんです。

乳児院のことも記憶にありません。気がついたときから私は愛光園の子だったのです」

「珠ちゃん、そんなことはいまあなたは考えなくてええんよ。

親さがしは珠ちゃんが一人前になってから十分できることよ。

いまはね、これからの進路をまず決めなきゃならない大事なときでしょう。

ね、よく考えてごらんなさい。下界とはるかへだたった山の上に養女に行って年寄りの世話をするよりか、一まずは隆ちゃんと一しょに、寮のある工場へ行くほうがずっと将来性があると思わない？」

「思いません」

突然珠子は激しく正岡先生の言葉を否定し、立ち上がった。

そうしてくるりとうしろ向き、土手に向かって五、六歩進むとまたその場にしゃがみ込んでしまった。

泣いているんだな、と正岡先生にはすぐわかり、そっと近づいて団扇で蚊を追い払ってやりつつ、こちらも黙ったままでいる。

鼻をすする音がしばらく続いたのち、やがて珠子が、

「先生にはわからんでしょう。
私はお父さんお母さんが欲しいんです。とっても欲しいんです。一度でええけん、お父さん、と呼んでみたいし、はいと返事をしてもらいたいのです」
と涙声でいうのを聞いて、正岡先生励ますつもりで、
「あら珠ちゃん、お父さんお母さんはちゃんといるじゃありませんか。生まれたときから園長先生がお父さん、私は少々たよりないかもしれんけどお母さん、それはこれからもずっとそうよ。就職して園を出ていっても、いつでもお父さんお母さんの顔を見に帰っていいのよ。私たちはここにずっとずっといるんですから」
「先生、そんなのイヤ。
施設でのお父さんお母さんは、四十人が同じように分けなければならないし、私のもらえる分はたったの四十分の一のお父さんお母さんでしかないじゃないですか。
どんなひとでもええんです。一度でいいから私ひとりの、百パーセントのお父さんお母さんと暮らしてみたい。
たとえその生活がすぐこわれたとしても、親なしの私にはとってもたのしい思い出として残るんじゃないでしょうか」
「珠ちゃん、現実ってのは、想像しているよりはずっときびしく困難ですよ。
養父母がええひととは限らんの。楽しい夢を描いていても、むざんに破れてしまうかも

しれんし。

ねえ珠ちゃん、悪いことはいわんきん。隆ちゃんと一しょの職場をさがしましょう。剣山のほうへは、当園には該当者がいないからとお断りしましょうよね」

「ええんです。

隆ちゃんのお父さんは監獄に入っているそうだけれど、いつかは出てみえるでしょ。そうすると、隆ちゃんはお父さんと一しょに暮らすと楽しみにしているんですもの。

私にはいつまでたっても、親はあらわれません。自分で作るより他ないんです」

そう強い口調でいい切ると、珠子は自分の膝小僧に顔を伏せ、声をしのんで泣いているらしかった。

そんな珠子を見ると、正岡先生もせきあげてくるものがあり、それは単に珠子がむごいというだけでなく、この施設の仕事にいかに懸命に身を挺しても、やはり子供たちは肉親の愛を求めて、自分のもとを去ってゆく、それがいらだたしくさびしかった。

どんなひとでもよい、自分だけのお父さんお母さんが欲しい、という珠子の言葉は、その後二、三日のあいだ正岡先生の胸の底に居据わって消えなかった。

十三年まえの夏、木暮園長とふたりで徳島市の児童相談所まで珠子を迎えに行って以来、ときに園長から注意を受けるほど、自分はこの子を大事にし、可愛がって来たつもりだったのに、やっぱりお母さんとは思ってもらえなかったという失望落胆は大きかった。

肥り肉の正岡先生は、額に大粒の汗をかいたまま事務室でぼんやり坐って考え込んでいることがあり、その様子を見て木暮園長は自室に招き、

「先生もなかなか了見が決まらんようじゃな。

つらいだろけど、ここはやっぱり一度は珠子を白塚さんに見てもらいましょう。双方とも前もって決めているかたちですが、いや実際に会ってみれば案外、拒否反応を示すかも知れませんよ。

ほら、前にもありましたね。里親が里子をようく見た上で引き取っても、いろいろ欠点をあげてすぐ戻してくる。戻すだけならええんじゃけど、別の子と取り替えてはまた戻す、あれは嫌、これは嫌、とまるで品物を試すか、ゲームを楽しむみたいに軽々しく考える里親もいる。

白塚さんは神主さんだから誠実な方だとは思うが、会ってみなければ判らんじゃろ。話がうまく運ばなければ、正岡先生のお考えのように他の方法へ努力して頂いてええわけだから」

とおだやかに説き、正岡先生もそれにはうなずいた。

夏休みに端を発した件はこうして一歩進むかたちとなり、木暮園長は、白塚国太郎に向けて、養女申し込みへの礼状をしたため、そして「当園からの候補者」として平珠子の詳しい身上書を添えた。

あと書きとして、

できれば年内に当園にお越し頂き、珠子本人とご面談して頂きたく、長き親子の縁を結ぶについては、その機会は度重なるほどよろしいのではないかと考えます。双方深き理解の上でご尊家に迎え入れて頂けば、のちのちの人間関係も必ずやうまく行くものと信じております。

と記したのち、投函した。

学校がはじまれば子供たちが学校や保育所へ出払ったあと、施設はしばらくの時間静かになるが、木暮園長と正岡先生はこの期間、巣立つ子の受け入れ先を求めるのに忙しかった。

来春は四人、珠子を除けば三人だが、ちょうど都会では三種の神器という、家電製品へのあこがれの言葉がはやり、なかでも電気冷蔵庫の生産台数の伸びが驚異的とあって、就職の見通しは明るかった。

そんななかで、手紙でなく、突然当の白塚国太郎が愛光園にあらわれたのは、木枯し一号の吹いた日の午後であった。

冷たい木枯しとともに入ってきた痩身の老人を見た瞬間、ちょうどその場に居合わせた正岡先生は、そのひとが白塚国太郎であることがすぐ判ったという。

何故かといわれればはっきりした答えは出ないが、まずなんとなく、神に仕える人の清

浄な雰囲気が感じられたことと、次に、たったいま山から下りて来たばかりと思えるジャンパーに作業ズボン、そして地下足袋といういでたちからして、ここらの里人ではないように思えたからであった。

ちょうど木暮園長も在園しており、園長室へ案内すると、国太郎は帽子を脱いでていねいに挨拶し、

「早々と連絡を頂きながら、ご挨拶がおくれてまことに申しわけないことでございます。何しろ郵便は山までは配達してくれず、私のほうも、このごろはそうたびたび里へは下りてこられませんので、お手紙は一ケ月か、二ケ月経たないと目を通せないようなわけでして」

と釈明し、そしてまず切り出したのはやはり、

「その、平珠子さんの調書を見ますと、何ひとつ申し分のない、ほんまによいお子さんですのう。

そんがなお子が、山の上の不便な暮らしに辛抱できますかのう。わしらは一旦親子の縁を結んだら一生かけて、と思うておりますが」

という懸念だったが、木暮園長はそれをゆったりと受けとめて、

「それは珠子には最初から話してありますし、なお白塚さんからもよくよく説明してやって下さい。

本人が納得すれば、山の上であろうとどこであろうと、かまわないことでしょう。ま、徳島県は八十パーセントが山じゃきん、珠子もいまさら驚くこともありますまい」

との言葉に国太郎もほっとした表情を見せて卓上の茶をすすった。

かんじんの珠子はといえば、今日は土曜日ではあるが、先ごろ全国で封切りされた映画「裸の島」を、池田町の映画館まで学校から総見に行っているという。

というのも、これは瀬戸内海の宿弥島を舞台に、監督新藤兼人が撮ったもので、主役の殿山泰司、乙羽信子が一言の科白もなく島の農民を演じており、その感動を生徒たちに伝えるべく学校としても、はじめての総見であった。

「そうですか。いやなに、待たせてもらいますよ。わしもそうたびたびは里へは下りてこられんけん」

といい、それなら、と木暮園長も正岡先生も国太郎を一人にして別室へ下がった。

が、時計が一時になると、国太郎はそわそわと立ち上がり、

「やっぱり今日はあきらめますわ。貞光からのバスは二時が最終ですから。乗りおくれると帰れなくなりますけんね」

「え？　バスの最終が二時？」

正岡先生がおどろいて問い返すと、国太郎はちょっと苦笑いしながら、

「いまごろはお陽いさんの足が早うてね。なるべく空においでるうちに帰りつかんと、道

に迷うてしまうけん」

と腕時計を見い見いそそくさと帰り支度をはじめ、玄関に腰をおろして地下足袋をはき、こはぜをはめた。

「これはこれは、何のおもてなしもせず」

と送って出た木暮園長と正岡先生がこもごも恐縮しているとき、ちょうど珠子たち中学生の一団ががやがやといいながら門扉を開けて帰ってきた。

「あ、珠ちゃん」

と正岡先生に呼ばれ、立ち止まった珠子の前に、白髪の男性が近づいて来て、

「おお、あんたが珠子さんか。ええ娘さんじゃなあ。わしは白塚国太郎というものです」

といいつつ会釈した。

珠子はあっと思い、驚いて見上げるとまっすぐに国太郎の視線とぶつかり、その瞬間、体のなかを電流がぴりぴりと鋭く走り過ぎたような、ふしぎな感じを持った。

決しておそろしいというのではなく、むしろあたたかくはあるけれど、この電流は自分の体の、頭のてっぺんから足の先まですべてを一瞬にして見通してしまったのではないかという気がして身が怯み、咄嗟に正岡先生のかげにかくれるようにして一歩退いた。

正岡先生はそんな珠子を押し出すようにして、

「お待ち下さっておったんじゃ」

といい、珠子はちいさく、
「すみませんでした」
と口のなかで謝って頭を下げた。
国太郎はしきりに腕時計を見ながら、
「また追ってご連絡します。
残念じゃが、わし急ぎますきに」
というと、よほど時間に余裕がなかったのか、小走りに園の前の道を駅の方向へと去って行った。
木暮園長、正岡先生、珠子の三人は玄関に立ったまま、しばらくそのあとを見送っていたが、まず正岡先生が珠子の肩に手を置き、室内へと誘いながら、
「どんな感じだった？」
と聞き、つづいて木暮園長が、
「年よりはまあ若い方じゃな。山を歩き馴れているせいかな。タッタッと足も早いもんね」
と、これも珠子の感想を促したが、珠子は何もいえなかった。
無理に話そうとすると、こわいようなおじさん、という表現にはなるが、しかし厳密にいえばこわい、とはちがう。

かといってやさしそうなおじさんではないし、強いて問いつめられれば、お父さんとして尊敬できる可能性のあるひと、というところかもしれなかった。

誰かに似ている、という感じもあり、誰かな、誰だったかな、と考えていると、それは学校の理科の先生に行きついてしまう。しかし背恰好は似ていても面差しがそっくり、というわけではないし、共通点をあげれば、花の好きな珠子をいつも褒めてくれる、その自分を認めてくれる胸の深い感じなのかも知れなかった。

珠子はその夜、最後の一人になるまで自習室に残って本を読んでいた。

いや、読んでいたというのは正確でなく、見ていた、というのが正しいが、その見ている目もうつろで、頭のなかは昼間会った国太郎のことでいっぱいであった。

長い施設暮らしなら、一にも我慢二にも我慢をしっかり守らねばならず、そのうち、その我慢は成長期の少女の夢を少しずつ削りとってゆき、珠子はこのごろ、自分の将来について楽しい夢を描いたことなどほとんどないといってよかった。

わずかに、自分だけの親が欲しいという願望は残していても、それも、緑の芝生に赤い屋根、毛のふさふさした犬のいる家で、たのもしいお父さん、やさしいお母さんとで暮らしたいというほどの贅沢な欲ではなく、ごく普通の、この三加茂の町ですれちがうそこら辺りの人たちとの家族として、たとえ一時にしろ子供のひとりになってみたいという思いはある。

しかし今日会ったひとは、自分の思い描いていたお父さんとあまりにかけ離れている故に、養女は絶対嫌、と断ることができるかといえば、それは珠子には心残りがあるし、さりとて喜んで承諾するのにはまだまだ迷いがありすぎる。

どうしたらいいのかな、と本の上に目を這わせている珠子の姿を見かけて正岡先生がはいって来、

「今夜は珠ちゃん、眠れんな。いいよ、先生もつきおうてあげる」

と椅子を引いてかけると、ちょうどそこへ居残りして帳簿を整理していた木暮園長も通りかかり、

「白塚さんは、とても珠ちゃんのこと気に入っていた様子だったから、いずれ近く、正式契約を申し込んでくるにちがいないと思うよ。

どうする？　珠ちゃん」

と問いかけ、話はこちらの諾否にかかっている段階に入っていることをいった。

珠子はうつむいて考えこみ、そんな珠子を見るにしのびなさに正岡先生はあらぬ方に視線を外らし、木暮園長は腕を組んで天井をにらんでいる。

珠子は自分からその沈黙を破って、

「園長先生、正岡先生、今日、『裸の島』という映画を見ました。

小さな島で水がとても不自由です。お百姓さんの夫婦が、水の桶を天秤棒で担って朝か

ら晩まで急な坂を上り、畑に水をやらねばなりません。畑の土はすぐかわきます。でも二人は何のもんくもいわず、水をかついで畑にやるだけです。映画が終わるまで、二人はついに言葉を口にせんかったです。

そんなひともいるんです。

山の上ではあっても、あの小さな島よりははるかにましだと思います。あのおじさんが私を子供にしてくれるのなら、私はありがたく受けることにしたいと思います」

珠子がのべた決意に対し、正岡先生はこの子、無理している、と不びん一途に思って涙を拭い、木暮園長は、むごい気もするがこの道がやっぱり珠子にはいちばん適しているのかもしれない、とひそかに思った。

三人はそのあと、この問題にはふれないままに過ごし、二学期が終わって暮れも押し詰んでから国太郎からの書状が届いた。

それには案の定、珠子の印象をほめたたえ、当白塚家の子女としては最適と考えられる故、何卒、すみやかに養女の手続きをすすめて頂きたく、と書かれてあり、なお追而書きとしてこまごまと、当方、先だってもご説明申し上げましたように、たびたび里へは下りられませぬ故、来年三月末日、珠子さんの卒業を待って迎えに参ります。その折、入籍その他一切の事務処理をすませたく存じますので、よろしくお願い申し上げます、と結んであった。

覚悟の上とはいえ、ただ一度ちらり見ただけで養女と決め、話しあいなど一度もなく、すぐ山上へ連れてゆくとは、何とまあせっかちな、と木暮園長も愚痴のひとつもこぼしたくなり、正岡先生にその手紙を見せると、先生は最初からの持論どおり、

「やめましょう、断りましょう。それにお母さんになる人の意見も書いてない。私がもう一度珠ちゃんを説得します」

と再び噴火山のように怒り出すのへ、いつもどおりやっぱり木暮園長はなだめ、

「神職の家だからね。信じるところに依って進むというお人だろうね。さてこんな大まかな手順で、果たして珠子が不安をおぼえはしないかどうか」

と、これまでどおり、話をくつがえすのは珠子の否、しかない、とそれに賭けたが、木暮園長の折り入っての話にも、珠子は、

「先生、もう決めてしまったことじゃきに」

といまさらの変更には同調しなかった。

考えてみれば、三人のなかで最初から一度も揺れ動かないのは本人であって、それについて木暮園長は、

「立派じゃなあ、珠ちゃんは。施設で育つとこう、何ていうか、自分の人生に対して度胸が据わるんじゃな。見習わなきゃいかん」

としきりに感心していたが、正岡先生には別の見かたもあり、

「珠子はまだ世間を知らんのですよ。親がなくて苦労したかもしれんけれど、施設にいれば最低の生活は保障されてきましたけんね。

でも山の生活はきびしいでしょう。

第一電気は引かれていますか。ガスも水道もあるとは思えない。そのなかで珠子はどうやって炊事したり洗濯したりするんだろか。友だちの一人もなく、年寄り相手のこれからの生活に、何の楽しみがあるんだろう。

そういうことがわかってないんです、あの子には」

と悔やみつづけ、それを聞くと園長も思わず同調したくなるが、いつも辛くもとどめるのは園長としての立場からくる分別というものであったろう。

第三章　剣山へ

昭和三十六年が明け、愛光園にも篤志家からはじめてテレビが寄贈され、少しずつ園の空気も変わりつつあるなかで、まず二人の男子勇と和光は揃って河内の家電工場へと行き先が決まり、最後まで食堂の住み込みを、と希望していた小西隆子は適当な求人先がなく、三月二十日の卒業式を前にしてとうとう名古屋の紡績工場へ行くことになった。

日曜日の午後、珠子と隆子は誘い合って川原へと下りてゆき、例の岩のかげで風を避けながら足をのばした。

「ようよう決まってね。ほっとした」

と隆子は自分の行き先をいい、

「決まらなかったら園長先生に迷惑かけるところやった」

とさすがに世話になった愛光園への気づかいもある。珠子も、

「食堂の住み込みさんじゃなくて隆ちゃんざんねんでした。じゃけんど紡績工場で働いていれば、そのうちお父さんも迎えに来てくれるじゃろうか

ら」

と慰めると、隆子はきっと首をあげて、

「お父さんとの約束など、私は全然あてにしてないよ。タマ子もね、私のいうことよう聞いときなよ。大人はな、子供を宥めるとき、その場限りの嘘をつくひとが多いからね」

と強くいい、そしてちょっと迷ってはいたが、

「タマ子が行くというお山の神官さんも、頭から信用してはいかんよ。一しょに暮らしはじめたらたちまち化けの皮が剝がれて、タマ子をいじめるかもしれん。そういうときはな、すぐ逃げ帰っておいで。そして私の紡績工場へ来ればええ」

と真顔で吹き込むのへ、珠子は笑い出し、

「またまた隆ちゃんのオーバーなとこがはじまった。私は心配要らんわ。山で静かに暮らすだけじゃ」

「そう？　そうならええけど。じゃ、手紙だけはたびたび頂戴ね。手紙だけが頼りよ」

「そうね、せっせと書くわなあ」

と珠子も指切りげんまんをしながら、あ、手紙もひんぱんにはやりとりできないんだ、と心のうちで思った。

でも、どんなに親しくても、これからそれぞれの人生を辿って行くのには、いつまでも求め合ってゆくことは出来はしないのだという天性のあきらめが珠子にはある。

二人とも条件さえ調えばずっと一しょに暮らしたいと心のうちではどれほど望んだか知れないけれど、こういう境遇にあればそれは夢のまた夢、としぜんに納得してしまう習慣が身について来ている。いまはただ、この先どこかで再び巡り合うことの僥倖を祈るより他ないのであった。

卒業式もいよいよ迫った日の夕食のあと、食器を片づけた食堂のテーブルの上に園長は一枚の地図を拡げ、巣立ってゆく四人を呼んだ。

「勇、和光は河内、隆ちゃんは名古屋、これは都会じゃけん、地図を見んでも位置は判っちょるね。ただ珠ちゃんの剣山というのは同じ徳島県人であってもよう判らんところがある。

そこで愛光園からの餞けとして、私が珠ちゃんに地図をこさえてあげたんじゃ。他の三人も一しょに私の説明を聞いて覚えておいてやりなさい」

といって、鉛筆の先で指しながら、

「山の地図というんは、どこにもないもんじゃな。池田の町の本屋にも、日本アルプスのものならあるが、四国の山の地図なんぞはめったにお目にかからんというとった。そこで

本をあれこれ読んだり人に聞いたりして、私がこんなものを描いてみたというわけなんじゃ。正確とはいえんかもしれんけんどなあ。

剣山はなあ、西日本では石鎚山に次いで二番目に高い山で、昔から信仰の山として人々から崇拝され、つい先ごろまでは女人禁制じゃったらしい。四国山脈のなかでも剣山系は標高千五百メートル以上の峰々を十五座も従え、剣山はそれらを束ねる主峰じゃという。千九百五十五メートルある。石鎚山よりはわずか二十七メートル低い。

ところで、珠ちゃんの家となる剣神社というのは頂上ではなくて見ノ越という中腹にある。頂上には測候所と山小屋があるが、山小屋は夏のあいだだけじゃきに、一年中を通じてこの山に住むのは測候所の職員と、剣神社の宮司一家ということになるんじゃなあ。

そしてこの山へ登るルートは、大きなもので四つほどあろうか。お隣の高知県から山伝いに入ってゆくものが一つ。じゃけんどこれは道も細うて行者さんしか通ってはおらんらしい。次が池田町から西祖谷山村、東祖谷山村を通って見ノ越へ至る道があるが、これは何しろ長いし、遠いという。歩きとおすことはできんと聞いておる。途中、名頃というところまで定期バスがついておるとはいうものの、このバスもあてにはならん。

雪と雨にはすぐ運休となってしまう。私にも経験あるんじゃ。そこで測候所の人や、宮司さんたちがいつも利用しているのはいちばん近い貞光からのルートじゃという。穴吹からのルートもここで一しょになるが、何というても貞光から川又まではバスが一日二、三

回通うとるけんな。

珠ちゃんもおそらく、この道から登って行くことになろうが、見てごらん、このバス道は貞光川の清流に沿うておって、名物の土釜（どがま）や鳴滝（なるたき）も窓から見ることができよう」

と園長は鉛筆を転がせて話を置いた。

四人は頭をくっつけあって大きい地図をみつめていたが、口々に、

「広いなあ」

「高い山じゃなあ」

というだけで、実感としては何も判らないのは無理もなかった。

珠子でさえ、地図だけではどれだけ山深いのか想像もできず、隆子が明るく、

「この地図、おぼえておくきんな。工場の休みにはタマ子の家へ遊びに行かんならんけん」

というのへ、

「うん、隆ちゃんきっと来てな」

と指切りして約束するのであった。

いよいよ三月二十日の卒業式の夜、例年どおり食堂でささやかな送別会がひらかれ、施設を去る四人との名残りの集まりがあった。

金属の食器に盛られた五目ずしに紅白のかまぼこが添えられ、デザートにみかん二個と

いうつつましい内容だが、この園に来て十三年、毎年上級生を送り出してきた身が、これを最後に今度は自分が去らねばならぬと思うと、さすがに胸はいっぱいになる。

園から贈られた記念品は、リボンのかかったボールペンと、新しいボストンバッグだったが、それは妙に悲しさを誘う品ではあった。

翌朝、県外に出る三人は園長先生に連れられて出立、珠子はひとりだけで駅まで見送り、汽車が見えなくなるまで手を振って別れた。

その帰り、川原に出てさきごろ隆子と語り合った岩かげに行き、草むらに指を入れて花のつぼみをさがしてみた。

施設ぐらしの月日、ときどき耐え難いほど悲しくなると、珠子は土手を越えてこの川のそばにやって来、じっと膝を抱えて心をなだめるのだったが、そんなとき、岩のあいだから顔をのぞかせる野生の小さな花々が、どれだけ慰めとなったことだったか。

春浅いころからこの川原にはナズナ、シロツメクサ、カラスノエンドウ、ハマヒルガオなど咲き拡がり、秋のゴマナ、ノコギリソウ、キクの各種まで、花好きの人が見たら小おどりするほど、とりどりの花が咲く。

ここで採ったペンペン草を、友達の耳もとで鳴らして聞かせたり、ザラザラしたネコノシタを友達にさわらせてみたり、揉むときゅうりの匂いのするキュウリソウをたくさん持って帰ったりの思い出は、いまつぎからつぎへと浮かんでくる。

珍しい花をみつけたら一本だけ採り、学校の図書室で植物図鑑を参照して名を知り得たときのうれしさ、移植できるものは園へ移し、玄関からのアプローチに花壇を作ったのも、ほとんど珠子ひとりの手だったから、別れとなると、珠子は花には大きな未練があった。

三月末のいまは、指先でさぐってもまだ花らしい花はハハコグサかノゲシぐらいしか見当たらず、珠子はそれを標本にすべく一、二本手折ってちり紙に包んだ。

園に帰ってみると、正岡先生が、

「白塚さんからの連絡がないんで、心配していたんじゃけど、やっぱり三十一日迎えにおいでなさるみたいじゃよ。

貞光町の郵便配達夫さんが一宇村で白塚さんを見かけたそうな。向こうから『郵便は溜まっておりますかのう』と声をかけてきて、『三十一日には子連れでお伺いします』というたそうよ。

やっぱり珠ちゃんを連れてゆくんじゃわ。

もう逃げることはできんねえ」

となお未練げにいうのへ、そのつもりでいた珠子はべつにおどろきもせず、

「荷物はもうまとめてありますから、いつでも大丈夫です」

と答えた。

三月三十一日の朝、珠子は六時まえに目ざめ、洗面をすませると、着馴れたグレイのセ

ーターに紺のズボンをはき、いつもの服装で園舎の裏側に出た。

ここの物置には、ずっと珠子が使っていた園芸道具があり、そのなかから大きなじょろを取り出して水を満たし、園舎のまわりに丹精してきた花壇に、今日を最後の水をかける。

花壇には、珠子が人からもらった球根や、道端から移し植えたもの、種から育てた苗などとりどりに育っており、それらはまだ固いつぼみであったり、半開きであったり、朝露を含んだままさまざまの姿を見せている。

自分がいなくなったら誰も世話する者もなく、花壇はたちまちなくなってしまうのではないかというのが珠子の唯一の心残りであったが、それについては正岡先生が、

「私も見ますけど、子供たちに当番を決めてやらせましょう。お花を育てていれば、きっと珠ちゃんのようにやさしい子になるでしょうから」

と引き受けてくれ、いまは心おきなくこの花々に別れを告げられると珠子は思った。

松林の小鳥がいっそう賑やかになり、朝日も射し初めたころ、珠子は門扉の外側から、

「お早うございます。白塚です」

という声を聞いてあっと思った。

見ると門扉のあいだから、見おぼえのある、このあいだと同じ服装の国太郎が立っており、珠子は驚いて危く手のじょろを取りおとすところであった。

こんなに早く、何故？　と不思議に思うかたわら、頭のなかでは忙しく、今日からこの

ひとのいうとおりにしなくてはならんのだ、朝早くても遅くてもそんなことは関係ないのだ、と自分を納得させようとする声があり、とりあえず珠子は門扉の前に駆けよって、かんぬきを開け、招じ入れた。

「やあ、こんなに早うてすまんことじゃな。園長先生は起きておいでじゃろか」

と謝りつつ国太郎は珠子について玄関から上がり、応接間も兼ねている園長室に落ちついた。

木暮園長、正岡先生もあらわれ、珠子も入れてまず朝の茶を飲んだあとで、

「もう一度くらい、ご連絡があるとおもうておりました」

と木暮園長がやんわりと怨みごとを述べると、国太郎はすまなさそうに頭を掻きながら、

「いや、神職というのはせわしいものでしてな。山の上にあっても月次祭というのはきちんとせんなりません。

それにやっぱり山から貞光までは私の足で歩いて三時間半、それからバスで二時間ですから、そうたびたびは里へ下りてこられません。

珠子さんの足なら今日は一日仕事になるかもしれん、と思うて、こんなに早うお伺いしたわけです。ゆうべは貞光町の遠い親戚に泊めてもらいました」

珠子の足なら一日仕事、と聞いて正岡先生は少し青ざめ、木暮園長はそれなら、と以前

からこれだけはぜひ問い糺したかったこととして、

「では珠ちゃんを高校に通わせることはできない相談でしょうか」

と聞いたところ、国太郎は目を落としてしばらく考えていたが、

「通学ができんところですからね」

とぽつりといった。

「いや、通信教育という方法もあります。もっともこれは一年のうち、一ケ月ほどは集中講義を受けねばなりませんが」

と木暮園長が懇請を兼ねてそう説明すると、国太郎は深くうなずいたが、ではそちらを考えましょうとはいわなかった。

何といっても施設側の立場は弱いし、個人の家にもらってもらえばそれが本人いちばんのしあわせ、としているところから、いまここで、木暮園長は国太郎にぜひ学校へ、などという無理はいえなかった。

これからまだ町役場や郵便局へも寄らねばならぬ故、と国太郎は前回と同じように珠子を急かし、珠子はまとめてある荷物を持ち出して来ていよいよ出発であった。

国太郎は荷物を気にし、珠子の全財産の入っている新しいボストンバッグと小さな風呂敷包みを手に持って重さを試し、

「山道になると持ち重りがするからね。

やっぱり山道に入ればおいこを出して負うてもらうことにしよう」

と呟いたが、それは聞いただけで前途のけわしさを思わせるものであった。

駅まで送るという木暮園長と珠子たち三人を、春休みの子供たちは門に立って送り、見えなくなるまで手を振ったが、角を曲がってしまうや、正岡先生が園長室に駆け込んで泣き伏し、それを慰めに入って来た木暮園長の妻、真代も、こらえ切れずに抱きあって涙を流した。

「選りに選って、いちばん条件のわるいところへ珠ちゃんが行くなんて」

と正岡先生が泣きじゃくりながらそういうと、真代も、

「もともとはうちの娘にするはずじゃったんです。何故、この話を承知してしもうたのでしょう」

とすすりあげながら同調する。

そのうち、真代があ、と壁に目を上げて、

「あら、この源平合戦之図、お餞別に珠ちゃんにあげるって主人がいうとったのに」

「あっそうでした。珠ちゃんが好きじゃったんです。じゃすぐに外して、いまから私が追いかけますから」

と二人はバタバタと鋲を取り、くるくると巻いて正岡先生がすぐ飛び出そうとするのへ、真代は、

「お若い先生がよさそうじゃ、足が早いし」

といい、正岡先生は肥った我が身をかえりみて、その巻物を若い保母の一人に託した。

若い先生はズック靴をつっかけ、全速力で馳け出してゆく。

阿波加茂駅を八時三十六分に出る上り各駅停車に国太郎と珠子は乗り込み、ホームで手を振っている木暮園長と保母に別れを告げて車内に入った。

汽車が動き出し、ホームの二人が視野から消えたとき、珠子は反対側の窓に目を当てた。まもなくその窓には国の天然記念物となっている、樹齢千年の大楠の木の芽ぶきはじめた梢が見えて来、心のうちで珠子はさようなら、大くすさんと呼んで別れを告げた。まわり二十メートルもあるこの楠の木は、拝めば願いごとが叶うとあって、隆子と二人、よく来たものだったが、いまはそれも過去の思い出のなかに遠く去ろうとしているのであった。

車内は学生の通学時間をややすぎていくらか空いていたが、珠子は椅子の背につかまったまま立っており、国太郎は次の三加茂駅で一つ空いた席を見つけて腰をかけた。

列車は、順に江口、そして阿波半田を過ぎてのち貞光駅に着く。

珠子にとってこのコースははじめてだったし、次々と停車する駅の周辺の景色ももの珍しくてしっかりと眺めているうち貞光駅に到着、国太郎にうながされて下りた。

「さあ」

と駅前の広場で国太郎は背をのばし、

「これから町役場へ行ってあんたの入籍届けをし、次に郵便局に寄って郵便物を取り、時間があったらわしの親戚の家へちょっくら顔を出したいと思うておるが、バスの時間に間に合わんかったら困るから、今日はやめておくかも知れん。

そのあと、いよいよ山行きのバスに乗る。こういう段取りじゃが、ええかのう、珠子さん」

と珠子の顔をのぞき込んだ。

その目は和んでやさしく、言外に、さあこれからはいよいよ親子として出発する、お互い仲よくやろうな、という意味が込められているように珠子には思われ、ふと心がふんわりとあたたかくなってしぜんに笑みがこぼれた。

歩き出すと、おどろいたことに国太郎は、

「さ」

と手を出して珠子の片手を握り、まるで幼児の手を引くようにして先に立ってゆく。

珠子は、人が見たらどう思うか、と最初うす赧くなったが、そのうち馴れ、手を引かれたまま町役場へと入って行った。

国太郎は、木暮園長から渡された戸籍謄本その他の書類を差し出し、手続きをすませると、

「お待たせ」

と声をかけてまた珠子の手をひき、次なる郵便局へと行く。

二つの用をすませたあと、国太郎は腕時計を眺め、人さし指で文字盤を叩いて計算していたが、

「今日は親戚のおかる婆さんの家へ寄るのはやめよう。それよりも」

と視線を落として珠子の履いている古びたズック靴を見つめ、

「あんたの足なら、初めてやし、山道は四時間以上はかかるじゃろう。底のうすいズックじゃと、すぐ穴が開くかもしれん。新しいズックと、それからジャンパーを奮発しよう。あんたの着ている長いオーバーでは、山道では裾が邪魔になる。腰から下はなるべく軽く、動きやすいのがええ」

と町のなかを靴屋へと向かう。

このおじさんは、子供を持ったことがないから、三つの子でも私のような十五の子でも皆おなじと思うて、手を引くのじゃな、と珠子はそう思いつつ、しかしそうやって甘えているのも悪い気分でなく、国太郎とともにまず靴屋に入ってズック靴を選んだ。

「山道を歩くのじゃから、底のしっかりしたのをたのみます」

との注文に、靴屋の主人は、

「あの、アイゼンとやらを取り付けられるような登山靴のことですか」
と聞き返すのへ、
「いやいや、ふつうの運動靴でよろしい」
という国太郎との会話のなかで、主人は、
「へえ、このお嬢さんがズックで剣山へ？」
と目を丸くし、
「登山靴でなかったら、お客さんのようにいっそ地下足袋はどうですか。そのほうが歩きやすいでしょう」
「いやあ、それはいくら何でも。
おなごのこですからね。なあに、そのうち馴れますよ。岩場を渡るわけじゃなし。
修行の先達さんは皆、いまでも草鞋ですから。大丈夫ですよ。
この子は強いんだし。なあ、珠子さん」
とふり返る国太郎に、珠子は元気に、
「はい」
と答えた。
買った靴を箱のまま抱え、今度はジャンパーを売っている店をさがしたが、婦人服屋ではかざりの多い派手なものしかなく、結局、作業着ばかり売っている男ものの店でみつけ

た、カーキいろの厚い木綿製のものを買うことになった。

珠子は最初、男ものを身につけることに少々の抵抗はあったが、こうして父親となるひととふたり、自分だけの靴や衣類をあれこれ選ぶのは初めての経験だけに、胸は何やら弾んでおり、包みをもらうとき、心から、

「有り難うございます」

と礼をいうと、国太郎もうれしそうに珠子の頭を撫でた。

山行きのバスは、貞光駅前発、川又行きというのが一日二本出ており、ちょうど折よく十一時発に間に合って二人は発車まえに乗り込んだ。

客は五、六人、国太郎はすぐ、

「バスには酔うかね？」

と聞き、長時間乗ったことのない珠子は首をかしげつつ、

「たぶん大丈夫ではないじゃろか」

と答えると、

「気分悪うなったらいいなさいよ。山道に入ったら相当揺れるから。もっとも吐くより他、手はないがねえ。わしのほうは寝てもかまんかね？」

と聞き、珠子がうなずくと、発車十分ののちには腕組みをし、もういびきをかいて眠り込んでしまった。

国太郎はしかし熟睡しているわけではないらしく、ときどき目をあけて窓の外を見、
「この道は県道じゃ。県道貞光剣山線じゃ」
とか、
「端山の外れまでは貞光町じゃ。その辺りはまだ人家も詰んでおるが、次の一宇村へ入ったらぽつぽつじゃけんねえ。
川の名も貞光川から一宇川と変わる」
などと説明してくれたかと思うと、次の瞬間にはまたいびきをかいて首を垂れている。
このひとは、私に道案内をしようとがんばっている、と珠子は判り、自分も懸命で道端の風景を目におさめた。
はじめにいわれたとおり、バスは山道にかかるとカーブが多くなり、走るほどに人家は乏しくなってゆく。
それでも停留所ごとに一人か二人の乗り降りはあり、しかしそれでも鳴滝、土釜、古見を経て終点川又へ近づくころには二人の他にはもう誰も客はいなかった。
始発を出てまもなく二時間、国太郎の腕時計の文字盤は一時近くを指しており、珠子はそれを目にして急に空腹をおぼえた。
バスから下りると国太郎は再び珠子の手をひき、運転手に、
「あっこ、また借りますよ」

と声をかけてから入って行ったのは、待合室ともいえぬ、無人の小さな切符売場のような小屋であった。

国太郎は荷物をおろし、

「ここは皆が山行きの支度をする場所になっとる。我々も弁当を使うて、一休みしてからいよいよお山さんへ登るきにね。しっかり腹ごしらえをしておかんならん」

と、ずっと背負っていたリュックサックのなかから、おかる婆さんが作ってくれたという竹の皮に包んだおにぎりを差し出した。

まんまるいおにぎりには梅干しが入っており、珠子はそれをおいしく食べてから水筒のお茶ももらって飲んだあと、きれいにあと始末して、

「これどこへ捨てますか」

と聞いた。

国太郎はそういう珠子に満足げにうなずいて、

「お山さんではね、何でも捨てるもんはない。竹の皮は焚きつけになるし、梅の核もきれいに洗うておけば細工もできる。軽いもんじゃけん、持って帰ろ」

とリュックにおさめ、入れ替わりに折りたたみの木のおいこを出して組み立て、

「これから珠子さんの足では四時間、いやそれでは利くまい、五時間かかるかもしれん。荷物は全部、このおいこにくくりつけて負い、両手をあけて登るとええ。
そうすれば途中で疲れたとき杖もつけるし、歩きもって水も飲める。
ええかね、ゆっくりゆっくり登っていこう。日が暮れるまで帰りつけばええから」
珠子は教わりながらまず靴をはきかえ、オーバーをジャンパーに着替え、そして肩に当たる部分を布でていねいに巻いてあるおいこをよいしょ、と負い上げた。
「どうじゃ。靴は詰めんか、肩は痛うないか、そこらへんをちょっと歩いてみい」
という国太郎の指示どおり、珠子は新しいズック靴を地面にとんとんと叩きつけるようにして歩き、国太郎に向かって指で丸を作ってにっこりと笑いかけた。
「おお、そうか、そうか。
ほんなら出発といこ。途中あんまり口をきかんほうがええよ。
しゃべんじょる者から先に疲れるから。
山のことは帰ってから説明する」
というと、国太郎もリュックをおいこにくくりつけ、今度は珠子の手はひかず歩き出した。
いまから四時間、けわしい山坂を踏破しなければならぬ不安感は珠子にはまだ無く、気分はいくらか遠足に近いような、どこかのどかな思いもある。

国太郎は珠子よりは半歩ほど先に立ち、無言でゆっくりと歩くのを真似(まね)て、珠子もおくれないよう続いてゆく。

道はまだバス道の延長の感じでしっかりしており、一キロほど歩いたのち橋を渡ると、国太郎は指さして、

「ここで道は二つに分かれとる。

左は葛籠(つづろ)みち。崖(がけ)あり、丸木橋あり、急坂ありだが、わしの足なら夫婦池(めおといけ)まで三時間はかからん。二時間半で行く。

右は桑平みちで、こっちはすんなりした明るい道じゃけんど、途中墓場もあり、遠まわりじゃ。夫婦池までは三時間とちょっとはかかる。

今日は珠子さんがはじめてじゃきに、桑平のほうを通ることにしよう。なに墓場があっても陽(ひ)もまだ高いし、こわがることはない。

それから、半時間歩いたら十分休もうか。

馴れたら休まんでも一息で上れるが、いまは無理じゃな」

というと、国太郎はおいこを揺りあげ、右のほうへと歩き出した。

ここまで来れば山の深さははじめての珠子にも感じられ、町にはない山の冷気が服を通して刺してくる。

今日は三月末日、園を出るときは庭の桜も満開だったのに、ここはやっぱり四国山脈の

まっただなか、いくらすんなりした道だと国太郎がいったところで、初めてここに足を踏み入れる少女に山は四方から迫ってくる感じであった。

空気は澄み切ってはいるものの、息を吸えば鋭く刺す感じがあり、ここが最後の集落だという二、三軒をすぎると、道のわきにヒノキ林が亭々と茂り、木々はしっとりと露を含んでいて、肌に冷たい。

唯一のなぐさめは、さまざまの小鳥の啼き声が聞こえてくることだが、山の春はまだ浅い故にどの鳥もまだ高らかには唱えず、チョッチョッという幼い声であった。

山に馴れた国太郎は腕時計を見い見い、三十分上ると道の辺においこをもたせかけて立ったまま休み、十分ののちまた出発する。

はじめにいったとおり国太郎はほとんど口をきかないが、それは自分自身の疲労を気づかうよりは、話しかければ珠子が答えなければならぬため、その配慮のせいらしかった。

歩き出して一時間半ほどののち、左手に広い墓地があらわれ、なかには新墓らしい葬式の白い幟の垂れているものも見えたが、べつにこわい感じもなかった。

が、そのあとしばらくしてから足にマメが出来たのか、踏みしめるたびに痛くなり、唇を噛んでこらえたものの、やはり、はた目にも判ったらしい。

ふり返った国太郎は珠子に休むようにいい、自分は茂みのなかに入って行ったが、やがて手ごろな枝をさがして来て大地にしっかりと突いて試してから、

「よし、これなら頼りになる」

と手渡してくれた。

「マメはなあ、出来てはつぶれ、出来てはつぶれして足を強くしてくれる。一足ずつ、こんちきしょ、こんちきしょ、と思うて歩きなさい。もう半分以上は来たからなあ」

と水筒の栓をあけて差し出してくれる。

この場所では二十分以上休憩ののち、さあもう一ふんばりじゃ、二ノ谷、三ノ谷とあとふたつ渡れば夫婦池に出る、の声に励まされてまた登りはじめたが、気のせいか足の痛みはよほどうすらいだようであった。

このあと、二時間近くの登りを、珠子は一度も弱音を吐かず、がんばり通した。すんなりした道とはいっても、やはり一足ごとに高みへ登ってゆく感じは全身に感じられ、まるで山の霊気と押しくらまんじゅうをしながらつき進んでゆくように思えるのであった。

それは、もう引き返すことはできない、などと悲壮な思いに押されての上ではなく、ごく自然に、国太郎に従って前に進んだだけのことだった、と珠子はこの日のことを思い返すたびにそう思ったものであった。

何といっても集団の暮らしでは、自分自身の問題を殊更(ことさら)にあげつらうのは遠慮しなければならないが、国太郎とふたりだけでの時間では、向こうも全部、こちらも全部で向きあ

っていられる安心感がある。

足のマメでも、施設なら手当てもしてくれるだろうが、自分から見せびらかすような方法を取れば必ず、あの子、わざと大げさにいうて先生に甘えている、とか、私などそれくらいのことなら我慢しているのに、とかの針のような声が聞こえて来、それが嫌さに黙って隠していることも多かった。

国太郎は、初めての登山の珠子を終始案じて、いたわり、励まし、決して視線を外らさなかった。

珠子は心のうちで、園長先生たちはこのおじさん連絡が悪いとぼやいていたけれど、こんなにけわしい山だもの、簡単には連絡できないのも当然じゃわ、と国太郎をかばう気持ちになっており、このひとをいつからお父さん、と呼ぼうか、と何だかわくわくするような期待が芽生えはじめている。

そのうち、もうじきじゃきにな、と国太郎が振り返っていったあと、一きわけわしい坂が続いてからふっと視界がひらけ、青い水をたたえた大小の池の前に出た。

「わあーっ」

と思わず珠子が歓声を挙げると、国太郎もほっとした表情で、

「ここまで来たら、もう戻ったも同然じゃ。あと一時間はかからん。ちょっと油断していこう」

と池のそばの石に腰をおろし、珠子も倣った。

動きをやめると急に四方から寒さが迫って来、あたりを見まわすと、まだかなりの量の残雪がある。

時刻はもう五時をまわっているが、山のおそい春でも日暮れはなお十分に明るく、池の周囲は空の残映と、地の残雪とが照らしあって美しい。

辺りは森閑としてもの音なく、深い静寂の底から何かを聞き取ろうと耳を澄ますと、眠りに入るまえなのか小鳥たちのかすかなざわめきがあるばかり、この幽邃さは珠子にとって感動的でさえあった。

こんな静けさのなかではものをいうのも憚られ、黙っている珠子に国太郎は、

「寒いじゃろ？　お山さんは里とは温度も二十度近くもちがうきにね。いまはマイナス五度か、いや今日はわりと温い。マイナス二〜三度じゃな」

と自分のジャンパーを脱ぎ、

「もう一枚、その上に重ねるとええ」

と着せかけようとするのへ、珠子はあわててとどめた。

「私はいいです。お父さんこそ」

とすらりとお父さん、という言葉が口をついて出、自分もどぎまぎしたけれど、国太郎のほうもおお、と目をうるませ、

「お父さんと呼んでくれるか。ありがとう、ありがとう」

とうれしそうに礼をいい、また赤ん坊にするように片手で珠子の頭を撫でた。

「あんたがうちの子になってくれて、わしはどれだけ有り難いか、しかしわしよりももっと家内のほうが喜んでおる。

なあ珠子さん、家へ帰りついたらすぐ、家内のことをお母さん、と呼んでやってはくれまいか」

という国太郎の申し出に、珠子のほうも胸いっぱいになり、

「はい」

と大きく返事をしてうなずいたのであった。

二人はまたおいこを負い、そのあと比較的なだらかな道を辿りながら、

「神さんとうちのあるところは見ノ越というてな。ちいっと前がひらけとる。あと二キロじゃ。もう見えてくる」

というとおり、大きなカーブを曲がると黒々とした神社の森があり、その奥に灯りのともっているのが目に入って来た。

あたりはもうとっぷりと暮れ、木々は黒くこんもりと、身のまわりを取り巻いているが、国太郎のいう「闇は底なしじゃない。目が馴れてくれば底は見えてくる」の言葉どおり、夜のとばりのなかにも道は仄白く浮き上がって見え、そのさきに石でたたみ上げた段が高

く夜空にまで伸びているのが判った。

「全部で百二十段ある。足もと気いつけや」

いわれるとおり一段一段しっかり踏みしめて登ると、なかほどに石の鳥居があり、そのあとは夜目にも白く社殿が聳え、軒の注連縄に挟んだ白い紙垂が揺れもせず、垂れているのが見える。

国太郎にいわれなくても、珠子はこれが神社かと思うと身のひきしまるような緊張が走り、深々と一礼すると、わきから小さく、

「二礼二拍手一拝」

と教えられ、杖を足もとにおいてそのとおりに拝礼した。

社殿の前はちょっとした広場になっており、その向こうの、さきほどからずっと遠目に見えていた灯りに向かって近寄って行くと、足音が聞こえたのか、腰高障子を開けて人のかげがあらわれ、

「お帰りなさいませ。お疲れさんでした」

と声が届いた。

「おお、おお、加減はどうじゃな」

と国太郎は人かげに問い、珠子を押し出して、

「珠子さんが来てくれたぞ。

はじめての山道じゃのに、つらいとも苦しいとも一ぺんもいわなんだ。ええ子じゃ、ええ子じゃ」

といいつつ三人は一塊となって座敷に上がったが、点っている灯りは珠子が見たこともないらんぷであった。

正岡先生はしきりに、電気が引かれているかどうかを案じていたが、やはりここにはまだ電気はなかった、と珠子はじっとガラス筒のなかの炎をみつめたが、それは失望というほどのものではなく、この山の暮らしの現実を最初に肯定したかたちであった。

三人はちろちろと燃えている囲炉裏のそばに坐ったが、国太郎の、

「これはすぎというてな、あんたのお母さんになるひとじゃ。ずっと前からリュウマチを患うておる。今日はええらしいが、痛うなったときはむごいもんじゃ」

という紹介を待つまでもなく、すぎは片足を投げ出して坐っており、

「ごめんなさいませよ。右足がどうにも動かんのですわ」

といいわけしつつも、このひとも珠子のことをこの上なく喜んでいるふうで、らんぷの灯りにしきりと目をしばたたかせながら、

「ほんまに、こんなところへよう来てくれなさった。これも神さんのお恵みじゃと、お礼ばっかり申し上げております」

といく度もおじぎをした。

たしかすぎの年は六十四歳、うしろに束ねた髪は半白で、もううすくはなっているが、珠子はその目を見たとき、何とやさしい目のいろだろう、と思った。

もののいいかたもやわらかく丁寧で、思いやりに溢れており、このなつかしさには何やら覚えのあるような感じがあった。それは珠子が小学校に上がる前、亡くなった木暮園長の母親いつ子の雰囲気だった、と思いおこし、よくお寺に遊びに行ってはあめ玉など口に入れてもらったことも、いま、いっそう珠子の気持ちをすぎに近付けたようであった。

すぎは不自由な体を動かして囲炉裏の上の鍋の蓋を取ろうとし、

「お山さんは寒いですきに、珠子さんがあったまるよう、雑炊を炊いておきましたぞ。卵も一つずつ入れました。さあさあ、どっさりお上がりなされ」

と手をのばすのを見て、珠子は思わず、

「お母さん、私がやります」

としゃもじを取り上げたところ、すぎも国太郎と同じように、喜びをあらわにして、

「私もこれでようやくお母さんになれました。うれしいですねえ、お父さん」

と語りかければ国太郎も、

「そうじゃな。今夜は親子固めの盃をすることにしような」

と気軽に立って台所から一升びんと湯呑み三つを持って来てそれぞれに手渡した。

女二人は飲めはしないが、それでもほんのしずくほど注いで湯呑みをあげ、
「平珠子さんは、昭和三十六年三月三十一日を以て白塚国太郎、すぎの長女として、終生苦楽をともにすることになりました。
仲ようやりましょう」
と唱えると、珠子もすぎと顔見合わせてにっこりし、
「どうぞよろしくお願い申し上げます」
と声を出していい、舌の先に湯呑みのなかのものをぽっちりとのせた。
とたんに舌が火傷するような感じがあったが、珠子はこの夜のことも酒の辛さも、決して一生忘れまいと思うのであった。
国太郎はいける口らしく、一升びんからひとりで注ぎ注ぎ、冷やのまま、湯呑みで二、三杯傾け、傾けると口はぐっとなめらかになる。
「くどいようじゃが珠子さん、わしらはなあ、子供というものを養うたことがない。扱いかたも全く知らん。ほんじゃけん、あんたに対してどんな態度でのぞんだらええんか皆目わからん。あんたを床の間に奉っておくのも、あんたは気ずつなかろう。さりとて、使用人のように家の用事ばっかりさせるのはこれはいかん。そこでじゃなあ。
うちは神職じゃけん祖霊拝詞のなかのみことばに『親族家族諸諸心を合わせ、睦び和みて敬い仕え奉るさまを、愛ぐしと見そなわしまして』とあるとおり、ともかく三人大もと

のところで心を一つにしておれば何ごともうまくいくと思うんじゃ」

といえば、すぎもわきから取りすがるような口調で、

「なあ珠子さん、六十すぎてあんたのようなええ娘さんが私にもできたちゅうことはどんだけうれしいもんか、ちょっと言葉にはいえんほどじゃ。

これからは、私たちの至らんところはどしどしいうて下されや。自分でも気がつかんこともありますけんね。なおしますけんね」

と謙(へりくだ)ったいいかたをするのに珠子はおどろき、居ずまいを正して、

「そんなお母さん、至らんところじゃなんて」

と、こちらもうまくはいえず、とにかく、

「一所懸命やりますから」

とけりをつけ、三人はこもごも顔を見合わせてほほえんだ。

国太郎はすっかりいい機嫌になり、

「珠子さんよ。お山さんで暮らすにはお山さんのことを全部知っておかんといかんきにね。何から話そうかの。

そうじゃ、まずいの一番に山で暮らす者の誇りについて話しておこう。山というても、ここは室町(むろまち)時代のころまでは人間の入ったことのない、気高さこの上ない神域じゃった。

四国山脈のなかには、西日本中、最も天空に近いのが千九百八十二メートルの石鎚山、

それよりわずか三十メートル足らずおくれて千九百五十五メートルの我が剣山が屹立しておる。

二峰ともに尊い神々の在ます聖地である故に、ここに暮らす人間は選ばれた者のみに限るというわけになる。

いまこの剣山に居を構える山人は、それぞれの使命を負うており、第一に、山の鎮めの我が剣神社にお仕え申し上げる不肖白塚と」

と、ここで国太郎はげっぷをして湯呑みをおいた。

「ハハハ、大分まわったらしいなあ。

なに頭はたしかじゃけん。

で、山頂には気象観測の測候所があって、常時、四、五人の職員さんが暮らしよる。測候所のすぐ下には夏のあいだだけ、山小屋が開き、ここには木屋平から佐川さん一家が上がって来て登山者のお世話をするが、旅の人は別として、このお山に許されて暮らす人はこれだけじゃ」

と国太郎は指を折って、

「珠子さんを入れて全部で十一人かのう。ほんでもこれは冬になると半分になるけん、この広い広いお山を五、六人で預からせてもろうとるというわけじゃ。

そいで我々は、山に関わる森羅万象にすべて感謝し、呼び名には必ずさんをつけるば

かりでなく、山にあるもの一木一草たりとも損傷してはいかん。

ええかね、空にはお陽いさん、月さん、星さん、お山さんでは花さん虫さん、お社さんは山頂に大剣さん、この地にお剣さん、稀に行き合う人があればお人さん、お気をつけなして、と挨拶する。

何に向かっても有り難う、と礼を述べる気持ちを忘れては一日もここにはおれんけんね。なあ珠子さん、考えてもみいや。

里は便利で賑やかじゃ。食べるもんでも着るもんでも、金さえ出せばなんでもある。人さんもようけおって気晴らしもできる。

しかしじゃな、このお山さんのような、神々しいまでに澄み切った空気は、里のどこを捜したらある？　あるものはようけのお人の息で汚れ切った空気ばかりと違うか。

わしは里へ下りるたび、体がいつもべとべとして早うにここへ帰りとうなる。家内も一しょじゃ。病院へ行けとすすめても、やっぱりここがええというて、動こうとはせん。なあ」

と呼びかければ、火箸で炉の灰をならしていたすぎもうなずいて、

「ほんまにそうですがな。

里ではお人もとげとげしゅうて、始終うしろからせき立てられるように思いますなあ」

と同意する。

珠子は雑炊をすすりながら、国太郎が力こぶを入れて話す言葉を、一語一語、胸の奥底にしまうようにして聞いた。

幸うすい少女の身の上で、生まれてずっと施設育ちの十五歳では、六十年の人生から生まれた悟りはただちに理解できるとはいえないものの、父となるひとの戒めならしっかりとおぼえておこうと思うのであった。

「明日は頂上へ登ってみようか。

山小屋は五月でないと開けないが、測候所のおとこしたちは働いているから、ちょっと挨拶をな」

夜が更けるとしんしんと寒さは増し、三人は囲炉裏のそばで三方に分かれ、夜具をまとってそれぞれ背を丸めて眠った。

らんぷを消すと真の闇、囲炉裏の榾火(ほたび)だけがちろちろと赤く燃えており、きれいな色だなと眺めたのも束(つか)の間(ま)、珠子は昼間の疲れでぐっすりと眠ってしまった。

目ざめたのはもう辺りがすっかり明るくなった頃あいで、見れば自在鉤(じざいかぎ)には鉄瓶(てつびん)がかかり、しゅんしゅん音を立てている。

昨夜は暗くてらんぷのまわりしか判らなかったけれど、朝の光のなかではもの皆しっかりとたしかめられ、何よりも吸い込む空気のさわやかさは珠子がはじめて味わうおいしさであった。

囲炉裏のそばでは痛い右足を投げ出してすぎがにじりながら朝の膳を用意しており、珠子が挨拶をすると、

「土間に水溜めの桶があるけん、洗面器に汲んで顔洗うてきなさい」

と教えてくれ、土間に下りるとここにはいろいろなものを置いてあり、炊事洗濯薪割りもできれば、風呂桶も据えられ、そして隅には鶏小屋まであって、五、六羽のレグホンが遊んでいる。土間のなかに何故鶏小屋まであるのかとふしぎに思ったが、のちに珠子は、この地の冬の寒さでは鶏や小鳥などの生きものは屋外では耐え難く、また柄杓や金だらいのような金気のものは凍りついて使えなくなるため、すべて屋内に入れてあるのだということが判った。

昨夜国太郎は、お山さんには人が住むための便利なものは何ひとつない、紙の一枚でも、ペンの一本でも、皆、里から背負うて運んできたものじゃ。じゃけん何でも大事にして有り難うに思わんといかん、といっていたけれど、そんならここにある茶碗も箸も、お父さんがあのおいこにくくりつけて上げてきたもんじゃなあ、と珠子は思った。

国太郎は朝のお勤めをすませ、社殿のほうから座敷へ帰って来て朝飯となったが、それは御飯と味噌汁、つけものだけの簡素なものとはいえ、あつあつを吹きながら三人で食べる味はまた格別であった。

食事のあと片付けは珠子がひきうけ、水は、凍らない期間は山からの筧、冬は天水をし

っかり貯めた水槽にたよらなければならぬ故に大切に使ったが、水を惜しむなどいままで考えもしないことであった。

そのあと、すぎが杖をつきながら次の部屋に珠子を案内し、

「このつづらに自分のもん、入れなさいね。夏になったら珠子さん一人でここで寝てもええが、冬は寒うて囲炉裏のそばはよう離れんやろ。いっつも三人いっしょに居ろね」

とやさしくいってくれた。

ゆうべ斜めに渡って来た境内に出てみると、はあはあいいながら上がってきた百二十段の石段、中ごろの鳥居、紙垂だけが見えた社殿はりんとして祖谷川の流れに向かって建っており、わきの社務所、そしてそのうしろ側には先達の修行のための宿坊などが見える。

境内から眺めれば、神職の居宅もなかなか立派で、珠子はここがこれからの住居か、と見るよりもまず、山の上でこれだけの社殿と家を建てるのにはどうやったのだろうか、と首をかしげてみるのであった。

国太郎は昨夜の言葉を忘れておらず、

「珠子さん来たばかりじゃけんど、うちへ落ち着いてもらうためにはまっさきにお山さんの頂きに挨拶をしておかんならん。上へ登ってみような」

と誘ってくれた。

剣神社のある見ノ越は海抜千四百メートル、ここから頂上まで約六百メートルは、人一人通れるほどの細い道を上がって約二時間、決してあなどってはいけない行程ゆえに、二人とも昨日の登山のいでたちに身を固め、上がりはじめた。

「上へ行くほど空気が薄うなる。急いで登ると必ず息が苦しゅうなったり、頭が痛うなったりする。第一にこれ、おぼえときや」

といい、ポケットから赤い布切れを紐状に裂いた束を出して、

「次は、道に迷わんために、ところどころの木にこの切れをくくりつけておく。帰りはそれを目印にして下りてくる」

というのを聞いて、珠子はまあ、子供みたいと思い、おかしくなって小さな声を立てて笑った。

「ほんでも、山の道がどんなにこわいもんか、珠子さんもそのうち判ってくる。雪が降ったら一ぺんで木は姿が変わるし、雨が降っても道が無くなるけん、そのために命を落とすひとも出るんじゃ。

道というのはなあ、人が踏み固めてこそしっかりとでき上がってゆくのじゃが、ここでは誰も通らんために、昨日来た道でさえもう今日は判らんことはたびたびじゃ」

といいつつ、事実先に行く国太郎の足はしばしば鈍り、ハテナ、ハテナと道をたしかめつつ進むのであった。

国太郎の話によれば、荒廃していた剣神社を再興したのは父親の先代宮司であって、その苦闘の半生を、国太郎は聞かされて育ったのだという。

「山肌をおおういちめんの熊笹を、鎌で刈って道を作らんといかん。この熊笹ほどしぶといヤツはおらんけんな。刈ったと思うてうしろ振り向いたらまたはびこって来ておる。そいつとの格闘じゃったそうな」

という話はまだ実感として珠子には判らないが、しかし残雪の小道を一足一足踏みしめつつ上がるのは、昨日バスの終点から見ノ越までの五時間近くよりもっときついと思われた。

家を出てからおよそ一キロ、と思えるあいだは原生林で、やっと頭上が明るくなったと思うとそこは西島の祠があり、急に小鳥の声が繁くなる。ここから上にはところどころ椚の白骨化した晒木があるだけでもう森林はなく、通称、お花畠と大剣谷の巻き道を通ったところに無人の大剣神社があった。

「あら、ここも剣神社じゃ。大の字が上についちょる」

と珠子が声を挙げると、国太郎は、

「お山さんには神社と祠はようけようけござる。こちらは我が見ノ越の神社の本家といおうか、親戚の神さんじゃ。わしが元気なうちはさいさい上がって来て、両方お祀りしたもんじゃけんど、いまは折々お詣りするだけでお許し頂いておる。

さ、珠子さん、ご挨拶して」
とうながし、二人並んで拍手を打った。
「ちょっと寄り道して、これも拝んでいこう」
と神社の下へ少し下がると、そこには巨大な奇岩が傾いたまま突出しており、その根元からは残雪のあいだにこんこんと澄んだ水の溢れ出ているのが見えた。
この岩の下には、安徳天皇の宝剣を埋めてあるため、この山を剣山と名づけたのじゃそうな、と話しながら、
「さあもう一ふんばり」
と国太郎は頂上へのいちばんきつい急坂へとりかかる。
よっしょ、よっしょ、と掛け声をかけながら登りつめるとここはいちめんの四国笹の大草原、平家の馬場であった。
ここが頂上と聞いて珠子はおどろき、
「剣山って刀の先のようにとんがった山かと思うとりました」
と率直にいうと、国太郎はすぐ目の前の測候所に向かってゆっくり歩きながら、
「いやいや、剣山の頂上はこんなになだらかでやさしいんじゃ。
わしはおとなしい牛の背のようじゃといつも思うとる。ほら、この広々した平家の馬場は、昔、ここへ落ちてきた平家の武士団が、来る日のためにここで馬術の稽古をしたそう

な。このことはまた詳しく話そうなあ」

頂上は丸くなだらかでも、ここはさすがに二千メートル近くの高さ、ぐるりと一まわりすると、三百六十度の景観はすべて自分の視界に入ってくるし、また波打つ四国山脈のなかでも、自分の立っている地が周囲の山をぬきん出て高いことがよくわかる。

何という爽快さ、そして充足感、ここは下界を遠く離れ、里からいつも仰ぎ見ていたあの山々の頂上なのだと思うと、ひとりでに瞼が熱くなるような感動があった。

まだ二十センチは積もっている雪のなかを、珠子は両手を高く挙げてそこいら中、走りまわり、笑い声をあげ、雪を蹴散らして遊んでいる。

国太郎はそんな珠子の姿を、目を細めて眺めていて、

「五月になれば、ついそこの山小屋が開く。その佐川さん家には、典夫さんと勝代さんというて、あんたと同じ年ごろの子供さんがおって家の仕事をよう手伝うておる。ときどき遊んでもろうたらええなあ」

とすすめてくれた。

剣山に連なる山々の座は、目の前にどっしり横たわる次郎笈、一ノ森、塔丸、三嶺、赤帽子山、天狗塚などなど、いずれも千八百メートル前後の険しい峰々が波打ち、遠く西には石鎚の霊峰、北には鳥取の大山までが望まれる。

国太郎は自慢のひとつとして、

「このお山は、登ってきたお人にサービスのええお山でなあ。どっち向いても海を見せてくれるんじゃ」

といい、日の出の方向に紀伊水道、北は讃岐山脈をへだてて瀬戸内海、そして対岸の岡山は鷲羽山まで眺められ、南西には広い土佐湾の紺碧のいろまでが手に取るようによく見える、と指さしてくれた。

なかでも珠子は、次郎笈という珍しい名にひかれ、由来を問うと、剣山はもと太郎笈と呼ばれていたそうで、

「二つのお山さんはもと兄弟でもあっただろうかなあ」

という話であった。

それにしては兄の太郎笈の剣山はまるくなだらかで、弟の次郎笈のほうは兄におくれること三十メートル弱の高さながら、見るからに険阻で男性的な山容をしており、珠子はおもしろいと思った。

「夏になったら次郎笈まで連れてってあげような」

と国太郎はいい、雪のなかを測候所に近づいてゆくと、ちょうど百葉箱の観測に出ていた職員の一人に出会った。

宏大な山のなかでの、ちいさな点のような人間同士、お互い、

「やあ」

「やあ」
「今日はちょっと温いな」
「ここ二、三日ましじゃな」
と挨拶しあい、
「宮司さん、なんでここまで？」
と聞いた職員の吉田に、
「娘を連れてきました」
と国太郎は笑みこぼれ、胸を張って答えた。
「ほう、宮司さんにこんな小まい娘さんがおったんかいな」
「はいはい、十五の年まで里の親戚へ預けておりました」
という国太郎の言葉を、吉田さんは信じたのか信じないのか「そうか、そうか」と笑顔でうなずいて、
「ちょっとお茶いっぱい飲んで行かんかえ。ちょうど、というか、あいにくというか、事務所にはいま誰もおらんけん、わしが淹れます」
と二人をなかへ招じ入れた。
こちらは屈強の男ばかりの職場、下からの荷上げもできやすいと見えて、事務所のまん中には薪をくべるだるまストーブがおかれてあり、火のいろがあたたかかった。

三人は、吉田さんの淹れた番茶をすすりながら一しきり雑談、そのなかで吉田さんが、
「近年登山ブームとやらで、去年の夏はこの山にもリュック背負うたひとがぽつりぽつりとやって来ましたなあ。秋になって、また人かげを見んようになったときには、そこら中の木や草は無残に荒され、ゴミだらけでしたよ。私ははごうてね、涙が出ました」
と如何にもくやしそうにいうのを受けて、国太郎も、
「この山におるもんは、誰に頼まれたわけでもないのに皆、暇さえあればゴミ拾うたり道なおしたりしよりますもんね。
その点、修行にみえる先達さんは見上げたもので、このひとたちが通り過ぎたあとはきれいなもの、洗うたように清められています。やっぱりお山さんをあがめる気持ちの違いでしょうなあ」
「今年の夏は立て札でも立ててみますか。
植物をいためるな、ゴミを捨てるな」
「効きめがあればええですがのう」
珠子は、たのしそうに談笑する吉田さんの、雪やけしたひげづらを横から眺めながら、このおじさんもうちのお父さんに負けず劣らず、この山を愛しているのだな、と思い、これから自分もその仲間に入ることに何やら胸がいっぱいになる感じがあった。
吉田さんにはその後、見ノ越でもう一度会う機会があったが、後年、このひとが愛する

剣山で遭難することになろうとは、このとき知るよしもなかったのである。

熱いお茶をたっぷり頂いたのち、他人の前ではじめて父娘を披露したふたりはもう一度平家の馬場に立ってまわりを見廻し、いく度も大きく深呼吸して、ゆっくりともと来た道を引き返した。

「お父さん、あの測候所やら山小屋やら建てるとき、建材も一本一本背負うてあげたのですか。まっこと大へんだったでしょうね」

と珠子が疑問を投げると、

「測候所は終戦直後じゃったけん、ボッカさん（強力）雇うて柱の一本一本、担ぎ上げたと聞いとるが、山小屋はヘリコプターで空から資材を落としたらしいよ。お金かかっただろがなあ」

人の足しか頼るもののない山上に家を建てるのはたいへんなこと、それでは我が剣神社も？　と珠子がたずねると、

「うちは西祖谷山村から東祖谷山村にかけて、氏子さんたちがおいでるのでな。そのひとたちが一日柱一本、板一枚、祝詞唱えもって運んで来てくれたらしいよ。

毎月十七日の月次祭には、冬のあいだは休みじゃが、その氏子さんたちがお詣りに見える。

珠子さんにも神職の家のしきたりなど説明せんならんが、そうじゃな、もう五、六日待

ってくれるか」

と国太郎はいい、下り道は珠子を先に立てて、赤い切れのしるしどおり行くように、と自分はうしろにまわった。

珠子は一歩一歩しっかりと坂を踏みしめ、辺りを見まわし、登りの記憶を呼び戻しながら道を辿りつつ、やはりいちばん気になっていることを聞きたく、

「お父さん、山には珍しいお花いっぱい咲くでしょう？　それはどの辺りに？　どんなお花じゃろか」

と、歩きながら前向いて大声で聞くと、国太郎もこだまを呼ぶほどの大声で、

「そうじゃったな、珠子さんは花が好きじゃったなあ。

山の春は遅うてな、四月ではまだまだ咲かん。ま、サバノオとか、ギンラン、ワサビの花くらいはぽつぽつ目につくが、大ていの花は五月もゆっくりして順々にひらく。七月、八月ともなればもう百花繚乱じゃなあ。右を向いても左を向いても、錦をひろげたようなあんばいじゃ。

この剣山はとくに植物の種類がようけあってな、なんでもここにしか咲かん花もあると小屋の佐川さんがいうとったよ」

「ここにしか咲かん花もあるんじゃろか」

「測候所のお人も植物には皆くわしいが、佐川さんはとくに何でも知っとる。その花はこ

の先の道の分かれを右へ取ると、先達さんたちの行場があってな、そのまわりだけにしか咲かんそうな。

名はキレンゲショウマ、わしは何度行ってもその花に出会うたことがない。盛りが短いけん、運じゃろなあ」

という説明を、珠子はしっかりと聞き、そのむずかしい花の名を記憶にとどめた。

それにしても、錦をひろげたとはどんなやろか、錦なんて見たこともない珠子は早く山中が春になってそれを眺めたいと思った。

花の話になると足どりも軽くなる珠子を、国太郎は戒めて、

「ほなけんどどんなに欲しい、手折りたいと思うても、山の花は一本も折ってはいかんよ。根ごと取ってきてうちの庭に移しても、山の花は床のかわるのをきらうけん。むざむざ枯らす羽目になる。

こんがな事はよう覚えときや」

と嚙んで含めるようにいい聞かせる。

山に来て一日、二日、三日、珠子の時間はあっというまに流れ、四日目の朝、囲炉裏ばたで目を覚ますと、火をつくろっていたすぎが、

「お父さんがお話があるんじゃと。奥の部屋へ行てみなされ」

と、次の間を指さした。

山はまだ零下十度近い日もあるため、囲炉裏のそばは片ときも離れられないが、火の気のない奥の部屋で何の用なのか、と顔を洗ったのち珠子が襖を開けると、そこには白衣に水色の袴をつけた国太郎が威儀を正して坐っている。

初対面以来、ずっとズボンにジャンパー姿ばかり見馴れていた目にはびっくり、

「わあ、ええ恰好」

と思わず子供らしい感嘆の声をあげると、国太郎は一瞬照れて、片手で髪を撫で、

「これがわしの仕事じゃ。いつもこれじゃ」

といったあとで、前に坐るように指さし、白木の三方を珠子の前に置いた。

「どうじゃな、山で暮らして行けそうかな」

と聞き、珠子がこっくりうなずくと、

「それはよかった。まだ先が長いけん、ぼちぼち行こ。

ついては、我が白塚家神職の説明と、これから先のあんたの役割とを話しておこうなあ。まずじゃな、このお社にどなたさまをお祀り申し上げてあるかというと、一にオオヤマツミノミコトさま、これはイザナギ、イザナミノミコトの御子神で山を司る尊い神さんじゃ。

そしておん弟のスサノオノミコトさま、時代が下って安徳天皇、この天皇は源平の戦に敗れ、我が剣山にまで落ちまいらせて、このお山さんで薨去遊ばされた。

お山さんに住む者は安徳天皇のみたまを永遠に安んじ奉らねばならん故に、我が社にお鎮まり頂いておる。このことはいずれ詳しくあんたに話すことにしよう。

このお三方を祭神とする我が剣神社は、父の宮司が艱難辛苦の末に再建し、わしは二代目を承ってこんにちに至っておるというわけじゃ。

そこでじゃが、まず神に仕える人間はこの職をこの上なき栄誉と心得、一心に身を清め、誠心誠意、相勤めねばならん。

家職じゃけん、これからは珠子さんにも手伝うてもらうことになる。

祭祀の手順やら唱え言葉は、わしについてやっておればおいおい覚えるじゃろう。祭りの日は、白い着物に緋の袴を穿き、巫女さんの装束でわしの介添えをしてもらう。

そこで、巫女名というものをわしは考えたんじゃ。よその社ではそういうものはないらしいが、わしは折角授かったあんたを、ずっとけがれなく清らかに育てとうに思う。

いわば神さんから授かった子じゃけん、一点のくもりもない純白のままでこの先、すごしてもらいとう思う」

国太郎は目の前の三方を取り上げて拝し、その中の奉書を珠子に手渡しながら、

「このなかには、今日から巫女さんとして生まれかわるあんたの名前が書いてある。開けてみてみい」

いわれて珠子は奉書をひらくと、そこには濃い墨で、

「剣神社巫女　白塚浄身」

と書かれてあった。

「むずかしいかな。そのまま読むとじょうしん。女の名にすればきよみじゃ。

この浄という字にはわけがあって、もちろん身を浄める意味も大きいが、一つには神職の階位をあらわし、いちばん下は直階、その上が正階、そして明階。いちばん上が浄階、となる。

浄という字は尊い境地をあらわしておる。

わしは決して、ゆくゆくはあんたが神職となって、浄階の位にまで登りつめるように、という願いをこめてその字を頂いたのではないよ。

神職も、このごろでは女子もなれんことはないらしいが、わしはべつにそれを望みはせん。

ただ、神に仕える家の子となったからには、けがれなく身を保ち、ひたすら清く生きていってもらいたいと、わしもお母さんもそれのみ念じておる。

今日からは珠子という俗名はさっぱりと忘れてもろうて、きよみとして新しく生まれ変わってもらいたいのじゃ。

ええかな。わかってくれるなあ」

と国太郎は珠子の目をのぞき込むようにして確かめ、珠子は「はい」とうなずいた。

「それから」
と国太郎はまたつけ加えて、
「わんくには本殿のわきに宿坊があるなあ。あっこは誰にでも一夜の宿をお貸しする場所じゃが、主に使うておるのは先達さんたちじゃ。
あんたも見たことがあるじゃろ。白い着物に笈を負うて、頭には兜巾をかぶり、重い錫杖をつきながらお山さんの神さんにお詣りして修行する。
この剣山には特別の修験道があって、お山全体ではなお五百八十六社のお社や祠が残っておるが、先達さんたちは遠く高知や香川などから山伝いに入って来て宿坊で参籠し、このさきの行場で滝に打たれ、お社にくまなく参詣するのじゃそうな。
その人たちは自分の食べるもの着るもの一切持参じゃけん、うちは坊をお貸しするだけでええ。
ま、一心に修行する人たちに接していれば、教えられるものもようけある。
ちょうど明日、十二人の組のお方がおいでる予定じゃけん、あんたも用をいいつけられたらしてあげなさい。
わかったなあ、きよみ」
国太郎がなあ、きよみ、と呼んで立って行ったあと、しんしんと冷たい部屋に珠子はじ

っと坐ったままでいた。

今日から生まれ変わって浄身、きよみ。神職の家の子ゆえに一点の汚れもないよう、清らかに育たねばならぬ、といういまの国太郎の言葉はまだ耳の底にある。

それがどういう意味なのか、十五にもなれば、全く判らぬでもなく、それだけに気持ちの上で何となく不安が感じられてくる。

珠子はこれまでに、べつだん異性を想った経験もなく、将来もそういう感情にあこがれているわけでもないが、人間として女として生まれてきたからには、結ばれるべき異性があってもいいし、当然ながら、ゆくては結婚して家庭を形成することもあるに違いないという、漠然とした夢は描いたこともないでもなかった。

いま国太郎から、そういう夢をすべて否定されてしまうようなそんな言葉を聞けば、暗澹とした気持ちになってゆくのは事実だが、しかし、父親となったひとが示してくれた道が必ずしも不幸だとはいい切れないと珠子は思った。

ただ、小さいときから皆にタマ、タマ、と猫のように舌を鳴らして呼ばれてきた愛称を、今日を限りで捨て去ることについては未練はあるが、しかしこれも、お父さんが何日もかかって考え、神さまにお許しを頂いたもの、と思えば、素直にきよみ、になろうというだけの聞き分けのよさはある。

しかしこの言葉と名前は、その後成長するに従い珠子を悩ますことになるのだが、この

ときはまだ、具体的にはよく判らなかった。

珠子は勢いよく立ち上がり、囲炉裏のそばへ行くと、すぎがめがねをかけ、不自由な姿勢で針箱を出しており、膝の上には赤い切れを拡げているのであった。

「あ、珠ちゃん、じゃなかった。

お父さんに聞いたじゃろ。今日からはきよみじゃったな。

きよみ、なあ。これあんたに緋の袴縫うてるところなんじゃ。巫女さんの装束はその向きの店でどこでも売ってるやろが、一枚くらいは私の手で縫うたもん、着せてやりたい思うてな」

というのを聞いて珠子はうれしくなり、

「お母さん、ありがとう。私も手伝うけん。私、家庭科はいつも4じゃったの。

ぞうきんも何枚も縫うたことあるし、それからエプロンも、手提げ袋も」

「そうか、そうか。おいおいそんなんも縫うてみせてな。

私のリュウマチは日によってご機嫌がいろいろでなあ。今日はお天気じゃきに針も持てるけど、雨の降り出しやら長雨のときはそれはもう、疼いてなあ。

何のバチかと思うくらいなんじゃ」

とすぎはいい、そう聞くと身近に重病人を見たこともなく育った珠子は、今度は痛くなったらきっと私が看病してあげようと思うのであった。

翌朝、珠子は潮騒のようなもの音にめざめた。辺りはまだ暗く、暁がたの寒さがしのびよってくるなかで、蒲団をかぶり、体を固くして耳を澄ますと、それは大ぜいの男声コーラスで、歌詞はむずかしい言葉ながら、しっかりと聞いていれば全く理解できなくもない。帰命頂礼、剣山、その濫觴をたずぬれば
南海道の阿波の国、無二の霊山霊峰は
もと石立の山なるぞ、昔時行者のご開山
秋は弘仁六年の、六月中の七日なる
空海大師この峰に、登りて秘法修し給う
メロディーはやさしい繰り返しだが、歌詞は物語ふうに長くつづき、いっかな終わりそうもない。ようやく、
一度拝山拝堂を、いたす行者の身は影の
形はいつも離るらん、悪事災難病難を
祓いおさむる御宝剣、六根六色備わるを
ただ真心のひとつなり
深く仰ぎて信ずべし
と終わりをゆっくり唱いあげて止み、そのあと「六根清浄」の大合唱が山の空気をふ

るわせてしばらく続き、最後に錫杖の高い金属音が響き渡ってとどめをさした。

珠子ははね起き、夜具の始末をしてから庭に出ると、宿坊では白装束の男たちが忙しそうに立ち働き、朝餉の支度をしているところであった。

国太郎もその群れのかたわらに立っており、珠子が近よってゆくと、

「さきほどの和讃、きよみも聞いたじゃろ。あれを全部おぼえると剣山の由来がようわかる。

先達さんは和讃を唱え、お山くぐりの修行をしていちばん下の平先達から中、大、班長などと順に階級を上がってゆく。

今日の皆さんは高知の岩原、豊永の合同隊じゃな。みてみい、皆、自分の食べるもの飲むもの全部持参してきて、ここで飯を炊き、参籠して行場まわりをする。きよみもな、いわれたことはしてあげたらええが、いわれんことまでして修行の邪魔立てをしてはいかんよ」

と珠子の頭に片手を置いて説明してくれた。

そういえば先達さんたちはきびきびとそして粛然と手順よく働き、まもなく宿坊のなかの二つの大きな囲炉裏にかかる釜の蓋がことことと動き出すのを見て、珠子は家に帰った。なるほど御飯を炊くのも、薪の用意をするのも、笈の荷物を整理するのもみんな修行か、と判り、そういえばこちらに来て以来、三度の食事の用意をするのは、ほとんどの場合国

太郎であることを思った。

すぎの体が不自由なこともあろうが、国太郎は、

「あの先達さんや仏家にはきびしい修行があってな、行場めぐりでは鎖を伝って洞穴へ下りていったり、滝に打たれて祈願したり、そんな鍛錬を経て自分を磨くことが出来るが、神職にはそれはないゆえに、ひたすら自らが自宅潔斎をせんならん。とくに神へのお供えものを調理する火を大切に、けがれないようにするのが、これが神職第一の修行と思いなさい」

といったことを思い出しているのであった。

このあと、先達さんたちは食事のあと片付け、宿坊の掃除など、まるで舐めたようにぴたっときれいに終えたあと、やがて一列になって「六根清浄、懺悔、懺悔」と大音声に山々峰々を揺るがせながら発っていった。

第四章　山の暮らし

珠子が剣山に来てから三日、五日、七日、と日が過ぎてゆく。

この家で珠子の決まった役割はなく、強いていえば国太郎がお勤めをするとき、背後に立ってそれを見習っていればいいだけだが、その他には二人からときどき、

「きよみ、ちょっと手伝うてや」

と声がかかったときだけ、手を貸してあげればよいだけで、それでも珠子は時間をもてあまして困るなどということはなかった。

何しろ、何を見ても聞いても珍しいし、自分でももっと知りたいという欲がある。

「遠くへ一人で行かれんよ」

という注意を守って勝手に山歩きはしないが、そこら辺りの散歩のときは必ず赤い布切れを持って、せいぜい片道三十分くらいの距離までは道をおぼえるために歩いてもみる。

国太郎もすぎも至ってやさしく、最初に神職の家の者の心得を説いて以来は小言もいわず、もちろん珠子を叱るなど一度もしなかった。

それでも、日一日と重なるうち、珠子にもいろいろと判ることはあり、それはこの剣神社は氏子が少ないため、家の暮らしむきは決して楽ではないこと、主たる収入は宿坊の宿泊料やそのとき寄進される米麦などであること、そして月の十七日の月次祭には、東祖谷山村の氏子の人たちが上がって来、国太郎も装束をつけて朗々と祝詞をあげ、珠子の介添えで祭祀をちゃんと行うこと、などひとりでにおぼえてゆくのであった。

白い木綿の着物に緋の袴をはき、参拝の信者に玉串を渡したり、お神酒をついだり、またときにはすぎに手伝って紙垂の切りかたを習ったり、注連縄のかけかたもできるようになり、神札に水引をかけることも一人で上手にやれるようになった。

神とは全く無関係の、施設に育った女の子が、いわれるままに神職の介添えの仕事をおぼえることに抵抗がないかといわれれば、珠子は首をかしげ、答えに困ってしまう。

先ではわからないが、いま、ここで暮らすのは珠子にとって学校の授業を受けているような感じがあり、そういうものをすべて吸収し、消化すればまわりに喜んでもらえる、と自然に考えるのも、長い施設ぐらしの子の、それも優等生といわれる子の、身についた処世術というものでもあったろうか。

この家での居心地は、と聞かれれば、施設とは全くちがう一種ふしぎな感覚があり、何よりも父母の役割の二人と自分ひとりだけで向かいあっているという、しっくりした思いはある。この家が自分の家、この二人が自分の両親、と思うのはいかにもゆるぎない安堵

感があり、珠子はこれでいいのだな、とふっと涙ぐむ折もあった。

またひとつには、国太郎すぎのいう、

「五月に入ったら、気の早い花はぽつぽつと笑いはじめる。この上のほうにあるお花畠が満開になるのは七月の終わりから八月じゃが、ま、五月半ばごろからはきよみの嬉しがる顔が見れるようになるからなあ」

の花情報も珠子には大きな楽しみであった。

その五月はじめ、国太郎は貞光に所用で下りてゆくことになり、

「手紙書くなら書きや。出してあげるけんね」

と珠子に声をかけてくれた。

山に来て一ケ月、全く施設の人たちのことを思い出さないといえば正直ではないが、思い出したところでそれは会いたいとか、話したいとかの現実感はなかった。

遠く離れたといっても外国に来たわけではなし、是非、という用と必死の思いがあれば誰にでも会えないこともなく、川又まで下りれば電話というものもある。

しかし珠子は、いままで一度も具体的にそんな手段を考えたことはなく、それというのも山の暮らしがあまりに里とかけ離れているため、過去は遠くなってしまっている感じであった。

いま、貞光へ行く国太郎から手紙なら出してあげるよ、といわれ、ハッと目ざめたよう

な感じを受けた珠子は、そうだ、お礼状を書かねばならぬ、と思い、指を折ると園長先生をはじめ、それは五、六人にもなってしまう。

とすると五、六通はひどくおっくうになり、何となく、

「お父さん、愛光園へは寄らんの？」

と聞くと、

「そうじゃな。きよみが元気にしよることは報告せんといかんな。しかし明日は日帰りじゃけん、寄る暇があるかどうか。

もし無かったら電話でもかけておくことにしような」

といい、それを聞いて珠子は、では自分は隆子にだけ手紙を書こうと思った。

つづらの中から施設でもらったボールペンと便箋を出し、別れるときにもらった隆子の名古屋の寮の住所を先に封筒に書いてから、

隆ちゃん、お元気ですか。私も元気です。

お父さんもお母さんもやさしいし、山の生活は快適です。名前もかわりました。浄身、きよみ、といいます。むずかしい名でしょう。

と便箋二枚ほどすらすら書き、読みかえしてみると、何から何までいいことずくめで、これ読めば隆子はきっと、山行きを止めた私へのつらあてね、と怒るにちがいないとは思ったが、珠子はすぐ、だってこれはほんとうなんだもん、と心のうちで呟き、封筒の封

糊をなめてのひらで押しつけた。

翌日、暗いうちに国太郎は出かけてゆき、食事の支度は珠子がすぎに教わりつつ、囲炉裏の火で作り、二人で帰りを待った。

すぎは杖をつきつき門口に出、

「お陽いさんが伸びたなあ。日いが長うなると暮らしようなるから、ええなあ」

と呟き、痛い右足をかばってしばらく暮れなずむ空を見上げている。

やがて、まだ空が明るさをやや残す時刻、おいこを揺りあげながら国太郎が戻って来、

「おかる婆さん、芋をくれたんじゃ。芋は重いけん要らんともいえず、なあ。有り難迷惑じゃ」

といいつつ土間に包みをぶちまけ、

「きよみに手紙が来とったよ。二通。ほらな」

と封書を手渡してくれた。

国太郎から渡された封書をらんぷに近づけ裏返すと、それは木暮園長と小西隆子からであった。

「いやあ、隆ちゃんじゃ。私のと行きちがいになったわ」

と嬉しさに思わず大声をあげ、どちらから先に読もうかと両てのひらに二つの封書をの

せ、重さを計るように揺らしてみた。

「やっぱり先生からや」

と指先で封を切り、らんぷの灯りに傾けると、

珠ちゃんがそちらに行って、もう半月になります。消息を聞くことができないので、どうしているか、正岡先生たちといまだに毎日話しあっています。

他の県外就職組もそれぞれ元気にやっているようすです。もっとも、三人とも誰も便りを寄越しませんが、いまの若者は手紙を書くのが苦手ですから、仕方ないでしょう。

珠ちゃんも山の暮らしに少しは馴れましたか。里へ下りてくることがあったら、きっと寄って下さいね。

園のまわりの花壇も、下級生たちが当番をきめて毎日水をやっています。いまは紫のすみれが盛りです。これも珠ちゃんが川原から移し植えて、育ててくれたのでしたね。

お父さんお母さんのいいつけをよく守って、仲よくくらして下さい。病気をしないようにみんなで祈っています。

文面は、とくに変わったことは書いていないが、全体から木暮園長のいつものやさしさが立ちのぼってくるように思われ、珠子は読みながら涙がこぼれそうであった。

読み終えると、そばの国太郎が首をのばして、

「わしは愛光園へはよう寄らなんだが、園長先生おかわりないかね。

どれどれ貸してごらん」
と手をのばしてその手紙を受け取ろうとした。
珠子は、
「えっ」
と驚き、思わず手紙をうしろに隠そうとしたが、国太郎は読もうとしてもうめがねをかけており、仕方なく珠子はしおしおとそれをさし出した。
人の信書を読むのはいけないことだ、罪悪だと教えられ、施設でも人宛（ひとあ）てのものはハガキでさえ読まないのに、お父さんはいったいどういうわけ？　と珠子がみつめている前で国太郎はさっと目を通し、
「園長先生もええお方じゃなあ。いつまでも心配して下さりよる。わしも親として礼もいわんならんけんなあ」
と今度はすぎにそれをめがねと一しょに渡し、
「お前も目を通しておかんといかん」
とすすめ、
「もう一通は誰じゃな？」
といわれたとき、珠子はとっさに封書をうしろにかくした。
国太郎はそれを、ふざけていると取ったのか笑いながら、

「恥ずかしがることはないよ。子供に来た手紙は、まず親がひらいてみて、ためにならんこと書いてあったら処分するのが親のつとめじゃもんな。

わしらはきよみを守らんといかんけんな、誰じゃな、その手紙は」

とてのひらを差し出した。

その様子は、信書を検閲するという威猛高なものではなく、なにごとも親として共に心配しようという善意に満ちている態度であることはすぐ判ったが、しかしそれでは、とすぐ封を切らないままで差し出すのはためらわれた。

頭をよぎるのは、隆子がさんざん珠子の山行きを止めたことであって、元気のいい彼女なら文面にあのじじい、ばばあ、などと悪い言葉を書いてありはしないかという懸念があり、珠子はちょっと考えてから、

「私が先に読んじゃいかんかしらん？」

と聞いたところ、国太郎はうなずいて、

「そりゃあべつに、ええよ。きよみに来たものじゃけん」

というのと同時に、すぎのほうは、

「そりゃあきよみ、いかんよ。お父さんに先にお見せせんと」

といい、両方一緒に聞いた珠子は一瞬、頭のなかが混乱した。

この場合、お母さんのいうとおりお父さんに差し出すのがこの家の習慣なのだと判って

も、それでは、と開封せぬまま渡す気には珠子はなれなかった。

「ごめんなさい」

といいつつ、珠子は封を切り、大急ぎで目を通すと、

タマ子、げんきにしている？　こちらに来て私はもう二週間。毎日ガチャンガチャンの機械の音にかこまれて、自分も機械になってしまいそう。朝は七時から夕方六時まで働きづめの毎日です。愛光園のころがとてもなつかしい。あのころは先生の悪口ばかりいってうっぷんを晴らしていたけれど、こちらの監督さんは鬼よりこわいひとばかり。愛光園から脱走したA君の気持ちがよくわかります。

タマ子もときどきは手紙ちょうだい。もっとも不便なところらしいから、この手紙もいつ着くか、そっちからの便りはいつくるか、あてにはならんね。でも元気でね。

さっと読み終えたあと、珠子はそれを国太郎に渡し、深いためいきをついた。

こちらをののしっていないのは安心だったが、隆子があまりしあわせではない様子なのは、決して嬉しくはなかった。

行動力のある隆子のことだから、突然工場を逃げ出すおそれなしとはいえず、それはいまの珠子に関わりはなくとも、唯一の友を失う不安となるのであった。

囲炉裏の火はちろちろと燃え、らんぷの油はときにジジ、と鳴るだけの静寂のなかで、国太郎は、

「紡績工場というのは仕事がきついなあ」

といい、すぎは別の見かたで、

「うちへ来てもろうたんがきよみでよかった。こんな子やったら、なんぼ大事にしてあげてもうちにはありつかんじゃろなあ」

と、我が身にひきかえての受け取りかたをいう。

そろそろ晩飯にしよう、と珠子もすぎに手伝って作った煮込みうどんの鍋を囲炉裏にかけ、いつもの三人の食事がはじまったが、そのあいだ中、珠子は考えつづけた。

私に来た手紙を、お父さんお母さんが読むというのは間違っていはしないか、まして開封まえのものまで先ずお父さんに、というのは親としても行き過ぎではないか、とくり返し思い、それは即ち、今後の問題でもある。

手紙は二通とも、半月も前に出されたもので、里へ下りてゆく用がなければそれはいたしかたもないが、この家では手紙が大きな話題となるという驚きもある。

施設では毎日たくさんの郵便が来、それをさっと個人に分けて処分してしまうが、ここではそれが小さな事件ともいうべきものであった。

事実このあと、小西隆子という名は二人にしっかりおぼえられ、話題のないときには、

「隆子さんて、どういうひと？」

とくどくどと聞かれることになった。

珠子はそれをべつだん嫌とは思わず、それというのも自分には親を持った経験もないゆえに、親とはこういうものかもしれないと納得してしまうところがある。

しかしそれにしても、手紙を見せなければならぬというのはやっぱり嫌だ、と珠子は思った。

二人とも悪意のないのは十分判っているが、拒否するためにははっきり意見を述べなくてはならず、それはまだ珠子にはできないことであった。

唯一避けられる方法としては、自分が貞光の郵便局へ行って、先に読んでしまうことだが、これも目下のところ不可能なこと。してみると、自分の生活はすみからすみまで全部二人に知られているというわけになり、その夜、珠子は蒲団のなかで、

「自由なんて、なんちゃないんだわ」

と繰り返し呟いて奥歯をぎゅっと嚙んだ。

こんなとき、隆子はすぐ脱走したA君のことを思い浮かべるが、珠子は生まれたときからのしぜんの習慣で、懸命になって気持ちを楽しい方向へむけようと努力する。

夜なかふと目ざめれば、赤い燠となっている囲炉裏のまわりに、白髪の国太郎と半白のすぎとの頭が眠っており、うす目をあけて二人を眺めているうち、何となく、嘘ではあってもこうして両親とともに枕を並べていることは、自分がずっと以前から欲しかったしあわせというものではないかと、心満ちて来るのであった。

五月になれば花も咲く、頂上の山小屋もひらく、という楽しみのほうに気持ちを向けているうち、三日の朝、珠子が洗面の水を家の前に撒いていたところ、家のうしろの道を駈け下りてくる人の足音がした。

まだ辺りは白い靄に包まれており、その靄のなかから赤と青の鮮やかないろがあらわれて、突然、目の前に、

「お早うございました」

という声とともに、その色はヤッケを羽織った人のかたちとなった。

「わっ、びっくりした」

と、胸をどきどきさせながら珠子が思わずそういうと、青いヤッケのほうは、

「山小屋の佐川典夫です」

といい、赤いほうは、

「妹の勝代です」

と、二人ともよく似た口もとでにっこりと笑った。

そこへ国太郎も寄ってきて、

「一日から開けちょるんか」

と聞き、典夫が、

「連休じゃけん、二十五日から。おれは学校休んで手伝うとる。ほなけんど今日はお父さ

んが、下の神主さん家にかわいらしい女の子が来とると吉田さんがいうとった、挨拶してこいいうもんで、勝代と一しょに下りて来たんじゃ」

と説明し、妹を前に押し出すようにした。

「そうか、そうか。それはご念の入ったことじゃな。きよみといいます。ええ子でな。仲好うしちゃってなあ」

と国太郎もきよみを引き合わせた。

聞けば勝代は珠子より一つ下の中三、典夫は高二で、二人とも穴吹の学校へ通っているという。

兄妹の人なつこさに珠子も引き入れられ、それに一つちがいもあって三人はすぐ親しくなり、典夫は国太郎に、

「お父さんの飴湯をごちそうしたいけん、おっちゃん、きよみさんをうちへ連れて行ってもかんまんかえ？」

と聞き、

「そうじゃな。必ずお陽いさんの高いうちまた連れてもんてな。きよみはまだ山に馴れてはおらんきに」

との許しを得て三人はさっそくに登りはじめた。

山の隣は徒歩で二時間、決して気を許してはならんという国太郎の戒めを忘れず、珠子

は例の赤い切れをところどころにくくりつけようとすると、典夫はそれを見てアッハッハと可笑しそうに笑い、

「それは雪の積もったときの話じゃ。いまはな、木や石のかたちでおれたちは覚えとる。もうちょっと上がるとお猿さんの木、そこからしばらく行くと亀の石もあるよ。みな、おれと勝代が名前をつけた目印じゃけんど、これからはきよみちゃんにも教えちゃる。

山の仲間じゃけん」

という。

典夫も勝代も子供のころからこの山を遊び場として育っているだけに、足の軽いこと、身のこなしの敏捷なこと、

「まるでお猿さんみたいじゃ」

と珠子が息を切らしながらいうと、

「きよみちゃんもすぐに足は強うなるよ。夏休みになったら三人でこのまわりの山、みな登ろうな」

と二人して励ましてくれるのであった。

山小屋では、初対面の佐川夫婦が歓迎してくれ、父親の昭市が腕に自慢の剣山名物の飴湯を大きな湯呑みいっぱい、珠子にふるまってくれた。

まだ雪も残る山頂で、一杯の飴湯の湯呑みを両てのひらであたためながらすするおいしさ、珠子は一口ずつ味わいながら、

「この飴湯は、片栗粉へ飴を入れたのとはちがいますじゃろ？　とっても香ばしくておいしい。作りかたに秘訣があったら教えてください」

というと、母親の祐子が、

「これはなあ、きよみちゃんがうちのお父さんに習うても一日や二日でできるもんやないわ。

この山小屋をひらいた先代が考案したもので、質のよいざらめを炒って炒って、気長く炒ってまず飴から作るもんじゃけんね。

そやけん、うちのお父さんはざらめだけは毎年、自分で選んで買うて、それを負うて上がってくるのよ。

お客さんのなかには、この飴湯が目当てのお方もおいでるほどじゃもん」

というのを聞いて、なるほどと珠子は思った。

小屋の内部は素朴な作りで、奥には剣神社の宿坊とおなじく、囲炉裏のある畳の部屋があり、土間は食堂になっていて、佐川家の家族全員が立ち働いて、客の注文に応じ、簡単な食事を出すようになっている。

珠子が奥をのぞくと、リュックをわきに置いた男性二人づれが囲炉裏にあたって休んで

おり、あのひとたちは？　と不思議そうに見つめている珠子を見て、昭市が、
「きよみちゃんもお父さんからようくいわれとるじゃろう？　山はなあ、朝のうちの行動がいちばん安全じゃけん、この頂上へ昼の十二時すぎについた人も、二時についたひとも、その日はもうここで泊まってゆくんじゃ。昼過ぎたら山の中では動かんほうがええ。ほじゃけんあのひとたちも今夜はお泊まり。きよみちゃんもそろそろ帰りなさい。典夫に送らせよう」
とねんごろにいい、珠子はいわれるとおり帰り支度をした。
山のこわさがどんなものか、珠子はまだ全く判らないが、帰りみち、典夫がいうのには、
「いちばんの敵は雪と雨。それから暗さ。これらと闘って疲れを呼ぶらしいよ。おれは知らんが、親父は疲労で動けなくなったひとを助けたこともあるんじゃと」
典夫は先に立って大声で明るくしゃべり、
「それから不可抗力に近いのが雪崩じゃと。おれは冬のあいだは里におるけん、雪の深いときは知らんが、これに狙い打ちされたらまず助からんらしい」
といいさして振り向き、珠子がおびえた顔をしているのを見て典夫は、
「あ、ごめん。おとろしい話ばっかりして悪かったなあ。いや、楽しいことでもいっぱいあるよ。

もうすぐお花さんがようけ咲いて、それはそれはきれいじゃけど、おれはお星さんのほうが好きやなあ。

夜な、お月さんの無い晩、平家の馬場に寝て空を見るとな。それはそれは、すごいぜえ。もうお星さんが何重にも重なって、空という大きなバケツにビー玉を山ほど入れたみたいじゃ。

手えのばして取ったろか、と思うくらいじゃ。ちょっと口ではいえんなあ。そのきれいさは。

なあ、きよみちゃん」

と典夫は立ち止まって、

「いっぺんうちへ泊まりに来んか。

きよみちゃん家は中腹じゃけん、お星さんは一部分しか見えんけど、うちはてっぺんじゃきに、空は全部、おれの家のもんじゃ。

里で見るお星さんは夜空に一つずつ、銀紙貼りつけたみたいに平たいけど、山ではな、お星さんのうしろにお星さんがあり、その奥にもまたお星さんがあって、もう頭の上はお星さんだらけなんじゃ。

あれ、きよみちゃんに見せてあげたいよ」

と熱心にいい、珠子も是非、その満天の星を見たかった。

話しながらの下り道はさっさとはかどり、ちょうどまん中辺りの亀石まで来たとき、珠子は、

「もうここでええ。あとは一人で大丈夫じゃけん」

と辞退すると、典夫も強いて送るとはいわず、この春、父親に買ってもらったという腕時計を見て、

「下りは早いなあ。ここまで四十分しかかからんかった。あと三十分足らずで帰りつくよ。ここから見よってあげるけん。

そんなら一人で帰ってみい」

と年上の経験者らしくいい、珠子はそのとおり「じゃさよなら」と頭を下げると、早足で下りはじめた。

ちょうど疎林の地帯で、まだ緑は芽ぶいておらず、下りの大きなカーブにくるたび振り向けば手を振る典夫の姿は小さくなって見えており、しかしそれもまもなく見えなくなったが、珠子は迷わなかった。

この山にも、話を交わせる友だちがいると思うと心たのもしく、つい昨日、両親に隆子の手紙を見られた小さなこだわりも、薄れてゆくようであった。

それに、山小屋の家族四人、誰ひとりとして珠子の素姓を聞き糺さず、まるで生まれたときからの知り合いのようにごく気さくに、そしていかにも親しく話しかけてくれたこと

は、珠子にとって一つ何かをとびこしたように、ひどくうれしかった。山の人たちっていいな、と思い、また国太郎となら二時間だった道も、若い者同士ならぐっと短縮されることも、新しい発見でもあった。

五月半ばのある日、珠子は国太郎に呼ばれ、社殿のほうに行ってみると、

「おいで」

とふだんは立ち入らぬ方へ連れて行かれた。

社殿の左上は雑木が茂っており、そのあいだをほんの一筋、小さな流れがすずやかな音を立てている。珠子は見るなり、

「あら、かわいい花」

と駈け寄ると、国太郎はこれがワサビの花じゃ、と教えてくれた。

え？　これがワサビ、と問い返すと、野生のワサビは根を食べるのではなく、花と葉をさっと湯どおしし、二杯酢で食べるのだという。

「うまいぞ。いまどきの山のごちそうじゃ。ちょっぴり摘んでおいてくれんかな」

というのを聞き、珠子は驚いて国太郎の顔を見て、

「お父さん、山にしぜんに生えたものは一木一草たりとも手折ってはいかんはずじゃなかったの」

というと、国太郎は照れながら、小声で、

「そうかたいことというな。
ワサビの花と葉は酒のさかなに最上じゃ。さっきわしは一心に祝詞をあげたけん、山の神さまはちょびっとならええぞ、と仰せられた」
というのを聞いて珠子は可笑しくなり、空のほうを向いてハッハッと笑った。
「こらっ笑うな」
と国太郎は自分も笑いながら、
「ほんなら、ええな」
と念を押し、自分は帰った。
お父さん、自分の手で摘むのがこわいんじゃ、神さまのバチが当たると思うとるんじゃ、と珠子はまだ笑いを嚙み殺しながらしゃがみ、その小さな白い花に鼻を近づけた。
とたんに、鼻の奥につーんとくるワサビの香りがし、思わず涙ぐんだが、国太郎の酒のさかなへの執着のおかしさを考えて、手折ることにした。
こんな小さな沢の水のそばに、人知れず咲く花のかわいさよ、花の好きな珠子は一茎一茎、「ごめんね、ごめんね」といいながら千切るうち、やっぱりワサビの香りにむせて涙が溢れてくるのであった。
一握りのワサビの茎を流れで洗い、手についた汁も洗っているとき、つい目の前を大きな青大将がにゅるにゅる、と渡ってゆき、珠子は叫び声をあげてとびのいた。

摘みとったワサビの花は一輪一輪、十字状の白い花が固まって開いており、このままコップに挿して眺めても十分に美しい。しかし夕方には国太郎自身の手であえなく皿の上のものとなり、お神酒とともに国太郎を喜ばせただけでなく、珠子もはじめての味を、とてもおいしいと思った。

味だけでなく、草木に対して厳格極まりないと思っていた国太郎から、抜けみちもあることを暗に教えられたおかしさも、珠子の気持ちをずい分と軽くしたようであった。

冬が来れば山眠り、春が来れば山笑う、という言葉を国太郎から教えてもらった珠子は、五月も終わりごろになるとそれが真実をいい得た景色なのだとしみじみ思う。じっと目を閉じてうなだれていた裸木や、道の辺の草がいっせいに空に向かってほほえみはじめ、己が生命を讃えるかのようにつぼみをふくらませているのを見ていると、こちらの胸もついはずんで来てわけもなくうれしくなる。こんなに心が弾むのは、家のうちが至って穏やかで、自由に振舞えるからでもあり、ここに来て珠子は自分の気持ちが安定しているのを感じずにはいられなかった。

今日も珠子は春めいた山に浮かれ、花をさがしに一人で出歩いてみる。

上りは亀石まで、と自分で決めてあり、たった一冊、施設のとき小づかいを貯めて買った小さな植物図鑑をジャンパーのポケットに入れ、道ばたに目をこらしながら歩くのはとても楽しい。

家のまわりの水場にはもう紫の小さなヤマルリソウが開いており、この花はまるで苔のように地面を這っているので、うっかりすると踏みつけてしまう。

花を見ると珠子はいつも我を忘れるほど見とれ、ときには気がつくと人に話しかけるように花に向かってひとりごとを呟いている。

そういうとき、花のほうからもたしかな答えがあり、触れるとポロリと首から落ちるヤマルリソウなどは、

「痛いよ、ひどいよ、もっとやさしくしてよ」

と耳もとで囁かれているような気がし、

「ごめんね、ごめんね」

などと謝ったりする。

その日、珠子は天気のよいのにひかれて、いつもの登りみちを辿って亀石のあたりまで花をさがして行ってみた。

道の両わきの草はみどりを増し、小さな米粒のようなつぼみをつけているものもあるが、まだ開花はしておらず、珠子は亀石に腰をおろしてしばらく休んだ。

ふと目をこらすと、小さな白い蝶かと見まがうような花が疎林のなかにぽつんぽつんと咲いており、珠子は駈け寄ってそれを眺めた。

どれも高さは十センチほどか、先のほうに拇指の爪ほどの白い花を十個ほどつけており、

得もいえず愛らしい。

木洩れ陽の光のかげんでは咲いているとも見えぬほど地味な花で、図鑑をめくるとギンラン、とある。

同種ではキンランもあるとのことだが、見まわしてもこの辺りにはギンランの白花ばかりで、黄金いろのキンランは見当たらなかった。

珠子は花のやさしい姿にひかれて、いつのまにか道から外れ、すこし奥へと踏み込んでいたらしい。ギンランは群生せず、間隔を置いて一、二本ずつ咲いていることもあって、次から次へと花を追い、かなりの時間、花と話を交わしていたような気がする。

はっと気がついたのは、頬に当たる水滴を感じたときであった。

家を出るときはうららかな春日が照りわたっていたのに、空を仰ぐと灰いろの厚い雲が低く垂れており、珠子はおどろいて引き返した。

さいわい道は判っており、亀石から下り道を辿って家に帰ると、土間には国太郎がいまま で見たこともないほどの渋面で突っ立っており、珠子を見るなり、

「どこへ行っとったんじゃ。行くときはどこそこへ何しに行くというていきな、とあれほどいいつけてあったんじゃろが」

と叱られた。

国太郎に叱られると、珠子は弁解のしようもなく、素直に、

「お父さん、ごめんなさい」
と謝ると、国太郎もすぐもとの温和な顔に戻り、
「早うお母さんのもとへ行ってやってや。いつもの病気じゃけんど、こいさはひどうてな」
と囲炉裏のそばを指さした。
すぎは今朝の食事のときはいつものとおり寝床も払っていたのに、いまは蒲団にくるまって低くうなっている。
「お母さん、どうしたの？」
と珠子が枕元に坐ると、すぎは助けを求めるように手をのばして来て、あえぎあえぎ、
「きよみがおってくれると思うたら、気が弱うなってなあ。前はこればびゃあの痛さでは寝込まなんだけどなあ」
と訴える顔は苦痛に歪んでおり、握った手はひどく熱かった。
「お母さん、熱があるのやなあ。痛い？　痛いところはどこ？」
と顔を近づけると、
「痛いのは全体じゃ。どこともいえん。
焼火箸を当てられるようじゃ」
といいつつも、口をきくのも苦しいらしく、そのうち言葉は出さなくなってしまった。

「お父さん、どうしたらええ？　お医者さん呼べる？」
と珠子もどうしていいか判らず、そばの国太郎に聞くと、国太郎もただおろおろするばかり、
「医者がなんで呼べるかいな。
すぎも用心せんのが悪いんじゃ。前から里へ下りて病院で見てもらえ、というてあるのに、山が好きじゃけん、ここにおる、ちゅうて一向に養生せん。
ほんじゃけん、こんなことになる」
という愚痴をきいてもどうにもならず、とりあえず珠子は、
「お母さん、さすってあげよか。どこ？」
と蒲団に手をさし入れると、すぎは目を閉じたまま、珠子の手を自分の太腿のほうへ誘った。
病人を看病した経験は珠子にはないが、目の前の、ほつれた白髪を乱し、あえぎ苦しんでいるすぎを見ればどんなことでもしてあげたくなり、両手で交互に肉の落ちた太腿を一心に撫でてみる。
それを見て国太郎は、
「そうじゃ。前のときは温めたら楽じゃというて湯たんぽを入れたんじゃった」
と思い出し、物置から袋を着せたブリキの湯たんぽを取り出してきた。

すぎのこのたびの痛みはなかなかのもので、そばで見ていても胸が痛くなるほどだが、どんなに焦ってもここは天界、よい知恵などあろうはずもない。

が、珠子はふとひらめき、

「お父さん、ええ考えがある」

珠子の案というのは、五月に入ってこの山にもぼつぼつではあるが登山者があり、げんにここの宿坊にも先達さん以外に、二、三人ずつの組が稀に泊まることがある。そのなかにもし万一、医者が混っていたとすればこれほど有り難いことはない、というもので、それを思いついた珠子が目を輝かせていうのにくらべ、国太郎は浮かず、

「医者が剣山に登山してくるとは考えれん。雲を摑むような話じゃ」

と問題にしないのへ珠子はくい下がり、

「宿坊の申込書を見てちょうだい。念のため」

と迫ると、国太郎はしぶしぶ立ち、閉じてある帳簿をひらいてみたが、それは氏名と住所、年齢が書いてあるだけで、やはり職業はなかった。

それというのも、郵便が不便なため、人伝での申し込みが多く、それだけに人数が急に増えたり取り消しがあったりして必ずしも正確とはいえなかった。

珠子はめげず、

「ようし、お父さん、山小屋の典夫さんに頼んでみる。あそこなら宿泊客はうちよりずっ

と多いし、ひょっとして今日でもおいでるやらしれん」
と立ち上がりかけると、国太郎は許さず、
「いかん、いかん、もう日も暮れる。行かんでもええ」
とひきとめるばかり、それを痛みに耐えつつ聞いていたすぎが、
「医者でのうてもええ。痛みの止まる薬をもっておいでるお人がおったら、分けてもろうて下され。
この痛みをどうぞして治めて欲しい」
と懇願した。
こんなときは、人であれ薬であれ、藁にでもすがる思い、日頃つつましく内気なすぎがそういうのはよっぽどであったろう。
その夜、珠子はほとんど眠らず、すぎの体をさすり続けた。
疲れてうとうとするときもあったが、熱にうかされ、低くうなりながら痛みと闘っているすぎを見るとかわいそうでたまらず、ふるい立たざるを得なかった。
夜もしらじら明け、今日はたった一人で頂上まで、と思うと武者ぶるいに似た興奮に包まれ、いきおい足も早くなる。
頂上ではご来迎を拝みに登山したひとたちが五、六人、朝食を摂っているところで、驚いて珠子を出迎えてくれた典夫も勝代も、連休が終わったので、いまから下山するところ

であった。

話を聞いてくれた昭市は、

「あいにくと今日のお客さんには医者はおいでん。今日ばかりじゃのうて、いままでのお客さんに医者はおいでざったなあ。

しかし測候所へ行けば痛み止めの薬くらいはおいてあるじゃろう。わし、一しょに行ってあげよ」

と昭市は珠子をともない、すぐ目と鼻の先の測候所へと訪ねた。事務所にはさきに会った吉田さんもおり、二人の同僚とともに、

「リュウマチなあ。そら痛むやろなあ。

しかしリュウマチの薬はここに置いとらんけんなあ」

と腕を組んで思案するのへ、昭市が、

「これは風邪薬効くんとちがいますか。熱もあるようやし、とりあえず熱さましの入った風邪薬飲んでもろて、様子見たらどないやろ」

といえば一人が聞いて、

「そうじゃ。そうじゃ。アスピリンじゃ。きよみさん家にアスピリンあるじゃろ？」

「さあ、知らん。薬飲んでるとこ、私見たことないもん」

珠子は正直に答えると、吉田さんは赤い薬箱からアスピリンの箱を出してきて能書きを

読み、
「一回一粒じゃ。頓服じゃけんさいさいは飲まんように」
とちり紙に三粒ほど包んでくれた。
珠子は、事務所でも遊んで行きたかったし、ひろびろした平家の馬場を走りまわりもしたかったが、何よりもすぎの苦しんでいる姿が目の前にちらついて、すぐ帰ることにした。
「なあきよみちゃん。あんたにいうても仕様あるまいが、お母さん一度貞光へ連れて帰って病院で見てもらわんといかんよ。
山はなあ、病気持ったひとは住めんところじゃけん。もし里へ帰るなら手伝うよ。そうお父さんにいうてみてやなあ」
と昭市は親身な言葉をかけてくれ、珠子もそのとおりや、とうなずきながら、帰りみちは全速力、一時間十分で戻りついた。
すぎの痛みは昨日よりは少し治まっているようだが、今日はまた両手の関節が疼くといい、みれば指のつけ根が腫れ上がっている。
とりあえずアスピリンを飲ませ、そっとその腫れた手をさすってやっていると、少しうとうとしているようであった。
珠子はまず国太郎に、昭市の言葉を伝えると、
「病院へ行くように、とすすめるのはわしはもう飽きちょる。

すぎはふだんは従順じゃけんど、いいだしたら利かん頑固なところがあってなあ。困ったもんじゃ」

と腕を組み、考え込むばかり、珠子は勇気を出して、

「ほんでもこのままではお母さんかわいそうじゃ。私、お母さんにすすめてみる」

というと、国太郎は気弱な目のいろをしてうなずき、

「きよみ、あんただけがたよりなんじゃ」

とすがるようにいう。

国太郎では病人の看病はできず、それに雪も消えかかれば、稀にではあるが里から信者も参詣にあらわれ、社務もおろそかにはできなかった。

三日目になると、熱は下がったが、すぎはなお起き上がれなかった。

「お母さん、髪梳かしてあげよか」

というと、すぎは頭を枕につけたままで、

「おおきに、ありがとう。

きよみ、あんたはほんまにやさしい子じゃなあ。まるで私の看病をしてもらうためにうちに来てもろうたみたいで、すまんことじゃなあ。

ほんでもなあ」

と、紡錘形に腫れた手指をかざして眺めながら、

「私もなあ、もうあんまり長いことないよ。ほんまいうと、このリュウマチは実家から持って来た病気なんじゃ。何十年私がとぎにしてきた病いなんじゃ。

神さんのお助けをもらえば、ひょっとしてなおるやらしれんと思うて、十八のとき遠い親戚のお父さんのもとへ嫁入ってきたけんど、年々ひどうなるばっかりじゃなあ。

お父さんは病院へ行けとすすめてくれるが、私は行かん。何故行かんかというと、社家の妻というもんは夫について潔斎し、祭祀の介添えをせんならんのに、私は足が不自由なために若いころから何ひとつそれができなんだ。

神さんはその罰を私に当てたかもしれん、とも思うし、また、病気持ちの私を六十過ぎまで生かしておいて下されたのは特別の御加護かとも思う。

じゃけん、山から下りて病いの手当てをするなんてことは、神さんに対して私にはできん。神主の女房が入院しとると知れたら、世間の笑いもんになるじゃないかなあ。

この病気は日和病みいうてな、これからも雨の降り出しやどんよりの曇りのときに、それも春先から梅雨の終わりごろまでたびたび起こる。

なあ、きよみ。

こんなわけじゃけん、私が痛がっても、もう何もせんでええ。アスピリンはないけんど、他の風邪薬なら柱に吊してある薬袋のなかにある。それでも飲んでしのいだらええけんなあ」

とゆっくりゆっくり休みながら、すぎは珠子にそう告げた。

ふだんから無口なすぎが、こんな打ち明け話をするのははじめてだけに珠子は一語一語しっかりと聞き、その固い決心を聞いたからには是が非でも里の病院へ、とはいえなかった。

珠子は口をつぐみ、手はゆっくりとすぎの背をさすってやりながら、いろいろと頭を過ってゆく思いがある。

愛光園の正岡先生は、珠子が白塚家へ養女にゆくのはまるでお手伝い代わりか老人介護か、といったけれど、事実はまさにそのとおりになりつつある。

しかし、一旦年取った親の娘ともなったからには、そこから逃げ出すような卑怯なふるまいはしたくなく、これが自分が望んだ道ならやれるところまでがんばってみようと思うのであった。

珠子が山に来た昭和三十六年の春と夏は、楽しみにしていたお花畠の満開をゆっくり眺める暇もなく過ごしてしまったように思う。

それというのも、すぎのリュウマチがもはやどん詰まりの様相となり、まるで珠子の手を待ち受けていたかのように、あの日からはもう起き上がれなかった。

五月も末近くなれば、いつもはさすがに囲炉裏も閉じるけれど、寒さが大敵の病気ではずっと燃やし続けねばならず、施設にいるときは薪など触ったこともなかった珠子も、火

を起こしたりつくろったりが上手になっている。

看病とはむずかしいものだが、この場合は医者もおらず病人看護人ともに知識がなく、それにすぎ自身、耐えるだけでよい、というのなら、比較的こちらの気分は楽ではあるものの、しかし目は離せなかった。

腫れた指では茶碗も持てなくなり、一日二度、粥を口へ運んでやることや、背負って便所へ連れてゆくこと、ときどき寝巻きを着替えさせてやることが珠子の役で、そして手が空けば体中をさすってやると、涙をにじませてすぎは喜ぶ。

いちばん大へんなのは洗濯で、雪どけの冷たい筧のちょろちょろ水をたらいに貯め、大きなネルの寝巻きを洗うときはずい分と力が入り、ときどき珠子は、

「もう嫌」

と思うときもある。

水場に洗濯物を放ったらかしたまま、あのワサビ沢まで行ってじっと花をみつめていることもあるし、亀石の近くまで登っていって小鳥の声を聞いていることもある。

しかし隆子のように逃げだしたい、と決して思わないのは、老人二人が珠子だけをいかに頼りにしているかが判るからであった。

熱っぽい病人の、独特の匂いには息も詰まりそうになるが、そういうときはすっと家の前に出て深呼吸してみたり、小石をけっとばしたりもしてみる。

また、宿坊の先達さんの和讃や国太郎の祝詞の声が聞こえたりすると、ふしぎに心も静まり、有り難い気持ちになるのも、すこしずつ神主の娘ということの自覚が固まりつつあるというものだったろうか。

雪もほとんど消えて、山も梅雨に入ったころからすぎは病状深まり、寝返りも不自由になったばかりでなく、ときどき胸が苦しい、息ができぬ、という症状を訴えるようになった。

食欲もほとんど無く、痩せこけた手で空を掻くようにするときは珠子を呼んでいるときで、そういうとき国太郎が耳もと近くで、

「ご祈禱をしたからなあ。すんぐ快うなる。もうちっとの辛抱じゃ」

といってももはや受けつけず、珠子が顔を近づけると、かすかな声で、

「きよみ」

と呼び、

「手、握っていてや」

と、泣くようにいう。

そんなすぎを見ると、これまで重病のひとなど見たこともなかった珠子はかわいそうでたまらなくなり、握られた手をふりほどくこともできなくなって、いつまでもそうしてあげているのであった。

その年はとりわけ暑い夏であった。

冬のあいだは鳥かげさえ見ぬ、というこの山も、ほんのぽつりぽつり、一日に一組か二組、程度の登山者があり、この見ノ越を通って頂上を目ざしてゆく。

珠子はそういう人たちを見て、いくらこのままでよい、とすぎがいっても、このままでは快くならぬ、快くなるためには登山者にも協力してもらって、何とか医者か薬かを得る手立てはないものか、といつも考えるのであった。

八月二十一日、その日はこんなときでなければ使わぬ国太郎の宝物、小さな鉱石ラジオが四国を台風が通過する旨、伝えており、宿坊にも客はないまま、夕方早くから国太郎も珠子とともに囲炉裏のそばにいた。

台風のときはすぎの具合がいちだんと悪く、珠子はつきっきりで背中をさすってやっていたが、さすがに疲れ、ほんの少しとろとろとしていたらしい。

突然、国太郎の、

「すぎ、しっかりせえ、こら、すぎ」

と呼ぶ大声にハッとして目を開けると、すぎは全身けいれんし、すでに白目になっている。珠子もたまげるほどに驚き、

「お母さん、お母さあん」

と耳もとに口をつけて叫んだが、けいれんはますますひどくなるばかり、

「水じゃ。気つけの水飲ましてみい」
と国太郎はすぎを抱きかかえたまま動転していい、珠子も台所に走って、柄杓のままこぼしながら水をもってきた。
が、すぎはそれを飲みくだす力はもうなく、水はあごから首、衿もとを伝ってたらたらと胸に落ちてゆくばかり、珠子はなお、
「お母さん、水のんで、ほら、水、水」
と柄杓の水を傾けようとする。
そのうち、すぎのけいれんも小きざみになったかと思うとようやく止み、そしてたらりと手足を垂れ、あごを上向けてとうとうこと切れたらしかった。
「もういかん。もういかん」
といいつつも国太郎はすぎをゆすぶりつづけ、珠子は柄杓の水をありったけ飲まそうと名を呼びつづけたが、すぎはとうとう戻らなかった。
国太郎も珠子もただ呆然とするばかり、とうとう死者と変わってしまったすぎの顔をみつめるだけであった。
痛みがひどいとはわかっていても、まさか死ぬなどと国太郎は思わず、まして珠子もどうしてそこまで考え得ただろうか。
死はまことに突然、というかたちでこの家族をおそい、二人は全くなすすべもなく、ど

れだけぼんやりとしていたことだったろう。
死者はもはや痛みは訴えず静かな姿となり、外は全山ゆるがす激しい風雨で、隙間風にもう芯の細くなったらんぷがふらふらと揺れている。
二人ともふしぎに目は乾いて涙は出ず、何やら夢のなかをさまよっているような感じで、すぎを中にしてただ風雨の荒れる音を聞いているだけであった。
剣山見ノ越の地に暮らす人間はたったの親子三人、肩寄せ合って暮らしてきたのに、そのうちの一人が唐突にも欠けてしまったこの現実を、残った二人が容易に受け入れることができないのも当然であったろう。
雨戸の鳴る音のあいまには、
「すぎは先にいってしもうたか」
と国太郎は血を吐くような声音で呟くかと思えば、急に元気になって、
「薬はわしが飲ます。きよみ、水もってきいや」
などといい、珠子はその様子を見て、さすがに自分がしっかりせねばと冷静さを取り戻し、そうなると何ともいえず心細さが増してくる。
「お父さん、気をたしかに持って」
と今度は父親を励まし、
「これからどうしたらええ？

死んだのじゃからお葬式もせないかんじゃろ？」

と問いかけてみたが、国太郎はなおうつつで、

「わからん。わしは知らん。

わしの親たちも終わりは里へ下りて、そこで死んだけん。わしは判らん」

を繰り返し、容易に頭の混乱はおさまらないようであった。

困った、と珠子はずしんと胸が重くなり、そう思うとはじめて鼻の奥からつんと熱いものが突きあげてきて、すぎの蒲団におおいかぶさるようにしておいおいと声をあげて泣いた。

それを見ると国太郎も、俄に悲しみが押し寄せてきたのか、

「きよみ、泣くな」

といいつつも、同じようにすぎの蒲団の上に打ち伏して涙を流している。

二人は途方に暮れて、どれだけの時間、そうやって泣いていただろうか。

そのうち、ジジ、と音がしてらんぷの灯りが消え、珠子は手さぐりでマッチをさがし、座敷を這って行って油を足してから、また灯りを点けた。

国太郎はそれを見上げて、

「すぎもアホやなあ。長生きしていれば来年あたりはこの山にも電気が点くそうじゃのに」

と嘆きつつ、またも涙を拭う。

頂上まで電気を引く運動はずい分前からされており、控えめなすぎもそれには熱心で、元気なころにはゆっくりゆっくり西祖谷山村まで下りていって陳情したこともあった。国太郎はありし日のすぎが、

「『電気がついたらお父さん、いちばんに洗濯機を買うてもらえんかなあ。あれは借金してでも買うもんじゃと、皆がいいよる。私もそれいっぺんぐらい使うて楽してみたい』とこないにいいよったのに」

とまたしても繰りごとを呟くばかりであった。

頼られていると思えば十六歳の女の子ではあっても奮い立たざるを得なくなり、夜が白みはじめると、珠子は国太郎にいった。

「お葬式は人手がいるけん、山小屋や測候所のおじさんたちに手伝うてもらいましょう。上までの連絡は、いまの時期、待っていたら登山の人がここを通るかもしれん。その人に頼んだらええ」

「あほいうな、きよみ。しけの朝に誰が山へ登る。ふだんでも一日一人か二人じゃのに」

「そしたら私が行ってくる」

「それもいかん。外に出てみい。昨夜のしけで木は折れ、水は流れて道など無うなっちょる。わしでも骨が折れるのに」

「そんならどうするの、お父さん。
お母さんをどこへ埋めるの？　この裏に穴掘って埋めるの？」
「そんなことはできん」
「どうして？　どうして？　お父さん」
「それはな、死びとを埋葬するのは墓地として許可された場所に限っちょる。それにこの土地は白塚家の持ち物ではない。剣山は一部の国有林の他は個人の地主三人のものじゃ。勝手に墓地にはできんのでなあ」
「まあ、そうじゃったの」
と珠子ははじめてそういうことを聞き、驚きとともに、ではすぎの埋葬はいったいどうすればいいのかとまた考え込んでしまう。
国太郎は、
「どうぞして里へおろし、貞光の我が家の先祖代々の墓地へ埋めるしかない」
というが、では亡骸をどうやっておろせばいいのかについては、よい知恵はなかった。ともかく手伝いの人を頼まねば、と珠子は夜明けと同時に雨戸を開けて庭に出、下の道から目を離さないようにした。
国太郎のいうとおり、しけの去った山はまことに無残なもので、いつもの登り道は水路と化し、濁った水が滝のように流れ落ちている。大小の枝は折れて散乱し、夫婦池への下

り道も塞がれてしまっているようであった。

こんなとき、「おーい」と呼べば答えてくれる隣があったらどんなにいいか、と、じっとすぎの枕もとに坐ったまま動こうともせぬ国太郎をもちらちらと眺めながら、珠子は思案する。

そうじゃ、こんなとき神さまにお祈りしよう、とふと思いついたのは、これが神職の家の子としての自覚でもあったのだろうか。

上からどうどうと濁流の流れ落ちている石段は避け、下の道を視線に入れつつわき道を一足一足登っているとき、いつか靄のなかから典夫と勝代があらわれたときのように、登山道のわきから黒っぽいヤッケの人が近づいてくるのが見えた。

足もとは濁流ゆえ、木の枝から枝へと伝いながらゆっくりと近づいてくるのへ、珠子は、

「おーい」

とありったけの声を挙げて呼びかける。

珠子の望む登りのコースではないが、この際、人かげなら上がり下り何でもよく、足もとのつるつるするのを用心しながら下りてゆくと、向こうも手を挙げつつ近づいてくる。

「おーい、神主さん家は被害はどうじゃね？」

と大声を挙げる人を見れば、それは測候所の山本さんであった。

家の前の広場へ両方相寄り、

「えらかったなあ、昨夜は」
と互いに見舞ったあと、珠子は黙ったまま家のなかを指さし、案内した。
座敷に上がって事情を知らされた山本さんはのけぞるほどに驚き、
「これはまあ、これはまあ、何と何と」
を繰り返すばかり、ややあって国太郎が、
「貞光の家までおろさんならんが、どうすりゃええんだろかのう」
とすがりつくようにして頼むと、山本さんもハテ、と腕を組んで考え込む。
山での死者は大てい遭難の場合が多く、警察などの力を借りて遺体を搬送するが、登山者の少ない剣山ではそういう例もこれまでほとんどないため、対処についてのよい方法は急に浮かんでこないのであった。
結局、これしかないという案に行きついたのは、ちょうど勤務交替のため山を下りる山本さんが貞光に行き、この地でボッカさん二人と棺を用意し、上がって来てもらうという寸法で、死びとを背負うて下りてくれるじゃろうか、と心配する国太郎に、
「それは賃を倍にはずむといえば来手はありますじゃろ。しけのあとで道も悪いが、わし頼んでみますわ」
山人は相身たがいじゃもん、と山本さんは引き受けてくれた。
ボッカさんともおいこさんとも呼ぶ強力（ごうりき）さんは、身体強健な若い男が請け負い、一度に

五貫俵の木炭を五俵も背負って登ってくるひともあるという。五俵といえば百キロで、それを一日二往復するひともあり、手間賃は一貫目か一キロいくらで支払うことになっていて、一日一万円とか二万円を稼ぐひともあるそうであった。

いまの場合、山本さんにめぐり会えたのは地獄で仏、というほどのありがたさ、国太郎も珠子も、ねんごろに礼をのべて山本さんの下山を見送った。

そしてボッカさん二人が上がってきたのは午後三時、すこし陽の傾きかけたころであった。

痩せこけたすぎの体重は四十キロ、ならボッカさんは一人でよいと考えていたが、二人とは賃も倍、と国太郎は一瞬たじろいだらしい。

が、死者を運ぶのは誰しも嫌がり、寝棺を立てて背負うことは無理なので、二人でかいてゆきたいといい、しかも、午後四時出発で夜道を歩くという。

ときは八月、亡骸（なきがら）は一刻も早く埋葬する必要があり、ボッカさんの、

「大丈夫、わしらは山小屋の佐川さん家へは米味噌（みそ）野菜、一日二、三回も運ぶことがある。夜道でも決して道をまちがえることはない」

との言葉を信じて、棺を担いだ二人を先に立て、国太郎と珠子は続いた。

なるほど熟練者とはすごいもの、二人とも大またでたったっと飛ぶように下り、後につづく二人はしばしば、ちょっと待ってや、と頼まねばならなかった。

川又のバス終点へは六時半着、このあとボッカさんの知り合いに頼んで村にたった一台のオート三輪を借りるのに手間どり、ようやく貞光町のはずれ、太田に着いたのは十時近かった。

もとは藍を作っていたという白塚家にはいま、またいとこのおかる婆さんが一人で住んでおり、突然運び込まれた棺を見て、口もきけぬほどに驚いたのも無理はなかった。

さらに、かねて話に聞いていた養女というかわいい女の子を連れて来たのもびっくりだったが、珠子のほうでもこの家は初めて、おかる婆さんともむろん初対面であった。

家は、代々神職の白塚家を崇めて、この辺りのひとたちが太田の宮、と呼ぶとおり立派な構えで、国太郎が剣山に登って以来はおかる婆さんひとり、使わない部屋は雨戸をおろし、邸内には畑を作って住んでいるのであった。

すぎの死以来、すっかり力萎えていた国太郎も、いまから自分の手で神葬祭を行わねばならぬ羽目ともなると、さすがにしゃっきりとし、近所の衆の手を借りて、さっそく通夜祭からの段取りに取りかかる。

すぎの遺体は北首仰臥に横たえられ、枕もとに守刀を置いて枕直しの儀とされたが、その前に国太郎は珠子を呼んで、

「きよみよ。くどいようじゃがお前はこの白塚家の跡取りじゃけんな。今日の葬祭をようく見ておぼえておかんといかんよ。次はわしの番じゃきに、そのときはお前が喪主になる。

うろたえんようにしっかりと見ておくんじゃ」

といい聞かしたが、それはすぎのなきがらを前にしての訓えだけに珠子はひどくおごそかな気持ちで聞いた。

祭員となる神職は、貞光町の天満宮から応援に来てくれ、喪主の国太郎は黒つるばみいろの喪服の上に白い素衣をまとい、珠子はこの家に置いてあったすぎの黒い喪服を、おかる婆さんや親戚のひとたちが手伝って着せてくれた。

突然の葬祭ではあったが、皆の協力によって納棺の儀、通夜祭、遷霊祭、葬場祭、火葬祭、埋葬祭、帰家祭と、とどこおりなく行うことが出来、すぎの霊は家のうちの仮霊舎に移され、ここで毎十日祭を五十日目の忌明けまで行うことになる。

日ごろ、うちはもう身寄りは死に絶えた、おかる婆さんより他には誰もおらん、と国太郎はいっているのに、葬式ともなればどこから集まってくるのか人が寄って来、その人たちの手によって万事順序よく事がすすめられ、そしてどうなることかと心配したすぎの野辺送りもこんなに丁重に終わったことは珠子にとって感動的であった。

いくら身内はおらぬといっても、人間は一人ではない、としみじみ感じ、それは自分の身におきかえて思われてくる。国太郎すぎの娘となってまだ五ケ月ではあるが、葬式に来たひとたちが口々に、

「国太郎さんもええ娘さんができてよかった、よかった」

「山で一人残っても心配ないなあ。娘さんがおいでじゃけん」

などというのを聞くと、こわごわ国太郎について来たあの怯えもうすれ、胸を撫でおろす思いになる。

おかる婆さんは耳が遠く、話をするには耳へ口をつけて怒鳴らなければならないので、しぜん会話は遠くなるが、婆さんは一人ではよくしゃべり、

「きよみちゃん、というたねえ。あんたが最期を見てくれて、おすぎさんもうれしかったじゃろ。

国太郎もよろしゅうたのみますなあ」

といく度も珠子の手を握ってたのむのであった。

このたびの人の死を看取ったこと、その葬祭まできっちりと付き添ってみつめたこと、これらは珠子にとっては、生まれてはじめての大きな体験だったといえようか。

十日祭が終わって一まず二人が山へ帰る朝、国太郎はなかなか寝床から出ようとしなかった。

珠子が蚊帳の外から呼ぶと、ようやく起き上がったが、十日余り、無我夢中で気を張っていただけに疲労甚だしく、その姿はがっくりと老いてまことにいたいたしかった。

「お父さん、大丈夫？　もう二、三日、こちらで泊めてもらう？」

と聞くと、国太郎は顔をぶるぶると振って、

「いかん、いかん、神社のお勤めがある。ここで油断しよるどころじゃない」

と口だけは元気なところを見せる。

珠子は国太郎に代わって郵便局と買い物をすることにし、財布を預かって家を出た。

まず留め置きの郵便物を受け取ると、かすかな予感のあったとおり、そこには隆子からのものがあった。

郵便局で三つ折りのメールを買って書いたものらしく、少し乱れた字で、

「タマ子、前に出した私の手紙は着いたの？　私やっぱりいまの工場をやめることにしました。最近、母の居場所がわかったので、手紙を出したところ、来てもいい、というのでそちらへ行くことにします。一しょにいるときは私をいじめてばかりいた母なので、あまり好きではありませんが、そこへ行けば、まあ何とかなると思うのです。

ともかく、鬼ばばあの監督とガチャンガチャンから逃げ出したいの。

母の家へ落ち着いたらまた手紙出すからね。タマ子も山から下りてくればいいのに。そしたら二人で働いて、うどん屋でも何でもたのしくやれるのにね。ではね」

日付は七月のはじめとあり、とすればもういまごろは工場宛てに手紙を出したところでいるはずはない、と思えた。

隆子がほんとのお母さんの許へ帰る、というこの便りは、一瞬ではあったが、珠子の胸にさざ波を立てたようであった。

いじめられてばかりの好きでない母、とはいっても、隆子の母なら若くて元気な人にちがいない、という感じがすっと過り、それは病み窶れたすぎの最期を見た珠子にはあまりにちがいすぎる境遇であった。

しかしそのさざ波はじき静まり、珠子は局を出てきびきびと、なるべく軽い雑貨品や食料などを買ったあと、ふっと通りすぎてゆく下り列車を見た。

あれに乗って阿波加茂で下りれば、木暮園長をはじめ、皆に会える、となつかしさに胸の熱くなるような感じもあったが、これもまた、すぐ消え失せてしまった。

いまは、すぎを失っていたく力を落としている国太郎を励まし、山へ帰らねばならぬ、山へ帰って神社の勤めに就かねばならぬ、という気持ちが先に立ち、自分の胸の小さなこだわりに関わりあってはいられなかった。

前回この町に来たとき、国太郎は珠子の手を引いて歩いたが、これからは自分がお父さんの手を引く番だと、珠子は思っている。

すぎが欠け、国太郎とたった二人の生活も定まり、すでに二年、山には事もなくおだやかな日が過ぎてゆく。

山の暮らしがほとほと嫌だと思ったことは、さいわいにも珠子は一度もなく、それというのも、国太郎が日一日と老け込んでゆくことへのあわれみもあったらしい。家のうちは

老父とふたり、ひんぱんに顔を合わせる友達もおらず、世間のニュースも聞こえてくるすべはなし、といういまの暮らしを、珠子は十分気に入っていると自分では思っている。何か欲しいものをあげよう、と誰かにいわれても、格別即座に頭に浮かんでくるものは何もなく、強いていうなら、山笑う季節、できるだけ花と遊ぶ春の期間の長かれと祈る、それだけなのであった。

すぎが亡くなった翌々年、山にも待望の電気が引かれ、測候所ではささやかな祝宴をひらいたよし、珠子はその写真を見せてもらったし、山小屋でもいろいろな電気製品を買い入れたと、高校を出た典夫の口から聞いた。

自動車道も少しずつ整備され、池田（いけだ）からの登山口では、いままで名頃（なごろ）までしかひらけていなかった車道も、四十年の夏ごろまでには見ノ越まで通じるという。

将来は見ノ越から頂上までケーブルを設置するという計画もあるそうで、山もすこしずつ人が増えそうであった。

が、白塚家の暮らしは電燈以外は以前どおり、変わったことといえば、年々氏子が減ってゆくことで、先代のいたころの最盛期には夏の大祭にはおみこしも出たというのに、いまは氏子の家も代替わりを期に、ここまで上がってくる人は少なかった。

珠子は国太郎を助けてこの家を取りしきり、山暮らし四年もたてば、山の地理はすっかりおぼえていまでは国太郎以上にもなり、また巫女の仕事も積極的にこなすようになって

いる。

毎朝、国太郎が勤める神前の太鼓の音で目ざめ、朝食まえには社殿と境内の清掃も、このごろでは自分なりに工夫して美しい箒目を立てる。神饌、という神へのお供えものも日日怠らず、人が参詣に来れば社務所に入って応接もするし、お宮詣りや病気平癒や入学などの特別祈願には、国太郎の装束をととのえ、祈禱の介添えもする。

すぎとはわずかな期間の同居生活ではあったが、その間に教えられたさまざまのしきたりは十分生かし、いまでは国太郎の狩衣一式と自分の緋の袴などはわけなくたためるし、繕いまでできるようになっている。

何よりも神職の家の子、という自覚はひとりでに体に浸みとおってゆくようで、浄身、という名もまんざら嫌とは思わなかった。

珠子は年とともに美しくなり、十七、八歳のころから匂うように清らかな雰囲気を身につけて、測候所や山小屋では、

「見ノ越の天女さん」

とも呼んで、大切にしてもらっている。

紅白粉はもちろんつけず、すぎの形見の鏡台にもクリームくらいしかなかったところから、国太郎から、

「里へ下りたら、好きなもん買いや。

たまには化粧もしてみいや」

と小づかいも渡されているけれど、神に仕える身なら脂粉の香りを漂わせて参殿することはできない、と思っている。

国太郎も六十七歳という年になり、これといった病気はないものの、いたく目が衰え、以前にも増して何事につけきよみ、きよみと頼るようになっているのであった。

剣神社の神職も、国太郎が勤まらなくなればどうなるか、という問題も、年とともに大きくなりつつある。

第五章　天に咲く花

あれはたしか昭和三十九年のこと、典夫が五月の連休に小屋を開けたとき、見ノ越まで下りてきて、

「おれ、もうずっと山におっておやじを手伝うことにしました。ちょっとずつ登山者も増えてきよるし、それに、やっぱりおれも山より他へは行けんということが判ったから」

という挨拶があった。

もっとも、客がなければ開けても意味のない山小屋は、連休のあとまた一旦閉めてつゆどきをやりすごし、本格的には七月ごろから十月いっぱいまでの営業となる。

そのとき典夫は、

「おっちゃんもきよみちゃんも、夏になったらいっぺん泊まりに来んかえ？

うちは今度、テレビを買うたんじゃ。お客さんへのサービスじゃけんど、ほんまはうちのもんが喜んじょる。

おもしろいぜえ。見せてあげたいけん」

と国太郎と珠子を誘ってくれた。

二人とも里へ下りた際にテレビはのぞいてもおり、このごろはずい分普及もしてはいるが、山小屋でそれを購入したというのはやはりニュースにちがいなかった。

約束どおり、その年の八月の半ば典夫は二人を誘いに来てくれたが、国太郎はあまり行きたがらず、押し問答の末、珠子一人行くことになった。

若い二人は足どりも軽く、それというのも五月から咲きはじめた山の花々は六月、七月、八月が真っ盛り、九月からは秋の花となって名残りに咲き、十月からは見なくなるため、この間は珠子も花をたずねてずい分歩いているのであった。

典夫は珠子が花の好きなことを知っていて話題をそちらへ向け、

「シコクハタザオ、なんておもしろいなあ。ほんまにこれに紙の旗でも立ててやろか、と思うぐらい、まっすぐ立って旗竿みたいやもんなあ。

シコクフウロもかわいらしい。こないだシコクチャルメルソウ、ちゅうのをおやじに教えてもろうたけど、これでも花か、ちゅうようなもんやった」

「あら、あんなんがええんちがうの？　私は目立たず咲いているのが好きじゃ。

他にもコメツツジ、ニシキウツギ、ツマトリソウ、トゲアザミ、タカネオトギリ、百種類くらいノートしてどこに何が咲いてるんか、私はもう全部このお山さんの花、判ってしもうた」

「きよみちゃん、えらいこと自信あるんじゃなあ。
そんならこの山にだけしか咲かんキレンゲショウマ見たことあるか？」
「キレンゲショウマ？」
とその名を聞いて、珠子の記憶はゆっくりよみがえり、はじめて頂上へ登ったとき、国太郎からその名を聞いたことを思い出した。
「それどこに咲いてる？　教えて」
典夫は腕時計をのぞいて、
「今夜はうちで泊まるんやったなあ。そしたら寄り道しておそうなってもかんまんやろ」
といい、
「この先、白骨林を過ぎたあたりに分かれ道がある。そこを古剣谷のほうへ向かって行くと先達さんが滝に打たれて行をする行場があるんじゃ。
キレンゲショウマはその行場のあたりにしか咲かん。それもちょうどいまごろだけじゃ。行ってみるか」
と典夫は先に立った。
「きれいな花じゃろか」
とうしろから聞くと、
「口ではいえん。一度見たら忘れれん。きよみちゃんみたいじゃ」

と典夫は前向いて怒鳴り、珠子はそれを聞いて、
「お追従がうまいなあ、典夫さんは」
とこれも大声でいって笑った。
「追従なもんか。ほんまぜえ。おれはきよみちゃんがおるけん、学校卒業しても山へ戻って来たんじゃ」
典夫はそれをさらに高い声でいい、小さく妬する自分の声に耳を澄ますように立ち止まった。
珠子も立ち止まり、
「冗談やめて、早う行ってなあ」
と催促すると、典夫は前向いてしばらく黙っていたが、考えなおしたのかまた歩き出した。
今度は二人とも何もいわず、大またで坂を登り下りする息づかいが聞こえるだけの静寂が続いたあと、道は木々の掩いかぶさった湿地帯に入り、やがて遠くにあざやかな黄の点々が目に入ってきた。
「あっ、あれじゃない？」
「そうじゃ。あれがキレンゲショウマじゃ」
と典夫がそういったとき、珠子は典夫のわきをすりぬけて走り出していた。

木々の茂みの下、これはみごとな花の群落、見渡すかぎり黄の点々は拡がり、それは小暗い木洩れ陽を浴びて、まるで一つ一つの花が月光のように澄み、清らかに輝いてみえた。

茎の高さは一メートルほど、葉はたっぷりと大きく幅は二十センチはあろうかと思えるが、その立派な葉を従えるように、さわやかな月光の花は凛、として気高い。

そっと指を添えて花を仰向かせてみると、全開はしないのかどれもらっぱ状の姿で、厚ぼったい花びらはねじれてらせん形に朱いろの芯を包んでいる。

行場の近くの花は滝の音にかすかに打ちふるえており、そのいじらしさに珠子は思わず両てのひらで花を包み、そっと唇を近づけた。

山行きには片ときも離さぬ植物図鑑を取り出し、どうぞこの珍しい花の項目がありますように、と念じながら目次をひらくと、そこにはキレンゲショウマ・パルマータ、とあり、説明は林下に群生、パルマータはてのひらの意、とだけしかない。

花は、お月さんが地におりてきて宿っているような淡く輝いた黄、葉は大人のてのひらのようなパルマータ、それにしても何と美しい、と珠子はすっかり魅せられ、我を忘れてその場に立ち尽くした。

剣山には数知れぬほど花は咲き、どんな小さなものといえどもそれぞれに可憐で美しいが、このキレンゲショウマほど、辺りを払って誇り高く、大きな群落を持つ迫力はない、

と珠子は思った。ひょっとすると、私はこの花に会うため、お山さんに来たのではないか、という気がし、そう思えばこの花と自分とは深い縁で結ばれているような、ふしぎな感じに打たれてくる。

ややあって、典夫から、

「もうええじゃろう。行こか」

と声をかけられ、はっと気づいて引き返したが、気分はまだ夢見ごこちであった。

山小屋に着いたとき、典夫は父親にきよみの様子を告げて、

「おれ、病気になったんやないかと心配したぜ。ぼうーっとして動かんもんなあ」

といえば昭市も、

「いや無理もないなあ。広い世界でこの剣山の、しかもあっこだけにしか咲かん花じゃけんなあ。何やら因縁めいてふしぎに思うもんなあ」

と、この花の魅力については同意する。

当然その夜は、宿泊客とともに山野草の話となり、いまはこの辺りいちめん咲き乱れているリンドウ、レイジンソウ、マイヅルソウ、カニコウモリ、ホツツジ、キリンソウ等々、五、六十種の花の名を数え合ってたのしんだ。

昭市の話では、キレンゲショウマは漢字で書けば黄蓮華升麻（きれんげしょうま）、だそうで、他にうす紫の蓮華升麻をよそで見たことがあるという。

「何やこう、神秘的ちゅうんか、ふしぎな花やなあ。このお山の女王さんじゃ。大事にして長うにここにおって頂かないかん」

と昭市がいうのを聞いて客はみな笑い、

「そういう奥まったところだったら、人が入って傷つけたり盗んだりすることはないし、永久に咲きつづけるのではありませんか」

というと、昭市は真顔になって打ち消し、

「それがちがうんじゃ。しぜんに生えた植物にも寿命というもんがちゃんとあるらしい。あれはうちが小屋を開いた年やったんかいなあ。翌年かもしれんが、このお山全体、地面を這うてる熊笹ありますじゃろ。あれが全部枯れてしもうて、いちめん黒い地肌が見えるようになりましたんや。

それがな、こちらの阿讃山系だけじゃのうて、四国全体の山の笹が枯れてしもうたというけん、ふしぎですじゃろう。

何でも笹は六十年から百年にいっぺん生え替わるし、ちょうどその節目やったためじゃという人もあるけど、また一説にはその年、桜島が噴火して食べるものが無うなった渡り鳥がこちらの笹の実を食べに来て、食べ尽くしたというお人もおる。

笹の実は笹米というて、大麦の粒の大きさでな、ここらへんの鳥は実は食べても種は残してゆくもんじゃから新芽は出るが、九州からの渡り鳥ちゅうんはよほど腹空っていたと

見えて、根こそぎ食べてしもうた。
何しろ空が真っ黒になるくらいの数ですけんね。この説もほんまかもしれんなあ」
という。
山の夜は早く、柱時計が八時を指すともう皆、寝支度にかかるが、典夫は珠子を、
「お星さん見てみんか、ちょっとだけ」
と誘い、外は寒いから、と二人ともヤッケを着て平家の馬場に出た。
日中の景観もすばらしいが、夜のとばりにすっぽりと包まれた山なみの姿は、もはや眠りに入っており、たたみ重なるその黒い静寂もまたちがった感動がある。
ちょうど星月夜で、小さな岩かげにござを拡げて二人は腰をおろし、典夫は指さして、
「わかる？　あれがカシオペア。北東じゃ。ひい、ふう、みい、よう、五つの星がWのかたちになっとるじゃろ。エチオピアの王妃の姿じゃと。そのあたりは皆、天の川。射手座もある。ほらあれじゃ。
おれが自分で名前つけたのもようけ、ある。教えよか」
と熱心に星を語るのを聞いても珠子はよく判らず、正直に、
「私、こんなに広い夜の空見るのははじめてじゃけん。よう判らん。七夕さんのお星さんを先生に教えてもろうたことあるけど、それぐらいやから」
というと、典夫はふっと黙り込んだ。

悪いことというてしもうた、じゃけんど、この星空のきれいさは十分判っているつもりやから、そういうてみようと思ったが、何やら二人のあいだにある沈黙が重くて、口がきけなかった。

しばらくして典夫は、すねを両手で抱いたままの姿勢で、

「なあ、きよみちゃん、こんなこと聞いてええんかどうか、迷ってたけど、いっぺん確かめたいと思うてたこと、あるんじゃ。

あの剣神社のおっちゃん、死んだらきよみちゃんどうするん？」

と聞いた。

「え？」

と珠子は胸がどきん、とし、ちょっとの間、考えてからこれも正直に、

「そんなこと、私、考えたこともないよ。

お父さん元気じゃけん」

「そんでも、もう六十を大分過ぎておられるじゃろう。いつ、どんなことがあるか判らん年じゃないじゃろか。

そんでおっちゃんは、きよみちゃんを宮司にして家継がせよと思うとるんじゃろか」

「知らん、そんなこと。

いまは女も宮司さんになれるよ、とはお父さんいいよったけんど、私は中学しか出てな

いし、いまから高校へ上がって、そのあとまた宮司さんの学校へ行くというのはなかなか大へんやしなあ。

現実問題として、ここにおったら学校へは行けんもんなあ。通信教育でもスクーリングへ行く期間があるし、お父さん一人にはできん。

もしお父さん死んだら、資格のある宮司さんがやって来て、引き継いでくれるんちがう？」

典夫は珠子が淡々と、将来を語るのを聞いていて、

「なあ、きよみちゃん」

と少し口ごもり、

「もしな、もしやぜ、もしおっちゃん死んで行くとこのうなったら、上に上がってこんか」

といった。

「上に上がるって、この頂上で暮らせっていうこと？」

「そうじゃ。一しょにうちの山小屋やらんか、ちゅうてるんじゃ。ええ考えやないかなあ」

「それ、どういうこと？」

「うん、まあ」

と典夫はそこまでいって口をつぐみ、また仰むいて星を眺めている。

一人になったら山小屋へ？　ここで登山者の世話をする？　山小屋には家族四人もいるっていうのに、と考えていると、珠子ははっとして、典夫の言葉の意味は結婚を指しているにちがいない、と思った。

結婚？　と考えると、珠子はとたんに頭をガンとなぐられたような気がし、そのショックで勢いよく立ち上がった。

両親を知らず、他人ばかりの中で育った身には、自ら望んでも得られぬ幸福というものは世のなかにたくさんあり、そういうものに一切目をそむけて、あるがままの現実を受け入れて来た自分を珠子は思う。

いまは、片親にはなってしまったものの、それが思いもかけず親のいる家庭生活という暮らしを手に入れることができた現在、もう少しこの親子関係をあたためていたいし、ここでその上新しい結婚という運命に立ち向かうのは何やら気おくれし、自分にはまだまだ早すぎるように思えるのであった。

珠子は冷えてくる夜気にヤッケの前をかきあわせながら、典夫のまわりをゆっくり歩き、

「典夫さん、おおきに、ありがとう。

お父さんにもしものことがあったときは助けてちょうだいね。お願いします」

と、頭を下げた。

その夜、山小屋の部屋でみんなと雑魚寝しながら、珠子の頭は冴え渡り、いままで考えもしなかった問題の迷路をさまよっているのであった。

典夫は二十歳、珠子は十九歳、すぐに結婚などとは考えられもしないし、それに典夫のいう「行くとこのうなったらうちへ来んか」という誘われかたにもこだわりがある。たしかに国太郎は年々弱る一方で、この先、長く生きられないかもしれないが、「行くとこない」というあてどない心細さは、愛光園限りで終わったものと珠子は思っていただけに、いまになってまたそんなあわれみをかけられるのも、快い気分ではなかった。

白塚家で拾ってもらった子が、また佐川家のお情けにすがるのはもうごめんだな、という感じはありありと存在し、その果て、もうこんなことは考えないでいようと珠子は思った。

それよりもあの世にも美しい花、キレンゲショウマを目に浮かべるのがずっとたのしい。頂上の平家の馬場で、星空を仰ぎながら典夫が打ち明けた言葉を、珠子は決して忘れはしなかったが、しかし典夫はあれから二度とそれに似た話はしなかった。

話はしなくとも、あの誘いがふとした冗談ではなかったという思いはあり、冬、山小屋を閉じてしまうと、珠子はやはりさびしかった。

十月末、頂上では初雪も見て、佐川一家は下山する。里の家は木屋平にあり、見ノ越を通らなくても帰れるが、毎年わざわざ国太郎の家にまわって、

「来年の春まで、よろしゅうに」
と無人の山小屋を頼んでゆく。
一家が視界から消えてしまったあとは山の寂寥いよいよ増し、それも、暮れ正月の雪景色ともなればさらに寂として、鳥かげ一羽、見なくなってしまう。
夏は涼しくていいけれど、冬はいやだな、と珠子はいつも思い、冬ごもりのこのごろの楽しみは、電気が来てから国太郎が奮発してくれたラジオの音楽を聞くことであった。こんにちは赤ちゃんや、お座敷小唄や、可愛いベイビーや、王将など、古いの新しいの何でも聞き、聞くとすぐおぼえて、家事をしながら鼻唄でうたっているときもある。
三月十六日のその日も、家から社殿までの雪かきをし、囲炉裏の火をつくろって夕食の支度をしていたとき、突如耳に飛び込んで来たのは、
「剣山測候所職員の遭難」
のニュースであった。
いそいでラジオのボリュームをあげたが、前半の説明は聞き洩らし、名前は吉田勝さん四十一歳、ということだけは判る。国太郎は社殿の清掃をしており、珠子は飛び出していってこのことを告げた。
「ええっ」
と国太郎も絶句し、

「遭難とは何じゃ？　崖から落ちたか道に迷うたか、それとも雪崩に遭うたか」

と推量してみるものの、詳細はラジオを頼るしかない。

ようやく七時のローカルニュースで伝えられたが、それは、

「本日午後二時ごろ、剣山測候所職員吉田勝さん（四十一）が同僚とともに通信線保安のため、一ノ森の地区で作業中、突然おきた表層雪崩に巻き込まれ、行方不明となっています。

なお、同僚の山本さんは無事の模様」

とだけであった。

「雪崩なあ」

と国太郎は腕を組み、

「このお山さんは、うちの神さんがしっかりとよう守って下さるけん、いままで遭難事故ちゅうんはまず無かった。

雪崩は昔、望遠鏡で見たことあるけど、突然、というよりさきに割れ目が入って、そのあと起きるもんじゃけん、逃げよ思うたら逃げられたんとちがうかなあ」

こんなときどうすればいいか、と父娘していくら考えても何の方法も思いつかず、かといって吉田さんとは知らない間柄でもない故に、二人とも落ちつかなかった。

「ひょっとしてわきみちへ逃げておったかも知れんよ、お父さん。いまごろは元気に戻っ

て来てるかも」

「そうならええが。そんなことはまず考えれん」

父娘はそんな会話をいく度交わしたか、そして翌朝、坂の下から積雪を漕いで上がってくる一団を見た。

「お父さん、お人じゃ。ようけ上がっておいでよる」

「捜索隊のお方じゃろなあ」

と二人は一団を待ち受け、聞いてみると、このひとたちは測候所穴吹基地の職員と、警察、消防団の合同隊だという。

「ほんなら吉田さんは絶望じゃろか」

と国太郎が取りすがってたずねたところ、捜索隊の一人は首を振って、

「あっこ辺りは三メートルの雪じゃけんのう」

とだけ、言葉少なに皆沈痛な面持ちで登って行った。

そのあと、珠子はずっとラジオをつけっ放しにしてニュースを聞いていたが、遭難翌日の十七日は大規模な捜索にもかかわらず、吉田さんは見つからなかった。

翌日も手がかりなく、翌々日も判らないとなると、捜索隊も増員したり、交替したりで見ノ越は俄に人の往来を見るようになった。

ラジオのニュースも、次第に短くなり、そのうち全く触れない日もあったが、珠子は国

太郎とともに案じつづけた。

十日目だったろうか、ふいに表の戸が開いて、

「白塚さあん」

の声があり、出ると雪のなかを上がってきた山小屋の佐川昭市が立っている。

「いやわしは吉田さんとは心やすい間柄じゃったし、山のことはよう知っとるけん、最初から飛び出して行きたかったんじゃがなあ。

それもさし出がましいかと思うとったら、山の経験者は協力して欲しいといわれて上がってきたんじゃ」

と珠子の淹れた茶を一杯すすり、

「それにしても、吉田さんいまごろどこで寝とるじゃろかなあ。

あのひとわしよりもこのお山さんには詳しいし、スキーもうまくてなあ。遭難じゃとはいまだに信じられん」

としきりにいい、ほんなら、とおいこを揺りあげて雪のなかを登っていった。

「お父さん、うちは何もせんでええじゃろか」

と珠子がいうと、

「年寄りと女子じゃしなあ。行っても足手まといになるだけじゃないかなあ」

吉田さんはいっかなあらわれず、十日経っても二十日経っても、捜索状況は変わらなか

った。

捜索隊には次第にあきらめのいろが濃くなり、春の雪どけを待つしかないという声もあるかたわらで、続行を主張する人たちもあり、二十日すぎると一日、二、三人しか現場に人影のないときもあるという。

昭市は一週間目に下りて来て国太郎の家に寄り、

「捜索隊の宿舎は測候所じゃけんね。詰めて詰めて寝てもそう大ぜいは泊まれん。わしは典夫と交替して、また登ってくる」

といいおいて下りていった。

もうこうなったら吉田さんは生きているとはとうてい考えられず、もし遺骸となっているなら、

「雪の下じゃと、春まではきれいに保つかもしれんなあ」

「いやそれでも、山よりはおうちへ帰りたいと思うよ」

などと父娘で話し合う日も続いている。

典夫は入れかわりに登って来、珠子とは家の前で立ち話して現場へと向かって行った。

そしてこれは三日で下りてきたが、そのとき、

「捜索はきついにはきついが、まあきよみちゃんでもできんことはないなあ。最初は穴掘ってな、露天掘りみたいにして捜していたらしいけどな、いまはゾンデ棒つ

きさして進むだけじゃ。鉄棒じゃけん軽うはないが、もしその雪の下に吉田さんが寝とったらすぐ判るようになっとる」

といった言葉を聞いて、珠子はその場で行こう、と決心した。

国太郎は驚いて止めたが、山の仲間は皆、無償で奉仕しているとき、何もしないで家の前を通る人の話を聞いているだけではあまりに申しわけない、という思いもあったものと見えて、

「ほんなら一晩だけでゆるしてもろうてなあ」

という約束で、次に登ってゆく徳島山岳会の人に連れて行ってもらうことにした。

山はまだ白一色、雪はなかなかに深く、国太郎の大きなゴム長で一歩一歩登ってゆくのは思ったよりずっと大へんだったが、珠子はがんばって前の人について行った。

測候所に一旦荷物を置き、さらに雪のなかを千八百七十九メートルの一ノ森の峰をめざして漕いでゆくと現場へつきあたる。

その辺りを眺めて、珠子はなるほどと思った。雪崩は上のほうから斜面をすべり落ち、その先端は崖になっていて、デブリという雪塊はそこに溜まって波打っている。

見わたすと、ところどころに栂の大木が立っており、ひょっとしてあの下に吉田さん眠ってるのかな、と思うと、さぞかし冷たかろう、とかわいそうでたまらなくなる。

捜索の指揮を取るのは警察官で、

「さあゾンデーレンだよ。皆三十センチの間隔開けて並んで。両足ひらく。行方不明以来大分時間が経っているから、スピードゾンデでなく、三点ゾンデを行う。ゾンデ棒は垂直に左足先、まんなか、右足先と刺し、抜いてのち一歩進む。深さは二メートルまでによい。

一人だけでもゾンデ棒を斜めに刺すと、捜索の空白域が出来るから十分注意して」

とどなり、はじめ、の号令をかけようとして、ふと端に立っている珠子を見つけ、

「おいおい、あんたおなごじゃないか。おなごにはできん。とても無理じゃ」

と止めた。

「あの、吉田さんとは知り合いでしたし、それにこの山に住んでいますので」

と珠子は抵抗したが、やはり三メートルの鉄棒は重いし、屈強の男たちに混ってこの共同作業に加わるのは少しむずかしいかなという感じはあった。

結局、珠子は現場から引き返して測候所へと帰り、ここで捜索隊の炊事の手伝いをすることになり、一日懸命に立ち働いた。

国太郎を残してあるため、一晩しか手伝いはできないが、ちょうどその晩、吉田さんと一緒に遭難した山本さんが、一時入院していた病院から出、自分も捜索に加わりたいと、この日、登って来、珠子も会うことができた。

その夜は、ストーブを囲んで皆で山本さんの体験を聞くことになり、憔悴（しょうすい）のいろ濃い

山本さんは、
「いっぺんみんなに聞いてもらいたいと思うちょりました。いや、いっぺんどころやない、何べんでも話したい。いつまでも吉田さんのこと、いい続けたいのです」
と呟くような低い声でまるでそらんじてでもいるように話しはじめた。
「昼めしのあと、我々は一ノ森の奥の通信線の保安にでかけました。雪の重みで切れたり曲がったりしますので、それを修正するためです。
現場はゆるやかな坂だが雪は三メートルの深さでした。谷を渡った向こう側の奥はダケカンバの林になっていて、吉田さんはそれを見て『何かあったらあっこへ逃げこめばええんじゃ』というていましたから、頭の隅には雪崩の危険に対する防禦策はたしかにあったと思います。
事実、私どもが積雪のなかを漕いできたことで空気が振動し、雪崩発生の予兆はあったのです。上のほうでギシギシ、というか、パチパチというか、積雪に割れ目の入るような無気味な音を、私も吉田さんもたしかに聞いています。
そのとき吉田さんは『十分くらい待ってみよう』といい、雪崩をやりすごそうとしたのですが、十分後には何も起こりませんでした。
そこで、吉田さんは私に『お前、ここで待ってな』といって一人で渡ろうとしたのです。私は、谷のこちら側の栂の木につかまったまま、吉田さんを見ていました。

吉田さんは私の位置よりも十メートルほど上のほうを漕ぎ渡り、ダケカンバの林のとりつきにもう少しで届く、というときでした。私はそのときのおそろしさを忘れることはできません。雪崩のはじまる前の空気の振動でしょうか、体全体、何ものかにぶんなぐられるような衝撃を受け、とっさに吉田さんの名を声を限りに呼んだのでしたが、私の声はかき消され……。

轟音とともに私の目の前は真っ白になり、雪煙とともに山は崩れ落ちました。私の悲鳴が聞こえたかどうか、栂の木に必死でつかまっている私のすぐわきを、まんまるくなった吉田さんは雪に包まれたまま、猛スピードで転げ落ちて行った。まるで雪だるまをころがすようじゃった」

とここまで話すと、山本さんは嗚咽して声はとぎれ、座の者も言葉もなかった。

やかんのしゅんしゅんとなる山の夜、悲しい話を聞くのはいよいよ悲しく、山本さんもくり返し鼻をかみながら、

「雪崩は崖から落ちてやっと納まりました。あたりいちめん、まだ雪煙の立ちこめているなかで、私は声を限りに吉田さんを呼びつづけました。

でも春の雪崩は、デブリの場所では一瞬にして氷となり、固く固く締まってしまうと聞いたことがあります。雪とともに流された吉田さんは氷に締めつけられ、早く助けなければ窒息死してしまいます。

私は救援を求めるため、大急ぎで事務所へ引き返したのですが、捜索隊がやってきたのは翌朝でした。

いま思えば、あのとき私がデブリのなかに入っていって吉田さんをさがし、ともに死んでいたのがずっとよかったのかもしれません。いや、雪崩の危険を知りながら谷を渡った吉田さんを何故止められなかったか、それが先だったのです。

吉田さんは私が死なせたようなものなんです」

と、山本さんはふるえる声でいい、畳に突っ伏して号泣した。

もらい泣きする人、首を垂れる人、そばに寄って山本さんの肩を叩く人、みなこの不幸な事故を同じく悼んでおり、珠子もいく度かせきあげてきてはハンカチを目に当てた。

測候所の同僚たちは、くりかえし不測の事故だから自分を責めるな、と慰めたが、山本さんの心に負うた傷は浅くはないらしかった。

吉田さんの遺骸は、精密なゾンデーレンでもなかなかみつからず、捜索隊もそろそろ限界に来て打ち切りの声も聞こえはじめた四月二十日、ようやくゾンデ棒の先が吉田さんの右肩に突き当たった。

さがしあてたのは山小屋の昭市で、眠っていた場所はデブリの末端からまだ三十メートル下の位置であったという。

遭難三十五日目にしてやっと最期の姿を見せた吉田さんだったが、そのよすがとなった

のが日ごろ仲よしの昭市だった因縁をふしぎなこと、と人々は話しあった。

延べ何百人という捜索隊のなかで、昭市はとりわけ死者を悼む気持ちも深かったものか、そのときゾンデ棒を突き刺すと、小さな穴から異臭が立ち上り、判ったのだという。

吉田さんは一緒に流された樽の木の上に横たわっており、そのわずかな隙間が異臭を放ったものであるらしかった。

吉田さんの葬儀は測候所の穴吹基地で行われ、珠子は国太郎の代理で出席した。

昔から剣山は母のふところのようなそのおだやかな山容が語るとおり、遭難の件数は至って少なかっただけに、この雪崩事故は山に関わるひとたちの自戒の念をいっそう強くしたようであった。

吉田さんは殉職者として皆に惜しまれ、翌年には一ノ森の遭難現場に殉難碑が建つことになる。

山の暮らしももうまる四年なら大ていのことはこなせるようになり、葬儀の日も朝早く出て、終わると貞光の郵便局をのぞいただけでまっすぐに戻った。

それというのも国太郎はことしはじめごろから視力が弱り、一人で長い時間おいておくのは不安だからでもあった。

こんな国太郎を見ていると、いつか典夫のいっていた「おっちゃん死んだらどうするん？」の言葉がときどき珠子の頭をかすめることがある。

自分も七月がくれば満二十歳、これからは一人で生きてゆく手立ても考えなくてはならないが、山にいると毎日おだやかな日が流れ、こんな時間が永久につづいてゆくような安らかな感じがある。

それは五月の午後のことであった。

その朝は先達さん二十名がここから発ち、宿坊はもちろんきれいに掃除してはあったが、風を入れるために珠子は雨戸を開け払った。宿坊は三十帖、中央に二つの囲炉裏、押入れに三十人分の夜具、そして間仕切りの屏風、回りには広縁がついて縁の下には薪を並べてある。

夏になったら風鈴でも吊そうかな、と珠子が軒を見上げているとき、典夫が突然庭にあらわれ、

「きよみちゃん、お客さんぜ。

道が判らんというておれの家に来たけん、つれて来てあげた」

と、うしろを振り返った。

そこにいるのは、真っ赤なワンピースを着た若い女性と、ひところ流行ったリーゼントスタイルの髪型をした男性とふたり手をつないで立っている。

「え？」

と目を挙げた珠子に、若い女性は、

「タマ子、あたしや、隆子や」
と濃い口紅の唇をいっぱいに開け、笑いながら近づいて来た。
「まあ、隆ちゃん」
と珠子は驚き、夢ではないかと目をこすった。
「こんなところまで、よう来たなあ」
ととりあえず二人を宿坊にあげ、わざわざ案内してきてくれた典夫に珠子は礼をいって帰ってもらったあと、隆子と手をとりあい、
「あんたほんまに隆ちゃん？」
「ほんまじゃ。ほんまに隆子じゃ。なつかしいなあ。タマ子は相変わらずじゃなあ」
「よう登って来たなあ。疲れたじゃろ」
「ようよう来たぜぇ。道迷いもって来たぜぇ」
と二人ともわけのわからないことを怒鳴り合って、この突然の再会をよろこび合う。
しかし隆子の風体はと見れば、チリチリにパーマを当てた頭に濃い化粧、爪も真っ赤に塗り、一見していまの仕事が推量できる様子で、連れの男も派手なシャツを着、くわえ煙草をはなさず、首には金鎖をのぞかせている。
一しきり興奮がおさまると、隆子は連れを紹介して、
「私の彼氏。五郎ちゃん。やさしいんじゃ。彼がおらなんだら私はここまで登ってこれな

んだ。途中おんぶしてもろうたしなあ」

昭和三十六年に別れてちょうど四年ぶり、隆子はすっかりはしゃいで、

「つもる話がようけある。何しろタマ子ん家は電話もなければ郵便も届かんしなあ。私の出した手紙二通、読んでくれたかしらん」

といいつつ、山道は疲れたとごろりと横になり、手枕で頭を支えながら、

「名古屋の工場でいじめられた話、書いて送ったじゃろ？　あんなとこにいてたらアタマおかしゅうなると思うて、母親のとこへ行ったこと、書いたなあ。

あのひとは昔、私を捨てて若い男と駈け落ちしたんじゃが、ちっとは心入れ替えてまともになっとるもんかと京都のはずれのその家へ行ってみたんじゃ。ところが相手はもう変わっとってなあ。おまけに小さいガキも生まれてたんじゃ。亭主は何や芝居小屋の大道具とかに行ってる人じゃったけど、給料安いし、私がころがりこんだのが気に食わんとみえて、もうしょっちゅう夫婦喧嘩でなあ。そのむしゃくしゃを母親は毎度私に当てつけて、家の中は地獄じゃった。

ほしてな、丈夫なら働けっちゅうて、二人ともがやいやいいうもんじゃけん、私はとうとう家出して大阪のミナミへ行ったんじゃ。それから先のことは私は誰にもいいとうない。

十六やそこらの女の子が暮らしてゆくには、ミナミはあまりにおそろしすぎる。私は何べんもう死んだほうがましじゃ、と思うたことじゃったか。

そんな私をこの五郎ちゃんが助けてくれたんじゃったよ。なあ」
と振り返れば、これも寝そべって煙草をふかしている男は、
「もうええがな。そんな話はせんとき。
それよりも、珠子さん訪ねてきた目的の話、せんかいな」
と催促する。
珠子は聞いていて、いまの隆子の話が十分に理解できなかった。
実の母親にめぐり会い、弟も生まれてまことに結構な話だと思えるのに、何で家出？
何で大阪の盛り場で死ぬほどの目を？　と疑問ばかり起き、判るようにもっと話して、といいたいのに隆子は話がそこへ触れそうになると避けようとする。
そして五郎にそういわれると隆子は起きて坐りなおし、
「こんな山のてっぺんまで足にマメこしらえて上がってきたんはな、ただタマ子に会いたいだけじゃないよ。
私たち今度な、ミナミの店一軒、任されることになったんじゃ。タマ子は浮き世離れしてるから判らんじゃろが、大阪のやな、ミナミのやな、一流の店まるごと一軒任されるちゅうんはこら大へんな出世やで。ちょっとない話やで。
まあこれも五郎ちゃんのおかげやけど、こないだ二十になったばっかりの私がお店取りしきるっちゅうのは、ミナミでも聞かん話やって。じゃけん、私いま、走るまえの競馬う

まみたいにコーフンしてるんよ」

実際隆子はぶるぶるふるえているのではないかと思うくらい昂揚し、頬を紅潮させて、

「そこでじゃ。タマ子来て私を助けて欲しいんじゃ。若い娘がママになったら必ずバカにされるけど、二人でやれば心丈夫じゃしなあ。

タマ子美人じゃし、ミナミの水でみがいたらようけ男もつく。ミナミのピカ一になること請け合いじゃ」

「ちょっと待って」

と珠子はいよいよ判らなくなり、

「そのお店ってのはなに？　バーのこと？」

「そうじゃ。バーはバーでも高級クラブなんじゃ。会員制でなあ。一見さんは入れんけん、上品なもんよ。

儲かるぜぇ。お銭はどんどん入ってくる。ええドレスもなんぼでも作れるし、ごちそうもようけ食べれる。この世の極楽じゃ。

私は十六の年からこの世界へ入ったけど、もうもとに戻ろうとは全然、思わんけんね。自分の腕次第でなんぼでも出世できるもん。

なあタマ子、施設っ子は施設っ子同士じゃ。世間は施設出というと、汚いもんに触るように警戒する。げんに二年上じゃったヒロシくんも製鉄所やめてミナミへ流れてきて、バ

ーの下働きしよる。

一しょにやろう、なあタマ子」

と隆子はいつのまにかすり寄ってきて珠子の顔をのぞきこむ。

珠子は、そう説明されても自分とはあまりに遠い世界の話として、やっぱりすぐにはのみこめず、

「ええ？　急にそんなこといわれても」

と尻込みするばかり、するとうしろの五郎が煙草の火を灰皿にねじ消して近寄り、

「珠子さん、失礼やけどな、わし生まれてはじめてこんな高い山登ってきて、たまげてるとこなんや。

さっきの山小屋で聞いてみたら、郵便も上がってこんらしいな。電気はようよう点いたけど、水道なしガスなし、ここには電話もなし、冬になると人っ子一人通らへんちゅうやないか。人間の住むとこやあらへんよ。

お詣りする人もいてへんお社守って、こんな離れ小島にいるよりか、ネオンのあるとこへ出ておもしろおかしゅう暮らしたほうがなんぼええねんか、思い切って決心しはったらどないですか。

悪いことわんさかい」

と立て板に水のような早口の説得で、珠子はますます混乱し、

「私は、年とったお父さんもおるし、お社守らんと少ないけど氏子さんもおりますし、こ動けないんです」

と辛うじてせきとめたが、二人の勢いはとまらず、

「タマ子は昔から思い込んだらてこでも動かんガンコなとこあったなあ。じゃけんど、これから先のこと、どうするの？　じいさんもう長うはないよ。まさか死んだあともここに一人おるっちゅうんやないじゃろなあ」

隆子は今度は五郎に向かって、

「この子なあ、昔から何にでもすぐ飛びつかなんだ子なんじゃ。じゃけんど、じっくり話しよると判ってくれるわ。頭ええし」

とひと休みしよ、と申し入れた。

ちょうどそのとき、縁側から国太郎が首を出し、

「これは珍しい。きよみのお客さんかいな。ようおいでたなあ」

と声をかけた。

きよみ？　と驚く隆子に目くばせして珠子は制し、二人を紹介して、今夜はともかくこの宿坊に泊まってもらうことを国太郎に告げた。

先達さんのように、自炊のできぬ客人ならこちらが用意しなければならず、珠子はかいがいしく食事を作って膳を宿坊へと運んだ。

白いごはん、麩のみそ汁、家のまわりに萌え出た菜のおひたし、それにじゃこを香ばしく炒った小皿も添えて出したところ、隆子は大げさに声をあげて、

「これが晩ごはんじゃの？　タマ子、いっつもこんなもんばっかし？」

と聞き、うなずく珠子に、

「ほんま、タマ子、考えないかんよ。私やってお金のないときはラーメンばかりで一週間もすごしたこともあるけど、それが嫌さにがんばってそこから脱け出したんじゃないの。タマ子の若さでこんなもんばっかり食べよったら、三十すぎたらもうしわくちゃばあさんになるよ」

とまたもや説得にかかる。

黙って聞いていると、この二人は珠子の想像の遠く及ばない世界にいて、ふしぎな暮らしをしているらしく、その様子をもっと詳しく聞いてみたいという興味もおきてくる。

「そうじゃなあ。タマ子大阪へ来たらアパート借りてあげよなあ。そこにいて気ままに暮らしたらええんじゃ。

夕方になったら化粧して店へ出て、客にお酌をしてくれたらそれでええ。簡単なことじゃ。さびしいと思うたら男友達はなんぼでもおる。タマ子じゃったら相手に困りゃせん。いろいろ考えるよりも、思い切って出たらどうじゃなあ？　お互い助け合うてやろうやないか」

と懇々と説かれると珠子もだんだん気持ちの傾いてくるのが自分でも判るのであった。世間の動きはラジオで聞くだけ、という閉ざされた生活の扉をとんとんと叩かれ、こちらへ来てごらん、とドアを開け、きらびやかな世界へと招かれれば、この場合珠子ならずともこわごわながら外へ踏み出してみたくなるのは当然の話であったろう。

その上、珠子の心を大きく揺すぶったのは、その夜、枕を並べて寝た宿坊のなかで、隆子がしみじみと、

「なあタマ子、親は大事かもしれんけど、親なんて何にもなりはせんよ。あってもなくてもおんなじじゃ。そのことはお互い施設におってよう判っとるじゃろう」

と親の存在について話したことであった。

「あんたは百パーセントの親が欲しいちゅうてここへ来たけど、親はあんたに何してくれたちゅうんじゃ。ばあさんの死に水とらせ、巫女さんやらせ、いずれはじいさんの世話させられて、挙句の果ては一人ぼっちで置きざりにされるだけやぜぇ。

あんたそのあと、もらえる遺産あるんか。もっともこんな山の中で土地やら木やらもろうても二束三文やろしなあ。

人間生きてゆくのに、いちばん頼りになるのは恋人やぜぇ。親は親。自分は自分。生きて来た時代もちがう親のことなんて考えんでよろし。嘘の家庭なんてかなしいだけやないか。そんなんさっさとぶちこわしてしまいや。

じいさんはもともと子無しのひとじゃけん、あんた出ていっても、自分の身の振りかたぐらい自分で考えるじゃろう。

なあタマ子、あんたもひとつ踏んばって大阪出て、たのもしい恋人、早う見つけや。勇気が出るよ。世間が明るうなる。私はいま、五郎ちゃんのおかげで最高にしあわせじゃ」

といいつつ、隆子は自分の身の上をふり返ってときどきせき上げてくるらしく、鼻をする音も闇のなかで聞こえている。

親が何をしてくれた、といわれればたしかに今日まで自分が奉仕する一方だったように思えるし、自分のために両親が何かをがんばってくれたという記憶もない。が、それを格別不満とも思わずすごしてきたのは、生まれ落ちて以来の施設育ちだから、親に対する感覚が狂っていたのかもしれない、と珠子は思った。

それに、恋人がいちばんの頼り、というのは珠子にはまだよく判らないが、女と生まれたからには、我を忘れるほどすてきな男性にめぐり会いたいという思いは、潜在的にはずっとある。

いま目の前の五郎と隆子を見て、羨望に耐えないとは思わないけれど、少なくとも隆子自身がしあわせに身を浸している感じは受け取れる。

その夜、珠子はまんじりともせず夜を明かし、朝食のとき隆子に告げた。

「大阪へは私も行ってみたいと思う。じゃけんど、この山もいますぐ、というては捨てれ

ん。しばらく気持ちを馴らしてから、お父さんとも話し合うてから、それから隆ちゃんのところへ行くことにしたいと思うけど、どうじゃろか」

というと、隆子は少しがっかりした顔で、

「今日、私と一しょに山を下りてくれるかと思っちょったのに」

といったが、それが無理ということは自分でも判っていたと見えて、

「ほんなら承知してくれたのやね。おおきに、ありがとう。また昔みたいに仲ようやろうね」

それでは、と住所と電話を書き残し、国太郎に挨拶して下りることになった。

愛光園へは寄らん、という隆子と五郎を送って珠子は夫婦池まで下りてゆき、ここでしばらく休んでのち、手を振って別れた。

五郎のアロハシャツと、隆子の赤いワンピースは木の間がくれに下ってゆき、やがて見えなくなってしまった。

二人が帰ったあと、珠子は来る日も来る日もぼんやりとして過ごした。

耳の底にはまだ隆子の言葉が聞こえており、目の前にはみやげにくれたラメ入りの濃いえんじのワンピースと、キラキラ光る大きなガラス玉の二重のネックレスとがある。

こんなのを着て店に出、男性客に酒をすすめる仕事、と思えば一種の恐怖めいた思いに心臓が高鳴ってくるが、しかし一方で、こわいもの見たさに試してみたい気持ちもないで

はない。

隆子には一応応諾の返事はしたものの、二日たち、三日たつと、やっぱり臆病になってしまってなぜあんな返事を、と悔やむ気持ちも頭を擡げてくる。

しかし、この暮らしから脱け出したい気持ちの誘惑はなお歴然とあり、両者の綱引きに心は始終揺れて定まらず、ある日、ふと気がつくと珠子は亀石に腰かけて空を見上げていた。

五月も末ともなれば、遅い山の春も新芽がいっせいに萌え、噎せ返るような匂いに包まれるが、その香りを胸いっぱいに吸い込んで珠子の足はいつのまにか頂上へと向かっている。

小屋は連休のあとまた閉めるものの、今年のようにあたたかな年は登山客もあるため、開けていることもあり、それを目指したわけでもないけれど何となく山小屋に辿りつくと、典夫は法被姿で立ち働いている。

「きよみちゃん、お山の見まわり？

今日は天気いいからね」

と軽口を叩いていたが、珠子はその屈託ない様子を見て、心のなかをあたたかいものが流れてゆく感じがあった。

このひとに相談しても、この山を捨てる気か？　といきまくにちがいなく、はじめから

答えの判っているものなら、めんどうな話はしないでいようと思い、
「そうよ、山岳監視員よ。もうお花も咲きはじめたから、花どろぼうをつかまえようと思って」
といいつつバイバイ、と手を振り、ゆっくりともとへ引っ返した。
隆子は帰りぎわ、
「少なくとも五月末までには来てね。あんた整理する荷物もないんじゃろ？　身軽じゃないか」
といっていたが、月末が近づいても珠子の山を下りる決心は固まらなかった。むしろ、隆子は日一日と遠くなり、あの日のことは次第にうすれてゆく感じがある。なおはっきりと胸に刻まれているのは、人間生きてゆくのに親はいらん、恋人が頼り、という言葉であって、これは消そうとしても容易に消えはしなかった。
こちらに郵便の配達も電話もないのはこの際、好都合で、隆子からの催促がないままずるずると季節は梅雨に入り、山は毎日の雨であった。
雨の夜は気が滅入り、父娘して所在なくラジオをきいているとき、国太郎がいった。
国太郎はいつになくしんみりと、
「こいさの雨は太いなあ。しけあめやなあ」
と、外の音に耳を傾けていたが、

「なあきよみ、お前このごろ何やら考え込んどるのとちがうか。わしの見るに、この前、赤い服着た友達、登ってきたじゃろ？
あのひとに何かいわれたんとちがうか？」
と聞いた。
国太郎にそういわれるまでもなく、隆子の誘いを一応承諾し、それをすぐ打ち明けようと思っているうち一日のばしになってしまい、いまはもうその決心はかなり薄らいできている。
しかし隆子のいう都会の生活への誘惑もすっかり振り切ってしまったわけではなく、その迷いが国太郎の目についたものだと珠子は思った。
いおうかいうまいか、と珠子は食後の茶をのみながら考えていたが、やっぱり話したほうがいいかなと思い、
「お父さん、早うに話そうと思うとったんやけど、自分の心も決まらんもんやけん、今日までようい わなんだ」
と断ってから、隆子からの誘いをありのままに伝えたところ、国太郎は手をのばして棚の上のラジオのスイッチを止め、首を傾けてしばらく考え込んでいたが、
「それで、きよみは一度は承知したんじゃな？」
と念を押した。

そういわれると珠子は急に後悔の念に駆られ、叱られる！　とこわくなって、
「そんでもお父さん、五郎ちゃんとかいう男の人と二人がかりで説得されたんじゃもん」
といいわけすると、国太郎はべつだん怒る様子はなく、静かな声で、
「きよみがどうしても行きたければ行ってもええよ、わしは。
あとのことは心配要らん。自分がいちばんええと思う道に進んだが一番じゃ」
「じゃけんど、私がおらんようになったら、お父さんどうするの？　だんだん目も見えんようになるし。それにお社の勤めも一人ではできんじゃろう？」
と珠子がいうと、国太郎はうなずいて、
「そのとおりじゃ。そのとおりじゃが、わしとてこの年になって先ゆきのことを、何も考えておらんことはない。
いや、すぎの死んだあと、ずっと考えつづけて来たというのがほんとうじゃなあ。今夜はそれをきよみに聞いてもらおう。
そうじゃなあ。何から話そうか」
と国太郎は目を宙に這わせ、思案していたが、壁に貼ってある源平合戦の絵図を見て、
「うちの氏子さんがおいでる東祖谷山村、西祖谷山村はその昔の平家の落人の里じゃという伝説があるんを、きよみは知っとるじゃろう？
あれは根も葉もない話とはちがうと、わしは思うとる」

と話しはじめた国太郎の話を珠子は取って、

「私が捨て子じゃったことじゃろ？　そのことなら知っちょるよ。給食婦さんが話しよるのを聞いたけん」

と固いものを呑みくだすようにいうと国太郎はそうじゃろなあ、こんなことは隠しとってもすぐ知れる、とうなずき、

「わしは愛光園へ訪ねていって、園長先生から詳しゅうにその話を聞いた。お前にそれを正しく伝えておかんならんと、前々から思うとったところだったんじゃ。

本堂の縁の下に寝かせられておったお前は、身分の高い人が着るような白い着物を着て、達筆で平珠子と生年月日を書いた紙をそばに置いてあったそうな。

お前は大きくなるにつれ、面差しがなあ、この辺りの山人とはどこか違うて、都びとの匂いがする、と、これは木暮園長の話じゃが、園長はそれを唯一の手がかりとしてずい分と熱心に、お前の生みの親をさがして下されたらしい。

都会とは違うて、ここら辺りは隣の米びつのなかまでも知り合うて暮らしておる田舎じゃ。親はすぐに見つかるじゃろう、と園長は考えていたらしいが、案に相違してさがすお人はついに見つからなんだという。

ただ、このひとではあるまいかと思えるお人はおり、それは峯谷家で、戦争中疎開して来たなかにどうやら子供を産んだ女のお人がおいでたらしい。

木暮園長は栗枝渡の近くの落合まで訪ねて行ったらしいが、何しろ山深くて辿りつけなんだという。そこで峯谷家に手紙を出したところ、かなり年配とみえるご当主の方からのお返事で、疎開者のなかに東京からのお人があり、どうもそのお人が納屋で子供を産み、終戦後立ち去ったらしいという話が残っていたそうな。

峯谷家のご当主は、我が家を頼ってここまで疎開して来たからには、いずれ縁つづきの者ではあろうが、当時の疎開者は針の穴ほどの縁でも頼って地方へ逃れたというけん、定かにはわからんという。

また、七、八世帯も一軒の家に住んでおれば、それを束ねるのはお母さんの仕事、ご当主の男は一切知らんことであったというのもうなずけるわなあ。

そこで、かれこれ推測するわけじゃがお前の生まれは昭和二十年七月十五日、というは、これは書き付けどおりじゃろうなあ。そして木暮園長がお前を見つけたんは九月十八日、すると母親はこのときまでこの地におったことは、確かじゃなあ。そのあとが杳として知れん。手がかりがない」

国太郎はゆっくりと言葉をつづけ、

「わしの想像ではじゃなあ。こがな山奥まで身重の体でやって来て、旅の空で身二つになるにはとうてい女一人でやれることとは思えんのじゃ。必ずもう一人か二人かの手伝いがおって、そのひとたちが子供も産ませ、松巌寺までつれて来て、木暮園長が拾い上げてく

れるのを見届けて立ち去ったものと思うがどんなもんじゃろ。
ただ、なあ、きよみ、わしはお前を産んだお人も手伝いのお人も、皆そのあと東京へ帰ってしもうたという、これはカンじゃがなあ。そんな気がする。
つまり、こちらに縁のある、東京の人ではないかと思うんじゃ。
しかし、きよみ。
これらは皆、あくまでも仮定の話じゃ。何ひとつ証拠もない。いや、証拠というては、お前が着ておった白の紋緞子の着物と、平珠子、という書き付けはある。
思うに、着物は亡き母親の才覚で生まれたときに調達してあったもの、そして書き付けはお前を連れてきたお人が、『この人は平家に因んだ子です故、大切に育ててやって下さい』という願いをこめたものではなかったかと、わしは考えるんじゃが」
というのへ、珠子はそれまでをずっと平静に聞いていたが、ここに来て膝をすすめ、
「そんならお父さん、私がその峯谷さん家へ行って、地べたに頭つけて、ほんまのこと話して下さるよう、お願いしてみたらどないやろ？
もし私に、その平家の血がちょっとでも流れておるとしたら、峯谷さん家とは親戚じゃし」
というと、国太郎は手をあげて、
「まあまあ、待ちや。そう急きなや」

ととどめて、

「こんがな話をすると、必ずお前がそういうじゃろうと、いままで園長もわしも何もいわなんだ。

ええか、きよみ、何度もいうが、これは空想ぞ。頭のなかで描いてみたお前の出生の物語ぞ。

第一、ま、わしは我が社に安徳帝をお祀りしてある故に固く信じとるが、祖谷の平家伝承が眉つばじゃと笑いとばす人はようけおる。あっこがあんまり険しい山奥じゃけん、落人の隠れ谷にぴったりじゃとした作り話かもしれん。それをお前が、血相変えて峯谷家に談判に行ったなら、向こうはびっくりどころか、怒り狂い、塩まいて追っ払われるがおちじゃ。

わしがな、今晩、きよみにこんがな話したんは、出生を明らかにするつもりじゃなかったんじゃ。

お前がさきほど打ち明けてくれた大阪行きの話なあ。そのことで、わしの意見も聞いてもらいたかったんじゃ。

わしは今さっき、きよみが行きたいと思うんじゃったら行ったらええ、というたなあ。それはいまも変わらんが、ただあの隆子さんとやらのお人と、その連れの若い衆との仕事の話聞いて、きよみが何も考えず行ったら、ひょっとして危い目に遭いはせんか、と案じ

るんじゃ」

「危い目ってなに？　お父さん」

「はっきりいうとな。お前は施設に育って、世間の冷たい目で見られた、と思うとるかしらんが、わしから見れば、世間しらずの温室育ちじゃなあ。

親がないというのは、何ものにも勝る苦しみかもしれんが、きよみは親に代わる周囲の人のあたたかい手で大事に育てられてきとる。じゃけん、隆子さんとその連れの二人の風体を見ても、ピンとくるもんがないじゃろう？

あの二人の仕事は、きよみなどの行くところじゃない、とわしは見た。まだ二十そこそこの子に、店を任すなんてことは考えられん。なんかわながありそうな気がするんじゃ。

わしはなあ、お前に浄身、という名を授けたなあ。

あれは巫女さんとして、お前にきよらかに身を保って欲しいと願いをこめてのことじゃあるが、またひとつには、平珠子、という名の由来にかけても、やっぱりまっすぐな道を、歪まずに歩いて欲しい、という気持ちもある。

園長やわしの推量を信じ込んで、峯谷家へ談判に行っても困るが、ま、少なくとも、自分は平家の末裔じゃという誇りを背負うて生きていってもらいたいと思うのじゃが、どうじゃろなあ。

しかし、ま、いうなれば屁のような話のために、お前を死ぬまでここに引き留めておく

のもむごい話でもある。

ここはきよみ自身が選ぶことじゃ。

というても、もう返事はしとるのじゃなあ」

と、国太郎が長い話の終わりを告げたとき、雨足は一入(ひとしお)はげしくなり、家のわきの登山道から水の流れ落ちる音まで聞こえてくる。

国太郎は耳を傾けていたが、つい二、三日前、登りやすくするため、道に青竹を埋めて段をつけたことをいい、

「この雨じゃ、竹が流れるかもしれん。ちょっと見てくる」

よっこらしょ、と立ち上がり、柱の懐中電燈とレインコートを手にして雨のなかを出ていった。

珠子はそのあと、じっと坐ったまま、いまの国太郎の話を脳裏に呼び戻していたが、気分はとてもさわやかであった。

いままで、考えまい考えまいとして、胸の奥底に押しこめていた生みの親の話を、いまはじめて聞き、その虚実はべつとして、それを木暮園長と国太郎がずっと案じてくれていたことは珠子には何よりうれしかった。

たとえ二人の創作物語であれ、親はどこの誰やら皆目判らぬ、と宣告されるよりははるかに心かるく、そして平家の血を引く人間、というのも、自分とこの地との縁の深さに依(よ)

っているとさえ思えてくる。

お父さんの話を信じよう、と珠子は思った。いまどき、源平の話など、と他人に話せば笑われてしまうだろうが、そう信じると、あの愛光園から餞別にもらった絵図から関心が離れなかったのも当然、と感じられる。

そして珠子は、杳として行方のわからぬという自分の親を捜したいと思う気持ちは以後いささかも持たないでいようと思った。これまでも、雲を摑むような親を捜し出して会いたいと思ったことは一度もなかったし、こんなに自分を昂ぶらせてくれるお伽話を明かしてくれた国太郎をしんじつ父親と考えることで十分満足だと思うのであった。

戸外の雨は少し小止みになったらしく、音はやや静かになったが、国太郎はなかなか戻ってこなかった。

時を刻む柱時計を見上げると、出てのちもう十分以上は経っている。登山道はすぐ裏だし、ものの一、二分で戻ってこられるのに、ひょっとして道をなおしているのかな、こんな雨の晩にしなくてもいいのに、と珠子は立ち上がり、これも電気のない時代たくさん買ってあった懐中電燈のひとつを手に持って外に出た。

登山道の入り口で、闇に向かって、

「お父さあん」

と呼ぶと、意外な近さから、

「おーい。ここじゃあ」
と国太郎の声がし、珠子はその声をたよりに懐中電燈を左右に振りながら近づいてゆくと、
「こっち、こっち、ここじゃあ」
の誘いで、とうとう丸い光のなかに国太郎の姿を浮かび上がらせた。
「すべったんじゃ。腰が抜けたらしい」
という声の元気さに珠子はほっとし、見れば雨でつるつるになった坂にべったりと腰をおろし、両足を投げ出している。
「歩けんの？」
と聞くと、
「さっきからやってみよるが、立てれんのじゃ。腰が上がらん」
という。
「そんなら私につかまってみてや」
と、珠子は傘も捨て、片手を国太郎の胴にまわし、どっこいしょ、と抱き上げようとしたが、足もとが定まらず、二人ともその場に転んでしまった。
「ほんなら、負ぶさってみてや」
というと、国太郎は両手を珠子の肩にかけ、珠子は捨てた傘を拾ってそれを杖に、すこ

しずつ坂を下りる。

国太郎の重みは半分地面にあずけ、ぞろぞろとひきずりながら、歩けばたった一、二分の距離を、ずい分と長い時間かけて、ようやく家に戻りついたのであった。

二人とも泥だらけなのはよいが、腰が抜けたという国太郎をどうすればよいか、と珠子は考えながら、国太郎の着替えをさせているうち、国太郎は突然、柱を支えによろよろしながら立ち上がった。

「ありゃ、なおった。快うなった」

といい、

「きよみ、こらこのとおりじゃ。なおった、なおった」

と大声を挙げながら喜び、そこら中片足をひきずりながらも歩いてみる。

珠子もそれを見て安堵とおかしさで、思わずハハハ、と笑い、

「お父さん、大げさな。腰なんて抜かしてはおりゃせざったのよ」

「いや、腰が抜けたんはほんまじゃったぞ。きよみ」

父娘は顔を見合わせていく度も笑い、

「雨の晩に坂道を歩いたらいかんじゃないの」

と珠子が説教すれば、国太郎もすっかりしょげて、

「そうじゃったなあ。わしもきよみにそんがなこと教えてもらうようになったんかなあ」

と、親子逆転した地位をむしろ喜んでいる様子であった。
翌晩、夕飯のとき、珠子は、
「お父さん、私なあ、大阪行くのやめたわ。ここにずっとおるけん」
と告げた。
国太郎は驚いて茶碗を置き、
「そんでもお前、あのひとと約束したじゃろうが。嘘つくのはようないなあ」
「隆ちゃんには手紙書いて断る。
やっぱり都会のなかで私はよう暮らさん。
それに、田舎もんの私が行っても、すぐには役立たんじゃろ。隆ちゃんの足手まといになるだけじゃ」
といってから珠子は明るい声で、
「お父さん、ほしてきよみは平家の子孫じゃもの。浄身じゃもの。俗塵にまみれたらいかんのじゃ」
「え、俗塵？　きよみそんな言葉知っとったのか」
「ラジオ聞いとるもん。だんだん賢うなるよ、きよみも」
と二人は顔見合わせて笑ったが、国太郎はすぐ顔を曇らせて、
「すまんなあ、きよみ。お前はほんまにやさしい子じゃ。

大阪行きをあきらめるのは、わしのことが気にかかるせいじゃろなあ。わしは足腰立たんようなったら里へ下りるつもりしとる。わしのことは放っておいてもろてかまんのに」

と、沈んだ声でいうのへ珠子は元気づけるように、

「お父さん、私はこのお山さんがほんまに好きじゃけん、ここから下りとうないのじゃ。お父さんもそうじゃろ？　そんなら二人とも、ここにおれるだけおることにしようよ。お社の神さんも守って下されるけん」

というと、国太郎は目をうるませてうなずき、

「おおきに、きよみ。

お前がそこまでいうてくれるなら、神社庁のお方におたのみして、このお社を継ぐつぎの宮司さんを、きよみにふさわしいお人を寄越してもらうようにしたらどうじゃろなあ。きよみはそのお人と夫婦になれば、ずっとこのお山さんにもおれるしなあ。いや、もちろん、これはわしがいよいよ弱ってからか、或いは死んでからの話じゃが」

と打ち明けたが、それは国太郎がずい分昔から、ひょっとすると珠子を養女にするときから考えていたことかも知れなかった。

新しい宮司さんを迎えて、そのひとと夫婦になる、という、自分の将来を示されたその言葉を聞いても、珠子はそれが現実の話とは思えず、言葉は耳のわきを通りすぎて行っただけであった。

第六章　遭難者

昭和四十年の今年は、例年より梅雨明けが早くて、七月十七日の大祭はみごとに晴れ上がった夏空であった。

大祭は頂上にある無人の宝蔵石神社とともに行うが、まだみこしが出るには至らず、それでも珠子が山に来ていちばんの人出、と思えるほど、ぼつぼつの参詣者があった。

大祭となると、国太郎と珠子は夜の目も寝ずというほどに忙しく、当日は暁闇のうちにはもうすっかり神殿の飾りつけ、供物を了えていなければならぬ。

白木の三方、海のもの山のものを盛った平瓮、神酒を入れた瓶子、盃、等々、洩れなく調え、そして国太郎は衣冠をつけて神事を行い、珠子も白い千早に緋の袴で介添えをする。

参詣の氏子たちは国太郎に大麻でお祓いをしてもらい、神札とお守りを頂いたのち、何がしかの寄進をして帰って行く。今年は、珠子が貞光まで下りて行って、神社庁で調達してもらった神楽のテープを手に入れ、一日中神楽歌を流したが、それは山の気に調和して荘重な雰囲気をかもし出し、好評であった。

その日は山小屋もシーズン中で忙しいと聞いていたが、夕方近く典夫がお詣りに来てくれ、珠子を見て、

「きよみちゃん、髪長うなったなあ。巫女さんの装束にぴったりじゃ。おれ今度カメラ買うけん、写してあげるよ」

といってくれた。

そして、

「八月に入ったら行場へ行こか。そろそろ咲くじゃろ」

といいおき、明るいうちに、と急ぎ足で帰って行った。

毎年、大祭のあと、あのキレンゲショウマを見に行くのが珠子の何よりの楽しみとなっていて、それは最初のときのように、典夫が誘いに来てくれるのだが、その他に、珠子は花のある間は一人でいつも心ゆくまでこの花を眺めるのであった。

大祭のあと始末は結構大へんで、氏子たちへのもてなしや社殿のことは国太郎がしても、装束のほうは亡きすぎを受けついで、珠子がきちんと片付けねばならない。

ふだんの月次祭は白の浄衣でも、大祭のときは垂纓の冠、袍、指貫などを着けるため、その塵を払って箱に納めるのもなかなかに手間がかかるが、珠子はもうすっかり馴れてきぱきとやってのけた。

八月の二日、陽の昇るころには典夫があらわれ、

「行こうぜ、お花さん見に」と誘ってくれた。
山小屋では今年勝代が高校を卒業し、家族とともに仕事を手伝っていたが、常連の登山者の一人から望まれ、卒業と同時に結婚したばかり、そのひとも山に住みたいというので、近くもう一軒、山小屋を新設するという。
その話が順調に進んでいる話をしながら、典夫は先に立って行場へと向かった。
典夫は細い山道を先に立ち、珠子はそれに遅れもせず続いて、行場の森に近づいたとき、典夫は前方をすかし見て、
「や、まだじゃ。早かった。咲いとらん」
と立ち止まって振り返った。
珠子は驚きもせず、
「十日早かったなあ。去年はお盆まえじゃったけん」
「ほんならま、蕾(つぼみ)だけでも見ようか」
と進み、花株の大群落の端に立って見渡した。
「花って暦と一しょじゃなあ。八月も十日すぎんと咲かんもん。ようきまりを守っとる。賢い、賢い」
と二人は顔を見合わせて笑い、典夫は木の株を見つけて指さし、並んで休んだ。
花は蕾ばかりではなく、ぽつぽつと半びらきになった気の早いのもあるが、この花の美

しさはいっせいに競い合って開くときであって、そのときに居合わせてこそ、至福が味わえるというものであった。

二人とも足を投げ出し、手持ちぶさたのまま、さし交わす枝々のあいだからのぞく夏空を仰いだり、まわりの雑草をむしったりしていたが、そのうち典夫が、

「こないだなあ、赤い服着たきよみちゃんの友達、遊びに来たじゃろ？　あれからすぐ帰ったんか」

と聞いた。そのせつはありがとう、と礼をいってから珠子は、

「あくる朝すぐ帰ったんよ。どうして？」

「いや、こんな山の中じゃけん。あのひとびっくりしたじゃろと思うてな」

「それはびっくりしたらしい。こんなとこにようおるなあ、と何べんもいいよったけん」

「一しょに里へ下りよていわなんだか？」

「いうたよ。大阪へ行って働こうって誘われたんじゃ」

と珠子はすらりといってのけたが、その件について悩み、一度典夫を訪ねたことはいわなかった。

「それできよみちゃん、断ったんか」

「私はいまここにおるじゃんか。断ったに決まっとる」

「そうか。それはよかった」

と典夫は安堵したように少し歯を見せて笑い、そのあと急に珠子のほうへ向き直って、
「きよみちゃん、初めて二人でここへ来た日の夜、お星さん見もっておれのいうたこと覚えとるなあ」
「なに？　どんなこと？」
「なにとはないぜ。おれはきよみちゃんがここにおるけん、学校出て山へ戻って来たんじゃ。
おっちゃん死んだら、おれのとこへ来てや。今度こそほんまに、きっちり約束してや。なあ、ええなあ」
「ちょっと待って」
と珠子は典夫の言葉をおしとどめるように手を挙げた。
典夫については、珠子は心から信頼し、山のよい先輩だといつも思っている。単調な見ノ越の暮らしも、山頂に典夫たち一家が居ると思えばずい分と気分にもひろがりができる。そしてもう一歩、典夫と自分が結婚すると仮定しても、それは遠い将来としても決して嫌ではなかった。施設出の根無し草の自分が、神職の家の娘となり、さらには山小屋を営む善良な一家の嫁となっておだやかな暮らしを、この山頂で続けるというのは、まるで夢のようにしあわせな安定感であった。
それでいい、それがいちばん、と心で望んでいるのに、珠子が典夫の申し出を飛びつく

ように受けられないのは、先夜、国太郎がまるで遺言のようにいった社の後継者のことで、「わしがいよいよ弱ったら、或いは死んでしもうたら、きよみの婿に似つかわしい若い宮司を、神社庁から寄越してもろうたらええ」

の示唆であった。

それはまだ何も現実性を帯びてはおらず、見も知らぬ男との結婚を、不安この上なし、と拒否すればできないことはないが、また考えようによっては未知の運命に対する好奇心と楽しみもないわけではない。

何よりも、国太郎の存命中、自分が見ノ越を出て山小屋へ行くことは残酷だし、またとえ約束だけであっても、典夫との結婚は国太郎の希望を打ち砕いてしまうことではある。

珠子はその気持ちを、典夫にどう伝えようか、と困りながら、かろうじて、

「あのなあ、あの、うちのお父さんまだ元気じゃし、その話、もうちょっと待ってはもらえんやろか」

というと、典夫もうなずきながら、

「それはええよ。おれもまだ二十一じゃしなあ。ただきよみちゃんの気持ちさえ決まったら、おれは待つ。おっちゃんが死ぬまで待ってもええ」

といい、珠子は典夫の、自分をみつめているまっすぐな目が少し眩しくて視線を落とし、

「典夫ちゃん、おおきにありがとう」

と小さな声で礼をいった。

ここは誰もいない深山、若い男が結婚の約束を求め、女がそれを拒否しなかったとき、次におこるべきものはなに、と珠子は本能的にそれを感じ取っており、胸の鼓動がこめかみで大きく波打っている。

が、それは典夫もおなじで、昂ぶってくる気持ちを両手を握りしめて耐えていたが、しばらくして気を鎮めてその手を解き、右手を出して、

「約束ぜ。ええなあ」

と握手を求めてきた。

珠子はほっとし、自分も右手を出して固く握り合ったが、二人のてのひらとも汗でしっとり濡れているのであった。

「また満開のころ、来てみような」

と典夫はいい、さっきのように先に立ってもと来た道を戻る。

珠子はやっぱり素直にうれしかった。

今年は梅雨が早くに上がったぶんだけ、八月に雨が多く、旧盆が終わると毎日の雨であった。山での雨降りは道がすぐ流れてしまい、憂鬱なことが多いが、一面よいのは用水槽に水がたっぷり貯まるという利点がある。

測候所では雨水は地下のタンクに貯めるしかけになっているが、こちらは舟、という四

角い桶に受けており、これにいっぱいになると行水もたびたびできるし、冬場は風呂も沸かせるのでうれしい。

珠子はこのごろ、すっかり山の見廻りにも馴れ、雨降りの朝はレインコートのフードを目深くおろし、ゴム長をはいて、よく自分の通る道を点検して歩く。

誰に頼まれたわけでもないけれど、道が無くなれば困るのは自分、という考えかたで、すすんで、段をつけた竹をなおしたり、石を据えたりする。

その日は八月十九日、山ではもう朝晩肌寒いこともあり、雨降りの日はなお冷えて、珠子は少し歩いたら今日はもう帰ろう、と思った。この道は、いつもの登山道ではなく、社殿のうしろからの細く険しい坂で、ここをまっすぐ左手に千七百十一メートルの丸笹山の山肌に添って登れば、深い与次郎谷へつきあたる。

そこから先は道は迷路のようになっているため、谷を渡ってはいかん、と国太郎にいわれており、そろそろ引き返そうか、と思いつつ、心のうちでひょっとしてもうアサマリンドウにめぐり会えるかもしれん、とそれに引かれ、なお少しずつ進んでゆく。

アサマリンドウは去年ここで見つけ、がくが水平にひらいているので新種発見、と大よろこびしたが、その後、頂上付近でも夫婦池でもいっぱい咲いていて、ちゃんと図鑑にも載っているのを知ってがっかりした記憶がある。

キレンゲショウマはお月さまの色で、アサマリンドウは夕暮れの色かな、と考えながら

歩いていて、珠子はなにかにつまずき、つんのめって前へとんとん、と二足ほど泳いだ。

なに？　と振り返ると、熊笹（くまざさ）がのびてきている細い道に茶いろの小動物がうずくまっている。キャッと声をあげて珠子はとびのいたが、様子をうかがっていても、動物は動く気配もない。

シッと追い、ソラッとおどして見たがなお微動だにしないのはふしぎ、とこわごわそばに寄ってみると、それは茶いろの靴で、足首近くにＭＥＩＮＤＬとある横文字が見える。近寄って取り上げてみると、それは珠子がまだ一度も見たことのない底裏にギザギザのある革の登山靴であった。

「立派な靴じゃなあ。誰のじゃろうか」

とあたりを見まわしてみても、靴はこの片方だけでもう片方は視界のなかにはない。しかしこんな山中で、靴が片方転がっているのはふしぎなこと、何か容易ならぬ出来ごとが起こるのかもしれなかった。

靴を持ち上げてみると、なかまでびっしょり濡れており、それは長い時間ここに放置されていて雨が浸（し）みこんだものか、或いは履（は）いたままで湿地へ踏み込んでこうなったものか、外見ではわからなかった。

しかしいずれにしろ、ここら辺りでは見かけぬこんな高価そうな靴を道端に無造作に捨ててあるのはけげんな話、もう少し先に行ってみましょう、と珠子は靴を持ったまま奥へ

進んだ。

道の両わき、片方の茂み、山肌に目を配りながらものの三分も歩いたところで、左の崖の下にもう片方の靴がころがっており、馳け寄って拾うと、たぶん血ではないかと思われる黒い点々が足の甲の外側に当たる部分についている。

してみると、この靴の持ち主はこれで両足ともにはだしになったわけだが、よく考えてみるとこの靴で足を詰め、血もにじむほど痛くなったので替わりの靴に履き替えたもの、と推測できなくはない。なら捨ててある靴を、私がもらっちゃおうかな、と珠子は靴をぶらぶらさせながら、しばらくその場に立っていた。

しかしこの推理には無理があることがすぐに判った。第一、登山道でもないこんな裏の道に誰が入ってくるかといえば、山人ならこのような靴は誰も持っていないし、よしんば持っていたとしても無造作に捨てるはずはない。

きっとここで何かあったんじゃ、と思うと珠子は急にこわくなり、靴をさげて引き返そうとした。頭の隅には、今年三月山で亡くなった吉田さんのことがあり、そのことを思い浮かべると頭のなかが混乱しはじめ、引き返す足も止まってしまった。

あのとき、同行の山本さんは、雪崩とともに転げ落ちて行った吉田さんをその場で助け出すことをせず、まず救援を求めにいったことを一生の悔いとして号泣したが、その様子はいままざまざとよみがえる。

しかしいまは八月、雪崩の季節ではない、と珠子は思った。

もしやこの靴の持ち主が足に怪我でもして、助けを求めているのなら、力を貸してあげるのが山に住む人間の勤めではないか、と考えると、珠子は勇気をふるい起こして向きを変え、少しずつ奥へ進んだ。

雨はやまず、茂る木々は頭上に枝をさし交わしてあたりは暗い。細い道はまもなく谷への下り坂となり、そこまで行ったらもう戻ろうと決めたとき、坂の中途の茂みに何やら赤い色が見えた。

赤い花？　ソバナかな、それともレイジンソウ？　いやいやソバナは紫じゃ、あのいろは、とそろりと近寄っていった珠子の目に、それはチェックのシャツの赤、とはっきりとらえられたとき、珠子は恐怖のため、体が動かなくなった。

お人じゃお人が倒れとる、どうしょう、誰もおらん、死んどるのじゃろか、どうしたらええんじゃ、と頭のなかは乱れ、足はがたがたとふるえている。

死んどるのかもしれん、と思いつつ、珠子はそれでもふるえる足を踏みしめながら、赤いチェックのシャツにそろりと近づいた。

熊笹に半分埋まりながら横たわっているのは男で、頭を坂上に、足を谷の方に向けてながながとのびており、帽子はかぶっていなかったが、リュックは背負ったままであった。

そのため体はリュックにもたれるように斜めになっていて、そして足先を見ると何と靴

下まで脱いでいて素足になっている。その足は目にしみるほど白く、周囲の緑のなかでは不気味なほど浮き上がって見えた。

珠子は立ったままで、

「もしもし、ちょっと」

と声をかけてみたが答えはなく、身じろぎもしない。

今度はしゃがんで横向きの顔をのぞき込んでみると、目を半眼に開けたままであった。やっぱり死んでるんじゃ、と思うとおそろしさはいっそう深まり、逃げ出そうと立ち上がったとき、男の頸動脈がかすかながら波立っているのが目にとらえられた。生きとる、と思うとまたべつのこわさがどっと押し寄せてきて、目の前がまっくらになってくる。

こんなときは落ち着かないかん、といく度も自分にいい聞かせ、何せ生きとるお人を捨ててはおけんのじゃけん、とそれを第一に考える。

ここへ救助を頼むとすると、珠子は一旦家に戻り、それから頂上へ登って測候所か山小屋のひとたちを案内してこなくてはならないが、それだとどんなに急いでも往復五時間はかかってしまう。運悪く人が出払って頂上に誰もいなければ、測候所の無線で穴吹基地に連絡をとることになり、その場合はさらに時間は延びて、ひょっとして夕暮れになるかもしれず、夕暮れの登山は翌朝にのばされてしまう。

その間、五時間以上或いは一日近くもこのお人を雨に打たせたまま、放ってはおけない

と珠子は思った。いまなら手当てすれば助かるかもしれないものを、自分の判断と処置が誤ったためにむざむざ死なせてしまっては一生悔いが残る、と珠子はそう考えた。

では、このお人を、どこへどうやって運ぶか、とすれば、救助の経験者のいる山頂まではとても登ってはゆかれず、いちばん近い我が家まではやっぱり山道を一時間近くはもとに戻らねばならぬ。

見れば背も高く、がっしりした体格のこのお人を、女の自分が背負うことなどとうてい不可能だと思うと、珠子は困ってしまい、泣き出したかった。

これが運命だった、とこのお人にあきらめてもらうしかないか、と次第にその方に傾いてゆき、すごすごと立ち上がったとき、珠子はハッとして自分の目を疑った。

半眼に閉じていた目がものうそうに開き、同時に力無く投げ出していた片手がほんの少し上がって、まるで珠子を招くように一振りしたのであった。

しかし考えてみれば目が開き、手が動いたのは、ひょっとして珠子の錯覚かもしれないと思った。何故なら、次の瞬間、男はまたもやものうそうに目を半分閉じ、手も力なく体のわきに投げ出しているのが確認できたからであった。

しかし一旦、確かに逃げようとする自分を手招きして呼び戻そうとしたと思えば、もうふたたび、捨てて帰ることはできなかった。

山で災難に遭ったお人は、山に住む者が助けてあげるのがルール、と珠子は言葉に出し

てそういい、自分の体を入れてその人を抱き起こそうとした。が、これは千鈞万鈞の重み、まるで地に根が生えたように一向に体は持ち上がらぬ。

よく見れば、倒れてもなお肩に食い込んで離れぬ大きなリュックがあり、重みはそのせいかと思われた。しかもリュックには左右と背後にさまざまな器具をぶらさげてあり、そのうちの三脚はどうやら撮影用のものであるらしい。

してみると、このお人はカメラマンさん？　と推察はできるが、さてそのたくさんの器具とともに体まで引きずって帰るのはむつかしい。珠子は、雨に打たれたまま、しばらく考えていたが、ここは地元の人しか知らぬ山道、登山者が迷い込んでくることもまずはあるまい、と思われ、リュックと靴はこの場所に残しておき、あとから取りにくることにした。

よしんばその間、誰かに盗まれてもそれはそのときのこと、いまは持ち物よりこの人の命が大切、と心を決め、リュックの背負い紐から片方ずつ腕を抜く。体に触ると、出ている肌の部分は冷え切っており、まるで死人のような、と珠子はすぎのことが頭を過り、ときどきひるむ思いになる。

ようやく両腕を抜いたリュックと靴とを揃え、その上を、雨で重く垂れている手近の雑木の枝を折って掩いかくし、さて、男の両腕をうしろから自分の首に巻きつけてみる。先だって、腰が抜けたという国太郎をこうして背負い、ずるずると引きずって戻ったときの

ことを思い起こし、大丈夫、大丈夫、と自分を励ましながら歩き出そうとしたが、ゴム長の先はいたずらに空を蹴るばかり、いっこうに前には進めない。

しかし珠子は、ここで投げ出そうとはもう思わなかった。

何とかして助けてあげたい、助けなければという一心でがんばっているうち、ほんの少しずつでも前に進めるようになり、まるでかたつむりのようにじりじりと上の道まで辿りつくことができたとき、珠子は思わず尻もちをついてしまった。

とりあえず一番近い我が家まで運ぶとすると、ここからは往路とは逆に下り坂となり、男の体重は珠子にのしかかるけれども、引き上げるほどの力は要らないのは有り難かった。

カメラマンさん、生きとってよね、がんばってよね、私も一所懸命じゃけんね、と、その言葉をいく度珠子は胸のうちで繰り返したことだったろうか。

すねから下は地面につけて引き摺り引き摺り、ものの十メートルも進めばハアハアと息をつき、しばらく休んだのちまた気を取りなおして前進にかかる。それはおそろしく重労働であるだけでなく、精神的にもひどく忍耐を要する作業であった。汗はぽたぽたと滴り落ちて目に入るだけでなく、喘いでいる唇からも入ってきて塩っぱい味がのどもとを通りすぎる。

とき折、男の表情を確かめるのだけれど、半眼の目はいつのまにか閉じており、生死のほどは判らなかった。

二時間か、いや三時間はたっぷりかかったと思われる格闘のあと、ようやく社の屋根が雨に煙って見えてきたとき、珠子はほっとし、気がゆるんで危うくその場にへたへたと頽れそうであった。

もう一ふんばりじゃ、と気を取りなおし、一足踏み出したとき、雨でゆるんでいる坂の土がどどっと崩れ、珠子は男とともに転げ落ちた。が、幸いなことに、その土砂くずれは珠子と男を社殿の裏まですべりおろしてくれたようで、立ち上がると、そこはもう宿坊の縁側であった。

とりあえず男を寝かせねばならないが、珠子自身も全身水から上がったほどの絞るような汗、しかしそんなことはいっておられず、ともかくも手取り足取り、引きずって座敷にあげたとき、国太郎の声が聞こえた。

「きよみ、きよみ、どこへ行っとったんじゃ。もうとうに昼どき過ぎとるじゃないか」

いいつつ宿坊にあらわれたとき、珠子もすっかり力尽きて男とともに横たわったままであった。

「なにしとるんじゃ」

とたずねられても答えることはできぬほど疲労困憊しており、ただ大きく胸を波打たせている珠子を見て、国太郎はおおよそ察したらしかった。

そろそろと男に近づき、鼻に手を当ててみて、

「息しとらん、死んどるじゃないか」
というのへ、珠子は首を振って否定し、
「ここで死なれたら、何時間も背負うてきた甲斐がない。このひとは生きとるよ、お父さん」
とようよう声を出して自分の信じていることをいい、とりあえず湯を沸かすよう頼んだ。この男にどんな手当てをしてあげたらいいのか判らないが、以前、山小屋の昭市が疲労のため動けなくなった高校生を救助したとき、まず体をあたため、熱い飴湯を呑ませたことを典夫から聞いており、とりあえずは湯たんぽを入れてあげようと珠子は思った。
国太郎の、すこぶる敏捷でない動きを見ていると少々はがゆく、珠子は気力をふるいおこして起き上がり、着替えさせるため国太郎の下着と浴衣を取りに行った。ぐっしょり濡れた男の衣服を脱がせ、冷たい体をマッサージして乾いた浴衣を着せるのだが、こういうときは国太郎が下半身、珠子が上半身を受け持つ。そして国太郎は、
「お神酒を持ってきいや」
と指図し、男の唇をこじあけるようにして匙で冷酒を流し込んだ。
二人は男の顔をみつめながら絶えず体を強くさすり、軽く叩き、血行をよくするよう手当てしているのだけれど、男の状態はなかなか好転する気配はない。
「与次郎谷の谷底へ落ちとったんか」

「いいえ、谷へ下りる小道の途中、熊笹のなかに寝とったんよ」
「なんでそんげなところへ入って行ったんじゃろか」
「このひとお父さん、カメラマンさんじゃと思うよ。リュックにいっぱいカメラ道具ぶらさげとったんじゃもの」
国太郎と珠子はマッサージの手を休めず、互いに小声で、
「助かるじゃろか、お父さん」
「さあそりゃ判らん。顔はもう死人じゃもんなあ」
「どうしたらええ？　山小屋のおじさん呼んでこうか」
「わし一人ではよう看病せん。きよみおらんあいだにこのおひと、死んでしまうかもしれんしなあ」
「そうじゃなあ」
二人はひそひそと相談しあうものの、いましばらくこのままで様子を見るより他、手立てはなかった。
そのうち国太郎は、
「わしはもう疲れた。ちょっと休ましてもらう」
といって母屋に帰り、珠子はひとりでマッサージを続けていたが、こちらも疲れが出たのか、いつのまにかうとうとしていたらしい。そんなに長い時間ではなかったと思うが、

むき出しの腕を蚊にくわれて目ざめたとき、男の顔に視線を当ててびっくりした。死人のいろ、と国太郎がいった土気いろの顔に赤味がさし、あきらかに生気が感じ取られたからであった。まだ唇は紫いろのままだが、頸動脈の搏動もさっきより大きくあらわになっている。

珠子はその顔近くに口を寄せて、

「もしもし、気が付きましたか。わかりますか」

と呼びかけたところ、目も開けず、ものもいわないけれど、微かに唇が動いたのをとらえたと思った。

珠子はうれしくなり、

「もしもし、もう大丈夫ですよ。あんたさん助かったんですよ」

とつづけざまに大きな声で話しかけてみるのであった。

男は年のころ三十代の前半ぐらいだろうか、その若さが看病する側のたよりであって、珠子の我を忘れるほどの熱心な手当ての甲斐あって、男がようやく目を開け、正気が戻ったのはその日の夜であった。

ひどく弱々しい声で、

「ここはどこでしょうか」

とたずねたのが第一声で、珠子が説明すると、

「それでは、私は死んでいたのですね」

と深いためいきとともにそういい、またもや目を閉じたが、その両目尻から涙が糸を引いているのを珠子は見、タオルでそっと拭いてあげた。

その夜は、熱い粥を珠子の手から一さじ一さじ口に入れてもらい、さもおいしそうに食べたあと、また深い眠りに落ちたらしく、翌日の昼近くまで目ざめなかった。

着替えするとき国太郎が見つけたが、男は右足首が大きく腫れ上がっており、捻挫か骨折か、すぐに歩けるような様子ではないため、夜も珠子がそばに付き添って眠っている。

男の名は久能卓郎といい、フリーのカメラマンで、全国の山を歩いて高山植物を撮っているのだという。

もっとも、姓名職業を明かせるほど意識がはっきりしてきたのは三、四日のちのことで、それまではなお昏々と眠っているほうが多かった。

ひょっとして、このまま恢復することなく死んでしまうのではないかと危ぶまれ、その寝顔を見つめていると、珠子の胸には何やら名状し難い不安と悲しみが押し寄せてくる。

ただ一つの希望は、大声で呼びかけるとうっすらと目を開くことで、そのときを見計らって熱い粥を口に入れてやるとゆっくりと飲み込むし、そのあと、そろりと起こしておぶい、便所に連れていくと、これだけは何とか一人で用を足すのであった。

しかしこの男はいわば遭難者であり、このあとの処置についてどうすればよいか、父娘

は手をこまねくが、国太郎はやっぱり、
「警察に届けんといかんなあ。きよみちょっこり上へ登って、無線で連絡してもらいや」
という。
珠子は、この男のリュックと靴を道のわきに置き去りにしてきたことも気にかかっており、いま警察に上がってきてもらえばそれらも引き上げてくれるだろうが、何故か、それはしたくなかった。
「ほんでもお父さん、警察が来たら担架にのせられて下ろされるじゃろ？　右足にも怪我しとるようじゃし、動かさんほうがええんとちがう？　このまま養生さしてあげて、癒ったら警察に連絡してもかまんじゃろう？」
「それは何もかまわんが、きよみが大へんじゃ思うてなあ。それにこの宿坊もぼつぼつ予約も入っとるし」
「私はええよ、お父さん。このひともう少し元気になったら、母屋へ移ってもろうたらええし、明日はあの隠しておいたリュックも私が取りに行ってくるわ」
「そうか。一人で大丈夫か。何なら山小屋の典夫さんに助けてもろうたら？」
「ううん、大丈夫じゃ。きよみこのひとを背負うて来たんじゃもの」
「そうじゃ。きよみは思いの他力持ちじゃもんなあ」
と珠子は引き受け、三日目、ひとりで先日の道を辿った。

この剣山も夏場ともなれば登山者の姿もぽつぽつ見かけるが、この道は与次郎谷で行きどまり、誰も入って来はせず、先日の荷物は珠子が木の枝で掩ったままの姿で、もとの位置にあった。

が、雨を吸ったリュックはまだ乾いておらず、とうてい手では持ちあげられず、珠子は久能卓郎をもう一度かつぎあげるほどの気持ちで背負い紐に両腕を入れ、ぐっと力を入れて負い上げた。

リュックを持って帰った夜、どうやら意識の戻ってきたらしい男に珠子は、

「ここは明日、泊まり客がありますので、私どもの家のほうに移ってもらいますね」

といい、抱きおこしてから自分の背を向けると、男は片方の腕だけ伸ばして珠子に預けるようにした。

歩く意志がでてきたのだな、と思い、その腕を自分の首にまわし、片手を男の胴にかけて一歩ずつ進むと、怪我の足をひきずりながらゆっくりとついてくる。

国太郎も手伝い、奥の間の蒲団の上に体を横たえると、男の額はすでにびっしょりの汗で、ものもいえないほど息を喘がせているのであった。

「お父さん、このひとすごく弱っとるんじゃわ。無理もないなあ、半分死んどったんじゃもん」

というと、国太郎はそれを恐れ、

「ほんじゃけん、きよみ、ここで死なれたら困るんじゃ。明日の泊まり客は池田の専売公社のお人らで、あさってには穴吹へ下りるそうじゃけん、そのお人らに頼んでやっぱり警察に来てもらお。なあきよみ、そうしよう」

というのは、すぎに死なれたときのかつての困惑をまざまざと思い出したらしかった。

珠子は、それに対し、

「うーん、そうじゃなあ」

と生返事しつつ、考え込んでいる。

雨の日、ふだんめったに踏み込んだことのない山道に入り、倒れている人を発見したのは単なる偶然か、それとも、この男と自分との運命的な出会いか、と思うと、折角ここまで助けた人を警察の手に引き渡すのはいかにも惜しい気がする。

あのひとがうっすらと気がついたときの第一声は「ここはどこですか」だった、教えてあげると両目尻から涙の糸を引いて目を閉じてしまった、もっと元気になって、せめて何故、与次郎谷で倒れていたかのいきさつなりと聞かせてもらったあと、別れてもいいのではないか、と珠子は思い、その夜、火のない囲炉裏のそばでいつものように枕を並べて寝ながら、国太郎にその旨、頼んだ。

「お前がそういうならええよ、わしは。じゃけんど、この辺では見馴れんような風体じゃし、カメラの道具もようけさげてパチパチ撮るようなお人は、うちの神さんもお好きじゃ

ないかもしれん。神さんのお怒りでお山さん荒れんように、そこ考えてなあ」

などと古いことをいって国太郎は釘をさした。男の恢復は案外と時間がかかり、ようやく姓名と住所、職業を自分の口から明かすことができたのは四日目の朝であった。

囲炉裏のそばへにじり寄って来、手をついて深く頭をさげ、

「何とお礼を申し上げてよろしいやら、助けて頂かなければ私は当然死んでいました。このご恩返しはどのようにしたらいいのでしょう」

久能卓郎は、まだ長話は苦しそうだったが、ご迷惑おかけしたわけ、聞いて頂きます、と低い声でゆっくりゆっくり、

「私は昭和八年生まれで三十二歳。高山植物に魅せられ、それまでの会社を辞め、この仕事に就いて五年になります」

と少し休み大きな息をしてから、

「これまでに、花を追って北海道、日本アルプス、九州、とひとりで歩き、撮りつづけてきました。人跡稀な山岳地帯に、誰が種をまいたわけでもなく、誰がこやしを与えたわけでもなく、しかも強い風雪に耐えてひっそりと咲く可憐な花々を見ると、私は涙の出るほど強い感動を覚えるのです。

いったい花は、誰に見てもらうために咲くのか、などと考えていると、ほどなく散る運命のその姿をせめて自分の手でカメラに収めたい、と思い、どんな険阻な山でも登って行

って写しました。

狙った花を前もってしらべ、現地に乗り込んで登り、天候待ちや、開花待ちのため、ひとりでビバークするときの心のときめき、そしていよいよそのときが来て、撮影するときの昂奮ときたら、たとえようもありません。

三脚を据え、そよとの風にも動かぬ一瞬をとらえてシャッターを切るのですが、私にとってはこれが自分の全人生だと思えるほどの至福の時間です。我ながら、よくぞこの仕事に就いたと思えるほどなのです」

と久能はまた休み、珠子の差し出した番茶をゆっくりと飲み干してから、

「剣山へはキレンゲショウマを撮りにやって来ました。

世界でも稀なこのキレンゲショウマが剣山にのみ咲くことを知ったのは、東京の都立大にある牧野標本館を訪ねたときのことでした。私は、この徳島県の隣の高知県出身である植物学者の牧野富太郎先生を日ごろからとても尊敬しています。

都立大へ行って牧野先生の足跡を詳しく調べていると、矢田部良吉先生に行き当たりました。この方は東大植物学教室の初代教授となられた方で、そしてこのキレンゲショウマの発見者、名付け親でもあったのです。

牧野先生はこの教室に出入り、ヤマトグサの新種命名など活躍なさったのですが、それが矢田部先生にはお気に召されなかったらしい。そしてその後、牧野先生は『日本植物志

図篇』の第一巻第一集を自費出版されたことで矢田部先生のげきりんに触れ、とうとう破門をいい渡されてしまいました。

このときの矢田部先生のお怒りはすさまじかったらしく、牧野先生は国内にはいられなくなってロシアへ亡命なさろうとしたのですが失敗、そのあとは東大農学部の研究室でひっそりと研究を続けておられました。

しかし運命はめぐってその後矢田部先生が罷免され、松村任三先生がとって代わったため、牧野先生は東大助手として雇われ、本格的な『大日本植物志』に着手することができたのです。

私はいまだ牧野先生の『自叙伝』は拝見していませんが、あらましの経歴を辿っても矢田部先生の牧野いじめは相当なものであったと思われます」

久能はこんな話、いいでしょうか、とためらいながらもゆっくりと続けて、

「その矢田部先生が名づけたキレンゲショウマを、ぜひとも自分の手で撮りたいと私は考えました。

そこで八月中旬から下旬にかけてという開花時期を見計らい、東京を出発して穴吹の宿に泊まったのが十七日でした。いま思えば、私はこの山を見くびっていたのかもしれません。

日本の山の名は駒と剣のつくものがいちばん多いそうですね。

なかでも最もけわしいのが北アルプスの剣岳で、ここはたしか二千九百九十八メートルであったと思います。私は一度ならず二度までもこの山に挑みましたが、峻烈な岩石には歯が立ちませんでした。私の登山技術など寄せつけないほど剣岳はその名の如くきびしかったのです。

ですから、おなじ剣の名でも、四国の剣山は剣岳より千メートルも低く、そしてまことに女性的な、なだらかな山形をしていると聞いて、かなり緊張がゆるんだのだと思います。

それに先年、高知市五台山に牧野植物園が完成し、見学したばかりでしたから、四国とは案外近いところだと感じていたし、剣山へは一日の行程だと聞いていましたから、ごく気軽に、東京近郊にでもでかけるような気持ちで穴吹駅前からバスに乗り、川上車庫前の終点で下りました。

それから川に沿って登りはじめ、富士ノ池一号橋を渡ったあと、左へ行かなければならないところを、どうやらここで間違えたらしいのです。右へ取って進めど進めど、教えられた追分という集落は見えてこない。あるものは人一人通れるかどうかの細い道と、うっそうと茂った樹木ばかり、さっきの分かれ道まで引き返すべきだと思いつつも、私はそれをしなかった、いやできなかったといったほうがいいかも知れません。

道に迷う遭難者というのは、まず思いちがいをするそうですが、私も正しくそうでした。こちらを進めば、地図にあるお花畠につきあたり、そこを通りこせば行場が見えてきて、

もういちめんのキレンゲショウマだと、信じ込んでいたのです。

しかし、いくら歩いても歩いても同じ景色ばかりでした。悪いことに、穴吹を出るとき調達したのは弁当一食分だけ、それを食べればあとは何もないし、水もすぐ飲み干してしまった。そのうち日は暮れる、山は深い、カメラは大きな六六と三十五ミリ、二機までもリュックに入れ、フィルムは欲張って五十本、三脚は頑丈なやつをぶらさげている。この荷を持ってくるため、私物はできるだけ少なくしてビバーク用品はおろか、非常用具さえ入れてなかった。

しかも夕方から雨になってしまいました。まさに最悪の状態です。こういうときは歩きまわることをやめ、雨のかからない大きな木の下か、横穴があればベストで、ここに休みつつ救助を待つ、というのが助かる常識ですね。

しかしあのときの私には、そんな簡単な山の心得など、頭に浮かぶ余裕などなかったのです。救助なんて絶対にくるはずはない、あくまでも自力で道をみつけなければ、と焦ったのです。何故なら、半日以上歩いても、人っ子一人会わないし、この山が如何に深いかが判れば、自分が人しれず白骨死体となるのはとても恐ろしかったのです。

そのうち闇がすべてのものを包み、一歩進むのさえ困難な状況になりましたが、それでも私はなお前進しつづけました。

手さぐりで、いや足でさぐって一歩進み、進んでは木や山肌に凭れかかって休み、そし

てまた進む、といった具合に、私は一晩中、歩きまわりました。

いまにして思えば、歩きまわるとはいっても、闇のなかですから方向感覚はないし、たぶん同じところを行ったり来たりか、或いはどうどうめぐりか、そんなことではなかったでしょうか。

それでもおかしなものですね。どんなに疲労困憊しても、カメラだけは肩からおろさなかったのですから」

と久能は苦笑いして、しばらく押し黙った。

珠子は身をのり出して、

「私が先に見つけたのは靴でしたよ。はだしで歩きまわったんですか」

と聞くと、久能は自分の足を眺めながら、

「暁がた近くでしたね。目の前に古い洋館が建っていて、立派な金具のついたドアがあるんです。ああ、家があった、休ませてもらおう、と思って私は近づき、ドアを開けようとしたがいっかな開かない、そこで足で蹴ったんです。力まかせに蹴りつづけたんです。

すると一瞬、洋館はかき消え、もとの厚い闇があるばかり、なんだ錯覚か、と振り返ると、今度はうしろに同じ洋館とドアがある。そこでまた足で蹴る、蹴りつづける、そのうち足がとても熱くなってきて、靴を履いてはいられなくなった、ぽーんと片足を脱ぎ、また片足を脱ぐと、目の前のドアがぽっかり開いているのが見えました。

私は喜んで、そのなかに吸い込まれるように入ってゆきました。記憶はここまでです。気がつくと、あたたかい寝床に寝かされ、お二人のマッサージを受けていました」

と久能はここまで語り、そしてうしろへ退って手をつき深々と頭を下げた。

「ほんとうに有り難うございました。感謝の他はありません」

国太郎はいやいや、と手を振ってそれをとどめ、

「きよみがなあ、がんばったんじゃ。おなごしの力でようあんたを引きずってきたもんじゃとわしもほとほと感じ入っとる。

ところで」

と国太郎は改まって、

「これから先、どないなさる？　山の事故は必ず警察へ届けんならんし、そのお足では一人ではまだ下りられんじゃろ。

明日にでもきよみに上へ行ってもろうて、警察へ連絡頼みましょうぞなあ」

というと、久能はさっと顔いろの変わるほどに手をあげてそれを押しとどめ、

「あの、まことに重ね重ねご迷惑をおかけしますが、警察への届け出はちょっと待って頂けないでしょうか。

足がよくなるまで、ここに置いて頂けたら一人で山は下りられます。いや、宿泊費なら持ち合わせております。しばらくは大丈夫です。ぜひそうお願いします」

「それではこのまま黙っておれと？　うちの宿坊の客とおなじ扱いで？」
国太郎が驚いてそう問い返すと、
「警察へ届けなかったことで、お宅が罰を受けるとか、そういう例はあるのでしょうか」
「それは知らん。それは知らんが、以前、山小屋の昭市さんが疲労で動けなくなったひとを助けたときは、人命救助とか何とかで、昭市さんはたしか警察から表彰を受けたなあ。ほんじゃけん、今度もきよみに金一封くらいは出るかも知れんが」
「お父さん」
珠子はうす赧くなって国太郎をたしなめると、久能は、
「はい、そうだと思います。きよみさんの行いは、金一封はもちろん、広く世に披露してさしあげなくてはならぬ善行だと思います。命がけで私を助けてくれたのですから。ただ、警察へ連絡すると、私はただちに山をおろされてしまいますね。我がままをいわせて頂くと、もう少しのあいだ、せめて足の傷がよくなるまで置いて頂くことはできませんでしょうか。
きよみさんにはせめて、私のほんの気持ちなりのものを受け取って頂きたいとは思っているのですが」
「ふうん」
と国太郎はふしぎそうに腕を組んで、

「あんたは変わったお人じゃなあ。東京のお人ちゅうんは皆そんなんかなあ。ふつう山で災難に遭うてようよう助かったのなら、帰心矢の如しで一刻も早う家に帰りとうなるんちがいますか。お家にはご家族おいでにならんのですか」

「はい」

と久能が口ごもるのを見て珠子はわきから、

「お父さん、うちはなんぼおいでてもろうてもかまわんじゃないの。お好きなだけ泊まって頂いたら、うちも賑やかになるし」

と熱心に頼み、そうなると国太郎も、

「そんなら長期滞在のお客さんということにするか。もっともそんなお人はいままで一人もおらなんだけどなあ」

と不承不承ながらうなずき、久能はふたたび深く頭を下げて礼を述べた。

しかしこの客は、何も彼も自分のことは自分でする宿坊の客とは違って、まだなかなかに手がかかり、珠子はしばらくのあいだかかりっきりの毎日であった。

本人はなお十分に動けないので、珠子が代わって濡れたリュックからカメラや部品を取り出してひろげ、そしてあの日、脱がせた衣類はすべて洗って干し、アイロンをあててまた着替えさせなければならぬ。

足の傷には赤チンぐらいしか薬はないが、腫れにはドクダミの葉をもんで貼ればよい、

という国太郎の知恵を借り、ネルの切れにそれを塗って毎日繃帯をとりかえている。

珠子の毎日は急に忙しくなり、久能の世話の他に、巫女の仕事、社務所の事務、社殿の清掃、食事の支度、そして宿坊の客たちから料金を受け取る役割もあり、ゆっくり休む暇もない有様であった。

山に来てからこんなに忙しいことはいままで一度もなかったわ、と思いつつ、しかし何故かそれはちっともつらくはなく、むしろうきうきとして、体もよく動く。

とりわけ久能のそばにいるとき、何故ともいえぬ心の弾みを感じ、できるなら一日中、このお人の世話をしていたいなと考えている自分に気付き、ハッとする。

あの日、生死の境をさまよっている久能の顔をみつめているとき、珠子はふしぎな思いに打たれていたことも思い出す。それはこの、まだ名も所もしらぬ行き倒れの男性と自分とは、遠い昔、何かの因縁でつながっていたのではないかという宿命観であって、それがいまようやくめぐりあったのではないかという気がしてならないのであった。

でなければ、めったに行かないあの道へ自分が入り込むわけもないし、久能もまた、あの場所で自分の目に止まるような具合に倒れていることもなかったろう、と思えば、この出会いはやっぱり運命の神の導きではなかったのかと感じられなくもない。

それは以前、国太郎から聞かされた自分の、出生の仮説の影響かもしれないが、久能の、ここら辺りでは見かけないような容貌と声、そしてラジオを聞いているようなめらかな

東京弁などから、ひょっとして東京の人に縁のあるかもしれぬ自分との関わりが思われるのであった。

そしてもう一つの大きなつながりは、久能が花に魅せられた挙句、それをカメラに収める仕事をしていることで、これは珠子の、花あるためにこの剣山行きを承知したこととぴったり相通じることになる。

久能は、この家に滞在が許されたころから日一日と元気を取り戻し、日中は起き上がって片足を引きずりながら、社のまわりくらいは歩けるようになった。

カメラの手入れも怠らず、乾いた布で磨いた器材類を座敷に並べるのを珠子は手伝ってやりながら、これを早くいいたいと思っていた、

「久能さん、キレンゲショウマはお月さまの色をしていますよ。とってもとっても気高くて、そして愛らしくて、何ともいえず美しい。私は大好き。毎年、この花が咲いてから散るまで、五、六回は必ず見に行きます」

というと、久能は目を輝かせて、

「そうでしょう。そうだと思っていた。標高千八百メートル以上の湿地にしか咲かない花だから、人間の俗臭など寄せつけないような誇り高さがあるのでしょうね。お月さまの色とは、きよみさんの形容ですか。

私は天の花、天の果ての花、などとひとりで名前をつけながら登ってきました。

どうでしょう、まだ咲いていますか。散り残っていますか」

まだ花は咲いていますか、と聞かれ、珠子は、今日は八月の二十六日、去年の例でいうと全花いっせいに咲き揃ったのは旧盆の入りの十三日、それから一週間後に行ったときには花は三分の一以下になっていたことを考えると、年によって違いはあるにしろ、もう花は終わってしまっていると思わねばならなかった。

珠子がそう説明すると、久能はしばらく考えていたが、

「花はなくても、パルマータというその葉はまだありますよね。きよみさんにまたもやご厄介をおかけすることになりますが、私をその場所に連れてって頂けないものでしょうか。いやなに、足ならひきずりながらでももう歩けます。大丈夫ですから」

と折り入っての頼みであった。

珠子はとたんに困惑し、口ごもりつつも、

「じゃけんど、それはとても無理。私の足でも一時間以上はかかる山道じゃけん」

と断ると、久能はあきらめず、

「しかし私はこの花を撮るためにやってきたのですよ。せめてその葉なりと場所なりと自分の目で見ておきたいじゃないですか」

と懇願したが、珠子も花のこととなると頑固になり、

「あの花を写してくださるのは、私もとてもうれしいけど、やっぱり花は盛りの、いちば

んきれいなときにお見せしたいんじゃ。
終わったあとで見て頂くのは花もかわいそうじゃけん」
というと、久能は、
「まるで自分のことのようにいわれるんですね」
と笑い、珠子も、
「そうじゃ。このお山さんにある花は全部自分のものじゃと思うとりますけんね」
と一しょになって笑った。
そのあと、ふと気づいて、
「久能さん、どうしてもあの花を撮りたいなら、来年またおいでればええじゃないですか。そのときこそ、迷わない道を私がご案内しますけん」
というと、久能はふと目をあげて、
「来年ねえ」
と呟き、そして真顔になって、
「来年またお伺いするのじゃなくて、来年までここにご厄介になるのはまずいですか。ご迷惑でしょうか」
と聞いた。
え？　と珠子はおどろき、久能の顔を見ると、その目は澄んで真剣ないろをたたえてお

り、それは珠子が生まれてはじめて感じた胸のふるえるような感じであった。

　このお人は、このお山さんが好きになってくれたんじゃ、この先ずっと私と一しょにおってくれるんじゃ、と思うと、わけもしらず熱いものがこみあげてきて、思わず涙声になりながら、

「なんぼでもここにおって下さい」

　と心からそう答えた。

　久能の体はすこしずつもとに戻り、次第に元気になって行った。

　九月に入ると、珠子に宿泊費をお払いしたいといい、珠子は国太郎に相談したところ、

「受け取らんのも久能さん居辛(いづら)かろう。ここの宿泊費はお客の寄進ということじゃけん、お志でええ」

　といい、そういうと久能は困り、頭に手をやって思案していたが、翌日になって親娘二人の前で、

「ここに三十万円あります。私の現在の全財産です。私に似つかわしくない大金と思われるかもしれませんが、撮影に出ると途中でどんなことが起こるやもしれないので、いつも家にある金を集めては持って出るのです。

　このうち十万円はきよみさんに受け取って頂こうと思っていましたが、お礼は必ずいず

れの日にかさせてもらうことにして、いまはお二人にこの金は使って頂きたいと思います。もっとも、私が長く居候させて頂くとなると、すぐ尽きてしまう金額ですが」

と、しわだらけの紙幣を差し出した。

国太郎はたまげて、

「これはまた、こんな大金を」

と二の句のつげない様子だったが、珠子は久能が大金をリュックに入れてあることはほぼ察しており、それは濡れたものを乾かすとき、厚い封筒があり、それが札ではないかと考えて自分は手を触れなかったことを思い出した。

国太郎は困り入り、

「いやあこれは受け取れん。引っ込めてください」

と辞退するばかり、久能との押し問答の末、

「ほんなら、この金はここの引き出しに入れておこう。この三人誰でも必要になったとき、使わしてもらうことにしよう。

ま、山では買うもんもないが」

でようやくその場はけりがつき、三十万円は部屋の隅の戸棚の引き出しに納められた。

山で暮らせば事実金をつかうこともないが、しかし金があるのとないのとでは気分もちがうと見えて、気のせいか国太郎の久能に対する態度も少しばかり親しみが増して来たよ

うに珠子は思う。

それに久能は話し好きなのか、高山の花の話などよくしてくれるし、山にいて話題のない国太郎には結構退屈しのぎになる点もあった。酒もほどほどにいける口で、国太郎のよき相手となり、炉端の食事はいつも長くなってしまうことが多い。

「高山植物は、日本中ではどこがきれいじゃな？　久能さんはあちこち歩いておられるじゃろ」

と国太郎が問えば、久能も、

「そうですね。高い山に登ると必ず中腹には針葉樹林がありますね。ここを通りぬけると高い木はなくなり、岩礫地帯となる。

私はやはりこの高いところに風になぶられながら凛、と咲いている花が好きですね。本場はやはり北海道でしょうか。

なかでもキバナシャクナゲ、これは大雪山では見渡す限りに咲いています。

キバナシャクナゲは、緑のない岩場にしっかりと根をおろして、淡いクリームいろの花を咲かせていますが、視界の限りそのクリームいろが拡がっている光景を想像して下さい。

私は危く気が狂うところでしたよ。まるで別世界に迷い込んだような気がして、撮っても撮っても倦きず、とうとう一晩、花のなかで眠りました。何ともいえぬよい香りに包まれたまま」

と久能は遠くを見るような目つきをし、珠子もすっかり昂奮して、
「そのときのお写真はどうなさったん？　見ることできるんじゃろか」
と聞くと、
「いや、あまりに美しいものは人に教えたくはないですね。ポジは蔵ったまま、誰にも見せてはいません。
もっとも、いまではキバナシャクナゲは誰でも知っていて、写真はたくさん出廻っています。が、自分の写したものはちがう。人にはわからない愛着がある。
さらにいえば、自分で撮りつづけながらいうのもおかしいのですが、花は写真ではダメなんです。いくらうまく撮ったところで、あのこわれそうでこわれない薄い花びらや、いかにも重そうなぼってりした厚い花びらや、そして明日は散るかもしれない花自身の誇りと悲しみ、こんなものをレンズという無機質の物体がとらえられるわけはないでしょう。
写しまくったあと、私はいつも必ず自分の行為が意味のないものに思えてきて、懐疑的になりますね。いい年してまるで高校生のような悩みです。
でも、それでも私はやっぱり花を撮っているんですよ。おそらく一生、もう他の仕事に就くことはできないと思いますね」
と語る久能の言葉を、国太郎は、
「ふうん、むずかしいもんじゃろかなあ」

と聞き、珠子は、このお人は自分よりももっと深く深く、花のことを愛しているのだと思った。

こんなふうに、三人して食膳を囲み、久能からは花の話を、国太郎からはこの山の話をのんびり語りあい、聞きあいしていると、この三人はずっと昔から家族であったような、そんな気さえしてくるのであった。

久能は足のよくなるにつれ、珠子を手伝って薪を運んだり水を汲んだりよく働き、それがいかにも楽しいらしく、ときどき鼻唄や口笛など吹いていることもある。

ある日、珠子が、

「久能さん、お歌お上手じゃなあ。聞かしてもらいたいなあ」

とねだると、

「いいよ。上手じゃないけど、うたうのは好きだよ。私はいつも単独行だから、山の中でさびしくなるとよく歌をうたう。するとそばに親しい友人がいるような気になるからふしぎなんだなあ」

と、洗濯する珠子のそばに立ち、ズボンのポケットに両手を入れたまま、低い声で口ずさんでくれた。

「モルゲンロート、モルゲンロート、清らに輝く、いざ声高らかに、うたえ朝の歌を、そよ風薫りぬ」

と一番をうたうと、次はドイツ語でもう一度うたい、
「山の唄にはね、胸を張って高らかにうたうものが多いし、またリズミカルで元気を鼓舞するようなものも結構ある。
私はこのあいだ生死の境をさまよっていたとき、一人で歩きながらよく唄う『大尉の遺言』を思い出していたんだ。何だか心境的に似ていてね」
と前置きしてうたったのは、
「山の大尉は傷ついた、部下の山岳兵たちに、も一度ここで逢いたいと、息たえだえにことづけた」
と一番をうたい、そのあと六番までは珠子のわきにしゃがみ、たらいのへりを指で叩いてリズムをとりながら、
「大尉に呼ばれた山岳兵たちは靴がないので歩けない、などといっていたが、ともかく臨終間近い大尉のもとを訪れたところ、大尉は遺言として自分の体を五つに切り、最初の一切れはイタリア皇帝に捧げ、次の切れは連隊に贈り、第三の切れは母上に、第四は愛人のもとへ、そして最後の切れは山に埋めて欲しい、そしたら山はきっと薔薇の花で埋まるだろう、とこういう歌なんだよ。
おもしろいでしょう」
と語るのを、珠子は洗濯の手を休めて聞いていたが、その歌が久能の遭難時の心境に似

ているというなら、第四の体の切れを渡すべき愛人は久能さんにはいるんですか、という質問が唇まで出かかったが、胸がどきどきし、その言葉をぐっとのみ込んでしまった。

久能は、写真の話、山の話ならとても快活に、聞かれるままに話してくれるが、自分の私生活については一言も語らなかった。

結婚しているか、子供はいるか、両親は、と珠子には知りたいことはたくさんあるが、どうやら話題がそちらに行くのを避けているような気配がある。山も十月までは宿坊にも一般客があるので、その客に頼んで、無事でいることを家族に宛て電報でも打ってもらったら、と先日も国太郎がすすめてみたが、久能は頭から、

「いや、誰も心配はしてませんよ。山へ行けばこんなものですから」

といい、応じるふうもない。

しかし珠子は、そんな小さな気がかりな問題をかかえながらも、久能がいる毎日はたのしくてならなかった。なるべく気持ちよくここで過ごさせてあげたい、と心をくだき、ふと気がつくと久能のことばかり考えている。

あるとき、洗った久能のシャツにアイロンを当てていると、そばで見ていた久能がとても珍しそうに、

「そのアイロン、どうしたの？　なぜそんな手間のかかることしているの？」

と目を見張ってたずねたことがあった。

珠子は、つばをつけた指さきでアイロンの腹をジュッと鳴らせてからそれを使いながら、
「おもしろいでしょ。これ火のしっていうの。電気でなくて炭火を入れて使うんじゃ。死んだお母さんが大事に使っていたから、私もそうしようと思って」
というのを聞いて、久能はさらに、
「ここ電気も来てるんじゃない？　電気アイロンのほうがずっと便利だよ。一つ買えば？」
とすすめると、珠子は笑いながら、
「判っているけどなあ。しばらくはお母さんのやっていたとおりにしていたいんじゃ。そのほうがお母さんもうれしがると思うし、それに手間かけたほうが久能さんも喜ぶでしょうし」
とうす赧くなって答え、それを聞いて久能は、
「きよみさんはとても親孝行なんだなあ。私のことはともかく、いまどきそんな心のやさしい女のひとってはじめてだよ」
としみじみいったが、珠子は静かにほほえんでいただけであった。
このとき久能はまだ珠子の身の上はなにも知らなかっただけに、のちに事情が判ったとき、こんな光景を胸を熱くして思いおこしたものであった。

九月に入ると、この見ノ越一帯は俄に騒々しくなり、朝八時過ぎになると大ぜいの道路工事の人夫さんたちがやってくる。

それというのも、ずっと以前から剣山国定公園の登山道や車道の開発プランがあり、年々少しずつ進んで、どうやら今年中にはこの見ノ越までまず車道が通るらしかった。

こちらは池田町から上がってくる西の入り口で、現在バスは祖谷渓に沿って名頃まで通じている。そこから先、祖谷川の源流沿いに見ノ越まで車道を通せば、ともかく車は登れることになり、生活上どれだけ便利になるかしれなかった。

ゆくゆくは、この見ノ越から頂上近くの西島までリフトが開設されるらしく、そうなると見ノ越―頂上一時間四十分のいまの距離は、リフト二十分ののちあと徒歩四十分で頂上に至るというわけになる。そうなれば登山者も大幅に増えるであろうことを見越して、この剣神社のすぐ下には土産物屋も何軒か店を出す予定だそうであった。

このプランは、東西の祖谷山村に氏子を持つ剣神社には朗報ではあるものの、まだ個々の家ごとに車を持っている状況ではないため、国太郎は前々から、

「どうじゃろなあ、お山さん掘り返して道つけたりするのは」

と疑問を呟いている。

この名頃―見ノ越間の車道も、何年か前からところどころ工事をして来ており、残るは社殿下だけとあって、雪のこぬ間に最後の仕上げをするらしかった。

神職の家は下の道からは百二十段の石段のぶんだけ上にあるので、工夫さんたちの工事の騒音はそれほど響いてはこないが、それでも社の行事以外の日は親娘二人だけですごしてきたこの家にとっては、急激な環境の変化とでもいえそうであった。

「何だか落ち着かんなあ」

と国太郎がいえば珠子も、

「誰かに急かされているみたいじゃなあ」

といい、そして意外にも久能はこの工事の状況を見るのを嫌い、部屋のなかに閉じこもっている。

「ここまで来て、下界の風俗を見せられるのもおかしなものですよ」

というが、工事の騒音を避けるためにももう足もよくなった久能を、珠子はそろそろ連れ出してあげようと思った。

「お花見に行きましょうか」

と誘うと、久能は目を耀かせて喜び、思わずカメラの荷を振り返ったが、

「これはまだやめておきましょう。無計画に撮るのはいけない」

と自分にいいきかせ、

「何を見せて下さるのですか、剣山の花博士さん」

と呼び、珠子もおどけて、

「まずリンドウ、と参りましょう。頂上はまだでしたなあ」
と、まず平家の馬場へと目指す。
珠子は、あの遭難時の赤いチェックのシャツにチョッキ、きれいに乾いたマインドルブーツを履いた久能を案内して、通い馴れた道を登りながら、
「頂上にはアサマリンドウがいっぱいです。ちょっと下には晴れた日だけ開くリンドウもあります」
「きよみさんはリンドウの種類をいくつ知っていますか」
「え？　いくつって」
「たくさん種類があるんですよ。リンドウは薬草ですから。雪が降ってもまだ咲いているミヤマリンドウはアルプスですね。駒ケ岳かな。
トウヤクリンドウは紫でなく黄いろ。これは白馬岳で。同じ黄いろでも北海道にあるものはクモイリンドウといいます。オヤマリンドウ、エゾリンドウ、ツルリンドウ、タテヤマリンドウ、その自生地の名がついていますが、リンドウは皆、曇天には花ひらかず、太陽を見ると笑顔になりますよ」
「参りました」
と珠子は謝り、二人顔を見合わせて笑ったが、こんな雰囲気のなかにいると、珠子は突然、久能に自分の身の上を聞いてもらいたいという衝動に襲われそうであった。

久能は、自分のことは全くしゃべらないが、珠子についても何ひとつ質問はせず、いったい私のことをどう思っているのかしら、と聞いてみたい気持ちはいつも隠し持っている。誰もいないここで、それをいま、自分から話してみたい、と咽喉もとから言葉は出かかったが、やはり口に出す勇気はなかった。

二人の足ではすぐ頂上に着き、いちめんのリンドウをたっぷり楽しんだあと、山小屋を訪ね、飴湯を飲んだ。久能については、

「うちにお泊まりのお人さん。キレンゲショウマ撮りにおいでたんじゃけんど、もうお花終わってたけん、お気の毒じゃった」

とだけ紹介したが、法被を着て応対していた典夫はちょっと疑い深そうな目をして、

「どちらからおいでです？」

「貞光から登っておいでたん？」

「いつまでお泊まりですか」

など質問するのを、久能はあいまいにかわしている。

帰ろうとして立ち上がったとき、典夫は珠子を呼び止め、戸のかげで、

「十一月には名頃から見ノ越まで道がつくじゃろ。その道はいずれ与次郎谷を渡って富士ノ池一号橋までのびてくるけん、これからは車さえあれば便利になる。おれ、今年は十月にはもう山下りて自動車学校へ行って免許とるんじゃ。免許とったら

きよみちゃん乗せてやるけん、待ちよってやなあ。
おれが山下りるまでに、二人で次郎笈行ってみんか。カメラはおれも持っとるけん、なんぼでもきよみちゃん写してあげるぜ」
といい、珠子がうなずくと、典夫はもう一度、
「ほな約束したけん、おぼえとってや」
といい、ちょうど到着した客の応対にまわった。
珠子と久能は、勝代夫婦がゆくゆくは経営するという第二山小屋の建設予定地の前を通り、行場へ向かった。
珠子は、この四年ほどのあいだに花を求めてこの辺りを駈けめぐり、国太郎からは、「山姥（やまうば）とはいえんなあ。若姥といおうか」
などとからかわれるだけ、道はもうすっかり覚えてしまっている。
九月も半ばを過ぎるともう花はほとんど無いが、湿地帯の行場には珠子の秘蔵にしているものがまだひとつある。
上の道から少し下り、じめじめした腐葉土の地帯にかかると、そこにひょっこり、ここにひょっこり首を持ち上げているのを指して、
「これです」
というと、久能はああ、とうなずき、

「シャクジョウソウですね」

とすぐ当てた。

「あらやっぱり久能さん。強いですね。これ、うちに泊まられる先達さんの錫杖に似てません？　葉っぱはうろこみたいに茎にくっついているだけじゃけんど、まるで生きものみたいに動くので、おもしろいと思って」

「動くってどういうふうに？」

「最初はうつむいて咲いているのに、実が熟すにしたがって天を向くんです。ほらこれ、これもまっすぐ上向いてる。色も変わって。

ひとりでに動くて、ふしぎや思いませんか」

「これはね、腐生植物だから太陽の当たらない場所に咲く。自分の身を守って子孫を増やすためにいろいろな知恵を持っているんじゃないの。けなげだよね」

「ふーん、そうじゃなあ」

「しかしやっぱり、蝶などを誘惑するような美しさはないなあ」

「じゃけんど、私はおもしろいと思う。ときどき見に来て、その動くさまを楽しむんです」

二人は立ってしばらく眺め、そしてその暗い木立をぬけて、下り坂をとった。

いつもの亀石まで出たとき、珠子はもっと二人でいたい気持ちのままに、ちょっと休ん

でいきましょう、と誘うと、そうだねと久能もうなずき、並んで腰をおろした。

空を見上げると、意外な近さで雲が流れ、とき折起こる軽い風に一しきり落葉の降る音が聞こえるだけの山の静かさであった。

「いいなあ、心も体も洗われるような気がする。ねえきよみさん」

と久能が珠子をそう呼んだとき、珠子はずっと我慢していた思いがとうとう堰を切ったようになり、

「あたし、きよみじゃないの。ほんとは珠子ていう名です」

と口を切ると、あとは聞いてもらいたかった自分の生い立ちを、包みかくさず久能に打ち明けたのであった。話しながら、珠子はいつのまにか涙を流し、しゃくりあげながら訴えており、その背を久能のあたたかなてのひらがやさしく撫でてやっている。

珠子の生きてきた二十年という月日は、いくら話しても尽きないほどの長さだと思うのに、口下手な珠子の、とぎれとぎれの述懐はすぐに終わってしまい、珠子はいつのまにか泣きながら、自分の膝に顔を伏せているのであった。

それというのも、捨て子というあまりに苛酷な運命を、珠子自身に語らせるにしのびず、久能は、

「もういいよ、珠子さん。それ以上は何をいわなくとも私にはよく判る」

と止どめたし、そしてそっと、泣き沈んでいる珠子の頭を、自分の膝の上に引きとって

やりながら、

「実いうとね。珠子さん。いま話を聞くまで、私はあなたが養女だなどとは全く気づかなかったんだよ。ただ、お父さんにしては白塚さん少し年を取りすぎているかな、と感じたことはあるけれどね。

ましてあなたが施設で育ったなんて、夢にも想像したことはなかった。むしろ、こんな山奥の、神職の家の清浄ななかで小さいときから育てられたからこそ、珠子さんは汚れなく清らかに素直に成長したのだとばかり思っていたんです。

ねえ珠子さん、ほんとうの親が知れないということを、あなた自身が何故に、どうして恥じることがある？　かえって、他人ばかりの施設のなかで、曲がらずくじけず、それこそ玉のようないまの珠子さんが成長してきたことを大いに誇っていいのだと思う。威張っていいのだと思う」

一語一語、噛んでふくめるようにいい、それはあたたかくも力強い励ましの言葉として珠子の胸の奥深く沁みとおっていった。

久能は片手で珠子の髪を撫でつつ、

「私はキレンゲショウマを撮りにこの山に来たけれど、山の神は花の代わりに珠子さんという、世にも気高い女性を私に引き合わせて下さった。それは命と引き換えだっただけに、私には重い意味を持つことになるだろう。

珠子さんありがとう。あなたに比べれば私の人生など、ずるくて汚い。いい加減なもんだ。反省しています」

といつになくしんみりといい、それを聞くと珠子は、ひょっとして久能は近々山を下りるつもりではないかと急に不安に駆られ、起き上がって、

「久能さん、いつまでうちにおって下されるおつもりじゃろか？　もうすぐお帰るつもりじゃないじゃろか？」

と聞くと、久能は珠子の手をしっかりと握って、

「そんなことはない。ご迷惑じゃなければいつまでも居させて欲しい」

といった。

「ほんと？」

とその目をのぞくと、久能も深くみつめ返して、

「ほんとだよ」

といい、こんな快い時間のなかに身をおいているうれしさは珠子も生まれてはじめてだと思った。

第七章　希　望

三人の暮らしは一ケ月も経てばすっかり定着し、力仕事は久能が引き受けるぶんだけ国太郎は老い、何かあれば久能さん、久能さんと頼るようになっている。

久能もすっかり家族の一員として溶けこんでいるかのように見えるもののしかし、神社祭祀については考えることがあり、あるとき、ここまで立ち入っていいかな、と思いつつ、

「ひとつ聞いていい？」

と遠慮がちに、

「珠子さん巫女さんとして、お父さんのお手伝いしているね。

それは神の存在というものを信じてのことだろうか。それとも？」

と問いかけてみたことがある。

そのとき珠子は、

「うーんむずかしいなあ」

と仰向いてしばらく考えていたが、

「私のほんとの気持ちを人に話してしまうと、ひょっとしてバチが当たるかもしれん、といまも思うじゃろ。そのこと自体がもう神さまを信じておることじゃないやろか」

といい、

「最初なあ。お父さんから巫女さんたのむといわれたとき、自分にできるじゃろか、と悩んだこと覚えてる。お父さんのすること見よると、ふしぎな気がしてなあ。あのお社のいちばん奥の扉のなかにいったい何が入っとんのやろか、開けてみてみたい、といっつも思うてたんじゃ。

じゃけんど、お父さんと一しょに暮らして、お父さんの仕事手伝うてるうち、だんだんと、神さまは人間一人一人の持ってる良心ちゅうもんで、お社の奥においでになるのは、自分の良心の鏡や、いつもそこに映されてるんやと思うようになったんです。

まあ、お祀りの作法も、平安朝から発したものをずっと引き継いでおって、どれもいわれがあるとか、ときどきお父さんは話してくれるし、お祈りしてると心がおだやかになるのはほんまなんです」

と珠子は訥々と話し、そのあとで、

「ねえ久能さん、倒れてる久能さんと私が出会ったのも、神さんのお導きや思いません？私はそれ、固く信じてます。

あの日から一そう、心をこめて久能さんの恢復をお祈りするようになりましたから」

と真剣なまなざしでそういわれると、久能は自分がいままで無関心に過ぎてきた神道という日本固有の民族信仰に対して、あまりに無知だったのではないかと省みられるのであった。

しかし現実のここでの生活に目を向ければいま久能は文字どおり衣類は着たきり雀、洗い替えには国太郎のものを借りてまにあわせているが、まもなくきびしい寒さがやってくるなら、やっぱり適当な衣服は求めなければならぬ。

一日、珠子がそのことをいうと、国太郎もすぐ賛成し、

「ふたりで貞光まで下りて買ってきいや。このごろは店もようけ出来とるらしいけん、何でもあるじゃろ」

と貞光行きをすすめると、久能は固辞して、

「いやいや、着るものは何でもいいのです。ご迷惑でなかったら白塚さんのものをしばらく貸して下さい。

それよりも、私は冬の装備を持ち合わさないので、雪がくるまでに近辺の山を案内して頂きたい。地図を見ると、おもしろそうな山々が近くには目白押しですね。いかがなものでしょうか」

「そうじゃなあ、近くでは次郎笈、一ノ森、塔丸、それから赤帽子山、丸笹山ぐらいならきよみも登っておるけん、ご案内はできるじゃろ」

「じゃ、いちばん近い次郎笈から行きましょうか」
「そうするか、きよみ大丈夫じゃなあ」
「はい、お父さん」
と珠子はこのとき、典夫から十月に入ったら次郎笈へ二人で登ろうといわれていたことを忘れていたわけではなかったが、典夫とは以前勝代も入れて一緒に登ったこともあるし、久能のほうを優先させてもいいのだというふうに考えたのであった。
次郎笈は、兄太郎笈(たろうぎゅう)と剣山(つるぎさん)の頂上から見ればすぐ南側にあり、ほんの一またぎ、と思える近さだが、登ってみるとこれが大いに違う。
太郎笈に劣ることたった二十六メートルとは思えないほどにきびしく、雪が降り出せばトラバースは固く禁止されている。
珠子が以前登ったときは、三人とも若い足、それに典夫と勝代は「うちの庭のうち」というくらいたびたび踏破しており、そのときの経験から、今度もごく気軽に考えていたが、久能はさすがに慎重で、いく日も前からまずずっとラジオの天気予報のメモを取り、当日は珠子にそういって弁当は二食分、防寒ともなる衣類をしっかりとリュックに詰めた。
当日は午前六時の出発、二人の足なら剣山頂まで一時間四十分、そこから次郎笈峠まで尾根道を一時間、あと頂上までは急坂を三十分、合計三時間余あれば山上に立つことができ、休憩時間を入れても午後一時には見ノ越(みのこし)へ帰ってこられる行程だけれど、久能は大き

な山に登るような準備を怠らなかった。

「ザックに詰める荷はね、きちんと順番があるんだよ。まず一番下はシュラフ。これは私の分一枚を入れておく。次はテントだが、これはなし。次がコッヘル、ストーブ、これもなし。

そして食料、その上に水筒、手帳、地図、いちばん上にはおやつの甘いもの。これは山小屋であめ玉を買っていこうか。

この順番をまちがえたり、背中に固いものが当たるような詰めかたをすると、疲れやすくなる。パッキングは大切なんだよ」

とひとつひとつ珠子に教える久能を見ていると、これほどの山の経験者が何故(なぜ)あんな事故を起こしたのだろう、と思えたりする。

十月の、降雪も間近い下旬の一日、ザックは久能が背負い、珠子は杖(つえ)を一本持って二人は出発した。

頂上まではいつもの道だが早朝はもうしんしんとつめたく、西島まで上がると、辺りは白砂糖を振りかけたように粉雪が降り敷いている。

先に立つ珠子が、

「今年は早いみたいですよ」

といえば、

「じゃ頂上はもう積もっているかもしれない。もし積雪があれば計画は変えなければならないね」

と久能はうしろからいい、そのあとは二人とも無言で登って行く。

しかし頂上の雪も西島と同じく、まだパラパラで地肌全体を掩ってはおらず、予定どおり測候所わきから南西へ向かう道をとった。山小屋で何か甘いものを、という久能のすすめを斥けたのは、今日は何故か典夫とは会いたくない気持ちがあったためであった。

「糖分は疲労恢復のいい薬だよ」

という久能に、

「売ってないのかも知れませんよ。ひょっとして」

と珠子は珍しくいい返し、尾根へ通じる道を急ぐ。

よく晴れた日で、見廻せば山々の向こう、東のかたにキラキラと輝いているのは紀伊水道、いま向かっている方向には土佐湾の紺碧も望めるが、道は切り立った稜線なので、四方を眺めながらのんびりと歩く余裕はない。

この道は、高知県の側から先達さんたちが入ってくる修行道でもあり、この前珠子が登ったときには二十人ほどの組とすれ違ったのに、今日は人影は見当たらなかった。

道は四国笹が尽きた辺りで次郎笈峠となり、ここから先は岩礫地となってぐっとけわしくなる。久能は、

「先頭代わろう」

といい、ザックを揺り上げて位置交替したが、馴れていると見えて身のこなしが軽く、ひょいひょいと歩を進めてゆく。

やがて頂上、二人とも汗ばんだ額を拭いながらぐるりを見廻すと、遥か西の方、東赤石山、三嶺の間にみえるとんがりの三角が石鎚山、すでに冠雪して純白の姿を見せている。

珠子が指さす山々を、久能はうなずきながら見ていて、

「西日本では石鎚が最高峰、ついで剣山なのに、人は何故かあまり登らないね。登山といえば日本アルプスに集中している。

たしかにアルプスは個性的な山が多いし、またさまざまな条件を持っているからおもしろいが、もっと四国の山にも登ってみてはどうかなあ。

もっとも石鎚も剣も霊山だし、信仰の山だから、俗世間のスターたることを拒否しているのかもしれない。私みたいに、山を見くびって入って来たものにはこっぴどい罰を当てるんだからなあ。

あれは天からの手きびしい鞭だった」

二人は頂上でしばらく休んだのち、次郎笈峠まで下り、大きい岩をさがしてそのかげで弁当をひらいた。

頂上にいるころから風が強くなり、二人が握り飯をひらくと、包んであるその竹の皮が

はたはたと鳴るほどだったが、気にもせず、
「梅干しのおむすびってうまいな」
「おむすびちゅんじゃろか、東京は。こっちはお握りっていうんじゃけんど」
「お握りともいわないことはないよ。このおしんこもいいな」
「おしんこっちゅうの？　おつけもんとか、おここ、とかいうんじゃなあ。うちは」
「どっちでもいいんじゃないの。意味が判れば」
二人は他愛ない話をしながら握り飯をほおばり、一つの水筒の水を代わりばんこに口をつけて飲み合った。
いつも思うことだが、珠子は久能と二人でいると、得もいえぬあたたかいものが身うちをめぐり流れてゆくのを感じる。生まれてはじめてのこの充実感をしあわせというなら、そのしあわせを与えてくれる久能とはいつまでも離れたくないと思う。しかし珠子は、この先、どうなるかということは、いまは考えたくはなかった。
折角、手中にしているこのしあわせのさなか、いつかは山を去るにきまっているひとの行末のことなど、思い描くだけで胸を絞られるのであった。
「兄の太郎笈はなだらかでやさしく、弟の次郎笈は雄々しく、二つ並んだ山でもこうも違うものかなあ。
しかし次郎笈登山の感想をいえば、久しぶりに立派な山に登ったという感じだったね」

久能と珠子は語りあいながら戻り道を辿ったが、そのうち剣山領域に入ったころから、小声での話というのは全くできなくなってしまった。

もともと高所は風が吹くが、この日は太陽が昇ったころあいから強い季節風が吹きはじめ、どこからともなく突風が起こり、山肌を激しく薙いではさえぎるものもない天空を渡っていずこへか去ってゆく。

風の力は強く、ごうーっと巻き起こる風をまともに受ければ、ザックを負っている久能でさえ思わずよろめいて、たたらを踏むほどであった。

「危い、珠子さん、早くしゃがんで」

とあらん限りの声で久能は叫び、それでも声は風に散らされて珠子に届かず、とうとう久能はうしろから珠子のヤッケを摑んで地面にひき据えた。

二人が立っているのは細い稜線、まともに風を受ければ人間ひとりくらい、難なく山肌を谷までころがり落ちてしまう。滑落はおそろしい事故で、いまこれを避けるのは地に伏せて風をやりすごすしかなかった。

二人は手を取りあってにじりながらとりあえず小さな岩かげに身を寄せた。

見とおしのよい稜線にあるものはいちめん地を這う四国笹ばかり、風を遮る木も岩もなく、二人が身をよせた小さな岩もほとんど風除けとはならなかった。

風の力はそれほどに強く、悪くすればこのくらいの岩では二人を敷き込んで転がり落ち

てゆくかもしれず、久能は決心したように、
「よし、この岩から出て二人でしっかりと抱き合っていよう」
といい、ザックをおろしてそのいちばん下に入れて来たシュラフを取り出そうとしたが、全身風になぶられ、吹き飛ばされそうになるのを珠子はうしろから久能の体を懸命で支えた。そしてようやく取り出したシュラフを二人はすっぽりと頭からかぶってしっかりと抱き合い、少しでも風の抵抗を避けて斜面に添って体を倒す。
「こうすれば二人分の体重が重しになる。もし吹き飛ばされても二人一しょだものね」
そういう久能の顔は珠子のすぐ目の前にあり、シュラフで囲った薄暗いなかで、二人とも目ばかり光っている。
「これは谷風？」
「そうだ。冬のはじめの好天の日はとくに強い。しばらくやりすごせば風だって息をするから、そのあいだにまた進めばいい」
いいつつ二人とも、シャツを通して伝わってくるお互いの体温を確かめ合っているのであった。
風はときどき、どーんという轟音とともに二人に突き当たり、そのたびいっそう抱き合っている手に力をこめるが、珠子は何だか気が遠くなってしまいそうな恍惚感があった。
このまま風がやまず、いつまでも吹いていてくれればいい、と思いつつ、

「ねえ久能さん」

と呼びかけると、久能も珠子の目をみつめながら、

「判っている。私に聞きたいこと、あるんだろう」

といい、珠子もその目をみつめかえして深くうなずいた。

「今日は話そうか、明日は打ち明けようかと考えながらもう二ケ月だものね」

声は、シュラフの風にはためく音にときどきさえぎられるものの、耳もとでささやくような久能の声は力強くてしっかりと聞きとれる。

「珠子さんもお父さんも、その間何も私の身の上に触れず家族同様にすごしてくれたこと、私はとても感謝している。お渡しした金も、まともに宿泊料を取って頂けばまもなく無くなるだろうし、ここらで何かの決断をしなければならないと、私もこの数日、ずっと考え続けていた。

私はね、東京の杉並区の自宅には妻がいるんです。いや、いたというほうが正しいな。結婚して三年になるけど、私の仕事が仕事だから同居の期間をいえば一年とちょっとくらいかなあ。そのせいもあるのかどうか、どうもしっくりといかなくてね。

もちろん私自身にも原因はあると思うけど、別れ話は結婚直後からいく度も出ていて、そのたびにまあ何となく納まり、こんにちまで続いたというのが実情です。

しかし私は、仕事のこともあっていま心機一転したく、この八月、置き手紙をして家を

出てきました」

久能の話のあいだも風はやまず、頭を掩っているシュラフははたはたと鳴りつづけ、また土を巻き上げたり降らせたりして吹き過ぎてゆくが、珠子はもう風どころではなく、大きく目を見張ったまま、

「そうじゃったの、久能さん。そうじゃったの」

と首を振りつつ、

「お子さんも無かったんじゃなあ。ほじゃけんど、手紙を残しただけで家を出るんは脱走じゃなあ」

「脱走？　ああそういえばそうかもしれない」

「ほしたら久能さんは、やっぱり奥さんのもとへ帰ってあげんといかんのじゃ。なあ、そうでしょう」

珠子が悲しそうな顔でそういうのを、久能はじっと見ながら、思い切ったように、

「珠子さん、私と一しょに暮らすのは嫌ですか」

と聞いた。

「え？」

とふしぎそうにたずね返す珠子の、肩にまわした手に久能はいっそう力をこめながら、

「珠子さんに命を助けてもらい、よみがえった日から、これは私に芽生えた願望です。

いや、命の恩人へのお礼心とか、そういう因果関係は一切なく、とても照れ臭いけれど私の生まれてはじめての、女性への感動と愛情というべきだろうなあ。

珠子さんの介抱を受けて寝ているあいだ、いずれ元気になったら珠子さんをかっさらって、どこか知らない土地へ行って暮らしたいなあ、とずっと考えていた。それは東京の町でもいいし、遠い田舎の村でもいい。そこに二人で小さな家を構え、山の花を撮りに行くときはいつも一しょに出かけて。そんなことを私は夢うつつに思い描いていたんだった。

しかし、国太郎さんとの三人の生活に馴れるにつれ、珠子さんの義理のお父さんへの心づかいや、ぬきさしならぬ状況が判ってくると、私の珠子さん誘拐は大きな罪悪であることを思い知らされたんですねえ。

実は以前、行場（ぎょうば）へシャクジョウソウ見に行ったとき、あの折、珠子さんは私に自分の身の上をすべて打ち明けてくれた。私もよっぽどこの気持ちを伝えようかと思ったけど、やっぱりできなかったんです。

しかし珠子さん、かといって私はあなたと一しょに今度こそおだやかな生活をしてみたいというこの願望を、捨て去ることはできない。あなたをこの山に置いたまま、ひとりで下りてゆくことはできない」

久能は終わりは激した声になり、珠子の胸に深く顔を埋めて嗚咽（おえつ）した。

珠子は久能の告白に全身ふるえるほどのよろこびを感じ、急にものもいえないまま、た

だ久能の頭をしっかりとかき抱くばかりであった。

心が通じ合うということは、こんなにも嬉しいものかと思いながら。

荒れ狂った谷風はまもなく勢いが弱り、稜線上の人間を吹き飛ばすほどではなくなったが、シュラフをまとってしゃがんでいる二人は立ち上がらなかった。

いや立ち上がらないのではなく、立ち上がれないというのがほんとうで、それほど久能の告白はそれぞれにとって大きな衝撃であった。

生まれてはじめて、慕わしいと思い、好ましく感じたそのひとから事実上のプロポーズを受ければ、まるでいま、夢のなかにいるような感じが珠子にはある。

結婚なんて考えたこともなかったけれど、離れたくない一緒にいたいという気持ちを実行に移すとすれば結婚以外にはなく、いまは珠子も迷わずそれを望み、二人は抱きあったまま涙を流しつづけているのであった。

久能は顔をあげ、髪をかきあげながら、

「どうだろう珠子さん、私について来てくれるだろうか。迷惑じゃないだろうか」

と問い、激しく首を振る珠子を見て、

「二人で山を下りるとお父さんが一人になる。これは珠子さんにはできないよね。では私がここに居ついて剣山の住人となる。とすれば生活をどうするかという問題があるし、またお父さんも許しては下さらないだろう。

どうしたらいいかなあ」
と考え込んでしまう。
しかしいま、こんな大きな障害の処理について話してもよい方法が浮かんでくるわけもなく、二人はまもなく手を貸しあってようやく立ち上がった。
風の凪いだ帰りみち、珠子はすこし遠まわりして別の道を選び、山小屋の前は通らなかった。
家に帰りつくと、国太郎は囲炉裏の火を大きくし、その前に背を丸めてしきりに咳きこんでおり、靴を脱ぐなり珠子は寝床を敷いて、
「お父さん、風邪じゃないの。置きつけの薬飲んで早うに寝にゃあ」
とまめまめしく世話をする。
国太郎はいわれるままに寝床に入りながら、
「お前が出たあと、上の典夫が誘いに来てくれたよ。お前、典夫と一しょに次郎笈へ登るて約束してあったんじゃろ。
山小屋へ寄って一言そういうておけばよかったのに」
と珠子にいい、さすがにどきんとして、
「典夫さん怒っとったん？
約束はしてあったけど、今日とはいうてなかったけんね」

「そんでも、もうすぐ典夫が山下りることは知っとったんじゃろが。お山さんの隣は大事にせないかん」

と叱言をいうのへ、珠子は、

「ほしてお父さん、私が久能さんお連れしたことも典夫さんにいうたん？」

「そらいうたぜ。典夫も詳しゅうに問うけんなあ。嘘つくわけにはいかんし」

仕方なかろが、と国太郎はいう。

その翌日、珠子は庭にむしろを敷き、むしろの上に坐って大根や人参を切っていた。いかにも年寄りの仕事姿だが、これは宿坊に泊まった先達さんたちが余った野菜を置いてゆくのを、干して貯え、冬にそなえるための知恵であって、亡きすぎが痛い足をかばいつつこうしていたのを、珠子はずっと手伝ってきているのであった。

雪の積む土地では、大根や芋を乾燥させるためには軒先に吊すのがいちばんで、皮をむいた大根や人参をたてに四つ割りにし、上に穴を開けて藁を通し、それを竿に通す。

背戸の軒に野菜がたくさん吊されていると、今年の冬の汁の実は大丈夫だという安心感があり、すぎの死以来、主婦の仕事も受け持っている珠子はなんとなくほっとするのであった。

この朝も大根を竿に通しおえ、珠子がエプロンで手を拭いてこちらを向くと、思いがけ

なくそこに典夫が立っている。
「わっびっくりした」
と思わず大声を挙げると、典夫は珍しくこわい顔で、
「昨日、次郎笈へ登ろ思うて誘いに来たんじゃ」
といい、にらみつけるような強い視線で珠子を見た。
「あ、ごめん。まだ先のことじゃと思うとったけん」
「十月中には里へ下りるというとったはずじゃ」
「そんでも日は決めとらなんだもん」
「なんで次郎笈へお人連れてったんじゃ。俺とは一しょに行かんつもりじゃったんか」
「そんなことはないよ、典夫ちゃん。
次郎笈くらい何度行ってもええし、お父さんもご案内したら、というてくれたもんじゃけん」
「きよみちゃんはいつからお山さんの案内人になったんじゃ。俺との約束破って」
「典夫ちゃん、それはひどい」
と珠子は思わず気色ばんで、
「日も決めてないものを、私が何もせずに待ってないといかんていうの。そんなに私にきつういうんじゃったら、どうして日を決めておいてくれなんだの？」

「前はきよみちゃん、そんなんじゃなかったぜ。あの客が来てからじゃな。二人であっちこっち行きまわってるんじゃないか」

珠子は久能に触れたのであたりを見まわし、典夫のヤッケを引っぱって宿坊の縁側までつれていった。

「久能さんのこと、悪うぃわんといてな。お願いじゃけん」

「何でそんなにかばうんじゃ。あのお人はどうしてここに居つくようになったん？　ほしていつまでここにおるつもりなんじゃ。

おれに話してくれてもええのじゃないか。ちょっとおかしいぜえ。きよみちゃん」

これから木屋平村まで下りるという典夫は、また一冬会えない名残りもあって、久能のことをしつこく聞きたがったが、珠子は何も話さなかった。

「そう？　花の写真撮りに来たお人が、花が無うなってもまだお山さんにおいでるちゅうのはおかしいとおもうけどなあ。

おっちゃんも何もいわんというのは、よっぽどお人がええんやなあ」

と不満を述べるだけでこのところは何とかおさまり、珠子はそこら辺りまで送って行くことにした。

百二十段の階段を下りると、下はもう駐車もできるほどの広場に仕上がっており、典夫は、

「変わったなあ。草ぼうぼうやったのに」

と珍しそうに眺め、

「免許とったら親父に中古買うてもらうんじゃ。ほしたら、ちょっと遠まわりじゃけんど東祖谷山村まわって、家からここまで物資は車で運んでこれる。便利になるぜえ」

と嬉しそうであった。

二人はゆっくりと夫婦池のほうへ歩きながら、典夫が当然のように、

「来年秋くらいはどうやろなあ。きよみちゃん上へ来てもらうの」

といいだしたのに珠子はぎょっとして、

「典夫ちゃんもうお父さんお母さんに話したのん？」

と聞くと、

「いいや、まだ。じゃけんど、親父もおふくろもそうなることを願いよるみたいじゃ。勝代夫婦も第二山小屋が忙しいし、うちも人手が欲しい欲しいといっつもいいよる。おれが話したら、秋どころか、年明けたらすぐに来てもろうたらええ、というに決まっとる。

きよみちゃんもそのつもりでいてな」

「ほじゃけんど、なあ典夫ちゃん。うちのお父さん一人にはできんと何度もいうたでしょう」

「お父さんも一しょに上へ来てもろうたらええんじゃ」
「そしたら神主さんやめて？」
「もうおっちゃんもそろそろせこいのとちがうかなあ。剣神社お人にゆずって、上でおれたちとのんびり暮らしたらどう？」
「いやあ、それはお父さんまだお社をよそのお人にはゆずれんわ。かわいそうやわ。宮司の仕事に、お父さん誇り持っとるんやもん」
と珠子は大きなカーブに来て立ち止まり、
「ここで見ててあげるけん」
と、典夫にそういった。
典夫も強いてもう少し、ともいわず、
「ほな考えといてな」
とくだけるほど珠子の両手を握りしめたあと、大またでスピードを上げつつ遠ざかって行った。
典夫の姿が見えなくなると、珠子は引き返したが、ゆっくり歩いているのに胸の鼓動が早く熱く、脈打っているのを感じている。
昨日久能からの誘いを受け、全身よろこびにふるえたばかりなのに、今日は典夫から結婚を迫られ、そうなると国太郎のいう、よそから若い宮司を婿に迎えての将来の暮らし、

というのも行く手に立ちはだかってくる。

どうしたらいいだろう、と考えあぐね、珠子は道端の木の根に腰をおろしてしばらく休んだ。

この三つの問題、よくよく考えるつもりでいるのに、珠子自身欲しているのはたった一つ、久能とともにこれからの年月をすごしたい願いであることは判っている。

あれは今年の五月、赤いドレスを着た隆子をこの道まで送ってきたが、そのとき隆子のいった、

「いちばん頼りになるのは恋人やぜ。親なんて厄介なだけじゃ。うちは五郎ちゃんのおかげで救われたんじゃもん」

とくり返した言葉は、いまおそろしいほどの現実感として珠子には理解されてくる。

久能にめぐり会うまでは、典夫のプロポーズを嫌とは思わず、この好きな剣山の自然のなかで生涯をすごすのもいいかなとも感じていたのに、昨夜の久能の誘いの前には、典夫は俄に色褪せて見え、遠ざかってゆくようであった。

もはや考えることはない、考えるふりをしているだけだと、珠子は自分の胸のなかをのぞき込むようにして思った。

いままで四年間、典夫とつきあって来たけれど、珠子がいま久能に抱いているような、どうかしてこのひとの好きな食べものを作ってあげたい、どうかしてこのひとの好きなこ

とをしてあげたい、いつもいつも顔をみつめていたい、できるなら手と手を握りあっていたいという、まるでたぎるような思いを典夫に抱いたことがあるかどうかと自分に問えば、それはついぞ感じたことのない、いわば単なる友情でしかなかったのではないかと考えるのであった。

もうためらうことはないよ、珠子、と珠子は自分の内なるものに向かってそういった。久能が、あなたを置いて山を下りることはできない、といったように、自分ももう久能と離れて暮らすことはできないと思う。

しかし山小屋の嫁か、若い宮司との結婚なら先も見えているが、久能との暮らしは一寸先も何にも見えぬ。二人で駈け落ちし、どこの土地に流れつくか判らないが、そこに待っているものは楽しい日々か、或いはどん底の生活か、それも全く予想もつかない真っ暗闇であった。

しかし考えてみれば、親無しで育った自分が親以上とも思うほど大切なひとに偶然めぐり会ったのは、神の導く運命としか思えず、もはや余分なことは考えず、裸のまんまでまっしぐらに久能さんの胸のなかへ飛び込んでゆくべきだと思うのであった。

珠子は、あたりに誰もいないのをさいわい、声に出してつぶやいた。

「そうじゃ。典夫ちゃんの話はもう忘れよう。お父さんにも許してもらおう。どこかで断ち切らんと久能さんと一緒に暮らすことはできんもん」

そういうと珠子は勢いよく立ち上がり、登り坂になっている帰りみちを懸命に走った。息を切らしながら走りつつ、心のうちでは何のこれくらい、この先、どんなつらいことがあるやら知れん、へこたれんよ、へこたれはせんよ、と目に見えぬものに向かって肩をそびやかすようにして走り続けた。

が、まもなくさすがに力尽き、荒い息を吐いてしばらく休んだが、この決心だけはいつまでも持ちつづけなければと思うのであった。

家に帰ると、奥の間に置いてあるカメラ一式と久能の姿が見えず、社殿の清掃をしている国太郎に問うと、

「お山さんの景色を撮るちゅうて、出かけたよ。なにこの近まわりだけじゃけん、迷いはせんと笑っとった」

といい、珠子はそれを聞いて、花しか撮らない久能が風景を撮るというのは、いよいよ山を下りる準備に入ったのだな、と思った。

国太郎はまた、

「さっき工事のお人が県からの手紙を持って来てくれたが、下の道の開通式が二十五日じゃと。

ついては安全祈願のため出席して欲しいとのことじゃけんど、名頃(なごろ)まで行くのはもうおっくうじゃしなあ。悪いが断るか。

これだけはきよみが代理ちゅうわけにはいかんし」

としょげた声でそう珠子に告げた。

新道の始点は名頃だから、完工式はここで関係者が集まって簡単な式典を行い、しかるのち通り初めで車を列ねて見ノ越まで登り、社殿に詣ってここで解散、という段取りらしかった。

珠子は何となく胸がさわぎ、なら二十五日を境に下からどんどん車が上がってくるのでは、と思ったが、それについては、

「いやなあに、車でここまで来て、我がお社にお詣りして帰るような奇特なお人がこのせつどれだけおろうか。

夏になれば登山者はあるが、それもって自分の車でここまで来るというのは、まあこの近辺の、それも限られたお人だけじゃろう。

どっちにしろ、道はついてもお人さんはぼつぼつじゃなあ」

と国太郎は見ノ越の大きな変化をあまり期待していないようであった。

そこで国太郎の提案として、式典には、栗枝渡にある八幡神社の宮司にバスで名頃まで来てもらい、そこで祈願とお祓いをしてもらったあと、当剣神社は見ノ越で通り初めの一行を待ち、こちらでもお祓いをさせて頂く、としたところ、了承され、三日後の式典を控えて、社殿の清掃を念入りにし、その日を迎えることになった。

その日の夕飯のとき、国太郎が囲炉裏端へやってくるまえ、珠子は久能に、

「今晩、お父さんが寝入ったら、便所へ行くふりをして宿坊へ来て。寒いけん必ず毛布持って」

と早口でささやき、あとはそしらぬ顔をしていつものとおり食事をした。

「お神酒上がらぬ神はない」が口ぐせの国太郎は、その夜も徳利一本を空けるともう居ねむりをはじめ、珠子が寝床をひいて寝かしつけるのを見て、久能は毛布を持って部屋を出て行った。

この家で過ごして来た年月、ただの一度も親をだましたことのない珠子だっただけに、国太郎のいびきをたしかめたあと、そっとぬけ出す自分を、もう一人の自分が呆れ驚いている感じがあった。

そのくせ、こんな大胆な冒険を平然と企てることのふしぎな快感もあり、足音をしのばせて戸外に出ると、庭には突っ立って星空を眺めている久能の黒い影があった。

黙ったまま真っ暗な宿坊へと向かい、夕方、わざと埋み火してあった広間のまん中の囲炉裏のそばに毛布をかぶったまま坐る。

わずかな埋み火では、掘り起こしてもいくらも暖はとれず、久能は珠子の毛布の上に自分の毛布を重ねて、二人はあの次郎笈の尾根道のように、またすっぽりと毛布にくるまって身を寄せた。

十月下旬の山の夜気は、室内といえどもしんしんと寒く、固く固く身を寄せあっているお互いの体温だけがたよりのなかで、珠子は声をひそめて三日後には開通式があり、下から車が上がってくることを告げようとした。

言葉の途中、いきなり冷たい手に頬をはさまれ、冷え切った唇に自分の唇が塞がれたとき、珠子は息もつまるほど驚いて、

「いけない、やめて」

と叫んだが、それは声にはならず、久能の顔を避けただけであった。

二人はぴったり体を寄せ合っており、逃げようとしても逃げられないと判っていながら、珠子はいけない、やめて、と心のうちで拒みつづけ、そしてついには唇を合わせたまま、久能の胸のなかに沈み込んだ。

珠子は、久能を好きになって以来、こんな光景がいく度脳裏をかすめていったことだったろうか。

人を愛すれば、その人と結ばれたいと願うは本能で、誰に教えられなくとも心の底ではそれを欲している。が、そういう自分を激しく叱る声があり、それは浄身、という名へのこだわりであった。

国太郎はおそらく、神に仕える女子は終生異性と交わることなく身を清く持して欲しい、との願いをこめてこの名を珠子につけたにちがいなく、それはやはりこの期になっても珠

子の気持ちを縛りつけて離さないのであった。

毛布にくるまったまま、珠子は悲しい声を出し、

「ごめんなさい、久能さん」

「何故いけないの？」

と久能は問い、珠子は喘ぎながら、

「苦しいの。巫女さんじゃけん」

というと、久能はおどろいて、

「そんなことにこだわっていたの。じゃ巫女さんは恋人を持ってもいけないし、結婚もできないってわけ？

珠子さん、そしたら私と一しょに山を下りられないじゃないか」

「ええんじゃ、久能さん。私は久能さんについてどこへでも行くつもり。ほじゃけん、山下りて私が巫女さんでなくなったら、ようけようけ愛して下さい」

といいつつ珠子は、自分のいうことがあまりにも時代遅れで、また頑冥すぎるのではないかという恐れにおののいているのであった。

久能さんはひょっとすると、これで自分を嫌いになるかもしれない、と頭を垂れている珠子を、久能は黙ってしっかりと抱きしめていたが、

「珠子さんと私は一まわりも年が違うんだよね。二十の珠子さんに、そういう潔癖さがあ

るのを、私はうれしいとも思う。

これから先、ずっと一緒に暮らすんだから」

と静かな声でいい、

「もっとこっちへ寄って。

こうするだけならいいね」

と、さらに毛布を深くまとったなかへ珠子を引き入れた。

闇のなかで、声をしのんでの二人の相談は、いくら車は少ないとはいえ、道路が開通すれば凍結するまでの一ケ月間、もの珍しさに里からは人の往来もあることと思わねばならず、二人の脱走は、それまでの三日間にぜひとも決行しなければならなかった。

ここを発つのは二十四日の未明、朝の早い国太郎が目をさますまえには出なければならず、出たあとはとりあえず貞光町まで下り、そして汽車に乗って徳島市の町なかへ紛れ込むことにする。

ついては、国太郎あての詫び状を書き置きしてゆくこと、引き出しのなかの手つかずの三十万円はそのまま残し、二人は久能のわずかな残金をたよりに、あてどない旅の空をさまようことになる。

「珠子さん、私はいけない男ですね。

天空に汚れもしらず人知れず咲いていた花を、とうとう手折ることになってしまった。

出発までのあいだ、もし珠子さんの決心が変わることがあっても、私はうらみはしない。遠慮なくそういって下さい」

というのへ、珠子は激しく首をふって、

「いいえ、そんな。

久能さんについてゆくことを決めたのは私自身の気持ちです。

うれしいの。こんなことはじめて。山で一生暮らすと決めとったのに、これから先はどうなるやら。でも久能さんを私、固く信じていますから」

久能と打ち合わせができたあと、珠子はまるで夢見ごこちであった。

うれしい、と久能にいったとおり、事実心ははずみ、何をしてもうわの空だが、しかし現実に家出のための荷作りをはじめると、とたんに胸は重く真っ暗になる。

殊に、このところまた一段と衰えた国太郎の、庭をわたってとぼとぼと社殿へ向かううしろ姿や、めがねをかけていても視力の落ちてゆく目で、神社庁からの通知書などを、

「きよみや、これ読んでくれんかなあ」

と差し出す姿を見ると、きゅっと胸を絞られるようになる。

いままで、隆子からの誘いも、この人あるために踏み切れず、また山小屋の典夫のそばへ嫁ぐ気もいまひとつ進まなかったのに、現在ではその思いは珠子の家出の強いブレーキではなくなっている。

自分へのいいわけはしたくないけれど、たったひとつ許されるなら、国太郎とはかりそめの親娘であったが故に、いまそれを解消し、もとへ戻るのだと考えたかった。隆子をはじめ、愛光園の仲間たちのように、しんじつ血を分けた親子であっても別れ別れに暮らす例は世間にたくさんあること、それを思えばたとえ四年でも親娘として暮らした年月を、お互いしあわせとしなければならないのではないかとも思う。

しかしそう思う気持ちの裏では、その四年間、実の親娘以上に強い絆でつながっていたことを振り返れば、何という親不孝、人の道にもとる人間、と激しく自分を責めたくなってくる。

自分がいなくなったあと、お父さんは第一、装束をひとりで出し入れできるかどうか、社殿の清掃がきちんとやれるかどうか、紙垂が決められたとおり作れるかどうか、いやそれよりも、国太郎一人では洗濯もできず、風呂も沸かせず、悪くすれば垢にまみれてただうずくまっているだけの姿となりはしないかと、そこまで想像は伸びてくる。

と、とたんに涙がこみあげて来、珠子はつい裏の道へ駈け出してゆき、もうすっかり裸になったまわりの木々の梢を仰いではまぎらせるのであった。

しかし、どんなに自分を責めてみても、家出をとりやめようとは思わず、国太郎の隙を見ては少しずつ荷物の整理をしている。

もともと簡素な山の暮らしだから、持ち出す荷もたくさんあるわけではなく、大切な植

物図鑑の他は着替え一通りあるばかりであった。

久能も、遭難を免れたフィルム五十本分だけは風景を撮ってゆくのだといい、日中ほとんど家に姿は見えないが、決行前日の二十三日、珠子は一人でキレンゲショウマの咲く行場へ別れを告げに出かけた。

その日は気温がぐっと低く、剣山にもいよいよ冬の訪れたことを思わせる天気だったが、珠子はときどき時雨に打たれながらゆっくりと歩いた。そして、花はむろん、パルマータのてのひらも落ち尽くしたあと、枯れ枝ばかりになってしまったその姿を、じっと長い間眺めつづけた。

そしてこの二十三日の夜の、囲炉裏端での夕食は、やはり少しばかり重苦しい雰囲気であった。

当然のことながら心は重く沈んでゆくばかり、いきおい久能も珠子も無口になるなかで、国太郎だけは上機嫌で、一本の燗瓶をかたむけていて、ふと、

「お、きよみ、今朝発ったお人が塩さばくれていったなあ。あれ焼いてや」

といい出した。

昨夜宿坊には高知からの登山者十名の泊まり客があり、今朝発ちぎわに「余りものですみませんが」とさばの塩ものを置いて行ったものだが、珠子ははいはい、というとおりにしてやりながら、お父さんの食事の世話もこれが最後やなあ、と思うと、胸がつまりそう

であった。

囲炉裏に高足の鉄網を据え、塩さばの切れ二つを載せて焼くと、じゅうじゅうと油が落ちて燠の上にはそのたびめらめらと炎が上がる。山の食膳には魚っ気は珍しいので、国太郎は鼻をひくひくさせて喜び、

「うまそうやなあ。久能さんもつきおうてや」

と、盃を差す。

塩さばはしたたかにしょっぱいが、久しぶりの味ならそんなことはものともせず、大きな切れ一つ全部食べてしまい、

「ねむとうなった。ええ気持ちじゃ」

と呟いたと思ったら、もう国太郎は手枕でいびきをかいているのであった。

いつものように珠子は後片付けし、国太郎をやすませるのを久能も手伝ったあと、二人はしばらく囲炉裏の前に黙然と坐ったままであった。

ねじのゆるんだ柱時計がけだるく八時を報じたのを聞いて、久能は小声で、

「明日の朝は四時には出なくては」

といい、珠子はうなずいて、

「どうせ眠れはせんけんど、もうやすみましょう」

と立ち上がり、国太郎の目を盗んで中味を詰めておいたボストンバッグを、玄関の土間

まで運ぶと、国太郎と丁の字にひいた囲炉裏ばたの自分の寝床へ、ズボンとセーターのままもぐり込んだ。

闇のなかで、囲炉裏の火だけが鮮やかに美しく、みつめていると山の暮らしの四年半が、つぎからつぎへと浮かんでは消え去ってゆく。養父母との暮らしではあっても、涙の出るほどつらい思いをしたことはなく、また山の暮らしを選んだことを後悔したおぼえもなかっただけに、この家とも今宵限り、と思うと珠子の胸には悲しみがそくそくと迫ってくる。

しかし、自分でもふしぎだと感じるのは、それほどに悲しいくせに、久能とともに旅立つことを考えると体中の血が躍るような思いがあり、この矛盾のなかの自分を、もうひとりの自分が呆れたように眺めているのであった。眠れはせぬ、と思っているのに、寝床があたたまってくると、珠子はいつのまにかとろとろしていたらしい。

そのうち珠子は、夢うつつに、聞き馴れぬ異様な声を耳にした。

まだ夜は明けておらず、何やらおそろしい夢でも見ているのかな、と頭の隅で思いながらなおとろとろしていたが、その声は止むどころか少しずつ近づいてくるような感じがあり、そのうちはっと閃くものがあって飛びおきた。

声の主は、頭の上の位置に横たわっている国太郎のうなり声らしく、立って電燈のスイッチをひねると、案の定国太郎が苦しそうな渋面を作り、背を曲げている。

「お父さん、どうしたん？」

と聞くと、国太郎はうすく目をあけ、
「腹がいたい。さすってや」
と絶え絶えにいう。
珠子はふとんに手を入れ、横臥（おうが）している国太郎の腹部をそろそろとさすりながら、
「なんでまた。いつから痛いん？」
といい、困ったことになった、と思った。
柱時計を見上げると三時を少しまわった時刻、四時の自分たちの出発までには果たしてよくなるか、ならないまでも目を覚ましていられたらどうしよう、と迷いつつ介抱する手はかったるいらしく、国太郎はすこし癇（かん）を立て、
「もっとしっかりさすらんか」
と声を荒らげた。
「どうもあの塩さばじゃ。塩さばの当たり腹じゃ。はばかりへ行ってみよう」
といえば、珠子は大急ぎで綿入れのはんてんを着せ、肩を貸して土間の隅の便所へ連れてゆき、戸の外で付き添っていてやらなければならぬ。
今朝に限ってどうしてこんなことに、と地団駄踏む思いだけれど、腹痛に苦しむ国太郎を見捨てて逃げ出してはゆけなかった。
便所から寝床へと連れて戻り、やれ薬じゃ、やれ懐炉を入れろ、と珠子に看病を求める

国太郎はいつもの温和な国太郎とはちがって、何やらいら立った様子なのを見て、珠子は内心、ひょっとしてお父さん、私たちの計画に感づき、止めようとしているのではないか、と思えたほどであった。

塩さばが当たったとしたら、同じものを食べた久能もひょっと、と案じていると、ほどなく久能も寄ってきたが、目が合った珠子には無言のまま首を振った。

それは、自分の体はどうもない、という意味もあったろうが、それ以上に、今日の計画はとり止めにするしかない、という合図だと珠子は受け取った。

久能は国太郎の額にてのひらを当てて、

「少し熱がありますか。夜が明けたら上へ行って、無線で救急車頼んでもらいましょうか。祖谷のほうからだともう車は上がってこられるでしょう」

というと、とたんに国太郎は真っ赤になって、

「何をいうんじゃ。わしは救急車なんぞの世話にはならん」

と興奮して、

「この道の通り初めが、神社の宮司を乗せた救急車とあってはわしは死んでも死に切れん。いや、救急車ではなくてもじゃ。無線で医者を呼んだり、担架に乗って里へおろされるような病気は、わしはしておらん。

当たり腹は、腹を温めて口養生をしておればやがてなおる。これくらいのことで騒ぎ立

てるは恥じゃ。
ええかな、二人ともお人が来ても、このことは固くいわんようになあ。わしはすぐなおるけん」
とたしなめた。珠子はしかし、そんなことでええんかなあ、と思いつつ、
「そんでもお父さん、えらいうなっとったよ。相当痛かったのとちがうかなあ」
といったが、国太郎は頑固で、
「さっきからいえば、大分快うなった。この順でいけば、すんぐに起きられる」
といい張ってゆずらず、そして、
「あしたは開通式じゃけん、どんなにでもしても勤め上げるつもりしとる。ついては久能さんにもお頼みしたいが、社殿の清掃とおかざりなど、きよみを手伝うてやってはくれんじゃろか。お願いします」
と寝床から頭を下げると、久能も恐縮しつつ、
「ご心配いりませんよ。教えて頂けばそのとおり、何でもお手伝いいたします」
と引き受けざるを得なかった。
やがて夜は次第に明け、庭に出た久能と珠子はしばらくは言葉もなく、ただ顔を見合わせているだけであった。
玄関に並べたザックとボストンバッグを、二人はとりあえず宿坊に移動させて隠したあ

と、久能はためいきとともに、

「やっぱりもともと、困難を極めた計画だったんだよね」

といいつつも、ひざを叩いて、

「しかし珠子さん、第一次のプランがお流れ、という程度に考えないか。因縁話は持ちこまないようにしようよ」

と明るく話しかけるのへ、珠子もうん、と大きくうなずいた。

山の人々はいまでも迷信や伝聞を大切にするところがあり、珠子のいまの計画を人が知ったら、必ずや山の神の罰が下る、というであろうことは最初からわかっているのであった。ましてや、宮司の娘であり、年老いた親を捨てて男と逃げたとあれば、珠子自身の心にも恥じるところがないでもない。

計画を立てたらもはやまっしぐら、わき目も振らずに突っ走って、それで成功したのなら悔いも少ないが、今朝のように、まるで何者かが行く手を阻むように突発的な事が起これば、多少なりとも弱気になろうとする気持ちを、久能は思いやってそういってくれているのであった。

国太郎の腹痛は、開通式を控えている気の張りからか、二十四日は一日中しくしくと痛んだだけで、しばらくすると粥腹ながら、手を貸さないでも一人で便所へ行けるようになった。

国太郎が床に就いていれば、たったひとついいことがあり、それは国太郎の目を盗まないでも、相談ごとがあれば庭に出るとよく、二人はそうやって自由に話しあうことができるのはありがたかった。

しかしいまは開通式を何よりも無事すませなければならず、二人は準備に大わらわで、挫折した計画の立てなおしなど考える余裕もないありさまであった。下から県の役人たちも上がって来、社の石段下の自動車道の終点には造花を飾ったアーチを立て、広場には簡単な祭壇をしつらえ、床几を並べ、それらしく配置を終えたあと、珠子にあしたはよろしく、の挨拶をして、夕刻近くに帰って行った。

珠子は、寝ている国太郎にその様子をいちいち報告し、

「お父さん大丈夫かなあ」

といく度も念を押して聞いてみる。

そのたび国太郎は力ない声ながら、

「心配せんでもええ」

と受け答えはするが、珠子は安心できないまま、装束にアイロンをあてている。

しかし翌朝になると国太郎は寝床の上に正座し、

「用意はできたかな。わしはこの通りじゃ。ちゃんとやれるぞ」

と元気な声を出した。

名頃での式を終わってこちらへ上がってくるのは大体午前十一時ごろ、とあって、先発隊はいち早く到着して簡単な酒肴の準備をしており、珠子は国太郎に装束を着け、自分も着替えをすませた。

やがて測候所の職員と、佐川夫婦もあらわれて広場で待つうち、車の警笛が高く谺して、まず黒塗りハイヤーが県旗をなびかせながらカーブから姿を見せた。つづいてつぎつぎと後続車が上がって来たが、このころから白いものがチラチラと舞いはじめ、式のはじまる時刻には参列者の手先は皆、赤くかじかんでいるのであった。

式次第に従って国太郎がお祓いをし、祝詞をあげたあと、順に全員玉串を捧げておよそ四十分足らずの式典は終わったが、皆、空を見上げて帰りを急ぎ、まもなく人影は散ってしまった。

花火も揚げず煙火も鳴らず、開通式にしてはいとも簡素な式典だったが、珠子はそれどころではなく、式の直後、へたへたと頽れてしまった国太郎の世話に懸命であった。

祝詞を唱える国太郎の声が何とも弱々しく、ときどきつかえそうになるのを、珠子はすぐうしろにいて心配しながら聞いており、ようやく車が全部出てしまってから、部屋にこもっていた久能の助けを求めに駈け出していった。

とりあえず国太郎を寝かせ、装束をたたみながら珠子は、いったいこの事態をどうしたらいいのかと思う。

久能はしきりに国太郎の顔をのぞき込み、
「腹の痛いのは治まりましたか？　気分はどんなですか？　他にどこか苦しいところは？」
とたずねるが、国太郎は眉根を寄せ、
「疲れただけじゃ。年じゃけん。他はどうともない」
というばかりで、自分の容態をことさら話題にされるのを好まない様子であった。
二人は粉雪のちらつく庭に出、珠子が深いためいきと共に、
「どうしたらええんじゃろうか。なあ久能さん」
といえば、久能も腕組みして、
「やっぱり年寄りを置いて山を脱出、というのは無理だったかもしれないね。計画はしばらく延期しよう。それしかないでしょう」
「そしたら山は雪になる。春までは動けんなあ」
「また別の展開があるかも知れないよ。車道もついたことだし。ま、じっとときを待ってみてはどうだろうか」
と久能は落ち着いており、そういわれると珠子も気持ちはしずまってくる。
いまはともあれ、国太郎の健康回復を先ず考えねばならず、二人は代わる代わる枕許に詰めて様子を見守っている。

国太郎は、亡きすぎの場合とちがって痛いという個所もいまはなく、目を閉じているその顔を見る限りでは決して病人ではない、と思えるものの、ずっと手首を握っている久能の話では、

「脈が乱れていると思うよ。私は素人だからわからないが」

というとおり、ときどき息が苦しくなるという症状はある。

単なる疲れかもしれないね、ともいい合い、いやいや案外、心臓の持病があったのかもしれないよ、と疑いつつも、医者に診せることもできず、手を束ねて見ているうちに時間は一日二日と経ってゆく。

国太郎は一向に起き上がる気配はなく、毎日少しの粥と梅干しを食べ、じっと横になっているだけ、目覚めているときはラジオをつけてくれ、ということもある。

考えてみれば、山の暮らしでの時間は気が遠くなるほどのんびりしていると思えるのに、実際は結構早くときは流れ、一日はすぐに過ぎてしまう。空が白めば起き出して珠子は食事を作り、久能は家の内外を清掃し、すぐに昼を迎えたあと、つるべ落としの陽はたちまち夜のとばりをおろす。

まもなく十一月に入り、見ノ越では今年二度目の雪を見た翌朝、山小屋の佐川夫婦が下山の挨拶に寄り、国太郎を見舞って、

「病気の正体が判っておれば、薬を買うて届けるんじゃが」

といってくれたが、目下それは頼みようもなかった。

開通した車道は、時期も初冬ということもあって国太郎の予想したとおり、上がってくる車はほとんどなく、一日数えて二台、三台、それも工事関係者とか、測候所へ資材を運んでくる車とかばかりで、観光目的の乗用車はまず見かけなかった。

道が凍って通行不能となるのは大体十二月の半ば以降だから、まだまだ車は通れるが、ここまで上がって来て、車を捨てておいて頂上へ登ろうとするひとは無く、山はまたきびしい眠りに入ろうとしているのであった。

国太郎はただ寝るばかり、こんな状態では身動きもならず、まるで袋小路のなかに追い込まれたようだと思いつつ、珠子は庭を横切ろうとし、宿坊の縁側を見てつい笑ってしまった。

そこには、拭き掃除でもしていたらしい久能が手を休めて一息ついている姿があり、見れば、国太郎の古いシャツに古いズボン、首には寒いのか手拭(てぬぐ)いを巻き、これも国太郎の着古した綿入れ半纏(はんてん)を着ている。

どこから見てもこれではこの辺り一帯の山家のお兄さん、という感じで、かつての東京のカメラマンという一種都会的な雰囲気はすっかり失われているのであった。

「よう似合(にお)うとるわ、久能さん」

と近寄って行くと、久能も笑いながら、

「いつもはおちゃんちゃんだったけど、今日は何だか寒いんで、これ無断借用しちまった。いいかな」

「着て頂くのはかまんけど、はじめてじゃろ？　半纏は。着にくいことないかなあ」

「いやとってもあったかいよ。綿が入っているんだなあ」

と、二人並んで腰かけ、珠子は足をぶらぶらさせながら、

「どうしたらええんかなあ。日はどんどん経つのにお父さん起きられんし」

申しわけない、の気持ちを込めて珠子はそういい、

「やっぱり久能さん一人帰ったほうがええのとちがうかなあ。昨夜もずっと考えてたんじゃけんど、久能さん東京を出て二月余りになるもんね。みんな心配しとるんじゃないかしらん」

「珠子さん、ほんとにそう思うの？　私一人帰ったほうがいいと信じてそういうの？」

急に久能は強い語調になり、問い詰めようとするのへ、そういわれると珠子はたじたじとなり、

「だって、このままでいつまでもというわけにはいかんじゃろ？　どうしたらええんか、困ってしまう。久能さん引き止めてる私がいちばんの悪者じゃないかと思うてしまう。もし私がいなかったら、久能さんとうに東京に帰ってたでしょう」

「珠子さんいなかったら、私は死んでいました。与次郎谷で白骨になっていました」

久能はそういいながら、珠子の肩へ手をまわし、そっと抱いた。

「珠子さん、いま私が考えていること、いおうか」

と久能はむしろ楽しそうに、

「あなたを置いて私一人山を下りられない、といいましたね。この気持ちはいかなる状況のもとでも不変です。

だから、珠子さんが私と一しょにここを動くことができないのなら、私も動きはしない。ここで私たち、結婚しませんか。

お父さんに話して許しを乞い、三人で暮らしませんか。

二ケ月余り養って頂いたあいだに、私はすっかりこの山の暮らしが気に入りました。太古のままの自然に抱かれ、汚れた心のかけらもないひとと一しょに過ごしていると、人間の醜い欲望などきれいに拭い去られてしまう。

もともと私が山の花を撮りたかったのもそうだった。誰に見せるでもないのにせい一杯咲いて、そして自然に抱かれて散ってゆく、こんな姿がたまらなく好きだった。

ねえ珠子さん、私は何もあなたをこの山から連れ出さなくてもいいんですよ。私がそばにいればそれでいいんです。あなたに同化され、山の自然に融け込んでゆく、それが私の理想だったはずだ」

珠子は久能のその言葉を聞いたとき、全身を感動の波がかけめぐり、充ち溢れるのをお

ぼえた。

こんな素晴しい夢を、私は久能さんに会ったころから心ひそかに描いていたんだ、と思うと、いまそれを久能の口から直接聞かされたことで、珠子は思わず涙がしたたりおちるほどうれしかった。

久能は珠子の肩の手に力を込めながら、

「ただ、私がここに居付くとしたら生活の問題がある。私にはお父さんの神職を継ぐことはできない。神を敬う気持ちは十分に持っているから、神職が嫌だというのではないが、資格を取るのには学校へ行かなければならないし、何年かの別居生活を強いられる。

ではいままでどおり、山の写真を撮って、それで生計が立てられるかといえば、剣山一ケ所にとどまっていることはむずかしい。活動範囲を拡げれば、これまでのようにほとんど家にはいられなくなる。

珠子さん、私がいま考え込んでしまっているのは、その生活の問題なんだよ。これでもあなたは私に、一人で山を下りろっていうの？」

「そうじゃったの。そこまで考えてくれていたんですか」

珠子は深くうなずき、

「生活というのなら、いまうちはお社の氏子さんの寄進と、宿坊の宿泊料でしょう。

贅沢さえしなかったら、これで十分なんです。三、四ケ月に一度ぐらいは貞光に下りていって、衣料品や珍しい缶詰なども買えますし。久能さんと三人、べつだん心配せんでも暮らしてゆけますよ」

「そう？　そうだねえ。

しかし食べさせてもらうだけというのも、割り切れない気がする。ま、すでに生活の基盤はあるわけだから、あとはおいおい考えてもいいしね」

「お父さんきっと喜ぶと思うなあ」

第八章　別　れ

久能との話しあいのあと、珠子はむしょうに嬉しく、心が弾みあがってその夜はすこしも眠れなかった。

久能と駈け落ちと決めたときから、ひそかな喜びはあったけれど、そのかげには親を捨ててゆく罪、都会生活への不安があり、片方で自分を責めつづけていたのに、今度は久能に申しわけなく思いこそすれ、悔いはほとんど無いといってよかった。

もしこれが実現すれば、大好きなこの剣山からも離れることなく、生涯愛する久能とともに過ごすことができる、これこそ自分がさがし求めていたしあわせだと思うと、まるで夢を見ているような気持ちであった。

珠子は久能に、

「すぐお父さんに報告しましょうか」

と聞くと、久能は、

「もう少し快くなってからでもおそくないと思うよ。起き上がれるまで待ってみよう」

といい、久能ももう帰る望みを捨てたからには何もあわてることもないと珠子は思うのであった。

自分にとって最高の未来がひらけるというのはこれほどにうれしいものか、と珠子はしみじみと実感し、一日一日を浮き立つ思いで過ごしている。

ただ、国太郎は一向に元気にならず、ひょっとするとこのまま寝たきりになるのではないか、という心配がつきまとうが、それは珠子の行く手を阻むほどの出来ごとではなかった。

その日は十一月四日、空は晴れてあたたかく、久能は前日打ち合わせてあったとおり、今年最後の買い物をしに、一人で里へ下りてゆくことになった。

すでに一、二度、貞光までは出かけており、こまごまとメモした買い物リストをポケットに、国太郎のヤッケを羽織って家を出たのは午前七時ごろだったろうか。

すっかり山男めいた久能のうしろ姿を見送ってのち、珠子は忙しく立ち働き、国太郎に昼食を食べさせてから、社殿のわきにある社務所に入って内部を整理したあと、しばらくそこに腰かけていた。

ここは、神札やお守りなどの授与所を兼ねており、参詣者の求めに応じて分ける場所だが、誰一人お詣りすることがないと判っている日でも、用がなければ珠子はここに坐っていることがある。

目の前の木立をぼんやり見つめているときもあれば、社殿の奥に目をやっていることもあり、一見無為と思われるそんな時間をすごすことによって、自分が神に仕える身なのだという自覚を呼び返すことができるのであった。

木立にかかる太陽の位置から見て、それは午後二時ごろであったろうか。

目の前をすっと黒い影が過ぎてゆき、鳥かな、と思ったとき、それはすぐに引き返して来て珠子の前に立った。

顔を上げると、頒布品を並べてある台の向こうに立っているのは、この辺りでは見たことのない、都会的な雰囲気を身につけた三十がらみの女性であった。

そのひとと目が合った瞬間の衝撃を、珠子は決して忘れることはないと思う。

まだ名も名乗らず、誰に教えられたわけでもないのに、珠子は目の前のそのひとが、久能と深い関わりのあるひとにちがいないという鋭い直感が、まるで電流のように体中を貫いてゆくのを覚えた。

いやもっと、このひとはまちがいなく久能さんの奥さんだ、という確信が心の底にあったのかもしれなかった。

短く刈り上げた髪、黒いとっくりセーター、ズボンも黒で、手にはツイードのオーバーをさげているそのひとは、珠子に頭を下げて、

「あのう剣神社の宮司さんのお宅の方でいらっしゃいましょうか」

とたずね、うなずくと、
「こちらに久能卓郎と申しますカメラマンがお世話になってはおりませんでしょうか」
と聞いた。
珠子はとっさに、どう答えるべきかに迷っていると、向こうは続けて、
「わたくし、久能の家内でございます。
主人が八月半ばに剣山の花を撮りにゆくと家を出たっきり、連絡がないものですから、捜し捜ししながらここまでやって参りましたの」
と、歯切れのよい東京弁でそういう相手の顔を見ながら、珠子は自分の顔から血の気がひいてゆくのが判った。
そうだったのか、奥さんとは別れを告げてきたというのは嘘だったのか、こんなきれいなお人だもの、そうだったのか、そうだったのか、と一瞬にして何も彼も判ったような気になり、体中の力が抜けて危うく椅子からずり落ちそうになった。
気を取りなおして立ち上がり、
「久能さんはこちらの宿坊に滞在しておいでるのじゃけんど、ただいまは里へ買い物に下りておいでとります。
ここでしばらくお待ち下さい」
と珠子は社務所から出、女性を宿坊へと案内した。心のうちは、嵐の日の山の立ち木の

ように激しくざわめいているのに、よくもあれほど冷静に応対できたな、とあとで思ったほど落ち着いているのであった。

囲炉裏の火をおこし、枝をくべて部屋をあたため、自在鉤にかけた鉄瓶の中に水のあることを確かめてから、

「お湯が沸いたら、これでお茶淹れて下さい」

と茶の葉の缶や湯のみを揃え、立とうとすると呼びとめられ、

「あなたはこちらのお嬢さんですか。

久能のお世話をして下さっているのですね。久能は毎日どんなふうにすごしているのでしょう」

珠子は女性からの質問をかわし、

「ちょっと用事がありますけん」

といって宿坊を出た。

母屋へ帰ろうとして庭を渡るとき、下の広場を見ると、ベージュいろのしゃれた小型乗用車が駐車してあるのが目に止まり、ああのお人、あれに乗っておいでたんじゃなあと思った。

東京からはるばると、自分で運転して夫をさがしにここまで登ってくる妻、と思っただけで珠子は圧倒されるような感じになり、とたんに我が身はさむざむとした疎外感にさい

なまれはじめる。

どこかで一人、思いっきり泣きたく、家のまわりの道は稀に人のあらわれることもあり、結局珠子がいま、この張り裂けそうな胸を涙に代えてぶちまけるには、家の暗い土間より他なかった。

火のないかまどの前にしゃがみ、珠子は長いあいだしゃくりあげて泣いた。

久能さん嘘ばっかり、私をだましたりして、ひとりで山は下りられないからここに居つづいて一緒に山人になろう、なんて、私をぬかよろこびさせたりしてひどい、ひどい、と胸のうちで呟きつつ泣きつづけた。

昨日までは有頂天の毎日だっただけに、今日のこのどん底に突き落とされた思いはいっそうみじめに思えてくる。

まもなく座敷の時計がゆるく三時を打つのを、珠子はなおしゃがんだまま聞き、そのあと長針が半になれば打つチン、という音を耳にしたとき、珠子は目の前に久能が立っているのに気がついてびっくりした。

「いま帰ったよ」

とおだやかにいい、いっぱいにふくらんだザックと両手の荷物をおろすあいだ、珠子は硬ばった表情を解くことはできなかった。

「久能さん」

奥さんが、といおうとして唇がひきつっているのを久能は見て、
「判っている。さっき会いました。
いまから話しあいをしようと思うので、あなたも来て下さい」
と誘った。
「どうして？　どうして私がお話のなかに入らんといけんのじゃろか。
奥さんは久能さんを迎えに見えたのとちがう？　久能さんはあの車に乗って帰るのとちがう？」
「珠子さん、早合点してはいけない。
私は帰るつもりなんかしてはいないよ。さあ、おいで。巡子にそのことを話そう」
久能は珠子の手首をとらえ、強引にひっぱって宿坊に行った。
囲炉裏の前に坐っていた巡子は、
「あら、そのお嬢さんもご一緒なんですか。二人だけではいけないんでしょうか」
と強い非難のまなざしを送った。
「それをこれから話す」
と巡子と向かい合って久能はあぐらをかき、そのかげに隠れるようにして珠子はそうーっと坐った。
巡子のくべかたが悪かったのか、囲炉裏の火はいぶり、それを久能が巧(うま)くつくろって炎

にするのを巡子はじっと見ていて、
「あなたそういうこともお出来になるようになったのね。そのお召しになってる何ていうのかしら和風の上衣、それもよくお似合いよ。それもそのはず、もう二ケ月半近くですものね。ずっとこちらでお世話になってらしたの？」
と、どこかにとげを隠し持っているようないいかたに、久能はすこし癇を立てて、
「私が家を出るとき、書き残してきた手紙と書類、君は見ただろう」
「手紙は読みました。
私も仕事があるし、二人スレ違いが多くてたしかに和気あいあいというわけにはいかなかったかも知れないけど、そんなこと、どこの夫婦にもありがちのことじゃない？
あなたは何でも一途に考え過ぎるのよ。
書類って離婚届のことでしょう。あなた悪い夢でも見てるんじゃないかしら、と私、おそろしくなってすぐ破って捨てました。
ちょっとスレ違いが重なったくらいで離婚してたら、日本の夫婦の離婚率はすごーく高くなりますわよ」
「君は私の手紙を十分に理解していないね。私が家を出る決心をしたのは、もっと本質的なところにあるんだよ」

「あなたの本質を、私が理解していないといまごろになっておっしゃるの。あたしたち、愛し合って結婚したのを忘れたんですか」

「ともかくね、私の気持ちは手紙に書いたとおりだ。身勝手かもしれないけれど、私はもはやあの家に帰るつもりはないんだ。いまはこの決心がすべてなんだ。君に対する私の仕打ちがあまりに勝手過ぎるのは重々あやまる。私の気持ちとして、家も車もすべて、君が好きにしてもらえばいい」

「何をいうんですか。あなた。ともかく、すぐに帰りましょうよ。私は東京から車で途中休み休み、一週間もかけてここまで辿りついたんですよ。剣山には宿泊施設がいくつかあるんですね。でも十一月になると皆、シャッターをおろしてしまう。ただ一軒、ここの宿坊だけは冬も開けていると聞いて、開通したばかりの道を登ってきたら、あなたはちゃんとこちらにおりました。着替えも食料もお金も、車に積んで持って来ましたのよ。さあ、その着ぶくれの借着は脱いで、ご自分の防寒着を着て下さい。陽の暮れないうちに山を下りましょうよ」

と巡子はことともなげないいかたで久能を急がせ、是が非でも連れて帰ろうとするのであ

った。

珠子は目の前の久能と巡子のやりとりを聞いていて、さきほど久能の気持ちを疑ったのを深く悔いるとともに、こんなにも拒んでいる久能を強引に連れ帰ろうとする巡子のやりかたに強い反撥を覚えた。

久能は不快そうにしばらく黙っていたが、珠子を振り返って、

「私はね、道に迷って疲労困憊し、ほとんど死んでいたところを、このひとに助けられたんだよ。珠子さんは命の恩人だ。

私は、自分をよみがえらせてくれたこの山と珠子さんのそばで、ずっとこれから先の人生を送りたいと思っているんだ。

私にもっとも似合った選択だと考えている。東京からわざわざ来てもらった君に申しわけないが、それで納得してはくれないか」

と久能が説明すると、巡子は目を大きく見張って驚きの表情を見せたが、次の瞬間、体を前に折り曲げて笑いころげた。

「おかしい、おかしい、ああおかしい。

あなたのように山ばかり歩いていると、一度や二度は遭難することもあり得るでしょ。げんに、アルプスでも雪洞を掘って一晩そこで明かしたこともあったじゃありませんか。

要するに遭難とはいいわけでしょう？

ほんとうはそちらの娘さんに誘惑されたのか、あらごめんなさい、このいいかたはちょっときつすぎたわね。

つまりあなたはいま、迷っているんですよ。このごろは山の植物を撮る若いカメラマンも増えたし、危い岩場に登って撮る作品やら、人跡未踏という秘境に踏み込んで写すものやらどんどん凄いものが出てくる。

そんなものと太刀打ちできなくなった、とお考えなのとちがいますか」

と巡子がずけずけと浴びせる言葉を聞いて、珠子はひとりでに頭に血が上ってくるのをおぼえた。

何というういいようかしら、救助された山の娘に誘惑されたというのは無視するとしても、久能さんのカメラマンとしての自信を失わせるような言葉をまあよくも、と頬が熱くなり、久能の顔を見ると、久能は表情も動かさず、口もとで冷たく笑っただけであった。

「君はそういういいかたが好きなんだよな。いいさ、昔からずっとそうなんだから。

ただ、私のことは如何にあしざまに罵ろうと差し支えないが、珠子さんのことを悪くいうのは許せない。

このひとがいなかったら、いまの私は生きてこうしてはいないということを忘れないように」

というと、立ち上がり、

「帰ってくれ給え。私はここを動きはしない。あとのことは君の好きなようにしていいから」

といい捨てると、珠子を目で誘い、宿坊から出ていこうとした。

そのとき巡子は、一足踏み出した久能のズボンの裾をとらえたのと、

「あなた、待って」

と叫んだのと同時であった。

目が吊り上がっており、声も上ずっていて、

「ひどいわ。あなた」

と金切り声に近い叫びを聞いて久能はさすがにひるみ、

「手を離しなさい」

と巡子の腕を払うと、もう一度もとの場所に坐り、感情を押しこらえた声で、

「私が家を出る決心をするまでには長い時間がかかっている。ひょっとすると、結婚まえからもう別れることを考えていたのではないかと思うくらいだ。

それでいてだらだらと三年も一緒にいた自分の優柔不断を恥じているんだが、これは君に対しても深くあやまりたい。

だから、今回の決心は今日や昨日のことではないことを判って欲しい。いま私がもとの家に戻っても決してうまくいきはしないよ。お互いに苦しむだけだ。なあ、判ってくれ」

と説くと、巡子は激しい口調で、
「わかったわ。だからあなたは子供を欲しがらなかったのね。作ろうとしなかったのね」
というのを聞いて珠子はたじろぎ、この場に自分がいるべきではないと思って、そっと立とうとした。それを見て久能は、
「珠子さん、ここに居なさい」
といい、巡子はきつく、
「あなたは帰って。これはあたしたち夫婦のあいだの話よ。娘の分際で聞くことじゃないわ」
というのへ、久能は気が昂ぶったのか、
「そういういいかたはないだろう」
と大声でたしなめたが巡子は聞かず、
「出ていってよ。早く。
久能のことは妻の私が考えるわ。行きずりのあなたなんかにはお世話にならないから」
といったとき、たまりかねた久能の平手が巡子の頬に激しい音をたてた。
「あっ」
と驚いて駈け寄ると、巡子は打たれた頬をおさえながら、うす笑いを浮かべ、
「初めてよ。久能に打たれたの。

女房だから遠慮なく手がのびたんでしょ。
さあ、出ていってちょうだい」
と、珠子に怨みをこめたような視線を向けた。
珠子は立ち上がり、二人に頭を下げてから宿坊を出、庭をよぎって母屋へと帰った。
秋の日あしは短気者、とくに前が木立の見ノ越ではもはやとっぷりと暮れている。いくら車とはいえ、いまから山を下りることはできないと思われ、重い心のまま座敷へ上がると、国太郎は目を開けていて、
「お客さんか？　誰じゃな？」
と聞いた。
庭をへだてているとはいえ、宿坊での何やらただならぬ空気はここまで伝わってくるのかも知れなかった。
珠子は国太郎に聞かれ、すこし考えたが、隠しおおせることでもないと思い、
「久能さんの奥さんが見えとる。自分で車運転して東京からおいでたんじゃと」
というと、国太郎はうなずいて、
「そうか。もう二ケ月半にもなるけんなあ。おうちのお人らも案じておられたんじゃろ」
とだけいって、寝返りを打った。
そろそろ夕食の支度をしなければならないと思いながら、珠子は何をする気も起こらず、

さっきと同じように土間のかまどの前にしゃがんだままであった。

巡子の久能に対する態度の大きさと暴言は許せないが、これもつきつめて考えれば自分のいるせいなのだと我が身を責めたくもなってくる。何といってもあの二人ははるかな東京に住む都会人、こんな四国の果ての天上の生活とは全くちがう。話も合うだろうし、知人も多いだろう。結ばれるべくして結ばれた夫婦にちがいないのだと、悲しい思いでそう理解しようと思うかたわら、久能と自分との運命的な遭遇もまた、決して否定できない絆（きずな）であるとも思う。

しかし久能ははっきりと、これからの人生を自分と共に過ごしたいといってくれている。それも、命の恩人だからそう決心したのではなくて、珠子さんの人間全部が好きになったとも宣言してくれた。もし、あの事故がなかったとしても、私はここで出会った珠子さんという一人の女性に、深い感動と愛情をおぼえたにちがいない、ともいってくれた。

私だって、親を捨てて久能さんとともに山を下りようと覚悟した気持ちは決してかりそめのものじゃない、どんなことがあっても久能さんとは生涯一緒にいたい、離れたくない、と珠子は力をこめて両手をしっかりと握りしめる。

こんな気持ちは生まれてはじめて、あの巡子さんとやらに、田舎娘とあざけられ、久能を誘惑したとののしられようと、久能さんのためならどんなにでもして耐えてみせる、と珠子は武者ぶるいするに似た気持ちであった。

ともかくも日が暮れてしまったからにはあのひとを泊めなければならぬ、晩御飯も用意しなければならぬ、と珠子はようやくのろのろと立ち上がり、夕食の準備をはじめた。

久能のザックを開けると、里から買ってきた食糧がいろいろとはいっており、まず病人には豆腐汁を、あとは久しぶりに豚汁を炊いて、宿坊の二人を呼びに行った。

部屋から話し声は全く聞こえず、珠子は外から、

「夕食ができました。こちらへお持ちしましょうか」

と聞いたところ、久能からは元気な声で、

「私がやりますから」

と返事があった。

久能は母屋に戻り、

「珠子さん、ご厄介かけてすみません。巡子のことは私がやりますから」

と盆に豚汁の椀と御飯とをのせ、運んで行ったが、自分はいつものように母屋の囲炉裏端へ坐った。

その夜の夕食は何やら重苦しく、三人が三人ともことさらに宿坊の客の話題を避けようとしており、久能が、

「白塚さん、今日は胸は苦しくなかったですか」

と問えば、国太郎も、

「里はどうじゃったな」
などととんちんかんな返事をし、そそくさと終えた。
そのあと、茶を飲みながら、珠子はやっぱりそれが気がかりで、
「広い宿坊にお客さんお一人ちゅうのはとても寒いじゃろう。じゃけん、こちらで私らと一緒にやすんでもろうてはどないじゃろなあ」
というと、久能は強く拒み、
「いや、囲炉裏があるから大丈夫ですよ。十分に暖はとれます。いつもの通りにしましょう」
と受け入れず、しかし珠子も重ねて、
「そんでも、先達さんのようにご自分で火も焚かれるんじゃったらええのじゃけんど、薪などさわったことのないお人じゃし」
とすすめたが、久能は頑なに、
「寒ければ屏風もあるし、蒲団だってたくさんある。ほんとうに心配いりませんから」
といって立ち上がり、寝支度をしてやるために宿坊へと出て行った。
あとの珠子はおちつかず、新しい薪をくべたり、火箸で灰をならしたり、心の動揺をそのままにいらいらしており、それを見て今夜の国太郎は横にもならず、

「お客さんは誰じゃな？」
またぽつんと聞いた。
さっき話したはずなのに、わざと知らないふりをしているのか、と考えながらも、やはりもう一度、
「久能さんの奥さんらしい」
と小さな声でそういうと、折り返し、ふたたび、
「奥さんじゃな」
といって、国太郎はじっと囲炉裏の火をみつめた。
久能に妻があることをいまはじめて知ったはずだが、国太郎は何やら察したものと見え、ふと顔をあげて、
「なあ、きよみ」
と呼びかけた。
自在鉤の鉄瓶がしゅんしゅんと鳴っている静けさのなかで、国太郎は幼い子にさとすような口調で、
「お客さんが久能さんの奥さんなら、何を遠慮することがあろうぞ。二人であちらでやすんでもろうたらええじゃないか」
国太郎はゆっくりと続けて、

「宿坊は広いけん、一人で寝るはたしかに寒かろう。なんぼ榾火があるちゅうても暁がたは冷えこむ。

じゃけんど、夫婦で一つ蒲団に寝るのなら寒いことなんぞありはせん。枕もと足もとを屏風で囲うたら風よけにもなる。久能さんはわしらに遠慮なさっとるんじゃ。きよみ行って、どうぞご一しょにおやすみ下さい、いうてあげなや。ほしたら久能さんも安心して向こうで寝られるけん」

と、珠子にすすめた。

それは、まだおぼこで夫婦の何たるかを知らない娘に、親がさとしているような調子だったが、珠子は聞いたとき、何ともいえぬ悲しい思いが体中を充たすのを感じた。

久能が妻と抱き合ってねむる、といわれただけで胸を鋭くつき刺されるような痛さがあり、そんなことをすすめるなんて絶対に嫌だ、自分にはできない、と珠子は強く思った。

唇をきつく噛み、じっと目を落としている珠子の心をよそに、国太郎はふたたび、

「さ、早う行ってあげや。あの夫婦は久しゅう会うてなんだけん、つもる話もあるじゃろうし」

と急かし、そら、そら、と手で追い立てるしぐさをした。

が、珠子は立ち上がらなかった。

自分と一しょに暮らそうといっている久能の気持ちがほんとうなら、いまさら巡子と一

つ蒲団に寝るなどは決してしないと思うし、第一そんなことなど考えるさえ、身ぶるいするほどの嫌悪感に襲われてしまう。

国太郎は、日頃素直な珠子がじっと黙り込んでしまったのを見て、首をかしげてみつめていたが、何かを悟ったのか、こちらも口を噤んでしまった。

やがて手持ちぶさたに国太郎が、

「えらい静かじゃなあ。鉄瓶がよう鳴ると明日は雪じゃともいうが」

といったとき、土間に音がし、巡子の膳を下げて来た久能が戻って来て、

「冷えますね、夜は」

とてのひらをこすり合わせながら、囲炉裏の前の自分の定位置に坐った。

それはいつもの平静な久能の姿であって、国太郎が聞きただすとも、宿坊の客人はおとなしく寝についたことを示し、自分も普段どおりこちらでやすむということらしかった。

山の夜は静かで、この静寂を破ってめんどうな話をするのもはばかられる雰囲気があり、

国太郎が、

「わしはもう寝よう」

といえば、珠子は、

「はい」

と受けて手を貸し、かたわらの寝床へ国太郎を横たえてやるのであった。

珠子も寝ようとして戸じまりに立ったとき、ちょうど宿坊の灯も消えるのを見た。

珠子は、綿入れ半纏の前をかきあわせ、灯の消えた宿坊をしばらく眺めていたが、やっぱり襲ってくるのは辛さばかり、うなだれて家のうちに入ると、電燈のスイッチをひねって寝床に横たわった。

襖をへだてた向こうには久能が寝ており、許されるのならそのそばに行って、思い切り泣きたかった。

とても眠れるどころではなく、突然降って湧いたようにあらわれた巡子の、どの一言を聞いてもおどろきとしかいいようのない今日の会話が、いやでも耳によみがえってくる。

人の妻とはあんなにも自信に充ちているものか、頬をぶたれても女房だから遠慮がないのよ、と平然としていられる態度が思われ、それに比べると、自分など久能の言葉に一喜一憂するのは、やっぱりまだ愛されていることの確信がないためかとも思う。

しかしここに来て、久能があの巡子の車に乗り、一しょに東京へ帰って行くのは、珠子にはとうてい耐え難かった。もしそういうことになったら自分も車に乗り、一しょに東京まで久能についてゆこう、と思ったとたん、囲炉裏の向こうの国太郎の寝息が聞こえてくると、ああ、と昂揚した気持ちは奈落の底はるかに落ち込んでしまう。

かつて隆子は、母親をあしざまに罵り、この親を捨てることまことに平然として家を出

たと聞いたが、珠子にはそれはできないことであった。

高齢の上に体も弱っている国太郎を、このままどうして放置できようか、と思うと、また困った、困った、どうしよう、どうしたらええ、になり、ひんぱんに寝返りを打つだけで何の知恵も浮かんではこない。

考えてみれば、この状況は珠子生まれて以来はじめて直面した難問であって、それも久能夫婦の思惑と選択がからんでいるだけに、自分一人で決断のつき難いところがある。

考えても決して解決しない問題をくり返し頭に浮かべているうち、どうやら夜明けも近くなったらしい。入り口の腰高障子がうっすらとしらんで来、柱時計が五時半のチンを鳴らしたとき、

「ああ寒い、寒い、寒い」

という声が庭を渡ってくるのが聞こえたと思ったら、入り口の戸ががたがたと揺すられ、

「お早うございます。久能、こちらにおりましたらお願いします」

という高い声が響いてきた。

それを聞いて、寝ていた三人は皆とび起き、バタバタと蒲団をたたみ、埋み火をかき起こして、ともかくも声の主を迎え入れるべく支度する。

寒い寒い、というはず、外は昨夜からの予想どおり雪になっており、いま、もっとも激しく降りしきっているのであった。

「お客さんか、こっちへ上がってもらいや。火もあるけん」
と寝巻きの上に半纏を着、厚い衿巻きを巻いた国太郎が珠子にそういいつける。
あわてたのは久能で、国太郎に謝り、玄関に立っている巡子を叱り、そして囲炉裏ばたを片づけながら、
「どうして向こうにいないんだ。食事は運んでやるといっただろう」
というと、巡子はオーバーの雪を払って上がり、
「火がすっかり消えてしまって、寒いったらないのよ。しんしんとして、体の芯まで凍ってしまうわ」
と、囲炉裏の前まで進み、
「こちらのお父さまでいらっしゃいますか。わたくし久能の家内でございます。主人が夏以来、大へんおせわをおかけいたしまして、お礼の言葉もございません」
ときちんと挨拶した。
国太郎はどぎまぎして、
「ああ、いや、こちらこそ。久能さんにはよう手っ伝うてもろうとります」
などと受け答えしている。
朝食はいつも粥を煮る習慣で、大きな鉄鍋に洗った米を入れ、自在鉤にかけると、珠子は土間に下りてつけものの菜を洗ったり切ったりしながら、聞こえてくる囲炉裏ばたの会

話に耳を傾けている。
「ねえお父さま、雪が降りますと車はこの山道を通れなくなりますでしょう。わたくし朝ごはんを頂いたらすぐ、久能とともにおいとまいたしたいと存じます」
「そうか。久能さんもとうとうお宅へ帰られるんか」
「つきましては、あとでめんどうな話になるといけませんので、この際お父さまに申し上げておきたいと思うのですが。
久能が危ういところをお宅のお嬢さまにお助け頂き、その感謝のしるしにお嬢さまと結婚のお約束をしたらしゅうございますが、そのようなことは、久能が事故に遇ったための錯乱かと思いますので、何もなかったことにして頂きとう存じますの」
とよどみなくぶちまけた巡子の言葉に、珠子の手は思わずとまり、久能も一瞬絶句し、そして何も知らなかった国太郎はおどろきのためか、急に胸が苦しくなって、
「水、水」
と珠子を呼んだ。
久能も駈け寄って国太郎の背をさすり、やや落ちついたのを見はからって、
「白塚さん、このことは私の口からきちんとお願いしようと考えていました。
巡子が私をはるばると迎えに来てくれたことには感謝しますが、私たち夫婦はもうもとには戻らないのです。

これはどんなに努力しても無駄だと思います」

と話しはじめた久能をさえぎって、

「そんなことないわよ。夫婦の仲って二人の問題よ。主人はひとりでそう決めてかかっているんです。

私は別れるなんて毛頭考えたこともない」

昨日から久能と巡子がいい争っている問題は、とうとう病人の国太郎まで巻き込んで、またこちらの囲炉裏ばたでむし返されることになってしまった。

さすがに久能はひどく恐縮しつつ、

「白塚さん、まことに申しわけありません。お世話になった上にとんだ恥をさらすことになってしまいました。

どうぞ横になっておやすみ下さい。

この件は私と巡子のあいだで話しあいますから」

といい、珠子に合図してその場に寝床を取り、国太郎をそっと寝かせた。

巡子も国太郎の様子を見てさすがに少しひるみ、黙って様子を見ているのへ、久能は強く、

「白塚さんは体の具合がよくないんだ。我々のわずらわしい話をお聞かせすると、いっそう苦しませることになる。

君は宿坊にいてくれ給え。こっちに来ないように。私はまもなく行くから」
といい渡した。
巡子はいかにも不本意というふうに、
「そうですか。追い払われるんですか」
といいつつ立ち上がり、玄関で靴をはきながら、
「寒いのよね。がらんとした広間で暖房もないんだもの」
と捨て科白を残し、オーバーを肩にかけた姿で庭を渡って行った。
珠子は、粥の膳を用意していた手をおき、焚きつけの小枝を持ってすぐ後を追い、宿坊の囲炉裏に火をおこして大きな薪をくべた。寒い山家に火は何よりのごちそう、あたたかそうな炎をあげて燃えはじめた炉のそばへにじりより、両手をかざしていた巡子は、まもなく湯気の立つ粥の膳を運んで来た珠子に、
「あなたお母さまは？」
と聞いた。
「亡くなりました。もう四年になります」
「そう。それはお気の毒だわ。
こんな山だと学校はどうするの？　通えないでしょう？　それとも分校はあるのかしら」

「そうですね」
と珠子があいまいに答えると、
「それじゃあ義務教育だけなのね。不自由じゃない？　テレビもないようだし」
と、いかにもかわいそう、とこちらを憐れんでいる様子なのを見て、珠子はそっと席を立とうとすると、
「まあお坐りなさいよ」
とすすめ、
「久能と私は、大恋愛の末、結ばれたのよ。同じ会社だったの。でも久能はどこかデリケートなところがあって、夫婦で同じ職場にいることには耐えられなかったらしいのね。それでとうとう一人で花に逃げたんですよ。
もともと花の好きな人だったけど、山に行けばめんどうな人間関係もないわけだから、あのひとには向いた仕事だったんでしょうね。でもこのまま帰ってこないのは、私、困るの」
巡子は続けて、
「もし久能がこの山に居ついてしまったとしたら、会社での私の立場がなくなってしまうわ。それ見たことかと手を叩くひともいるのよ。会社ってライバルばかりなのよ。
ねえ珠子さん、あなたも久能に帰るようすすめてちょうだい。あなたと結婚するなんて、

まさかそんなこと、あなたも信じてはいないでしょ。

どちらが先にいい出したのか知らないけど、久能からだったら、それは恩返しにあなたを喜ばせただけよ。あなたがいったのなら、それは夢を見ているとしかいいようがないわね。

結婚ってある程度釣り合いがとれていなければ、周囲も納得しないし、認めないと思う。ねえ珠子さん、私というものが現れた以上、しっかりとこの現実をみつめてよ。東京っ子の久能がここであなたと暮らすなんて、とうていできはしないことよ。わかってね」

と説く巡子の自分流のいい分を、珠子は一語一語胸に畳み込むようにして聞いたが、反論はなにひとつしなかった。

いい返したいことは山のように体のなかに詰まっているのに、この流暢な東京弁に遭うと声が出なくなってしまう。よしんばいい負かしてもこの場合、それがなに、という気があり、珠子は無言でうなずき、両手で粥の膳をすすめてから母屋へと戻った。

国太郎は顔いろももとへ戻っており、寝床の上に坐って久能の話を聞いているところであった。

久能は珠子を見ると、坐るようにと目で指し、

「いまお父さんに事情を説明したところだよ。

巡子との離婚がまだ結着を見ていないのに、あなたに結婚を申し込むのは不謹慎の沙汰と受け取られてもいたしかたないが、私としては、もう二度と東京の家へは帰らないつもりだった。

ここは何とか巡子に同意してもらい、そしてこれから先、あなたと一しょにこの山で過ごすことを、お父さんに許して頂きたいと、お願いしているのです」

と膝を進め、熱心に国太郎の目をみつめた。

国太郎は珠子のほうに向いて、

「久能さんの話はよう腹に入った。

こんな山の暮らしが気に入って頂いて、わしもうれしゅうに思う。じゃけんど、きよみの気持ちというもんを、自身の口からじかに聞いてみたい。

どうじゃな、きよみ。

お前はどう思うとるんじゃ。奥さんも東京から迎えにおいでとるいま、かくさずほんまの気持ちをいうてみいや」

とゆっくりと促した。

珠子は、つばを呑み込んでから、

「お父さん、ほんまいうとなあ。きよみ、お父さん捨てて久能さんと逃げようと思うてたんじゃ」

お父さんを捨てて、という、いってはならない言葉を口にしたあとで、珠子は申しわけなさに顔が上げられなくなり、じっとうつむいた。

国太郎も大きな衝撃を受けたらしく、目を見張り、珠子を長いあいだみつめていたが、何もいいはしなかった。

久能はおろおろして、

「でも白塚さん、それはしてはならないと考え、私たちは取りやめたのです。おゆるし下さい。一ときでもそんな了見を起こしたことを謝ります。このとおりです」

と畳に手をついて頭を下げた。

国太郎は目を落としたまま、

「取りやめたんは、わしが腹いた起こしたためじゃなかったかなあ。ま、そりゃどっちでもええ。つまり年寄りのわしに同情してくれたことは事実じゃけんなあ。しかしじゃなあ」

といいさしてやめ、じっと考え込むふうで、それは長い沈黙であった。

両手を膝のまえに垂れ、じいっと炉の火をみつめたまま何もいわず、わきから珠子がいく度も薪をくべ、火をつくろうのにも目もくれなかった。

いまは三人三様に先の見えぬ袋小路に入り込んでいる感じがあり、国太郎の重い沈黙はあとの二人にも打開策の思案を強いているようであった。

しかし、巡子があらわれた以上、ことは急を要し、ぐずぐずしていれば道は凍り、車は通れなくなるし、宿坊の都合をいえば明日から連続して三日間、先達さんたちの宿泊の予約がはいっている。

そのことは三人ともよく判っており、やがて炉の白い灰がはらりと落ちたのを見て国太郎は思い切ったように、

「あのなあ久能さん。

あんた生まれも育ちも東京じゃなあ。わしはこの徳島の田舎に生まれて、貞光の町と剣山より他は知らん人間じゃ。その人間のいうことは信用できんといえばそれまでじゃが、このお山さんできよみとともに生涯暮らすについては、単なるもの好きではやってはいけんのじゃなあ。

自然が好きじゃ、山のお花さんが好きじゃだけでは、まもなく飽きてくる。いままで二ケ月半ここにおいでて、あんたさんすっかりここが気に入ったといわれるが、生涯山人になれば、この先まだ五十年、ここで暮らさんならんのじゃよ。

お山さんの生活は単純この上ない暮らしの繰り返しじゃ。四季の変化は里よりもはっきりしておるけんど、お花さん小鳥さん、お星さん風さん雪さんは、ものをいうてくれはせん。

お山さんはいまから冬の季節に入るが、眠った山のさびしさは口ではいえんほどじゃけ

んなあ。お花さん咲かず鳥かげも見ず、厚い雪に閉じ込められて囲炉裏の火ばっかり見つめて暮らさんならん」

国太郎は続けて、

「田舎びとのこのわしでさえ、冬のさなかには誰かに会いとうなったり、話ししとうなったりして苛立(いらだ)たしゅう思うことが必ず一、二度はある。

きよみは辛抱のええ子で、囲炉裏のそばで縫い物編み物をしたりして気持ちをやりすごす方法を、死んだすぎから教わったらしいが、男はそうはいかん。

久能さん、わしのほんまの気持ちをいうたら、あんたが腹くくってここに居ついてくれるのがいちばん嬉しい。それに越したことはないと思うとる。

じゃけんど、考えてみれば、それはあまりにもったいない。都会の暮らしかたを身につけ、その上カメラの技術を持っとるお方が、この剣神社の宮司の家の婿で終わるなんてことは、あまりに惜しい。わしの家は歓迎じゃが、それでは罰が当たるような気がする。

都会のお方は、やっぱり都会へ帰ったほうがええ。それは奥さんが迎えにおいでたからとか、夫婦が仲よくして欲しいとか、そういうのじゃなくて、久能さん自身の問題じゃ。自分の才能を大切にして、しっかりした生きかたをして欲しい、とわしは思うとるんじゃ。

ついでにいわせてもらうと、わしはきよみがあんたに釣り合わんとは決して思うとらん。きよみはまことにええ娘でなあ。

ご存じじゃろうが、わしとは血のつながりはないけんど、もしわしにほんまの娘があっても、こんなええ子には育ってないと思うとる。神さんから授かったわしの宝もんじゃ。それだけに、ええ婿にめあわせてしあわせにしてやりたいとつねづねどれだけ願うておるか。じゃけん、あんたのようなお人にもろうてもろうたら、親としてどれだけ嬉しいかしれん。これはわしのしんじつの思いなんじゃ。

しかしいまはそれより、久能さんがこの退屈な山でこのさき暮らせるかどうか、その覚悟を問うのが先決じゃと思うんじゃがなあ。

なあ久能さん、ここは奥さんのお顔を立てて、日の暮れんうち一しょに帰ったらどないじゃろなあ。そして東京へお帰って、もういっぺん、都会のまんなかで剣山のきよみのことを、思うてください。

きよみもつらかろうが、ここで久能さんががんばって動かずにおったとしても、それはすぐ破滅を見るかもしれんのでなあ。そんなことはない、といまは二人ともいえるじゃろうけんど、年月というのはきびしいもんじゃ。

熱いもんもさますし、鮮やかないろでも褪せさせる力を持っとる。

ともかく久能さん、奥さんと帰りなさい。このまんまでは四人が四人、みんな困ってしまう」

と国太郎は言葉を切り、

「わしも久能さんがおいでたら、頼ってしもうてなあ。弱る一方じゃ」
国太郎はもう一度くり返し、
「なあ久能さん、帰ってつかされ。
それが何よりもあんたのためじゃでなあ」
といい、久能に向かって頭を下げた。
久能はずっと身じろぎもせずに国太郎の言葉を聞き入っていたが、頭を下げられても気づかないほど、まるで放心したように考え込んでいる。
国太郎は珠子に、
「わしのいま話したこと、お前も判るじゃろうが。久能さんのような立派なお人を、こんな山家におひきとめしては申しわけない。
きよみからも勧めてあげや。お帰るように勧めてあげや」
といいきかせたが、珠子は心のうちでそんなこと、私にはできん、と思った。
口下手で、考えていることをそのまま言葉にはできないもどかしさもあるが、やっぱり思いのたけは判ってもらいたく、
「お父さん。申しわけないけどなあ。私は久能さん好きじゃ。きよみ、生まれてはじめて男のひと、好きになってしもうた。
久能さんから奥さん説得してもろうて、お帰ってもらえたらいちばんええと思うけど、

久能さんもお帰るなら、きよみもついて行きたい。東京でもどこでもついて行きたいんじゃ」

といったとき、珠子はその言葉の激しさに自分でもびっくりし、思わず二人の顔を見たが、二人とも静かで驚いた様子もなかった。

考えてみれば、国太郎は珠子が、お父さんを捨てて駈け落ち、を打ち明けたときから、その一途さを知ったにちがいなく、久能はもちろん、一度はそれも考えただけにいまさら動じる話でもなかった。

三人の上にはまた重苦しい沈黙が下りて来、柱時計の時を刻む音のみがいやに大きく部屋中に響きわたる。

どれくらいの時が流れたか、やっと久能が顔を挙げたのと、国太郎が三たび催促しようとしたのと同時だったが、久能が国太郎を制して、

「いや白塚さん、よく判りました。

おすすめ下さったように、ここはご忠告どおり、巡子とともに私は東京へ帰ることにいたしましょう。

ただし、次のお約束をして欲しいのですが」

と居ずまいを正して、

「私が巡子との離婚にきちんと始末をつけたあと、きよみさんを妻として迎えに来たとき

には結婚を許して下さいますね」

と聞いた。

国太郎は気のせいか、ややほっとした表情で、

「それはもちろんじゃ。

しかし、久能さんはここでは暮らせまいじゃろ。きよみを連れて行って下さるか。

それでもええよ。わしはどうせもう先は短いけんなあ」

久能は国太郎に、

「いや私は、一旦はここに自分の人生を埋めようと決心もした男です。こちらに戻ってくることにべつだん抵抗はありませんが、他に生活の方法があるなら、考えてもいいですね。まだ少し時間もありますから」

といっておいて珠子には、

「お聞きのとおりです。

いまのこの膠着状態から脱け出すには、私が一旦東京へ帰るしかないんだ。あなたも一緒に、と思ったけど、病気のお父さんを冬山に残して行くことは絶対にできない。

待っていて下さい。いついつとははっきりいえないけれど、できるだけ早く解決をつけて必ず迎えに戻る。必ず。

いいね。わかってくれるね」

とやさしくいった。

珠子はその言葉にうなずきはしたものの、いいようもなく悲しく、胸のなかが涙でいっぱいになってしまうようで、そっと座を立った。

迎えには戻ってくれるじゃろう、久能さんは私を裏切るようなお人じゃない、じゃけんど、これから東京まで、あの奥さんと二人、長い旅をしてゆくあいだには、とげとげしくいい合いばかりもしてはおられんじゃろ、そしたらそのまま、二人は東京でもとのさやにおさまってしまうかもしれん、第一、二ケ月半も一しょに暮らした久能さんが今日から突然、消えてしまうなんてこと、私は耐えられるかどうか、いいや、耐えられやせん、とても耐えられやせん、と胸のうちで呟きながら、珠子はいつのまにか家の裏に出、水槽のわきにぼんやりと立っていた。

早朝の雪はいつのまにかやみ、積雪は五、六センチほどになっていたが、珠子は寒さなど感じもせず、悲しみとつらさで胸ははり裂けそうであった。

久能がこの家にやって来てからの楽しかった日々の思い出が、ひょっとして無残に終わるかもしれないこんな結末を迎えるなんて、思いもしなかっただけに、いまはこの二ケ月半の過ぎ去った時間が珠子にはいっそういとしい思いがする。

珠子はふっと、肩に重いものを感じふり返ると、そこには半纏を着せかけてくれた久能が立っている。見るなり珠子は、弾けそうになっている胸の悲しみをそのままに、わあー

っと声をしのんで久能にとびつき、しゃくり上げながら泣いた。
「ごめんよ、珠子さん。いまはこれしか方法はないんだ。ちょっとの間の辛抱だよ。私だってうしろ髪引かれる思いだもの。なるべく早く、戻ってくるから。泣かないで。泣かないで珠子さん」
と久能も懸命のまなざしで珠子をいたわろうとする。
しかし珠子に、いま何がいえるかといえば、ただひとつ、「早く帰って下さい」以外に何もいうことはできなかった。久能をひきとめる最良の方途がなければ、この事態を見送ってただ待つより他なく、それももうあとわずかな時間で別れはやってくる。
久能と珠子は、互いの手を、骨もくだけると思うばかりに心をこめて握り合い、そしてしっかりとみつめ合った。
その二人の耳に、宿坊からはすっかりはしゃいでいる巡子の、
「あなた、どこ？　ちょっと来て」
と久能を呼んでいる高い声が雪の上をわたって響いてくる。
出発する二人のために昼食も用意しなければならず、珠子が土間にはいると、驚いたことに国太郎は這いずりながらひとりで寝床をあげ、白衣に浅黄色の袴をつけて、囲炉裏ばたに坐っている。

「雪道を東京までお帰る二人のために、せめて道中無事のお祓いぐらいはしてあげようと思うてなあ」

と杖をついてよろよろと立ち上がり、雪の庭を二、三歩ごとに休みながら社殿へと向かった。

こんな国太郎の、いやが上にも永の別れを思わせるような行動を見ると、唇をきつく噛みながら台所仕事をしている珠子の瞼はすぐまた熱くなってくる。

やがて社殿のほうから、弱々しいものの国太郎の祝詞をあげる声が聞こえて来、そのあと拝礼の時間があってのち、久能が国太郎を支えながら巡子ともどもこちらにやって来た。見れば久能は、ホームスパンの上衣を羽織り、それに似合った茶のズボンをはいてすっかり見ちがえており、まあ、と無言で目を見張る珠子に、巡子は勝ち誇ったように、

「どう？　いい男でしょ。

やっぱり彼にはおちゃんちゃんやら半纏などは似合わないのよ。もともとおしゃれな人なんだから」

といい、そういう言葉を聞いても、いまの珠子にはいい返すすべもなかった。

あたたかい里芋ごはんに干し菜の味噌汁、それにまぐろフレークの缶詰をあけて作ったサラダを添えた最後の膳を、巡子を除いた三人は黙々と食べつつ、久能はしきりに、

「ありがとう、珠子さんとてもおいしいよ」

と繰り返し礼を述べる。

山にいれば、缶詰の魚肉類は何よりのごちそうだと判るだけに、この膳に珠子がいかに心を込めているのか、久能には痛いほど判ったらしかった。

食後の茶を飲んだあと、国太郎に、

「さあ、日の傾かんうちに」

とせかされ、久能は畳に手をついて礼をいうと、そのまましばらく顔が上げられなかった。

この山で遭難し、救助されて九死に一生を得た経験もさることながら、ここでめぐり合った清らかな少女との引き裂かれるような別れは、久能にとって哀切極まりない思いであったにちがいない。

まる一日駐車してあったベージュいろの車の上にも雪は積もっており、タイヤチェーンもないので運転は久能がしていくという。車の後部座席にカメラ一式を積み込むと、他に久能の荷物といっては着替えを入れたザックがあるばかり、これで二ケ月半もここに滞在していたかと思うほど少なかった。

「では」

と頭を下げて久能が運転席に乗り、うれしそうな巡子が助手席に乗り込むのを、杖をついた国太郎、介添えしている珠子の二人が見送った。

目が赤くなっている珠子の顔を、久能はなるべく見ないようにしており、とうとうエンジンをかけて出発しようとしたとき、珠子はたまりかねて駈け寄り、

「久能さん」

と運転席のガラスを叩いた。

久能はガラス窓をおろし、はじめて珠子をみつめたが、ここで、「待っていて下さい」とはいえず、無言のまま、ただうなずいたあと、思い切って車を発進させた。

その瞬間、珠子はあっと呼んだのか、きゃーっと叫んだのか憶えていないが、ただ、ふところから大きな鳥が羽ばたいて空へ翔け上がって行ったという感覚が残った。

鳥の飛び立ったあとの胸はがらんどうでもはや何もなく、ただつめたい木枯しが悲しい音を立てて吹き過ぎて行くように思えた。

第九章　迷　う

国太郎も、車の消えた辺りをじっとみつめていたが、
「とうとう行ってしもうたか」
と呟き、珠子のほうを向いて、
「さ、きよみ、うちへ入ろう。今晩も雪かも知れん」
と誘い、そう促されると珠子は国太郎に肩と手を貸し、ゆっくりゆっくりと石段を上がって行くのであった。
家に入り、火をかきおこし、国太郎に白衣を脱がせるまでが珠子の限界で、そのあとは体中の力がすっかり抜けてしまい、囲炉裏ばたにべったりと坐ったまま、何をする気も起こらなかった。
涙だけがただやたらと流れ落ち、かたわらの手拭いをとって拭いても拭いても、鼻水とともに滝のように溢れてくる。
国太郎も、そういう珠子のまえに坐ったまま、これも言葉もなく、うなだれている。

珠子はそのうち、坐っているのさえ支えられなくなり、座蒲団を二つに折って枕にすると、ながながと横たわり、そしてなお泣きつづけた。

ややあって国太郎が、

「きよみよ」

としゃがれた声で呼び、

「つらいじゃろうなあ。悲しかろなあ。

じゃけんど、久能さんを引き止めるのは無理じゃ。

東京のお人はお山さんでは暮らせん。泣いて心が癒えるんじゃったら、なんぼでも泣きや、きよみ。ここは誰も見よりはせん。泣いたらええ。なんぼでも泣いたらええ」

やさしくそういったとき、珠子は突然熱いものがこみあげて来て猛然とはねおき、

「お父さん、私がいつ久能さんのことあきらめるというたん？

久能さんは私を迎えに戻ってくれるんじゃ。お父さんにもそういうたんじゃなかったの」

と激しい口調で抗議した。

国太郎は、日頃あらあらしいものいいをしない珠子にしてこの言葉は、と驚いたものの、そこは親の役でなだめにまわり、

「おおそうじゃった、そうじゃった。

きよみがええ子にしとったら、久能さん近いうち戻ってくれるんじゃった」
と慰め、
「気をのんびりと持ってなあ。あせらんこっちゃ。あせっても何も解決はせん」
と同調すれば珠子も納まり、
「そうじゃったなあ、お父さん」
と、また気をとりなおす。
しかし珠子は十一月五日というこの日を限りにひどく気力を失い、いままでとは打って変わって一日中ぼんやりしていることが多かった。
いつも脳裏には久能のおもかげがあり、何をしても久能さん、久能さんと思い出せば、いまさらながらいかに自分が深く久能を愛していたかを思い知らされた感じがする。
家事を片づけるのもひどくおっくうになり、食事どきが来ても囲炉裏ばたに坐ったまま、動こうともせぬ珠子を見て、代わって国太郎がわずかながらも元気をとり戻したのは、ありがたかった。
久能さんがいればわしは弱る、といったとおり、家に屈強の男手があればしぜん頼りにするが、いなくなればいなくなるで、年寄りも奮い立つらしかった。
久能が去って一日たち、二日過ぎてゆくのを、ここでは通信手段がないため、その動静が判らないのは苛立ちの原因ともなるものの、また一方では様子の知れないほうがかえっ

て安心なのかも知れないと思う。

五日の暁の雪のあと、山はしばらく晴天が続き、渡り鳥の数もはっきり数えられるほどだったが十一日の朝から激しい吹雪になり、夜半にやんでのち、見ノ越一帯も三十センチの積雪になった。

十二日の朝、囲炉裏の火が消えかかっているのに、寝床を出ようともせぬ珠子に、国太郎はいく度か声をかけたが、一向に起き上がる気配もないのを見て、とうとう自分で立ち上がった。

薪は戸外にあり、厚着して取りに行こうとして戸を開けた国太郎は、出会いがしらに人とぶつかりそうになった。

「これは」

と見ると、雪を漕いで来たのは測候所の花井さんで、

「お、白塚さん、無線は昨夜入っとったんじゃが、この雪で来られなんだ。お宅の貞光のご親戚、かるさんいうたかな。昨日亡くなられたんじゃと」

花井さんは続けて、

「昨日十二時すぎ、昼めし食べとってことんと前に倒れたらそれっきりじゃったらしい。ちょうど隣のじいさんが来とって、介抱したちゅうけんど、もうそのときは息もなかったんじゃと。

こちらへすぐ知らせようにも、川又からはえらい雪じゃったでなあ。ほんで誰かが穴吹の基地へ連絡とって、うちのほうへ無線入れてくれたんじゃ」

と早口で告げたあと、

「白塚さん、どうします。ともかく行ってあげんならんじゃろ」

と聞いてくれたが、国太郎は驚きのためあごががくがくして急に言葉が出ないありさまであった。

ともかく手まねで上がってもらい、囲炉裏のそばに招じ入れようとすると、珠子も来客の手まえ、急いで起き上がってまわりを片付けた。

聞いてみると、花井さんは勤務交替のために見ノ越まで下りて来たのではなく、おかる婆さんの死を知らせにわざわざやって来、また頂上へ引き返さねばならないそうであった。

「それはそれは。何ともこれはまあ、ご迷惑をおかけしてしもうて」

と国太郎が恐縮するのへ、花井さんは手を振り、

「なんのなんの。無線は私用には使えんもんじゃけんど、人が死んだとなると話は別じゃでなあ」

といい、

「で、白塚さんはこの雪のなかを歩くはとても無理じゃろなあ。どうします」

と聞いてくれるのは、無線を使うなら協力しようという山人同士の親切であった。
国太郎は、年のせいもあってすぐ対応しきれず、しばらくは、
「そうか、おかる婆さんはやっぱり死んでしもうたか。
殺しても死なんと思うとったほど、婆さん病気知らずじゃったのになあ。年はいくつやったかいなあ。たしかわしより三つ上じゃったけん、もう七十になりますかのう。
それにしても、ぽっくり逝ってしもうたんは、ええ死にようやったなあ」
と呟くばかりで、これからどうするかに思い至らないようすを見て、珠子はわきから、
「お父さん、足も弱っとるし、その体ではとても里までは下りられんじゃろ。
何じゃったらきよみ一人で行こうか。なあ」
と伺いを立ててみると、これはきっぱり、
「いいや、きよみ一人ではいけん。葬式がやれんじゃろ。わしの祓詞でのうては、おかる婆さんも天には昇れんけん」
といい、ならお母さんのときにならって、
「ほんならボッカさんに来てもらお、お父さん。ボッカさんに負われたらええ。
無線で花井さんにそれお願いしよう」
と珠子はそれを提案した。
山で死人病人が出るとどれだけ大へんなことになるか、それはかつてのすぎのときでよ

く判っているが、今度は死人でないのが気が軽く、たのめば雪のなか漕いででもボッカさんは来てくれそうであった。

国太郎はそういわれてもすぐにふんぎりがつかないらしく、

「そうじゃなあ」

と考え込んでいたが、勤務中の花井さんを待たせるのも気の毒で、珠子は強く、

「なあお父さん、そうしようね」

と念を押したあと、花井さんに連絡をたのんだ。

連絡は頂上の測候所から穴吹の基地へ、穴吹の基地から今度は電話で川又の役場支所へとつなぎ、支所の職員はボッカさんに手配して依頼するという段取りになるが、皆徳島県人というよしみがあるだけで顔も名前も知らず、果たしてうまく行くかどうかは判らなかった。

「大丈夫ですよ。人が死んだときはお互いさまじゃけん、きっと皆さん迅速にやってくれますよ」

と花井さんはゴム長を履きながらそういい、裏の登山道の雪を蹴りながら頂上へと引き返していった。

さっきまで落ちこんでいた珠子も、これから老人を伴って山を下り、葬式を出さねばならぬ羽目に立たされると泣き沈んでばかりもいられず、重い心のまま、その準備にかから

ねばならなくなる。

国太郎は放心したように囲炉裏ばたから動かず、その背中に向かって、

「花井さんがどんなに早う連絡して下さっても、ボッカさんをつかまえるのは夜じゃなあ。とすると、明日の昼ごろでないとボッカさんは上がってはこんじゃろなあ。お葬式がすんでも、しばらく山へは帰ってこれんじゃろうね。着替えも少し持って行かんならんなあ」

と珠子は話しかけながら家を片づけ、ボストンバッグに入用なものを詰める。気にかかってならないのは、留守中、ひょっとして久能が戻ってきはしないかという事態であって、もしそのときは貞光まで来てもらえばよい、車さえあれば遠まわりでも来られないはずはないと思い、久能あてに手紙を書いた。

この日で、久能が去って一週間、もう東京には帰りついているころかと思われるが、様子を知る手がかりもないだけに気分は終始動揺する。

剣山にいれば、つくづく里は遠いと感じ、そのはるかさを思うが、これが東京ともなると、もはや外国、ほどに思われるのも無理はなかった。

明日は貞光へ、と心づもりしていた十二日のその夕方、思いもかけず川又のボッカさんがあらわれたのには国太郎も珠子もびっくりした。

ボッカさんは二人かと思っていたが、やって来たのは、この前すぎの亡骸を運んでいっ

てくれた人一人であった。

「なあに宮司さんくらい、わし一人で負い通せますよ。わしらは六十キロ以上のものを負うて頂上まで一日三回は往復するけん」

と胸を叩いて受け合い、五十キロ足らずに痩せた国太郎を背中におぶって出発することになった。

すぎの場合も、先を急ぐため夜道を歩いたが、今回もすぐ陽は落ちるので一刻でも早く出発しなければならなかった。

社殿を閉めて錠をおろし、宿坊母屋も見廻って戸じまりしたあと、珠子は久能あての手紙を戸の隙間からそっとさし込んだ。

願わくば久能がとんぼ返りでここに戻り、手紙を読んで貞光まで追いかけて来てくれればどんなにうれしいか、そう思うかたわら、それはあり得べくもない夢、と自分に言い聞かせて、二人とともに積雪のなか、山を下っていった。

すぎの場合と異なり、負うている荷が生きている人間だとしぜんボッカさんも明るく口をたたき、道もはかどって川又までは二時間半、ここから農家のオート三輪を雇うのは前回と同じだが、おかる婆さんの家についたのはまだ宵の口ともいうほどの時刻であった。

有り難いことに、近所の人たちの手で婆さんはすでに枕なおしもされ、国太郎の指図を待つばかりになっており、さっそくにその夜は通夜祭、翌日は発柩祭から葬場祭、火葬祭、

埋葬祭まで、とささやかながらつつがなくすませることができた。

国太郎はずっと、

「お人の情けというのは有り難いもんよのう。おかげさんじゃ。おかげさんじゃ」

をくり返し、また、

「これでわしはもう、近い身内はきよみだけになってしもうた。さびしいもんじゃ」

と二言目にはそれを口にする。

そしてすぎのときと同じように、翌日祭が終わるなりまた寝ついてしまい、三日も四日も起き上がらなかった。

何よりも、

「里は温いなあ。雪がない。風もあんまり吹かん」

とこちらの過ごしやすさをいい、一向に山へ戻ろうとする気配もない。

珠子は、誰もするひとがないために一日中、おかる姿さんの持ち物を片付け、捨てたり焼いたりしながらも、心は半開きになっている門扉のほうにとられている。

ひょっとして車が止まりはしないか、久能があらわれはしないか、とあるときは胸躍らせ、あるときはそんなことあるはずもない、と打ち消しつつ、この太田ですごすうち、ある日、はっと頭をよぎる光明があった。

そうじゃ、久能さんの家には電話がある、別れるとき手渡された住所メモにそれを書い

てある、と気づくと大急ぎで自分のがま口を取り出し、大切にしまってあるその紙を取り出した。

メモには久能の手で住所のわきに電話番号が書いてあり、それを見て珠子の胸は苦しいほどにさわぎ始めた。

電話という通信方法など、珠子は生まれてこのかた使ったことはほとんどなく、とくに山に住みはじめてからは知識からも記憶からもほど遠いものであった。

山の暮らしも、電話があればどれだけ便利になるかなどとは考えもしなかったし、興味も持たなかった。が、いま久能の家の電話番号を見つめていると、ここにかければ久能の声を聞くことができると思うだけで、体中が火照ってくる。

東京に電話かけてみよう、と思い立つと珠子は矢もたてもたまらず、国太郎の寝ているのをさいわい、財布を手提げ袋に入れて貞光の町に出た。

日頃郵便物を預けてあるだけに郵便局はよく知っており、わき目もふらず小さな局へ行って、間仕切りの網戸の向こうに声をかけた。

「こちらで申し込みますから、かけてお待ち下さい」

と青いスモックを着た女子局員にいわれ、電話番号をメモした紙を渡したあと、珠子は隅のベンチに腰をおろした。

このとき珠子は、電話が通じればその向こうに久能がいるとばかり信じており、そのと

きが刻々近づいてくることに息が詰まりそうであった。

久能が出たら何といおうか、いや何も心配することはない、いつこちらへ帰ってくれるんですか、と問えばそれでええんじゃ、いやいやいきなりそれではあんまり無躾というもんじゃ、まず、無事に帰り着いたんじゃろか、という挨拶をしてから次に、毎日私は久能さんのことばかり思うとります、といい、それからいちばんあとでいつ帰ってくれるかと聞くのが順序じゃ、そうなんじゃ、それからそうそう、私がいま、貞光へ下りて来とることもいわんならんなあ、もし早う帰れるんじゃったら、こっちへ直接来てもろうたらええんじゃけん、場所もお話ししておこうなあ、と珠子はまもなく声だけでも聞くことのできる久能との会話の順序をあれこれ心づもりするのであった。

ベンチで待ったのは十分か、あるいは十五分ほどであったろうか。さきほどの局員から、

「白塚さん、東京お出になりましたので受話器をお取り下さい」

と指示があり、珠子はとどろく胸をおさえて隅の電話室のドアを開けた。

黒い受話器を取りあげ、耳に冷たい感触を得た瞬間、カチッとかすかなスイッチ切り替えの音があってのち、珠子がとびつくように、

「もしもし、久能さん？」

というのと同時に、向こうからも、

「もしもし」

があってのち、
「久能でございます」
という声は、久能卓郎のものではなかった。
ちがう、と感じたとたん、珠子は頭をガンとなぐられたように思い、その場にへたへたと頽れそうになったが、かろうじて支え、勇気をふるって、
「もしもし、あの、久能さんおいでたらお願いします」
というと、向こうは、
「え？」
と聞き返し、もう一度珠子が同じ言葉をくり返すと、
「久能は卓郎のほうですか、それとも巡子でしょうか」
という声は明らかに年配の女性のもので、ひょっとすると久能夫婦のどちらかの母親かも知れない、と珠子は判断した。
「あのう、卓郎さんをお願いしたいんですが」
という珠子の言葉の訛りを聞き分けられないのか、向こうは、
「え？」
とまた問いなおし、
「ああ卓郎なら留守でございますので、巡子に代わりましょう」

といい、受話器を置く音がしたのを聞いて珠子はびっくりし、あわててこちらから電話を切った。

心臓は大きく波打ち、口はからからに渇いて、すぐに電話室からは出られず、珠子はしばらくその場に突っ立ったままであった。

電話に馴れない者は、線がつながれば即ち相手と十分に話ができる、と考えていたが、こんなことだったのか、と珠子は大きな息をしながらそう思った。

なるほど、電話は久能家の食堂か玄関か客間に置かれてあり、その家は夫婦のみならず身内や知人やさまざまな人たちが出入りしていて、ベルが鳴れば誰でも受話器を取る、こういうことだったんじゃ、と珠子はいまさらながら自分のもの知らずが判り、しおしおと電話室を出た。

しかしながら珠子は、あのおばあさんはきっと、田舎訛りの女の声で卓郎に電話があったよ、というにちがいなく、それをもし巡子だけが聞いたとしたら決して夫には告げはしないだろうが、卓郎が聞いたなら、珠子がどんなに苦しんでいるか、すぐ判ってくれるにちがいない、と思った。

まるで暗号通信みたいなものだけれど、日頃電話など触れたことのない珠子が、意を決して東京まで助けを求めたことを、卓郎ならばそっくり汲み取ってくれるはずだと思えば、この冒険も決して無意味ではなかったんじゃ、と珠子は自ら慰めるのであった。

それにしても電話のおそろしさよ、向こうの状況が全くわからないところへ突然、こちらからかけるというのは暴挙にひとしいものだと思う。

もう二度とふたたびかけはしないつもりだが、久能の東京の暮らしも、それなりにいろいろあるのだなあ、と判る。

電話で受けた衝撃はなかなか癒えず、珠子は寝たり起きたりしてすごす国太郎のそばで、なおぼんやりといく日かを過ごした。

そのあいだにも、門扉をひらいてあらわれる久能の幻をいつも描いている自分があり、あの電話の際、留守だったのは、ひょっとして久能はこちらへ向かって来ていたためではないかと希望をつないだりする。

しかしこの太田にいつまでもいるわけにもいかず、第一神社を守らねばならぬ宮司の身で、冬は月次祭（つきなみさい）は休みとはいっても、あのまま放置はできなかった。

十一月ももう末になっており、

「なあきよみ、山はもう積もっとるじゃろなあ」

「雪のこと？　そんでも出てくるときでも三十センチはあったよ」

「また五ケ月くらいは囲炉裏ばたから動けんなあ。どうせ何にもできんのじゃったら、里におってもかまうまいが」

と帰るのをしぶる国太郎を見て、珠子はつくづくお父さんも年とったなあ、と思った。

以前はお宮さん第一で、我が身をいとわずお社を守った国太郎だったのに、いまは厳冬の山をひどくおそろしがっている。その様子を見れば、若い珠子にもあの剣神社も宮司も、その家族の自分も、そろそろ大きな転換期にさしかかっているのだと感じないわけにはいかなかった。

一日、この里にもみぞれの降る寒い朝、珠子はまた町に下り、ひとりで貞光駅に向かった。

ゆうべも遅くまで寝つかれず、久能のこと、国太郎のこと、将来のこと、自分ひとりでは対処しきれない難問のことを思うと、ほとほと途方に暮れる思いがする。

こんなとき、相談に乗ってくれる相手が欲しい、と考えていて、ふっと浮かんだのは愛光園の木暮園長の顔であった。

自分を小さいときから父親のように慈しんでくれたひと、そして母親役の正岡先生もいるのに、何故いままで頼っていかなかっただろうか、といまさらながらうかつさが悔やまれる。

ずい分と長いご無沙汰だが、先生はきっと喜んで自分を迎えて下さるにちがいない、と思うと久しぶりに珠子は胸躍り、国太郎には、

「ちょっと町で買い物してくるけん」

とだけいって家を出たのであった。

途中、菓子屋に寄ってまんじゅうを買おうとし、思いなおしてスーパーに入って袋菓子をたくさん手提げ袋に入れてもらった。自分も入園中、来客が袋菓子を土産にくれるのがいちばんうれしかったことなど思い出していると何故か心はうるおってくる。

通信も不便なまま、ほぼ五年間便りもせずに過ごしたが、会えばきっとその空白は取り戻せると思い、駅のベンチに腰をおろして下りの列車を待った。

駅舎は五年前よりはずっと新しくなっている。

駅の待合室のまん中にはだるまストーブが燃えており、濡れた雨具のまま、そこで暖を取るひとが入れかわり立ちかわりするのを眺めているうち、珠子の気持ちは少しずつさめていくようであった。

こちらは飛びつくような思いで訪ねて行っても、向こうは延べ何百人もの園児のお父さんお母さん、この問題は入園中、いく度もぶっつかってはそのたび絶望感を味わったんじゃなかったか、と昔の苦い思い出も次第に頭を擡げてくる。

先生を独占するのは園児としていちばんよくないこと、それを頭に叩き込まれて育った身には、いま大きな難問を抱えて相談にいくのはやっぱりはばかられ、やめたほうがいいのではないかという気がしてくる。

それに、園を出てのちの消息について全く知らせてないのでは、今日、いまになって突然ぶちまけると先生はさぞびっくりなさるであろうという遠慮もある。

今朝家を出たときの昂揚した気持ちはだんだんにしぼみ、珠子はストーブのそばに寄って手をかざしながら、長いあいだ考えこんでいた。

それにしても久能さんに会いたい、東京でいまどうしているか、何か手段があればそれを使って知らせて欲しい、私は久能さんを信じてこんなに待っているのに、と思い続けていると涙が溢れそうになってくる。

待ち続けた下り列車がホームに入って来たが、珠子は改札口を通らなかった。

ストーブの前から離れることなく、発車する列車を見送っただけであった。

やっぱり私はもともとひとり、相談するひとなんてありはしない、自分で考えるより他ないんじゃ、と自らいいきかせながら傘をかたむけ、みぞれのなかを帰ってゆくのであった。

帰ると国太郎は床を払って起き上がっており、

「おおきよみ、明日は山へ帰るでなあ。荷物片付けや」

と元気にいい、さっき近所のひとが川又で国太郎を運んだボッカさんにばったり会い、

「宮司さんお山へ帰るんじゃったら、いつでもわしが背負うてあげるでなあ。そういうてあげてや」

という言伝てがあったそうで、年寄りの身で山行きの難渋を考えていた国太郎には、その親身な言葉が何よりもうれしかったらしい。

珠子は荷物をまとめながら、考えるのは、この貞光町滞在の十日あまりのあいだ、やっぱり久能はあらわれなかったことのさびしさであった。

山へ帰ったとて、長い厳しい冬があるばかりだけれど、老いた養父を連れ、久能をひたすら待つ身には、ともかくもとのねぐらへ帰ってゆくより他、なかった。

これから雪は一日一日深くなり、そうすると車道も閉ざされて、久能の車は来春まで登ってこられなくなる。

昭和四十年のその冬は、珠子に取って長い長い冬であった。

厳寒の修行をする先達さんも年とともにほとんどいなくなり、一冬のあいだ、讃岐からの一組と土佐からの常連客があっただけ、その他は訪れるひとなく、鳥かげさえも見ない日ばかりが続いている。

毎日珠子はいくたび下の坂からのカーブに目をやるやら、ときには長いあいだ凝視していることもあるのに、その曲がり角からは車はおろか人でさえも現れなかった。

こんななかで正月を迎え、国太郎は気力をふるって歳旦祭を執り行い、珠子も気を張ってそれを手伝った。その日だけはさすがに氏子総代がチェーンを巻いた車に息子の運転で登って来、お神酒を頂いてすぐ引き返したが、それだけが唯一、新春らしい風景であった。

この年も雪は多く、朝、戸を開けると視界も見えず降りしきっている日もあれば、二、三日連続して粉雪の舞い続けている日もある。

珠子は、それでも望みは捨てなかった。

ぐっと冷え込む日は一日中寝床から出ない国太郎がつけているラジオに耳を傾けていると、遠い遠い東京の出来ごとが電波に乗って聞こえて来る。

いまはそれだけが頼りだが、そのニュースと久能の日常をどう結びつけようもないまま、依然何も判らないことに変わりはない。

奥さんとの離婚話がこじれて、なかなか結着がつかないのじゃろか、それとも新しい仕事に取り組んでいるのじゃろか、いや、山には冬のあいだ花はないのじゃけん、どこへも出かけはせんじゃろう、あ、そうじゃない、雪の下でももう芽の出ている花もある、っていっていたから、やっぱり冬もカメラを提げてどこかへ出ているのかもしれん、とあれこれ考え続け、その挙句は結論の出ないいら立たしさにとりこになって苦しんでしまう。

こんな閉ざされた生活の、あてどない暮らしのなかでの珠子の唯一の支えは、久能との二ケ月半の思い出であって、鮮明に頭に刻まれているその記憶のなかに逃げこめば、束の間いまのつらさは忘れられるのであった。

雪の一月が過ぎ、山では春の気配も見えぬ二月が去っても、なお久能はこの地にあらわれなかった。

いったいいつまで待ったらええんじゃ、とときにはそこら辺りのものを投げつけて気晴らししたいときもあるけれど、実際に珠子の性格としてそんな手荒なことができるわけも

なし、

「せめて雪が解けるまで」

と呟いて自分を慰める。

雪解けまで待って、あらわれなかったらどうする、など考える余裕はなく、自分の気持ちを宥めるためのとりあえずの区切りだが、そうきめると、ふっと、雪が解けて地の黒土が見えはじめた坂の、あの向こうからザックを負うた久能があらわれそうな気がしてくるのであった。

雪が解けるまで、と自分にいい聞かせながら、一方では雪はいつまでも解けないでいて欲しいという願望も珠子にはある。

雪が解けても久能があらわれなかったら、そのときの悲しみは考えただけでおそろしいものだし、いまのようにいっそ、雪に閉じこめられたなかでその日を待つのもむしろ楽しくもあると思う。

三月はまだ厳しいが、四月に入れば麓のほうから雪の降る回数は次第に減り、陽の光にも力が漲ってきて、そして日和が続けばこれも麓から雪解け水となって流れてゆく。

四月に入ると、珠子は毎朝庭の雪に目を当て、積雪のかさが減ってゆくのを、胸をとどろかせながら見守った。庭の雪だけでなく、下の広場の雪も坂道の雪も仔細に見、やがて斑になってところどころ地面があらわれているのを確かめたとき、珠子は興奮のあまり、

庭中を駈けまわった。

何でこんなに昂揚するのか、はっきりいえば、あの長い冬のあいだ、春になれば久能さんが登ってきてくれる、と自分を押さえ、慰めてきたその日がとうとうやってきたことのよろこびにちがいなかった。

雪は解けはじめるとすぐ太陽に負け、日中照ると目に見えて形がくずれてしまい、四月も十日ともなればこの見ノ越までは車も通行できるようになった。

冬の期間中、身も心も萎え切っていた珠子は少しずつまた希望を取り戻し、まめに家のうちの掃除などして、その日の来るのを心待ちにしている。

春になれば元気になるのは国太郎もおなじで、蒲団のなかから、

「わしはもういかん。神社庁に届けて来年はここを若い宮司にゆずり、きよみと一しょに里へ下りようなあ」

といっていたのに、雪の少なくなった景色を見れば、やっぱり、

「お社はわしが守らんといかんなあ。親がお護りしてきた神々さんを、そう簡単には人には渡せん」

などと気張ってものをいうようになっている。

冬のあいだどこにひそんでいたか、雪が消えると少しずつ小鳥の声も賑やかになり、そのさえずりがいっそう珠子の期待をかきたてるようで、毎日きっちりと、坂の下への視線

を怠らなかった。

その日は四月十七日、まだ気温は低いが空は晴れ渡り、春さきに多いもやも少なく、珠子は久しぶりに庭に洗濯ものを干した。

冬場は凍るのでいつも土間のうちで干しているが、今日は坂の下の監視かたがた、竿をかけ渡しているとき、珠子はふと、自動車のエンジンの音を聞いたように思った。空耳か、いいえそうじゃない、とみつめているその先で、やがて坂下のカーブからゆっくりと紺いろの車体が姿をあらわし、こちらへ登ってくる。

カーブを曲がって姿をあらわした車を見たときの珠子の気持ちを、何といえばいいのだろうか。

体中の血がよろこびで沸きたち、珠子は大声を挙げてそこら中を駈けまわった。

とうとう久能さんが帰って来てくれた、待っていた甲斐があった、これでつらくさびしかった半年あまりの辛抱はきれいさっぱり忘れ去ることができる、神さまありがとう、うれしい、うれしい、と珠子は両手で髪を撫でつけ、とび上がるようにして百二十段の石段を駈けおりた。

近づいてくる車に向かって両手を振りながら、最初にどういおう、お帰り、がいいか、お疲れさん、がいいか、いや、言葉は要らん、顔見ただけで涙が出るに決まっとる、と考えつつももう瞼は熱くなってきている。

しかし珠子のそのたぎりたった思いは、車が止まった次の瞬間、深い谷底へ陥ちてゆかざるを得なかった。

ドアを開けて下りてきたのは、待ちに待った久能ではなく、去年十月山を下りた典夫の姿だったのである。

あ、といったきり、棒立ちになった珠子の目がうるんでいたのを見た典夫は、

「しばらくやったなあ。待っててくれたんか。きよみちゃんがうれしそうに踊りもって石段下りてくるのが、車のなかからも見えたんじゃ」

と近づいて来、

「痩せたなあ、きよみちゃん。山の冬は外へも出られんけん、無理もないやろけど」

といいつつ、

「見てや、おれの車。中古じゃけんど、よう走る。荷物運ばないけんけん、荷台の広い型のにしたけど、早うにきよみちゃん乗せて走りたくて、雪の解けるの待ってたんじゃ。まあ見てや。車のなかも見てや」

と典夫は満面笑みを浮かべながら珠子を誘い、車の内外をさもいとしそうに眺めながら、ひとつひとつ説明する。

珠子は自分の顔から血の気の引いてゆくのがはっきりとわかり、その場に卒倒しそうで

あった。

喜びがあまりに大きかっただけに落胆もまたひどく、上機嫌の典夫のわきでしぜん暗い表情になってゆくのを典夫は気づかず、

「きよみちゃん、いまからドライブして池田町まで行ってみんか。ちょっとあるけど、夕方までには戻ってこれるし。おっちゃんどこ？　おれ、許しをもろうてあげる」

と、社殿のほうをのび上がって見ている。

珠子は、とてもいまドライブどころの気分ではなく、

「典夫ちゃん、わるいけど、今日は私何だか気分ようないんじゃ。またの機会にしてもらえる？」

ドライブに誘えば珠子はとび上がって喜ぶかと考えていた典夫は、ふしぎそうに珠子の顔を見ながら、

「ふうん、ちょっとぐらい気分悪うても、車で走ればすぐなおるんやけどなあ。気持ちえええぜ。なあ、乗ってみんか」

としきりにすすめるが、珠子は、

「こんなとき乗せてもろうても、車のなかですぐ吐くかもしれんし、典夫ちゃんに迷惑かけると悪いから」

と頑強に拒み、とりあえず、
「まあお茶でも」
と家の内に招じ入れた。
国太郎とも久しぶりで、
「おお、おお、そうか。車乗れるようになったか。この道も典夫ちゃんに走ってもろうたら喜ぶじゃろ。お父さんお母さんも元気か」
となつかしがり、しばらく囲炉裏ばたで男二人里の噂に話がはずんだ。
典夫が春、一番乗りで登って来たわけを聞いた国太郎は、典夫の手前、一応珠子にすすめてはみたが強いてとはいわず、
「すまんなあ。きよみも車に馴れておらんけん、長い時間はひょっとして酔うやらもしれんし」
とやんわり断ってくれた。
典夫は大いに不満で、これからは車に馴れなければ何もできん、登山のための自動車道もあちこち開通するんじゃけん、と力説していたが、いつまでも青ざめて元気のない珠子の様子を見て、このたびはあきらめたらしかった。
いずれもう十日もすれば両親とともに上がって来、五月連休の登山客のために山小屋は開くことになっており、そのあと、

「連休が終わったらまた小屋は閉めて、梅雨明けを待って上がってくるんじゃけんど、今年はおれ一人でも山に残ってみようかとも思うとる。

おっちゃんもきよみちゃんも、そのあいだ、上へ登って来んかなあ」

というのを聞いて、珠子は以前からの結婚問題がいよいよ現実となってくるおそれをおぼえた。

典夫はまもなく車を発進させて坂を下ってゆき、珠子はさっきの衝撃がまだ去らないまま、気の抜けた人間のようになって囲炉裏ばたに坐ったままであった。

雪解けの道を、いちばんに登ってくるのは久能さんの車、とはほとんど確信していただけに、今日のこの思いがけない出来ごとは珠子を徹底的に打ちのめした感があった。

人を待つことのつらさ、相手がどんなふうに過ごしているか全く知れないだけに、この雲を摑むような底知れない心細さはどうしようもない。

珠子は次第に気力を失い、ぼつぼつ家のまわりの花もひらき始めたというのに、ほとんど家に閉じこもったきりであった。

山にすこしずつ春が近寄ってきて、先ず草が萌え、木々が芽をふき、小鳥が高らかにうたいはじめても、見ノ越の白塚家には何の変化もなかった。

目立ったことといえば、珠子が元気をなくしている分、国太郎が気を張っているらしく、動作はひどく緩慢ながら、以前のように神前に供えるものを自分で調理するようになって

いる。

手もとも鈍く、耳も遠くなっているが、それでも神事を執り行うときにはしゃんと背筋をのばし、一瞬見ちがえるような姿になるのはたのもしかった。

珠子のほうは考えれば考えるほど気分ふさぎ、ときどき家の内を見まわしては、ふしぎな思いにおちいることがある。それは、隣の部屋にいま久能が寝ているのではないかという錯覚であって、突然立って襖を開け、そこに誰もいないのを知ると、涙がどっと溢れ落ちたり、一度はふらふらと久能が遭難したあの谷に向かって歩いているうちはっと気付き、泣きながら帰って来たこともある。

国太郎は、そんな珠子の様子を見ても何もいわず、不びんに思うのかいつもやさしい言葉で、

「きよみよ、思い詰めんほうがええよ。気を楽に持ってなあ。そのうちええこともあると考えとりや。なあ」

と宥めてくれるが、それは珠子の気鬱の薬とは少しもならなかった。

そして四月も終わりに近づき、例年どおり山小屋の佐川一家三人は揃って登って来て挨拶に寄ったが、珠子はこのときも、奥の部屋で寝たまま起き上がらなかった。

庭先で父親の昭市が、

「きよみちゃんが見えんようじゃが」

とたずね、典夫ものび上がって家の奥のほうをうかがう様子だったが、国太郎は、
「すまんなあ。あの子は花が咲きだしたら、この辺りフラフラ歩いて楽しみますのじゃ。たったいままでおったのじゃけんどなあ」
と取り繕い、山小屋の三人も隣のこととて、あっさりと、
「ほんならまた。きよみちゃんとは道で会うかもしれんなあ」
と手を振って登って行った。
今年の連休は、車道が開通してからはじめてとあって、さしてひんぱんではなくともときどき車が登って来、広場に駐車しておいて頂上めざす人たちもいる。
そういう人たちは大てい剣神社に参拝して登ってゆくので、珠子は天気のよい日は社務所に腰かけて神札やお守りをおわたしすることもあった。
忌まわしい記憶はなお消えず、ここに腰かけているとき久能の妻があらわれたことなどなお鮮明におぼえているため、ときどき耐え切れないときもあり、またやはり、下の広場に目を向ける習慣も、珠子の身についたくせのようになっている。
しかし、連休も過ぎ、天気が梅雨めいてくるとまた山はもとの静けさに戻って人影はぐっと減っており、そういう手の空いた時期、昼すぎ、山小屋の昭市が見ノ越にあらわれた。
そのとき珠子はまた気分がすぐれず、家のうちでここにだけ久能の移り香が残っているような気がして、奥の間に床をのべ、ふせっていたところであった。

「白塚さん、今日は折り入ってお話があってじゃなあ」
という昭市を、国太郎は愛想よく迎え、
「おおそれは、それは。まあ上がって下されや」
と囲炉裏のそばに招じ入れた。
雨の日は六月でも埋み火はしてあり、そこに掛けてある鉄瓶から出がらしの番茶を入れて、
「あいにくときよみは具合が悪うて寝とりますんじゃ。こんなお茶で申しわけないが」
と差し出すと、昭市は、
「きよみちゃんどんな具合です？　夏かぜじゃろか」
と聞き、国太郎はいやいや、と手を振って、
「春さきに起こる頭痛じゃなあ。大したことはありません。お話というのは？」
と催促すると、昭市は居ずまいを正して、
「これは仲人立てんといけんお話ですが、このお山さんでの隣同士のこと、手っとり早う私が出向いてきました。
略式で申しわけないが、おたくのきよみちゃん、うちの典夫の嫁に頂けんもんじゃろか」
「ほう」

「白塚さんはどないに思いますかなあ。わしの見るところ、本人同士はもうその気になっとるみたいじゃけん、きよみちゃんさえよかったら、すぐにでも来てもらいたいと思うとりますんじゃ」

「ふん、ふん」

「いや、これは、親一人子一人の白塚さんには無躾なお願いかもしれません。じゃけんどわしらは決してきよみちゃんだけ上に来てもらおうと思うとるんじゃない。白塚さんもご一しょしてもろうて、上で好きに暮らしてもろうたらええのですわ。

このことは典夫もずっというとりました。おっちゃんも入れて皆で一しょに暮らしたら楽しいやろなあ、ちゅうて。なに、この見ノ越もまもなく登山リフトもつくし、そうなったら山小屋の客も増えますでなあ。

典夫がわしの仕事継いでくれるんは何よりうれしいけんど、その嫁にきよみちゃんが来てくれるとなるともっとうれしい。家内も喜んどります。

山で暮らすには、山で暮らしたもん同士でないといけん。きよみちゃんはどこから見ても満点の嫁ですけん」

昭市は少しさがって畳に両手をつき、頭を下げた。

国太郎は手を振って、頭を上げて下され、というしぐさをしてから、

「まことに有り難いお申し出で、このとおりお礼申します。

じゃけんど、このせつの結婚は二人が合意の上でないといけんのじゃが、うちのきよみは承知しとりますのじゃろうか」

「それはたぶん、大丈夫じゃないかと思うとります。わしが直接きよみちゃんに聞いたわけじゃないけんど、典夫の話ではいつ来てもろうてもかまんというとりますけん、二人のあいだでは了解ずみちゅうもんじゃありますまいか」

「そうですか」

と国太郎は一息ついて、

「きよみがすすんでおる様子なら、わしは何もいうことはない。

じゃけんど佐川さん。わしはきよみについて行くことはできん。親がひらいたこのお社を捨てて、お宅で厄介になるということはできませんでなあ」

「いやしかしじゃなあ。失礼じゃが白塚さんもいつまでも宮司さんはできませんじゃろ。いずれはどなたさんかの手に委ねるおつもりじゃったら、早いと遅いの違いだけじゃないじゃろか。

きよみちゃんの為を思うてあげるなら、一しょにうちへおいでては下さらんか。若い二人もそれ、望んでおると思います」

「お言葉ですけんど、神職ちゅうんはふつうのサラリーマンとはちがいましてなあ。定年になったからちゅうて、さっさと家畳んでよそへ移るわけにはいきませんのじゃ。

わし、死ぬまでとはいわんが、足腰の立つあいだは神さん祀ります。きよみはもらってやって下され。わしはあの子の喜ぶ顔が好きじゃ。本人の望むとおりに話をすすめて下され」

「困りましたなあ」

と昭市は腕を組み、目を落として考えこんだ。

国太郎は至極おだやかな人がらで、ふだんから他人の意見に異を唱えることなく、協調性のある性質だと昭市は考えていただけに、この頑強な抵抗は、思いがけないらしかった。そのときまで隣の部屋の蒲団のなかで、息をひそめてこのやりとりを聞いていた珠子は、気を張って起き上がり、半纏をひっかけて境の襖を開けた。

こんな装でごめんなさいと謝って、

「おっちゃん、私、まだ結婚のこと考えとりません。

典夫ちゃんはやさしゅうしてくれるけんど、私はお嫁さんにして欲しいとは一言もいうとりません。

お父さんもまだ元気じゃし、お役を勤めるあいだは私も巫女さんして手伝うてあげんといけん。わるいけど、典夫ちゃんにはっきりお断りして頂けませんじゃろか」

珍しく珠子がきっぱりと意志を表明したことに昭市はおどろき、国太郎はさらにおどろいたらしかった。

急におろおろしはじめ、

「きよみよ、お人の気を悪うするようなそんなきついことというてはいかん。お前、わしに気兼ねすることはないんぜ。典夫ちゃんが好きなら一しょになったらええんじゃ。どうせわしは一人、と思うとるけん」

といいさして、国太郎は気づき、

「佐川さん、わしら血を分けた親子じゃないことはご存知じゃろうなあ」

と聞くと、昭市は大きくうなずき、

「もちろんですとも。わしが今日、ここへお伺いするまでに、家内が貞光へ下りて愛光園もお訪ねしてきました。

何も彼も承知の上で、わしら一家は皆、きよみちゃんら二人に来て欲しいといいよるんです。

きよみちゃん、お父さんがまだ大丈夫というて下されるなら、あんた一人、来てはもらえんじゃろか。知らん仲じゃなし、今日ええ返事をもろうて帰ったら、典夫もどれほど喜ぶやら知れん」

「おっちゃん」

珠子は髪を掻きあげながら、

「ほんまに私、いま結婚なんて頭にないんです。待って頂いてもその気にはならんと思い

ます。

お父さんのこと心配してるんじゃなく、私自身の気持ちです」

「きよみちゃんはいま頭痛で寝とったところじゃったなあ。起こしてすまなんだ。わしなあ、きよみちゃん気分のええ日見計ろうてまたくるけん。今日は一まず帰りますわ」

昭市としては、これは思いがけず紛糾の場であったにちがいなく、一旦退くのが賢明と考えたらしかった。

昭市が帰ったあと、国太郎も珠子もぐったりと疲れており、ものをいう気力もなくてじっと囲炉裏のそばに坐ったままであった。

しばらくして国太郎が、

「きよみ」

と呼び、

「お前、自分のほんまの親さがすつもりで結婚のこと考えとらん、というたんじゃあるまいなあ。

いつかわしの話したこと信じて、東京へたんねて行くつもりじゃとか、そんなんじゃあるまいなあ」

「お父さん、きよみはもうその望みは捨ててしもうた。ちょっと前までは、いつか東京へ

行ってさがしてみようかな、とも思うてたんじゃけど、久能さん東京へ帰って、そんな望みは無駄やとはっきり判ったんじゃ。

東京は判らん。きよみは山の暮らししかしらんけん、一切わからん。久能さんもわからんし、私の親もわからんのじゃ」

いま珠子は、何も彼も一切が信じられなくなっており、こういうときは人の心づかいまで見えなくなってしまう。

佐川一家からの懇望も、曲解すれば先の短い老人と身寄りのない娘をひきとってやろうという、あわれみからではないかとも受け取られ、さすがにそれを口にはしないけれど、こんなかたちで結婚はしたくないと思う。

国太郎も、自分の身はさておき、珠子の将来を考えれば典夫の好意を素直に受けるのが、この際いちばん安心できる道だとは思っているものの、自分からはすすめられなかった。

いまは傷ついた小鳥のように、羽を垂れたままの珠子はしばらくそっとしておいてやりたかったし、嫌がる言葉を浴びせて無益な刺激はしたくなかった。

そのうち梅雨も上がり、陽ざしも強くなって山にも夏がやって来たが、あれ以来、典夫はむろん、昭市も誰も見ノ越へ下りてはこなかった。やはり車道開通の影響か、例年より

ははるかに登山者も増え、車と、ザックを負った人影を見ない日はないほど山も少しは賑わうようになったが、そうなれば山小屋も忙しいにちがいなかった。

父娘は言葉少なに日を過ごし、相変わらず静かな暮らしで、二人とも典夫との縁談にも、また久能の噂にも触れなかった。

見ノ越から見える向こうの峰々に入道雲がもくもくと湧いている日、

「きよみちゃん、おるじゃろうか」

と大声をかけながら庭を渡って来たのは測候所の山本さんであった。

山本さんは、吉田さんの殉難碑を建立する世話も先に立ってやってのけたあと、穴吹基地への人事異動の勧告も断り、この地にとどまって勤務しているのであった。

国太郎が出迎えると、

「ちょっとあんばいが悪いとか、山小屋の佐川さんに聞いたけん、寄ってみたんじゃが」

といい、その声を聞いて珠子も出、

「いやあ山本さん、ありがとう。

山小屋のおっちゃん見えたときは、頭が痛うて寝とっただけじゃ。何ともないよ」

「そうか、そうか、それはよかった」

と山本さんは辺りを見まわし、紙袋をさし出して小さな声で、

「実はなあ。きよみちゃん病気じゃと聞いてなあ、今日交替で山下りるついでに、届けも

んしたげよ思うたんじゃ。

これ」

と袋の口をひろげて見せてくれた。

「まあオダマキ」

と珠子が声をあげると、

「山の草は採ってはいけんのじゃけんど、測候所のちょっと下の岩場にようけ咲くんじゃ。一本だけ、採るんじゃなくて見ノ越のお社へ移させてもらお、と根を掘ってきたんじゃ。今年の一番咲きじゃで、どうぞ」

わきから国太郎も、

「引っこ抜いて捨てるんじゃないもんなあ。頂上から見ノ越へ引っ越してもろたんじゃけん、かまうまいよ」

といい、珠子は久しぶり笑みがこぼれ、

「ありがとう、山本さん。きよみこの花、大好きじゃ」

と大事に受け取り、そっと袋から取り出した。

オダマキにはいろいろな種類があるが、測候所下の岩場のものは紫でいとも優雅な姿をしており、これが岩場から萌え出たものとは思えないほどやさしい花であった。

珠子は両手で捧げ、花に顔を近づけてしばらくうっとりしていたが、はっと気がついて、

「じゃけんど山本さん。見ノ越は千四百メートル、千九百五十五メートルの高さに咲いとった花がここらに根をおろすじゃろか」

「それはじゃなあ。正直いうてわからんが、北海道では海岸沿いの岩にこれがようけ咲いとるのを見たというひともおる。寒いところの岩場なら大丈夫じゃないじゃろか。枯れたときは枯れたとき。きよみちゃん一所懸命世話したってや」

と山本さんはいい、珠子の肩を元気出してな、と叩いて坂を下りていった。

気分がふさいだ今年の春は、いつもの年のように花さがしにも出かけなかった珠子だったが、山本さんの心づかいで胸の扉が少しだけ開いたような気がした。

山には歩いても歩いても新しい花の発見があり、植物図鑑片手にさがしていると、いつも我を忘れてしまう。久能のことはあきらめたわけではなく、いつも車や登山者の姿には目を配っているが、自分にもこんな楽しみがあったことに改めて気づいたのであった。

翌日から珠子は少しずつ、もとの自分を取り戻してゆくようであった。

家の水槽のわきの礫地にそれを植え、じっと眺めていると、紫の花びらのように見えるのが萼、上の小さな丸いのを距、といって蜜を貯えるところ、と教えてくれたのはあれはたしか山小屋のおっちゃんだったっけ、そういえばおっちゃんもずい分お花さんに詳しいお人じゃなあ、と心もなごんでくる。

登山者が多くなれば、登山の安全を祈るため社殿に参詣する人も増え、珠子も花をさが

すあい間にはつとめて社務所に坐っているようにした。

八月はじめ、今年の第三号台風が四国を通りぬけて行った翌日のことであった。

このたびはあまり被害もなく、珠子が庭に飛んで来た小枝を片づけているとき、

「きよみちゃん、こんにちは」

ときれいな声がし、裏道から下りてきたのは、典夫の妹、勝代であった。

見れば赤ん坊を抱いており、勝代のうしろからはたぶん夫と思われる背の高い男の姿がついて下りてくる。

「まあ勝代ちゃん、しばらく」

と珠子も思わずなつかしさに声を挙げ、以前のように駈け寄って肩を叩き合った。

勝代とはずい分久しく会っておらず、それというのも結婚、出産、ヒュッテの経営と忙しい日を送っているよし典夫から聞いており、昔みたいに遊ぶ機会もなくなったからであった。

「よう来たなあ。忙しいじゃろ、毎日」

といたわりながら家に招じ入れると、赤ん坊とともに夫なるひとも従ってくる。

「このひと一郎さん。脇町(わきまち)のお人じゃったけんど、お山さん好きで毎年登ってきてくれるうち、剣山に根をおろしてしもうた」

と夫を紹介すると、人のよさそうな一郎は頭をさげて、

「早くにご挨拶せないかんと思うとりますうち、いまになりました。おっちゃんもきよみさんも、一ぺん私らのヒュッテ、見に来て下さい。ぜひ」

といいつつも、膝にまつわりつく赤ん坊を馴れた手つきで抱き上げたり、あやしたりしている。

「まあ、かわいいね、赤ちゃん」

「うん、女の子。カヨコっていうんじゃ。これが見かけによらんきかん坊でなあ。私はおこってばっかりじゃけんど、うちのひとは甘やかすけん、そっちになつくんじゃ」

「いくつじゃな？」

「まもなく一誕生じゃ。もう歩けるし、片言もいえるけん、目が放せん、危うてなあ。ほんじゃけん、忙しいときはお父さんに預かってもらうんじゃけんど、お父さんそれをええことに、毎日のようにカヨコを連れにくるんじゃ」

「ほう、昭市さんも孫には目がないのじゃな。かわいいじゃろなあ」

と国太郎が首を振って感心すると、一郎も、

「いやお父さんはもうべたべたですけん。ムシバも恐れずアメもなんぼでも口に入れてやるし、ままごとの相手でもいつまでもしてくれます。じゃけんこの子はおじいちゃんがいちばん好きですわ」

という父親の膝の上にカヨコは立ち上がり、小さなてのひらで一郎の頬をたたいたり、

撫でたりするのを、一郎はまた、さもかわいくてたまらぬようにその指を自分の口のなかに入れてしゃぶってやったりする。

珠子は、その親子三人の様子を、おどろきと感動の目でじっとみつめた。

赤ん坊に触れた経験は全くないとはいえないが、こんなに身近な赤ん坊を見たのは初めて、といってよく、珠子はくい入るようにみつめていて、ふと、

「勝代ちゃん、私にもちょっと抱かせて」

とおずおずと手をさしのべた。

「ああ、どうぞ、どうぞ。じゃけんど、案外重いよ、この子」

カヨコ、と呼んで勝代は赤ん坊を珠子の膝の上にのせた。

両手を赤ん坊のわき下に入れ、自分の膝の上に立たしてみると、ぐん、と小さな足で力づよく珠子の腿を踏みつけ、カヨコはじいっとふしぎそうにこちらの顔を眺めている。

珠子はカヨコとおでこをくっつけて互いにみつめ合っていると、カヨコは何がおかしかったのか突然、のどの奥を鳴らして笑い出し、両手を打ち合わして足ぶみした。

「あらあらカヨコ、何がおかしいの？

きよみちゃんが好きになったの？」

わきから勝代が声をかけたが、カヨコはふりむきもせず、珠子をまっすぐ見つめたまま声を挙げて笑いつづけるのであった。

そのかわいさ、珠子は涙のにじんでくるような感動をおぼえ、思わずカヨコを抱き寄せて頬ずりした。

やわらかくやさしい頬っぺた、ぷっくりと盛り上がったまるい手の甲、真っ白な米粒のような歯、何よりも澄み切った瞳の清らかさは、それをのぞいた人が己を恥じるような、そんな気高さがある。

しかし赤ん坊の機嫌は不可解で、急に頬ずりされたのが嫌だったのか、カヨコは受け唇になって泣きはじめ、一郎はあわてて、

「さあおいで。お姉さんに迷惑かけてはいけんよ」

と抱き取り、表のほうへ連れ出していった。

「赤ちゃんて、ほんまにかわいいねえ」

と珠子がためいきをつきながらそういうと、勝代はうなずいて、

「子供が生まれると人生変わるっていうけど、ほんまじゃなあ。私、結婚してすぐ妊娠したじゃろ。まだ子供なんて欲しいない、と悔やんだけど、生まれてみると、ほんまよかったと思う。

家のうちも和やかになってなあ。お客さんいなかったらさびしいと思う山小屋でも、カヨコ一人おるだけで灯りがともったようになるもんなあ。

私も一郎もまだ若いし、うちのお母さんは、あと何人でも産みやってけしかけるんじゃ。

じいさんばあさんがまだ若いけん、見てやるって」

としゃべっていて勝代は気付き、

「あ、ごめん。今日はなあ、お願いあって来たんじゃった」

と居ずまいを正して、

「大分まえ、うちのお父さんがきよみちゃんを頂きにこちらへお邪魔して、断られたんじゃったなあ。

あのことなあ、もういっぺん考えなおしてはもらえんじゃろかと、一郎と私とだけで話し合うてお訪ねしたんです。誰に頼まれたわけじゃありません。

あれ以来、兄ちゃんはやけっぱちになって、しょっちゅう木屋平へ帰るし、お父さんも元気無くしてしょげちょる様子じゃ。

私がいうのもおかしいけんど、兄ちゃんはまじめじゃし、きよみちゃんをしあわせにする努力は一所懸命する人じゃと思う。

私もなあ、十八で結婚するとき、早すぎるって友達やみんなにいわれたけど、全然後悔はしとらんよ。逆によかったなあってしみじみ思うとるんじゃ。

ほんまいうと、私も山小屋で育った子じゃなあ。生涯このお山さんで暮らしたいなあと思うとるうち、一郎さんと出会ってそれが叶うたんじゃ。

自分の生きかたを押しつけるんじゃないけどなあ、きよみちゃん。あんたさんもお山さ

んが好きで登って来てくれたんじゃろ。
空気のきれいなお山さんで、やさしい兄ちゃんと夫婦になって、この先私たちと一しょに暮らせたらどんなにええか、私も一郎も心からそれ、お願いしたいんじゃ。
カヨコもいとこどっさり欲しいしなあ。
なあきよみちゃん、お山さんは子供育てるのに最適やで。自動車通らんし、危い溝やら川やらもないし、泥棒おらんし、きよみちゃんの子供と私らの子供で学校作れるくらいようけ産んだら、それこそ理想郷じゃ。
もっともそうなったら、うちのお父さんお母さん、子守に疲れて病気になるかもしれん」
アハハ、と勝代は明るく笑って、
「なあ、おっちゃんも孫、欲しいないですか。家の内、明るうなりますよ。冬のさびしさもちっとも感じなくなるからふしぎじゃ」
と国太郎にも話しかけ、熱心に懇願した。
そのあいだにも、カヨコを連れた一郎はしきりに出たり入ったりし、
「カヨコ、ガラガラと間違えてお社の鰐口（わにぐち）が気に入ってしもうてなあ。鳴らせ鳴らせてきかんのじゃ」
といいつけに来たりし、そのたび小さな笑い声が上がって、ふだん静まり返っているこ

の家も賑やかな雰囲気に包まれた。

ここには子供の喜ぶようなものは何もなく、珠子が、

「勝代ちゃん、カヨコちゃんおなか空いたんじゃろ。何食べさせたらええじゃろか」

と問うと、

「要らん、要らん。そうじゃ、ほんならお湯もらおか。ミルク飲ませたらおとなしゅうなって寝てしまうじゃろ」

とさも馴れた手つきで、かわいいアップリケのある大きな手提げ袋からミルクの缶と瓶を取り出し、手早く作って一郎にさし出すと、受け取った一郎は片手でその哺乳瓶をカヨコの口に含ませた。

その連繋が何ともなめらかでほほえましく、ミルクを飲むカヨコのまわりに大人たちは頭を寄せ合ってこくこく、とのどを鳴らすさまをじっとみつめる。

「この子、『大食いのカヨコ』っていわれてるんじゃ。困った子じゃなあ」

と、うれしそうにいう勝代はいかにも母親の貫禄があり、この三人の親子を眺めていると、しあわせとはこんなものかと珠子には思えてくる。

第十章　心澄んで

勝代たちはずい分と長居し、陽が少し傾いた時刻、眠り込んでしまったカヨコを一郎がおぶって、裏の道から戻って行った。

国太郎も送りに出、二人が見えなくなるまで庭に立っていたが、

「子供ちゅうもんは、かわいいもんじゃなあ」

と呟き、

「勝代ちゃんもええお母さんになっとる。婿さんもええお人じゃ」

と重ねて一人言をいうのを聞いて珠子もうなずき、

「ほんまじゃなあ」

と相槌を打って家の中に入った。

国太郎は三人の印象がよほど強かったものか、晩飯のときもしきりにそれをいい、

「うちには赤子ちゅうもんをついぞ見かけたことがなかったけん、今日はえらくおもしろかった」

「わし、きっちり見たんじゃが、あの子、目は父親似、口は勝代ちゃんじゃなあ。ふしぎなもんじゃ」

「昭市さんも、あの子なら可愛かろ。子守も喜んで引き受けるじゃろなあ」

と感じたままをのべ、珠子も素直にそれに同感であった。

その夜、珠子は寝床のなかでカヨコを抱き上げたときの感触を思い浮かべた。甘いミルクの香りのするやわらかな肌、世の汚れを何ひとつ未だ見ていないつぶらな瞳、何でも摑み取ろうとする勇敢な小っちゃな手、赤ん坊の存在というのは、それだけでまわりの人間を春風のように包み、且つ深い感動に誘い込むものか、と思う。

これがもし、自分の血肉を分けた子供なら感動はさらに深いものであろうと思うと、珠子は突然、勝代に強い羨望をおぼえずにはいられなかった。

以前、典夫にくっついて一しょに遊んだころには、まだ可愛い高校生だったのに、今日の勝代はどっしりと落ち着き、自信に溢れているように見えた。

この世に自分の分身を産み出すことの神秘と感動、それを思うと、珠子はいま目の前の扉が少しずつ開いてゆくような感じがあった。ひょっとして、自分にも明るい前途がひらけてゆくのではないかという、あたたかな予感があり、その夜、珠子はいく月ぶりか、ぐっすりと快い眠りに落ちた。

そしてなお二、三日、珠子は自分の胸の内に何やら起き上がってくるものをおぼえなが

らもそれを定かに摑めず、しかし国太郎のいう、
「きよみ、何やら元気が出たなあ。カヨコちゃん拝んだご利益か」
の言葉は当たらずとも遠からず、珠子がもとどおりになれば国太郎もまた奮い立つらしかった。
二人とも、勝代か昭市かからまたいずれ返答を求めにくるものと思っていたが、次にあらわれたのは思いがけず典夫自身であった。
典夫はしばらく見ぬうち、ひどく精悍な感じになっており、家には入らず戸口で、
「断ってもろうてもええよ。昨日行場へ行ってみたんじゃが、今年は花が早うて、もう満開じゃった。
よかったら一しょに行ってみんじゃろか。これが最後かも知れんけん」
と少し投げやりな口調で誘った。
珠子は、典夫を見た瞬間、ふっとなつかしいものが胸を過り、そのいいぐさが気になって、
「最後とは何故？
典夫ちゃんどこかへ行くのじゃろか」
と問うと、
「おれがこのお山さん捨ててよそへ行くわけはなかろう」

と典夫は両手をポケットに入れたまま、ちょっと苦笑いして、
「まあ三度もプロポーズして断られた男が、またのこのこ誘いにくるのも、見られたもんじゃないけんど、やっぱり未練じゃなあ。キレンゲショウマの前で別れをいうのもええかな、と思うてなあ」
と自嘲気味にいう言葉を聞いて、珠子はふっと空を仰いで気をそらし、
「典夫ちゃん、ありがとう。ええお天気じゃけん、行場へ行ってみよ」
と、国太郎にそういっておいてから先に立った。
こんなに足どり軽く山道を歩くのはいく月ぶりか、今年の春はいったいどうしていたのかと思うほど、いまはハッキリと道の花々が見え、ひとつひとつ口に出して、
「カノコユリ、レイジンソウ、カニコウモリ、オトギリソウ」
と呼びながら歩いてゆく。
二人はときどき前後入れかわって歩いていたが、典夫が立ち止まってはマッチを擦るのを見て、
「典夫ちゃん、煙草吸うようになったの？」
と聞くと、
「おれももうじき二十二じゃけん、人のすることは全部してみようと思うてなあ。ほじゃけん、赤ちょうちんでも飲むし、一ぺんきりじゃけんど、男の遊び場ちゅうんへ

も行ったで」

とひらきなおったいいかただったが、珠子はそんな典夫にかくべつ嫌悪感は抱かなかった。

むしろいままで、同世代の友達と考えていた典夫が急に大人びて見え、どことなく頼もしくさえ感じられた。

二人とも言葉少なに足をはやめ、ブナの林を抜けて行場への道に足を踏み入れたとき、眼前がぱあーっと眩しくなりその明るい黄いろを見て、珠子は思わず、

「まあーっ」

と叫んだ。

今年は例年に増して花が多く、気のせいか株数もふえたのではないかと思えるほど、広く広くその花畠は拡がっている。

その美しいこと、美しいこと、いちめんさわやかな黄の海原をいったい何にたとえたらいいのか、花の姿も時期も、珠子がこれまで見たなかで今日は最高の出会いであった。

典夫は道ばたの岩に腰をおろし、珠子は立ったまま、しばらくは我を忘れて眺めていて、

「夢のなかにおるようじゃ。いつまでも覚めんといて欲しい」

と珠子が呟くと、典夫もおなじ呟き声で、

「はじめてきよみちゃん、この花見たときお月さまのいろ、いうたなあ。

それ、おれの頭のなかにはっきり刻まれてしもうて、お月さま、きよみちゃんとつながって、お月さま見ればきよみちゃん思い出すし、きよみちゃん思えばお月さまがくっついてくるんじゃ。おかしいなあ」

といって黙っていたが、くわえていた煙草を足もとに投げ、靴でにじり消しながら、

「じゃけんど、それももう終わり。

おれのかぐや姫はお月さま目ざして昇って行ってしもうた。

あとにはじいさんばあさん残って泣きました、ちゅうわけじゃ」

と自嘲的にいいつつ、しかし表情は決して悲しそうではなかった。

珠子は、

「そう？」

と振り返ってその顔を眺め、

「典夫ちゃん強いお人じゃなあ。かぐや姫月へ昇っていっても、さびしくないの？」

「そりゃあ、さびしいよ。じゃけんど仕方なかろう。これからは一年一度、キレンゲショウマの咲く日に、里帰りしたかぐや姫の顔を見る、それだけでええよ」

「そう？」

珠子は典夫とは少し離れた岩に腰かけながら、

「あのなあ、かぐや姫は天へは昇らなんだとしたら、典夫ちゃんどうする？」

「え？」

「かぐや姫はなあ、月に昇ってみても、月の世界はわからないことばかりで息が詰まりそうなことが判りました。

竹のなかから生まれたかぐや姫は、やっぱり竹やぶのなかでやさしいおじいさんと一緒に暮らしたいと思ったんです」

「きよみちゃん、それどういうことなんじゃ」

「このあいだ勝代ちゃんがカヨコちゃん連れて来てくれたじゃろ。あのときから私、ぱあーっと目の前の霧が晴れたような気がしたんです。

私は生まれ落ちてすぐ施設に拾われ、十六年間もずっと知らぬ他人の手で育てられた。その間、ほんまの親に会いたいと思わなかったというたら、これは嘘じゃ。

心が灼けつくように親が欲しゅうて、涙がバケツ一杯、と思うほど流れおちたときもありました。どんな親でもええ、寝たきりでも監獄に入っとっても、またひどい貧乏暮らしとってもかんまん、ともかくこれが私の親じゃ、というお人がこの世におって欲しい、とどんなに思うたか知れやせん。

それ、私、忘れとったんやなあ。白塚へもらわれてきてから忘れとったんじゃ」

珠子はつづけて、

「白塚の両親はよくしてくれたし、私の心の痛みを忘れさせてくれたんじゃけん、有り難

いと思うとります。じゃけんど、私自身のことを考えたとき、今度は自分の子供に対し、決してさびしい思いをさせんために、親として努力をする義務がありはせんかと気がつきました。

若いうちにお母さんになり、あたたかな家庭を築いてよい子供を育ててゆくのが、施設出の私が自分の手で摑み取れるほんとのしあわせじゃないか、と思うたんです。

その目で見廻してみると、以前から私にプロポーズしてくれるやさしいお人さんがすぐそばにおりました。

まわりも皆よいお人さんばかり、そして何よりもうれしいのは、結婚してもいまの環境が変わることなく、それが子供を育てるのにとても適している自然があることでした。

いまになってこんなこと考える私って、典夫ちゃん、ずい分勝手な女子じゃなあ」

と問いかけると、両膝のあいだに手を組んでじっと聞いていた典夫は、

「勝手、というよりも、いまの話じゃこのお山さんに居って子供育てたいために、相手は誰でもええ、と聞こえるんじゃけんどなあ」

「ごめん、私のいいかたが悪かった。典夫ちゃんのこと、有り難いと思うとる」

「有り難いと？」

典夫は笑顔も見せず、

「おれはまだ世のなかのことよう判らんが、結婚ちゅうんは、お互い好きじゃけん、片と

きも離れとうないけん、一緒になりたいと思うんとちがうかなあ。
　少なくとも、おれきよみちゃんにプロポーズしたときはそうじゃった。早う一しょに暮らしたかった。
　きよみちゃん、無理することないぜ。おれはもうあきらめてるんじゃ」
「典夫ちゃん、そうじゃない。私、うまいこといえんけど、お嫁さんにしてもろうたらこんなに嬉しいことないと思うてるのに」
「きよみちゃん、もう一ぺん考えてみいや。一時の思いつきで決めたら後悔するぜ」
　といいつつ典夫は立ち上がり、靴の爪先で小石を蹴っていたが、イライラした様子のまま、
「もう、帰ろう」と先に立ってもと来た道を辿りながら、
「車があると行動半径ひろがってなあ。おれこのごろ、四国中走りまわってる。ほんじゃけん、山小屋の仕事手伝わんというて、おやじに叱られよるんじゃ」
　と話し、分かれみちまで来ると、立ち止まって、
「結婚ちゅうんは、何もわからんときにするんがいちばんじゃなあ。少し年くってくると、あれこれいらんことまで考えるようになる。おれも年行きすぎたんかもしれん」
　というのを聞いて珠子は笑い、
「二十二が年いったんちゅうん？　おかしいなあ。いらんこと考えるて何じゃろか」

と聞いたが、典夫はそれには答えず、
「ほんじゃ、気をつけてなあ」
とさばさばいい、手を上げて去って行った。
珠子はその場に立ち、しばらく典夫のうしろ姿を見送ったが、胸のうちではたとえ難い気持ちの揺れがあった。
それは、いままで勝代よりは少し年長の友人、くらいに感じていたものが、今日の典夫は急に大人の雰囲気を匂わせ、一まわりも二まわりも男っぽさを感じさせていることにある。

その夜、蚊帳のなかに横たわったとき、珠子は闇のなかで、
「お父さん」
と呼びかけ、
「うん」
とねむそうに答える国太郎に、
「きよみがね、山小屋へお嫁に行きたいというたら、お父さん一緒についてきてくれる？」
と聞いた。

白い団扇が一瞬止まったあと、
「むずかしい問題じゃなあ」
と吐息のような答えが返り、しばらくののち、
「きよみはそれがいちばんええと思うとるんか」
と聞いた。今度は珠子が少し沈黙して、
「うん、前は典夫ちゃん嫌いじゃない、という程度じゃったけんど、いまは好きかなと思う。あのひとと夫婦になってもええと思う。
ほして丈夫な子供産んで、しっかり育てたいんじゃ」
というと、国太郎はふん、と闇のなかでうなずいたらしく、また間をおいてから、
「ほんなら、久能さんのことはええんじゃな」
と念を押した。
「ええ」
と一旦は肯定したが、珠子はやっぱり、
「忘れてしもうたとはいえんけどなあ」
と言葉を濁すと、
「そんな気持ちで嫁ぐのはいかん」
と国太郎がいうのへおっかぶせて、

「大丈夫。実際に久能さんがここへ戻るちゅうことはおそらくないのじゃけん。お父さんさえよけりゃ二人一しょに上へ行こうなあ」

「お前があきらめがついたというのならええのじゃが」

と国太郎はしばらく黙っていたが、やがて大きなためいきをついて、

「頂上には大剣神社もある。以前はうちがお祀りしとったんじゃけんど、人手が無くていつしかそのままになってしもうとるし、わしがそこへ移るという手もあるなあ」

「それがええよ、お父さん」

父娘は、半分眠ったような状態でゆったりと話を交わしていたが、それは当然のなりゆきについて語るに似て、おだやかな運命の展開を見た夜であった。

そのあと、珠子は久しぶりに久能の夢を見た。ようやく離婚の問題が片付いたんだよ、待たせてごめん、といいながら、百二十段の石段を上がってくる久能は車でなく、大きなザックに相変わらずカメラの部品をぶらさげた、あの遭難の日のままの姿であった。

何もかも巡子に渡して、これっきりになってしまった、せいせいしたよ、と白い歯をこぼしてその笑顔が近づいてくる。

「久能さあん」

と珠子は石段の上から大声で叫ぶなり、とととっとどれだけの早足で駈けおりたか、伸ばした両手を久能が摑まえてくれた、と思ったとたん、瞼の裏が急に明るくなって、そ

れは夢であることを知った。

たとえ夢であっても、久能との久方ぶりの邂逅に珠子の血は衝撃を受けて全身熱く沸き立っており、それが少しずつさめてゆくのを、珠子はまっすぐ仰臥したままで待った。以前の珠子なら、夢で会ったあとはせつなさにさめざめと泣いたものだったが、今朝はじっと奥歯を噛んでこらえている。

典夫との結婚を決意したいまとなっては、久能のことは一切忘れ去らなければならないはず、と自分にいいきかせているのに、何故か激してくる思いは体内からいっかな退かず、逆に胸の奥はきりきりと絞られるように痛かった。

珠子はそっと起き上がり、国太郎の寝息をたしかめてのち、暁闇のなか足音をしのばせて社殿に向かう。社務所のとなりにある手水舎で手水をつかい、静かに社殿の扉を開けた。拝殿のまんなかには太鼓を据えてあり、これは国太郎が病気でもない限り自分で毎朝打ち鳴らしているものだが、今朝は珠子が両手に撥を握り、大きく振り上げてまず第一音をどーん、と力いっぱい打った。

太鼓の音は、まだ明け切らぬ山の空気を、さざ波のように振るわせてこだまを呼び、珠子は自分の心の迷いを洗い流して欲しいと祈りつつ、そのひびきのなかで一心に太鼓を打ちつづけた。

あの夜の珠子の夢は正夢であったらしい。

カメラと全財産を詰めたザックをようやく棚に上げ、新幹線の窓側にもたれながら走り去る外の風景に目をやっている久能は、まるで強いロープに手繰られるように一路、剣山へと向かっている。

珠子と別れて十ケ月、その間心は焦りに焦り、いく度手紙で経過を知らせようとしたかしれなかったが、そのたび、いや早くこちらを片付けて自分が山へ帰ったほうが近道だと思いとどまった。手紙は局留め、珠子の手にするのはいつの日か計りしれず、もし長期間放置することがあれば、発信地へ返送されるおそれもある。

それに、珠子には十分明かしていない自分の側の人間関係のもつれなど、とうてい手紙には書き尽くせなかった。

もともと久能は身内が少なく、結婚後は巡子の母親と妹二人との同居だったし、何かこと起これば、向こう側は結束して巡子をかばう態勢になり、いままでどれだけ悩まされたことだったか。

あの日、東京に帰りつくなり、久能は着のみ着のままで家を出、小さなアパートを借りて離婚の話しあいに入ったのだったが、巡子の側は入れかわり立ちかわり翻意を促しにあらわれ、この戦いもなみ大ていではなかったと思う。

しかし巡子が身内の者にいう、

「文明とはほど遠い山奥よ。水道もガスもないのよ。ほら『酒屋へ三里、豆腐屋へ二里』って昔のうたにあるでしょ。あれ以上なの。その上、その娘は施設育ちで親が知れないんですって。もちろん中学出よ。よぼよぼの老人をお父さんと呼んで二人っきりで暮らしているの。全然浮世離れしているわ」

との言葉は、久能にとってはそのまま裏返して珠子のいとしさとなり、いまさらのようにあの清純さがひたひたとなつかしくなる。

それにもうひとつ、山に戻るについては何かひとつでも生活手段を得ておきたく、考えた末、いちばん抵抗のないのはやっぱり久能自身が宮司の職を引き継ぐことであった。

神社のことなど、夢のかけらにさえ見たこともなかった男が、これからの生涯、神職として神社を守ってゆくことは考えかたの上での大きな革命ともいってよく、それは離婚問題を解決するよりももっと大きな転換かもしれなかった。

十ケ月という期間、久能はカメラのアルバイトをしながら、暇を見つけてはさまざま神道に関する書物を読み、そして神社庁に通って神職資格に関する知識を得た。

その結果、必ずしも長期の養成機関に通わずとも、大学卒という学歴の上に講習と実習を積めば資格の得られることが判り、先行き明るくなる思いであった。好きなカメラは生涯捨て切れはしないが、久能に神職への転職を決意させたのは、何といってもそこが遭難の地であることと、珠子への強靭な愛情であったといえようか。

久能が新幹線に揺られているそのころ、珠子は一人で山頂を目ざし、典夫たちの山小屋でなく、小さな分かれ道を辿って勝代たちのヒュッテの玄関に立った。

今日は典夫との結婚を相手に伝えようと決心した日。それは先日、夫婦で勧めに来てくれた勝代たちにまず打ち明けるのが順序であろうと、胸をふくらませてやって来たのであった。

もう秋のさば雲が西から長い尾をひいて空にかかっており、珠子は大きく息を吸い込んでから玄関のチャイムを押した。

チャイムは高らかな音を立ててこのヒュッテのなかに響きわたると予測し、高鳴る胸に手を当てていたのに、案に相違して何の音もせず、もう一度、強く指先で押してみたが、やはり全く反応しなかった。故障なのかな、と思い、それなら「ごめん下さい」と大声で呼ぼうとしたとき、建物のなかからわあーっと弾けるような笑い声が聞こえて来、そのなかにたしかに勝代らしい声も混っているのをとらえたと思った。

一度上がらせてもらったこのヒュッテは、東側が食堂と出窓になっているのを珠子は知っており、草を踏んで廻っていく途中、早昼なのか、食器の触れ合う音とともにカレーライスのいい匂いも流れてくる。そのうち、

「捨て子やそうじゃなあ、その子は」

という声が聞こえてきたとき、珠子はハッとし、思わず出窓の下に身をかがめた。

山の人は、近所がない故に声が大きいといつもいい合っているが、食堂の中の集まりはどうやら勝代の家の親戚らしく、遠慮のないやりとりが澄んだ空気のなかでは手に取るように聞こえてくる。

「施設で育ったお人じゃけんね。親はわからんけど、なかなかええお人よ、きれいじゃし」

とかばっているのは勝代で、それに対して老けた声が、

「そんな娘を典夫は好きになってしもうたんかいのう。

そんで、話はもう決まったと？」

というのへ、もう一つの声が、

「おばさん、まだ決まったわけやないんじゃ。こないだ典夫がうちへ来たとき、うちのお父さんもようよういうて聞かせてある。みなし児を嫁にもらうんは、親戚が増えんけん、ものいりも少のうてええけんど、ええ親戚の多いのがええに決まっとる。

ま、考えてみりゃ、身内の拡がってゆくのは枝葉の茂りじゃ。

そんなこともあるまいけんど、その娘の父親がもしも監獄へ入っとったような悪人じゃったり、親戚づきあいもできんような変わったお人で、のちのち名乗り出たりされたらどうする。お前責任持てるか、親戚中へ顔向けできるか、て典夫にきつういいよったん

じゃ」

「その通りじゃ」

とさきの老けた声はいっそう力んで、

「ここら辺りは、昔から縁組も親戚同士で引っ張り合うて、お互い家のうちも隅から隅まで見渡せるようになっちょる。

典夫の嫁は身許のしっかりした娘に来てほしいとわしは願うんじゃなあ」

「まあええよ、おばさん、典夫もそのうち熱がさめるじゃろうし、なあ勝代ちゃん」

「うーん、じゃけんどお父さんもお母さんもすすんではおるんじゃ」

「そらいかん。親戚中が反対じゃちゅうて、わしがじかに昭市さんにいうけん。その娘もらうんじゃったら親戚中が縁切るけん、とこれほどにいえば、昭市さんも典夫も無理にとはいえんじゃろう」

と、そこまで聞いて、珠子はそうーっと立ち上がった。

気付かれないように建物を離れ、自分の姿がヒュッテからはすぐ見えなくなる下り坂をとってゆっくり歩きながら、胸のうちで、いまの食堂内の会話をくりかえし反芻しつづけた。

声の主は、かねて聞かされていた勝代の母、祐子の半田町の実家のひとたちらしく、皆打ち揃って勝代のヒュッテを見に、天気のよいこの日、ゆっくりゆっくりと登ってきたも

のであろう。

いまの言葉を聞いて、珠子は目の前が真っ暗になるほどの衝撃を受けなかった自分の平静さを、かえってふしぎだと思った。悩み苦しんだ挙句、ようやっと久能に向いていた気持ちを捻じ曲げ、今日、結婚の意志を告げに来たところへ、心ならずも洩れ聞いたこの拒否であった。それが典夫本人の口から出たものではないにしろ、親戚中のこの総攻撃に立ち向かってゆくだけの、結婚への情熱を自分が持ち合わせていないことを、珠子ははっきりと判ったと思った。おそらく二度とふたたび、典夫との結婚の夢など描きはしないだろう、と珠子は思った。

考えてみれば、もの心ついたころから、施設育ちだと人にうしろ指さされるのをどれだけ恐れてきたか、長じてそれがさらに、捨て子であったのを知ってからはなお一そう臆病になり、人並みの幸福など望むべくもないと思っていたのに、いったいいつからこんな、身のほど知らぬ気持ちを抱くようになってしまったのだろうと身を責めつつ、見ればいつもの亀石の前に辿りついている。

てのひらで石の上を払い、腰かけて珠子はゆっくりと空を見上げた。さきほどのさば雲はいつのまにやら消え、代わってヴェールのようなうすい雲が刷毛でさあーっと刷いたように西から東へと流れている。

つい二時間余りまえには、ここを通りながら山小屋での結婚生活へとひたすら気持ちを

向けていたのに、いまはその夢はあとかたもなく消え去り、かえって気分は澄んで、おだやかであった。当然のように珠子の胸に呼び戻されてくるのはやはり久能のこと、去年ここで並んで腰をおろし、長い年月、溜まっていた悲しみをぶちまけたとき、久能はあくまでもやさしく、みなし児であることを誰に何の恥じることがある、一人で生きてきたほうがずっと尊い、と珠子の長い髪を撫でながら励ましてくれた。

この先いつ会えるかは判らないが、剣山にキレンゲショウマ咲く限り、たとえどんなかたちにしろあのひとはきっと戻ってきてくれる、それを信じよう、信じて待とうと思うと、珠子はいまようやく胸の奥底から何やら新しい勇気が湧き上がってくるのをおぼえた。その珠子の肩に、色づいた木々の葉がはらはら、はらはら、と音もなく降りかかってくる。

あとがき

このたびの「天涯の花」では、私いささかの冒険を試みました。

これまでの作すべて、出自から死後までを女の一生として書き続けてきた私ですが、今回の主人公珠子の人生は、わずか二十歳で筆をおいています。

理由は、もはや私がくどくどしく描きはせずとも、この先珠子は決して読者を裏切ることはあるまいという、確たる思いを得たからなのでした。

私は戦後の選択として過去に、保育所と社会福祉協議会に勤めた経験を持っています。いずれは、日本の社会事業の現場体感者としてこの世界を描きたいもの、という念願を抱いていますが、珠子の生い立ちはその一環として、ほんのトバロですが触れてみたのでした。

戦後の荒廃の時期、自分の子供でさえ育てるのは大へんだったのに、国からの涙金で大ぜいを養う養護施設ではどれだけのご苦労だったでしょうか。しかしこんななかでも、子供たちの無垢な魂は決して傷ついてはいなかったと思います。珠子は、彼女の住むのに最もふさわしい霊峰剣山めざし、新しい親子の縁を求めて登ってゆきますが、このストーリーは保育所時代から私の胸にあたためていたものでした。

そして山の神秘と清浄も、私が子供のころからあこがれつづけて来た領域です。体が弱いため登山はできませんが、それだけに、我が五感で山に触れたいという願望は人一倍強く、代わりにずっと山の本を読み漁ってきました。

今回は意を決し、見ノ越まで車で登ったのですが、千四百メートルのこの地点でもう息苦しく、頂上を極めずに下山してしまいました。頂上を踏まずして頂上を書いたこと、これも私にすれば大いなる冒険だったといえましょうか。

またもうひとつ、見ノ越よりもう二、三百メートル高い位置に咲くキレンゲショウマも、当然ながら私は見ていません。できる限り写真は手に入れたし、ご存知の方にも話を聞いたのですが、何といってもいちばんの助っ人は画家の大畑さんの絵でした。ご自身、開花の時期を狙って現地に足を運ばれ、この本の表紙の作画を完成されたのです。写実の手法ではとても力のある方なので、花はまるで、目の前にあるように生き生きと描かれていて、おかげさまで私のイメージはぐっと拡がりました。〔編集部注・平成九年刊の単行本、及び平成十二年刊の文庫版（本書）共に大畑稔浩氏の装画です。〕

余談ですが、この作の新聞連載が終わった直後、画伯夫人に生まれた一粒種のお嬢さんには珠子、と名づけられたよし、きっと玉のように美しく成長されることでしょう。

小説の珠子も、現存ならばだいま五十二歳のはず、山登りのお好きな方は剣神社まで登り、年経てもなお純真さを失なわぬ珠子をかいまみてはいかがでしょう。夏八月ならば、

一足のばしてキレンゲショウマの群生をも感動とともに眺められると思います。
「天涯の花」のあとがき、何か気持ちも昂揚してすっかり幕内をお見せしてしまいました。
はじめて若い主人公を描いたそのせいなのでしょうね、きっと。

多摩川のほとりの茅屋にて
宮尾登美子

平成九年秋

解説

高橋敏夫

物語のはじまりは、じつに印象的である。

昭和三十五年の、あの夏の日の午後が、自分の運命の大きな分かれ目だった、と珠子はときどき思い起こす。

そのとき珠子が腰を下ろしていたのは、養護施設愛光園の園長室で、真向かいには園長の木暮先生が片頬を西陽に照らされながら坐っていた光景も浮かんでくる。（中略）煙草片手に足など組んで話すような内容ではなく、木暮園長がいかにも大切に、この話を珠子に伝えようとしたかは、ヤニで黄色くなった指先をきっちりとテーブルの上に揃えていたことでも判っている。

逃れようもなく読者は、物語の冒頭から、物語のすべてを決定づけてしまう出来事に直面させられる。陰翳にとんだ光景と、「昭和三十五年の」「あの夏の日の午後」「自分の運

命の大きな分かれ目」「そのとき」「この話」といった表現に、わたしたち読者はとらえられてしまう。

　このはじまりには、宮尾登美子のつくりだす物語世界の特色が集約的にあらわれているばかりでなく、「いささかの冒険」（「あとがき」）を試みたという『天涯の花』の意義もまた刻みこまれているように、わたしは思う。

　宮尾登美子は、現代文学における最もすぐれた長篇物語作家の一人である。大胆な構想にさまざまな趣向を凝らした物語をおしげもなく読者にふるまうとともに、その長大な物語を前にしりごみしかねない読者を物語の冒頭から魅惑するてだれである。

　夏をつげる楊梅（やまもも）売りの姐さんのひっそりとした出現（『櫂』）。旅絵師の弾く琴の曲の終わりがもたらした静寂と悲しみ（『一絃の琴』）。ふりしきる雨のなか足先をぬらしながら無言で歩いた日の記憶（『春燈』）。大陸への旅立ちの朝、満開の実桜の花びらがこまかくふるえている光景（『朱夏』）――などなど。『天涯の花』とおなじく、いずれも語り手の回想によってとらえられ、それゆえ、安定した枠組みのなかでたしかな存在感を確保された人や感情やものである。

　宮尾登美子の愛読者なら、そうしたはじまりのシーンを、たちどころに想起するだろう。なかには、一九九八年刊の『天涯の花』と発表が時間的にも近接する作品『蔵』（九三年

刊）の、あの印象的な書きだしを想いおこす者もいるかもしれない、「吹雪の荒れ狂う一月末の夜更け、田之内家に産声をあげた女の子を、当主意造は烈、と名づけた」。蔵元を継ぐ全盲の娘烈の、ながい苦難の人生を凝縮したようなはじまりといってよい。

印象的で魅惑的な書きだしを特徴とする作家宮尾登美子の作品にあっても、おそらく、物語のなりたちとゆくえを直截的にしめす書きだしで、『天涯の花』は『蔵』とならぶ。

しかし、それにしても、この冒頭部分で起きているのはいったいなにか。

物語の内容、とりわけストーリーにかかわっていえばこうである。

十五歳になったばかりの珠子は、二歳から育てられた養護施設愛光園の卒園をまえに、このとき、園長から養女の話を聞く。申し出てきたのは、徳島県南部に聳えたつ剣山の中腹にある神社の宮司白塚国太郎とその妻すぎ、ともに六〇歳をこえた老夫妻だという――ここに、やがて珠子が体験する「肉親」との、きびしくもあたたかい生活のはじまりがある。電気や電話もなく冬は深い雪におおわれる山での暮らしのはじまりがあり、人知れず咲く孤高の花キレンゲショウマとの出会いのはじまりがあり、東京から来たカメラマン久能との運命的な恋のはじまりがある。

そして、孤児としての「過去」にこだわって生きてきた珠子の、孤児であることの自覚によってのみきりひらかれる豊饒な「未来」への確信もまた、このときはじまっていた、といえば、ここで起きていたのは、珠子の物語にとってたしかに決定的なことだったので

ある。そうしたはじまりの帰結をまのあたりにしつつ物語を読み終えた読者が、深い感慨とともに思い起こすのは、やはりこの「夏の日の午後」であろう。

ただし、わたしがこの書きだしに注目したいのはこのようなことばかりではない。

それはとくに「昭和三十五年」という時間の特定にかかわる。

わたしの知るかぎり、時間をこれほどはっきりと冒頭からしるした宮尾登美子の作品はほかにない。実在の人物に取材して書かれることの多い宮尾文学だが、その人物の生きた時間が克明にしるされているかといえば、そうではない。つくりあげられる堅固な物語空間が、実在の人物を物語を生きる人物に変換するように、実際の時間もまた物語の時間に置き換えられるからだろう。多くの作品にみられる、たとえば「その日」「その時分」「その時」といった言葉の頻出は、そうした物語の時間をあらわしているにちがいない。そしてだからこそこの、冒頭の「昭和三十五年」という表現は目をひく。

端的にいえば、この物語は、冒頭に「昭和三十五年」をおくことによって、実際の時間を陰画として物語にくみこむことをきっぱりと宣言しているのである。あるいは、「昭和三十五年」をいちはやく提示することで、物語のなかで否定し排除するものを特定しているといいかえてもよい。書きだしが他の作品にまして強烈な印象をあたえるのは、このことにも関係しているだろう。

いうまでもなく、昭和三十五年は一九六〇年である。この物語には、六〇年の初夏をゆるがした政治的熱狂は、痕跡すらない。それどころか、その夏をはじまりとして、物語は人里をはなれまさしく「天涯」へと舞台を移していく。

政治だけではない。物語が「天涯」においてひとまず完結するのが「昭和四十一年」だとすれば、ここには、六四年の東京オリンピックをはさむ戦後の華やかさの頂点ともいうべき時代（高度成長の絶頂期）のほとんどすべてが欠落している。いや、戦後の集団的な熱狂は、たとえば、国太郎の「あるものはようけのお人の息で汚れ切った空気」という言葉や、東京での生活を振り返って語られた久能の「ずるくて汚い。いい加減なもんだ」というつぶやきなどにもあきらかなように、汚濁にみちた「文明」として否定されるのである。

そして、高度成長期を生きはじめた人々が「肉親」との関係をたちきり「孤児」化し孤立していくのだとしたら、「肉親」を求め老人を介護し、そのうえにたって新たな「家庭」を築こうとする若い珠子の生き方は、この時代の若者たちのそれとはまったく逆の方向をむいていた、といえる。

宮尾登美子は戦後の浮動する風俗を描くのを好まない、とはすでに多くの作家、評論家が指摘してきた。『天涯の花』において、戦後の風俗にたいする宮尾登美子の態度は、いっそう鮮明になっている。「この先珠子は決して読者を裏切ることはあるまいという、確

たる思い」のもとに「わずか二十歳で筆をおいて」（「あとがき」）いるのも、このような態度のきわだちにかかわりがあるにちがいない。

そうしてみると、「あとがき」で記されているとおり戦後のはじめ（おそらく一九五〇年代）に着想されたこの作品が、なぜ三〇年以上もたった九六年になって書かれたかの理由のひとつがみえてくるように思われる。

『天涯の花』は、戦後の高度成長がもたらした文明的な価値がバブル経済のなかで限界をあらわにしたのち、おいうちをかけるように阪神大震災が戦後都市の脆弱性を、オウム真理教事件が生の価値づけの解体を暴露してしまった、そういう時代の文学である。人々の関心が戦後をこえたところにむかいはじめた時代の文学、すなわち脱戦後時代の時代的な文学、なのである。すくなくとも、この作品が刊行とともにたちまちベストセラー入りしたのは、こうした事情と無関係ではない。読者の多くは、戦後の「天涯」でいとなまれた珠子の清冽な生に、つよい共感をおぼえたはずである。

しかし、戦後を汚濁にみちた文明とする見方は、他方で、宮尾文学にそれまでにない、いささか残酷なまなざしを導きいれた。それは、この物語で「清浄」な珠子をきわだたせる、養護施設での無二の親友隆子と久能の妻巡子のあつかいにあらわれているだろう。珠子を大阪ミナミのクラブに誘うため突如あらわれた隆子の姿は、読者に違和感を与えるかもしれないし、東京という「文明」をかさにきた発言を連発する巡子には、同情を抱く余

地がない。

周知のとおり、宮尾登美子には、『櫂』『岩伍覚え書』『寒椿』『朱夏』『春燈』など、主として故郷高知での複雑な家庭環境と満州での戦中戦後体験をあつかった自伝的な系列と、『陽暉楼』『一絃の琴』『序の舞』『鬼龍院花子の生涯』『天璋院篤姫』『菊亭八百善の人びと』『きのね』『伽羅の香』『松風の家』『藏』『クレオパトラ』といった、ひとつのことにこだわりぬく女の一生を描く（非自伝）系列とがある。

この分類でいけば、『天涯の花』は、あきらかに後者に属する。とはいえ、たとえば、身寄りのない子供のめんどうをみてやりたいと奔走する木暮園長には、困っている人をすぐ家に入れた実父（小説では岩伍）の面影があるし、また、保母の正岡先生には保母として活躍した宮尾登美子自身の悩みが投影されているように思える。

だとすれば、『天涯の花』は、二つの系列がながれこむ新たな宮尾文学の展開を告げているのだろうか。この作品での「いささかの冒険」（「あとがき」）とは、ほんとうはここにあったのかもしれない。

この作品は一九九八年一月、集英社より単行本として刊行されました。
日本音楽著作権協会（出）許諾第〇〇〇九九八一―〇〇一号

集英社文庫　目録（日本文学）

西木正明　其の逝く処を知らず
西澤保彦　異邦人 fusion
西澤保彦　リドル・ロマンス　迷宮浪漫
西村京太郎　真夜中の構図
西村京太郎　夜の探偵
西村京太郎　パリ・東京殺人ルート
西村京太郎　東京―旭川殺人ルート
西村京太郎　河津・天城連続殺人事件
西村京太郎　十津川警部「ダブル誘拐」
ニューマン五木寛之・訳　リトルターン
貫井徳郎　崩れる　結婚にまつわる八つの風景
貫井徳郎　光と影の誘惑
ねこぢる　ねこぢるせんべい
ねじめ正一　眼鏡屋直次郎
ねじめ正一　万引き天女
野口健　落ちこぼれてエベレスト
野口健　100万回のコンチクショー
野沢尚　反乱のボヤージュ
野中ともそ　パンの鳴る海、緋の舞う空
野中ともそ　フラグラーの海上鉄道
野中柊　小春日和
野中柊　ダリア
法月綸太郎　パズル崩壊
萩原朔太郎　青猫　萩原朔太郎詩集
爆笑問題　爆笑問題の世紀末ジグソーパズル
爆笑問題　爆笑問題時事少年
爆笑問題　爆笑問題の今を生きる！
爆笑問題　爆笑問題のそんなことまで聞いてない
馳星周　ダーク・ムーン(上)(下)
はた万次郎　北海道田舎移住日記
はた万次郎　北海道青空日記
はた万次郎　ウッシーとの日々 1
はた万次郎　ウッシーとの日々 2
はた万次郎　ウッシーとの日々 3
はた万次郎　ウッシーとの日々 4
花村萬月　ゴッド・ブレイス物語
花村萬月　渋谷ルシファー
花村萬月　風に舞う
花村萬月　転(上)(中)(下)
花村萬月　虹列車・雛列車
花家圭太郎　暴れ影法師　花の小十郎見参
花家圭太郎　荒舞　花の小十郎始末
花家圭太郎　乱舞　花の小十郎京はぐれ
帚木蓬生　エンブリオ(上)(下)
浜辺祐一　こちら救命センター　病棟こぼれ話
浜辺祐一　救命センターからの手紙　ドクター・ファイルから
浜辺祐一　救命センター当直日誌
早坂茂三　男たちの履歴書

早坂茂三　政治家は「悪党」に限る
早坂茂三　意志あれば道あり
早坂茂三　元気が出る言葉
早坂茂三　オヤジの知恵
早坂茂三　怨念の系譜
早坂倫太郎　不知火清十郎　龍琴の巻
早坂倫太郎　不知火清十郎　鬼琴の巻
早坂倫太郎　不知火清十郎　血風の巻
早坂倫太郎　不知火清十郎　辻斬り雷神
早坂倫太郎　不知火清十郎　将軍密約の書
早坂倫太郎　不知火清十郎　妖花の陰謀
早坂倫太郎　不知火清十郎　ホウ伊斬り
早坂倫太郎　不知火清十郎　夜叉血殺
早坂倫太郎　波浪島の刺客　弦四郎鬼神斬り
早坂倫太郎　毒牙狩り　波浪島の刺客
早坂倫太郎　天海僧正の予言書　波浪島の刺客
林えり子　田舎暮しをしてみれば
林望　マーシャにりんぼう先生おとぎ噺
林望　リンボウ先生の閑雅なる休日
林望　小説集　絵の中の物語
林真理子　ファニーフェイスの死
林真理子　トーキョー国盗り物語
林真理子　東京デザート物語
林真理子　葡萄物語
林真理子　死ぬほど好き
林真理子　白蓮れんれん
林真理子　年下の女友だち
林田慎之助　諸葛孔明
林田慎之助　人間三国志　覇者の条件
原民喜　夏の花
原田宗典　優しくって少しばか
原田宗典　スバラ式世界
原田宗典　しようがない人
原田宗典　日常ええかい話
原田宗典　むむむの日々
原田宗典　元祖スバラ式世界
原田宗典　できそこないの出来事
原田宗典　十七歳だった！
原田宗典　本家スバラ式世界
原田宗典　平成トム・ソーヤー
原田宗典　貴方には買えないもの名鑑
原田宗典　大サービス
原田宗典　すんごくスバラ式世界
原田宗典　幸福らしきもの
原田宗典　少年のオキテ
原田宗典　笑ってる場合
原田宗典　はらだしき村

集英社文庫　目録（日本文学）

原田宗典　大変結構、結構大変。ハラダ九州温泉三昧の旅
原田宗典　吾輩ハ作者デアル
原田康子　星の岬(上)(下)
原山建郎　からだのメッセージを聴く
春江一也　プラハの春(上)(下)
春江一也　ベルリンの秋(上)(下)
春江一也　カリナン雨
坂東眞砂子　桜
坂東眞砂子　屍の聲（かばねのこえ）
坂東眞砂子　ラ・ヴィタ・イタリアーナ
坂東眞砂子　曼荼羅道（まんだらどう）
坂東眞砂子　快楽の封筒
半村良　雨やどり
半村良　晴れた空(上)(中)(下)
半村良　かかし長屋
半村良　すべて辛抱(上)(下)
半村良　産霊山秘録（むすびのやまひろく）
東野圭吾　分身
東野圭吾　あの頃ぼくらはアホでした
東野圭吾　怪笑小説
東野圭吾　毒笑小説
東野圭吾　白夜行
東野圭吾　おれは非情勤
樋口一葉　たけくらべ
姫野カオルコ　A．B．O．AB
姫野カオルコ　愛はひとり
姫野カオルコ　みんな、どうして結婚してゆくのだろう
姫野カオルコ　ひと呼んでミツコ
姫野カオルコ　サイケ
姫野カオルコ　すべての女は痩せすぎである
姫野カオルコ　よるねこ
平井和正　決定版　幻魔大戦（全十巻）
平井和正　時空暴走　気まぐれバス
平井和正　インフィニティー・ブルー(上)(下)
平岩弓枝　華やかな魔獣
平岩弓枝　釣女（つりなんな）　花房一平捕物夜話
平岩弓枝　女櫛（おんなぐし）　花房一平捕物夜話
平岩弓枝　結婚飛行
平岩弓枝　福の神入門　現代版
ひろさちや　ひろさちやのゆうゆう人生論
広瀬隆　東京に原発を！
広瀬隆　赤い楯　全四巻
廣瀬裕子　ドロップ
広谷鏡子　不随の家
広中平祐　生きること学ぶこと
ビートたけし　ビートたけしの世紀末毒談
ビートたけし　ザ・知的漫才　結局わかりませんでした
アーサー・ビナード　出世ミミズ

福本清三　どこかで誰かが見ていてくれる
小田豊二　日本一の斬られ役、福本清三

藤木稟　スクリーミング・ブルー

藤沢周　愛人

藤田宜永　鼓動を盗む女

藤田宜永　はなかげ

藤本ひとみ　快楽の伏流

藤本ひとみ　ノストラダムスと王妃(上)(下)

藤本ひとみ　離婚まで

冨士本由紀　包帯をまいたイブ

藤原新也　全東洋街道(上)(下)

藤原新也　アメリカ

藤原新也　ディングルの入江

藤原新也　風のフリュート

船戸与一　猛き箱舟(上)(下)

船戸与一　炎流れる彼方

船戸与一　虹の谷の五月(上)(下)

船戸与一　かくも短き眠り

古川日出男　サウンドトラック(上)(下)

ピーター・フランクル　世界青春放浪記
ピーター・フランクル　僕が日本を選んだ理由　世界青春放浪記2

保坂展人　いじめの光景

保坂展人　続・いじめの光景

星野智幸　ファンタジスタ

細川布久子　部屋いっぱいのワイン

細谷正充・編　時代小説傑作選　江戸の老人力

細谷正充・編　新選組傑作選　誠の旗がゆく

細谷正充・編　時代小説傑作選　江戸の爆笑力

細谷正充　宮本武蔵の「五輪書」が面白いほどわかる本

細谷正充・編　時代小説傑作選　江戸の満腹力

堀田善衛　若き日の詩人たちの肖像(上)(下)

堀田善衛　めぐりあいし人びと

堀田善衛　ミシェル 城館の人　第一部　争乱の時代

堀田善衛　ミシェル 城館の人　第二部　自然・理性・運命

堀田善衛　ミシェル 城館の人　第三部　精神の祝祭

堀田善衛　ラ・ロシュフーコー公爵傳説

堀田辰雄　風立ちぬ

堀越勇　くすりの裏側　これを飲んで大丈夫？

堀越千秋　スペイン七千夜一夜

本多孝好　MOMENT

牧野修　忌まわしい匣(はこ)

槇村さとる　イマジン・ノート　槇村さとるキム・ミョンガン

枡野浩一　ショートソング

松井今朝子　非道、行ずべからず

フレディ松川　少しだけ長生きしたい人のために

フレディ松川　死に方の上手な人　下手な人

フレディ松川　老後の大盲点　ここまでわかった　ボケる人　ボケない人

集英社文庫　目録（日本文学）

フレディ松川　好きなものを食べて長生きできる長寿の新栄養学
フレディ松川　60歳でボケる人　80歳でボケない人
フレディ松川　はっきり見えたボケの入口　ボケの出口
松樹剛史　ジョッキー
松樹剛史　スポーツドクター
松下緑　漢詩に遊ぶ　読んで楽しい七五訳
松本侑子　植物性恋愛
松本侑子　美しい雲の国
松本侑子　花の寝床
松本侑子　赤毛のアン　モンゴメリ　松本侑子・訳
三浦綾子　アンの青春　モンゴメリ　松本侑子・訳
三浦綾子　裁きの家
三浦綾子　残像
三浦綾子　石の森
三浦綾子　天の梯子
三浦綾子　ちいろば先生物語(上)(下)
みうらじゅん　とんまつりJAPAN　日本全国とんまな祭りガイド
三木卓　砲撃のあとで
三木卓　はるかな町
三木卓　野鹿のわたる吊橋
三木卓　裸足と貝殻
三木卓　柴笛と地図
水上勉　骨壺の話
水上勉　故郷
水上勉　虚竹の笛　尺八私考
美空ひばり　川の流れのように
三田誠広　いちご同盟
三田誠広　春のソナタ
三田誠広　父親学入門
三田誠広　ワセダ大学小説教室　天気の好い日は小説を書こう
三田誠広　ワセダ大学小説教室　深くておいしい小説の書き方
三田誠広　ワセダ大学小説教室　書く前に読もう超明解文学史
三田誠広　星の王子さまの恋愛論
三田誠広　永遠の放課後
光野桃　ソウルコレクション
皆川博子　薔薇忌
皆川博子　骨笛
皆川博子　ゆめこ縮緬
皆川博子　花闇
宮内勝典　ぼくは始祖鳥になりたい
宮尾登美子　岩伍覚え書
宮尾登美子　影絵
宮尾登美子　朱夏(上)(下)
宮尾登美子　天涯の花
宮城谷昌光　青雲はるかに(上)(下)
宮子あずさ　看護婦だからできること
宮子あずさ　看護婦だからできること II　老親の看かた、私の老い方

宮子あずさ　ナースな言葉　こっそり教える看護の極意
宮里洸　幽鬼　人斬り弥介秘録
宮里洸　鬼神　人斬り弥介秘録
宮里洸　沈む町　人斬り弥介秘録
宮里洸　茜雪　人斬り弥介秘録　あかねゆき　決定版・真田十勇士
宮里洸　隠才蔵　霧
宮沢賢治　銀河鉄道の夜　注文の多い料理店
宮沢賢治　注文の多い料理店
宮嶋康彦　さくら路
宮部みゆき　地下街の雨
宮部みゆき　R.P.G.
宮本輝　焚火の終わり(上)(下)
宮本昌孝　藩校早春賦
宮本昌孝　夏雲あがれ(上)(下)
宮脇俊三　鉄道旅行のたのしみ
三好徹　貴族の娘
三好徹　興亡三国志（全5巻）
三好徹　妖婦の伝説　武者小路実篤
村上龍　友情・初恋　だいじょうぶマイ・フレンド
村上龍　テニスボーイの憂鬱(上)(下)
村上龍　ニューヨーク・シティ・マラソン
村上龍　69 sixty nine
村上龍　村上龍料理小説集
村上龍　ラッフルズホテル
村上龍　すべての男は消耗品である
村上龍　コックサッカーブルース
村上龍　龍言飛語
村上龍　エクスタシー
村上龍　昭和歌謡大全集
村上龍　KYOKO　はじめての夜 二度目の夜 最後の夜
村上龍　メランコリア
村上龍　中上健次　文体とパスの精度
村上龍　タナトス　2days 4girls
村松友視　雷蔵好み　天使の卵 エンジェルス・エッグ
村山由佳　BAD KIDS
村山由佳　もう一度デジャ・ヴ
村山由佳　野生の風　きみのためにできること
村山由佳　キスまでの距離　おいしいコーヒーのいれ方I
村山由佳　青のフェルマータ　僕らの夏　おいしいコーヒーのいれ方II
村山由佳　彼女の朝　おいしいコーヒーのいれ方III
村山由佳　翼 cry for the moon　雪の降る音　おいしいコーヒーのいれ方IV

村山由佳　緑の午後 おいしいコーヒーのいれ方V
村山由佳　海を抱く BAD KIDS
村山由佳　遠い背中 おいしいコーヒーのいれ方VI
村山由佳　夜明けまで1マイル somebody loves you
村山由佳　坂の途中 おいしいコーヒーのいれ方VII
村山由佳　優しい秘密 おいしいコーヒーのいれ方VIII
群ようこ　トラちゃん
群ようこ　姉の結婚
群ようこ　でも女
群ようこ　トラブルクッキング
群ようこ　働く女
群ようこ　きもの365日
群ようこ　小美代姐さん花乱万丈
室井佑月　血い花
室井佑月　作家の花道
室井佑月　ああ〜ん、あんあん
室井佑月　ドラゴンフライ
室井佑月　ラブ ゴーゴー
室井佑月　ラブ ファイアー
タカコ・H・メロジー　やっぱりイタリア
タカコ・H・メロジー　イタリア 幸福の食卓12か月
タカコ・H・メロジー　マンマとパパとバンビーノ イタリア式 愛の子育て
望月諒子　神の手
望月諒子　殺人者
望月諒子　呪い人形
本岡類　住宅展示場の魔女
本宮ひろ志　天然まんが家
森詠　オサムの朝
森詠　那珂川青春記
森詠　日に新たなり 続・那珂川青春記
森絵都　永遠の出口
森鷗外　舞姫
森鷗外　高瀬舟
森博嗣　墜ちていく僕たち
森まゆみ　とびはねて町を行く 〈谷根千〉10人の子育て
森まゆみ　寺暮らし
森瑤子　情事
森瑤子　嫉妬
森瑤子　傷
森瑤子　カナの結婚
森瑤子　男三昧 女三昧
森瑤子　人生の贈り物
森瑤子　愛の美学 森瑤子が遺した
森巣博　無境界の人
森巣博　無境界家族
森巣博　越境者たち(上)(下)
森巣博　セクスペリエンス
森村誠一　死刑台の舞踏

森村誠一　灯旋状の螺路の墓標
森村誠一　悪魔の黙示録（新ファンタム学賞殺人事件）
森村誠一　壁の目
森村誠一　黒い墜落機
森村誠一　死海の伏流
諸田玲子　月を吐く
諸田玲子　髭麻呂（王朝捕物控え）
柳広司　贋作「坊っちゃん」殺人事件
柳澤桂子　愛をこめいのち見つめて
柳澤桂子　意識の進化とDNA
柳澤桂子　生命の不思議
柳澤桂子　ヒトゲノムとあなた
柳田国男　遠野物語
柳瀬義男　ヘボ医のつぶやき
山川方夫　夏の葬列

山川方夫　安南の王子
山口百恵　蒼い時
山口洋子　この人と暮らせたら
山口洋子　なぜその人を好きになるか
山口洋子　愛をめぐる冒険
山崎洋子　横浜幻燈館（俥屋おりん事件帳）
山崎洋子　ヨコハマB級ラビリンス
山崎洋子　柘榴館
山田詠美　熱帯安楽椅子
山田詠美　メイク・ミー・シック
山田かまち　17歳のポケット
山田正紀　少女と武者人形
山田正紀　超・博物誌
山田正紀　渋谷一夜物語
山前譲・編　文豪の探偵小説
山村美紗　京都紅葉寺殺人事件

山本文緒　あなたには帰る家がある
山本文緒　きらきら星をあげよう
山本文緒　ぼくのパジャマでおやすみ
山本文緒　おひさまのブランケット
山本文緒　シュガーレス・ラヴ
山本文緒　野菜スープに愛をこめて
山本文緒　まぶしくて見えない
山本文緒　落花流水
山本幸久　笑う招き猫
唯川恵　さよならをするために
唯川恵　彼女は恋を我慢できない
唯川恵　OL10年やりました
唯川恵　シフォンの風
唯川恵　キスよりもせつなく
唯川恵　ロンリー・コンプレックス
唯川恵　彼の隣りの席

唯川恵　ただそれだけの片想い
唯川恵　孤独で優しい夜
唯川恵　恋人はいつも不在
唯川恵　あなたへの日々
唯川恵　シングル・ブルー
唯川恵　愛しても届かない
唯川恵　イブの憂鬱
唯川恵　めまい
唯川恵　病む月
唯川恵　明日はじめる恋のために
唯川恵　海色の午後
唯川恵　肩ごしの恋人
唯川恵　ベター・ハーフ
唯川恵　今夜、誰のとなりで眠る
夢枕獏　神々の山嶺（いただき）（上）（下）
夢枕獏　慶応四年のハラキリ

夢枕獏　空気枕ぶく先生太平記
夢枕獏　仰天・文壇和歌集
夢枕獏　黒塚KUROZUKA
夢枕獏　ものいふ髑髏（どくろ）
横森理香　横森理香漫画「しりあがり寿」
横森理香　恋愛は少女マンガで教わった
横森理香　横森理香の恋愛指南
横森理香　凍った蜜の月
横山秀夫　第三の時効
吉沢久子　老いをたのしんで生きる方法
吉沢久子　素敵な老いじたく
吉沢久子　老いのさわやかひとり暮らし
吉沢久子　花の家事ごよみ　四季を楽しむ暮らし方
吉武輝子　老いては人生桜色
吉武輝子　夫と妻の定年人生学
吉永みち子　女偏地獄（へんじごく）

吉村達也　やさしく殺して
吉村達也　別れてください
吉村達也　夫の妹
吉村達也　しあわせな結婚
吉村達也　年下の男
吉村達也　京都天使突抜通の恋
吉村達也　セカンド・ワイフ
吉村達也　禁じられた遊び
吉村達也　私の遠藤くん
吉村達也　家族会議
吉村達也　可愛いベイビー
吉村英夫　完全版「男はつらいよ」の世界
吉行淳之介　子供の領分
米原万里　オリガ・モリソヴナの反語法
米山公啓　医者の上にも3年
米山公啓　医者の出張猶予14ヶ月

米山公啓　週刊医者自身
米山公啓　医者の健診初体験
米山公啓　使命を忘れた医者たち
米山公啓　医者がぼけた母親を介護する時
米山公啓　もの忘れを防ぐ28の方法
米山公啓　命の値段が決まる時
隆慶一郎　一夢庵風流記
連城三紀彦　美　女
わかぎゑふ　ＯＬ放浪記
わかぎゑふ　ばかのたば　それは言わない約束でしょ？
わかぎゑふ　秘密の花園
わかぎゑふ　ばかちらし
わかぎゑふ　大阪の神々
わかぎゑふ　花咲くばか娘
わかぎゑふ　大阪弁の秘密

若竹七海　サンタクロースのせいにしよう
若竹七海　スクランブル
和久峻三　あんみつ検事の捜査ファイル　三つ首荘殺人事件
和久峻三　あんみつ検事の捜査ファイル　白骨夫人の遺言書
和久峻三　京都紙園祭宵山の殺人　時計のない保育園
渡辺一枝　桜を恋う人
渡辺一枝　眺めのいい部屋　わたしのチベット紀行　智恵と慈悲に生きる人たち
渡辺淳一　白き狩人
渡辺淳一　野　わ　け
渡辺淳一　桐に赤い花が咲く
渡辺淳一　くれなゐ(上)(下)
渡辺淳一　冬の花火
渡辺淳一　女　優(上)(下)
渡辺淳一　化　身(上)(下)

渡辺淳一　遠き落日(上)(下)
渡辺淳一　公園通りの午後
渡辺淳一　わたしの女神たち
渡辺淳一　花埋み
渡辺淳一　新釈・からだ事典
渡辺淳一　シネマティク恋愛論
渡辺淳一　うたかた(上)(下)
渡辺淳一　夜に忍びこむもの
渡辺淳一　これを食べなきゃ
渡辺淳一　新釈・びょうき事典
渡辺淳一　源氏に愛された女たち
渡辺淳一　マイ・センチメンタル・ジャーニィ
渡辺淳一　ラヴレターの研究
渡辺淳一　夫というもの
渡辺　葉　やっぱり、ニューヨーク暮らし。

集英社文庫

天涯の花

2000年9月25日　第1刷
2007年3月25日　第4刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　宮尾登美子

発行者　加藤　潤

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
〒101-8050
（3230）6095（編　集）
電話　03（3230）6393（販　売）
（3230）6080（読者係）

印刷　大日本印刷株式会社

製本　ナショナル製本協同組合

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

© T.Miyao　2000

Printed in Japan

ISBN4-08-747236-1 C0193





定価 本体705円＋税

解説／高橋敏夫

ISBN978-4-08-747236-3
C0193 ¥705E

あたりを払って誇り高く咲くキレンゲショウマ。「私はこの花に会うため、お山さんに来たのではないか」珠子は心打たれた。

吉野川沿いの養護施設で育った珠子は、十五歳で霊峰・剣山にある神社の神官の養女となる。清澄な自然を背景に、無垢な魂を持ち続ける少女の成長と恋を描き、新鮮な感動を呼ぶ長編。